
東方界境輪舞

ピスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方境界輪舞

【Nコード】

N0826X

【作者名】

ピスト

【あらすじ】

厄神、鍵山雛の現代入りから始まる、普通(?)の大学生、門倉甲斐の物語。現在は幻想入り編を執筆中。

東京から遷都され、日本の首都となった西の都、京都。そこで大學生をやっている青年、門倉甲斐は、ちよつと変わった教授がやっているゼミに参加しているだけの普通の学生、だったはずだった。しかしある日の帰り道、甲斐は不思議な黒い陽炎のようなものを発見する。そしてそれに近づいた瞬間現れたのは一人の少女、『厄神』

鍵山雛。

大学生、門倉甲斐。秘神流し雛、鍵山雛。甲斐に仕えるメイドロボ、みること。天災、岡崎夢美。秘封倶楽部、マエリベリー・ハーンと宇佐見蓮子。そんな彼ら彼女らがお送りする『厄神』現代記、始まります。

いろんなかたの意見を聞きたいと思い *arcadia* 様や他の場所でも別名義で投稿しておりますが、同一人物です。

プロローグ（前書き）

注意）この作品はあくまで二次創作であり、独自設定やオリジナル、性格改変などが含まれておりますので、そのようなものがお気に召さない方はどうかブラウザのバックボタンをひっそりとクリックしてくださいませ。

プロローグ

「教授。岡崎教授」

「……………う、んあ？」

「んあ、じゃないですよ。最近データ集めで忙しいのはわかってますが、だからってこんなところで寝ないでください。折角奥に仮眠室もあるんだから」

「ああ……………」

のっそりと突っ伏していた机から起き上がり、ポリポリと頭を掻きながら奥へと引っ込んでいく赤毛の女性の姿を見送ると、青年
門倉甲斐かどくろかひは苦笑を浮かべ、ついでに出てきた欠伸を噛み殺す。

かくいう自分も徹夜で作業をしていたことだし、もう今日は家に帰って寝ることにしよう。

「ふぎや！？ ちょ、ちょっと教授、いきなり上にのしかかってこないでくれよつ。こっちのベッドはアタシが使ってるんだから、教授はそっちの方に……………ってだからそのまま寝るな！ 重いつてば！」

甲斐が荷物をまとめて帰る準備をしていると、奥で何やらバタバタと騒がしい声。大方寝ぼけた岡崎教授が、先に仮眠をとっていた助手の北白河ちゆりの寝ているベッドに入ったのだろつ。これはこの研究室では割とよくみられる光景なので、甲斐は特に気にせずそのままその騒ぎに背を向けて研究室から出ていった。

そして機械によってちょうどいい気温に調整されていた大学構内から出ると、すぐにうだるような暑さが身に直撃する。

季節は夏。道路を一人歩いていれば、アスファルトが溶けて靴の跡を残し、目を凝らせばそこには陽炎がみられる。一昔前には世間

でよく温暖化だ環境問題だとメディアで騒がれていたが、そう言い
たくなるのも分かるようない……そんな冗談のように暑い真夏日だっ
た。

「ふう……」

ほとんど無意識に溜息めいた吐息を漏らしながら、グイッと額に
浮いた汗を拭う。

日本の首都がかつての東京から京都へと移されて、もう暫く経つ。
都市機能も次第に移されていき、一部地域に高層ビルのような高い
建物が増えたことも、この暑さの一端を担っているのかもしれない。
これは京の都の景観を損ねるか、それともそこで過ごす人間の快
適さを損ねるか。そんな択一の選択肢だったのだろう。

まあ、個人的にはどちらでも構わない。全ては時代の、世界の流
れのままに。その中に生きる一人の人間として、受け入れながら生
きて行くだけなのだから。

そんな事を考えて、なんとなく苦笑して空を見上げる。そこに浮
かぶのは、シリシリと照りつける太陽の姿。どうにも暑さに頭がや
られて、思考が変な方向に向かっているようだ。睡眠不足真っ盛り
なのも、原因の一つかもしれない。

（さっさと家に戻って、み〜こと謹製のアイスでも食べてから一眠
りしよう）

そんなことを考えつつ、その甘さと冷たさを思い浮かべながら甲
斐が再び前を向いて歩き出した、その時だった。

「ん？」

思わず小さく声を漏らして、立ち止まって正面にあるものを見つめる。その視線の先にあるのは……歩道の隅っこに広がる、黒ずんだ陽炎のような何か。

(……なんだ、あれ？)

大きさはだいたい人間大くらい。あえて無理に言葉にして表現するのなら、立体映像で作った黒い寝袋、と言ったところだろうか。

(……って、流石にそれは無理がありすぎるか。我ながら語彙が貧困というか、表現力がないというか)

などと内心で自嘲気味に苦笑しながらも、少し近づいたり遠ざかったりしてそれを観察する。しかし目の錯覚のたくいなら距離で見え方に変化の一つもあるはずだが、それもない。

となると後は、寝不足が行き過ぎて幻覚を見ているとか、そんなものくらいしか候補に残らないが……

(まさか一日徹夜したくらいで、そんなことになるとは思えんのだけどな……)

まあこのまま一人でうだうだと考えていても埒があかないだろうし、この際だからもっと近づいて、可能ならば触ってみるとしよう。それが何かの現象　幻覚含む　ならば、手で触れることはできないだろうが、何か一つくらいは分かることがあるかもしれない。そうして思考を打ち切り、甲斐があと一步でそれに触れる距離にまで届く、というところで

「……お待ちなさい。それ以上、私に近づいてはいけないわ」

どこか息絶え絶えな、だけどしなやかさは損なわれぬ……そんな不思議に綺麗な声が、甲斐の耳に届いた。

反射的に足を止めて、辺りに視線を巡らせる。そしてこの声の主は何処に……という疑問は、足元にあった不思議な陽炎だったものに視線を向けた時に、氷解した。

その時甲斐の瞳に映っていたのは……地面に倒れ伏し、顔だけをこちらに向けている緑髪の少女の姿。

そこに人などいなかったはずなのに、確かに声は彼女が発したものであった。

(まさか、地毛ではないよな?)

染めたにしては、やけに自然で鮮やかな美しい艶と色。それが染料によるものなら、さぞやその筋には人気のものだろう。服装もやけにゴスロリチックだし、もしかしてバンドでもやっているのか、それともコスプレが趣味なのか。

(それにしても……)

普段なら、今のように入が倒れていれば取り敢えず声をかけて場合によつては救急車、といったところだろうが……どうにも妙だ。

甲斐はそのまま倒れている少女の言葉に返答もせず、一度距離を取る。そしてもう一度同じ位置に立つと、右の肘に左手を添えてそつと顎を撫でた。

今しがたの行動で、分かったことは二つ。距離が離れると、先ほどの黒い陽炎のようなものに見えて、近づくと今のように少女の姿に見えるということ。

それを頭の中で確認すると、次に甲斐はその間にふらふらと起き出して立ち上がったいた少女の正面まで近づき、

「ちよつと失礼」

と声をかけて、ぱんと軽くその細い肩を叩いた。

「……………」

彼女は初め、最初の言の通り甲斐が己に近づくのをやしとしないのか眉を潜めていたが、その行動の意味が理解出来ずに今は訝しげに首をかして甲斐を見ていた。しかし甲斐はその怪訝そうな視線を気にもせず、更に頭の回転を早めていく。

(問題なく触れる、か。これで夢幻のたくいであることは、否定されたな)

まあそれには自分の頭がまともであるのなら、という条件はつくが…………己の正気を自分で疑っても仕方が無いので、今はそれは考えない。

予想。仮定。想像。可能性。様々な考えが甲斐の頭の中を巡っていく。そのどれもが、目の前にいるこの少女の正体に対するものだったが

「う……………」

その思考は、彼女がふと漏らした小さなうめき声に遮られた。そこで甲斐が顔を上げてもう一度そちらを見ると、そこには再び地面に倒れようとしている緑髪の少女の姿が。

「え、おい!？」

それに慌てた甲斐は、すぐに考えることに夢中になりすぎていた自分に内心で罵倒を浴びせながら、その華奢な体をなんとか地面に倒れ込む前にギリギリで抱きとめた。

「……これは、どうしたもんかな」

相手が普通の人間なら熱射病か何かかと思うところだが、どうにもこの少女は普通ではなさそうだ。となれば果たして、このまま普通の対応 軽度なら水分補給をして木陰などへ、重度なら病院へ連れて行く をしてもいいものか。

一度体勢を立てなおして少女を背中に背負った甲斐は色々と考えた末に、取り敢えず自分の家で寝かせて、それで目を覚ましたら本人に確認しようという結論を出す。

幸いなことに、家は一軒家だ。仮に何かがあったとしても、近所の人に迷惑がかかるということは早々あるまい。

「そうと決まれば善は急げ、だな」

このまま日光降りしきるこの場にとどまり続けるのは、少女にも自分にもあまりいいことはないだろう。そう考えた甲斐はもう一度背負い直して落ちないように気をつけると、家路を急いで足を早めた。

1話

「ここ、は……？」

緑髪の少女

かぎやまひな
鍵山雛は、

どこかうめき声のような掠れた声を漏らしながら、ゆっくりと体を起こした。そしてぼやける視界にもどかしさを感じて目を擦りながら、静かに視線を巡らせる。

畳の部屋。しかれた布団。横たわっていた自分。なぜか部屋の隅のタンスの上にポツリと置かれている、何かの動物のぬいぐるみ。

ここはどこなのか。自分はどうなったのか。……何故、自分は存在できているのか。

「う……」

頭が重くて、考えがまとまらない。頭痛もするし、体が酷くだるかった。人間の病気には経験がないが、重度の風邪を引いたらもしかしたらこんな感じなのかもしれない。

雛が額に手を添えながらそんな事を考えていると、その時かたりと戸の開く音がした。その音にそちらに視線を向けると、そこには水差しとコップを載せたお盆を持った、倒れる直前に話したあのよく分からない男の姿が。

「あ、起きたのか」

その男 甲斐はお盆を布団の脇に置くと、自分も床に腰を下ろした。そしてその後雛の顔を覗くようにして、

「やっぱり調子が悪そうだな。病院に連れて行っていいものか分かんかったから取り敢えず家に連れてきたけど、どうする？」

「え？ どうする、って……？」

未だ血の気の引いた青白い顔色のまま、甲斐の問いに質問を返す
雛。

「病院に行くのならこれからでも連れて行くし、それが嫌ならそのまま寝てもいい。なにか欲しいもんがあるようなら持ってくる。ま、あんまり無茶言われても困るけどな」
「いえ……」

雛は一度目を瞑って間を取ると、軽く首を横に振って甲斐の目を見た。

「必要ないわ。これは人間の医者のところに行っただろうなるものもないもの」

「そか。それで、欲しい物は？」

「それも、いい」

再度首を横に振った雛を見て、甲斐は短く「分かった」とだけ口にして相槌を打った。

何も聞いてこないし、疑問を挟んでくるわけでもない。雛はおかしなくらいの物分りの良さに疑問を抱くも、それは内心に留めて立ち上がろうとするが、

「あ……」

すぐに目眩を起こして、再び布団の上に倒れこんでしまう。

「おいおい、無茶するなよ」

それを見て、甲斐は何も聞かずに雛に布団をかけ直して寝かせよ
うと手を伸ばすが、

「だめっ」

同時、雛は逃げるように身を引いて、強い拒絶反応を見せた。

「あ、悪い。そりゃそんな状態で見知らぬ男の部屋に連れ込まれちゃ、警戒もするよな。少し配慮が足らなかった」

雛は気にした様子もなしにそう謝ってくる甲斐に小さな罪悪感を覚えるが、それは胸の内に仕舞い込むとそうではないとすぐに首を横に振った。

「違うわ。アナタが悪いわけじゃないの。私は……」

とそこまで話して、続きを一向に口にしない雛に甲斐は訝しげに首をかしげる。

「私は？」

「……いえ、なんでもないわ。それよりも、私は行かないと。助け
てくれたことには感謝するけども、あまり長居するわけには……」

そう言って起き上がるようにする雛を無言で甲斐は見つめていたが、

「……で、また行き倒れるつもりか？」

とどこか鋭い目をして雛を制した。

「そんなつもりはないわ」

「残念ながら、全くもって説得力の欠片もないな」

小さく溜息を吐きながら、甲斐は言葉少なにそう言い放った。そして更に、

「アンタが元気なら、別に止める理由はなかったんだけど」

と苦笑い混じりに言葉を付け足し眉尻を下げる。

「どうしてそこまで……、いえ、そもそもあなたは、何故私を助けたの？ 最初はなにか邪な考えでもあるのかとも思ってたけど、そういうわけでもなさそうだし……」

甲斐はその言葉を聞いて、そんなに不思議がられることかなと疑問に思いながら首を傾げる。

「何故と言われても、そんな大した理由は必要かねえ？ 普通助けるだろ、目の前で誰かに倒れられたら」

「……私が、人間じゃなかったとしても？」

その、こいつは何を言っているんだとそう思われることも覚悟で口にした言葉は、

「アンタが人じゃなかったとしても」

思った以上に、効果を発揮しなかった。

「なっ……!!」

「そこまで驚くことか？ あれをみりゃあ、アンタが普通じゃないってことくらいはさすがに分かるさ」

絶句している雛を前にして、甲斐は事もなげに言い切った。

「ま、だからどうしたって話ではあるけどな。ほらほら、そういうことだから、とりあえず布団に戻って。そんな今にも倒れそうな顔して無理に動こうとしない。分かった？」

「え、あ、うん……」

なんだか彼のその勢いに押されて、素直に頷いてしまう。そうして雛が大人しく布団の中に収まると、

「それじゃ、俺は晩飯の買い物に行ってくるけど、アンタは何がい？ リクエストが無いようなら、お粥なんかにするつもりだったんだけど」

「え？ あ、いえ。私は別に、」

「いらない、っていうのはナシな」

「でも……」

「でもも力カシもなにもない。俺が気にするの。んじゃ、お粥で決定だな。オーケー？」

「……う、うん」

おずおずと布団をかぶりながら頷いた雛に、甲斐はふっと柔らかかに笑い返すと、

「よし。じゃあみ〜ことと一緒に帰ってくるかな。一応言っておくけど、ちゃんと大人しく寝てるんだぞ？」

と言って立ち上がり、部屋から出ていってしまった。

そんな甲斐の反応に、なんだか途中から自分が我がままを言っている子どもになってしまったような気がしてしまい、胸の内に気恥

ずかしさが残ってしまう。

「変な、人間……」

事故で外の世界に来てしまつて、力は減る一方。信仰もなければ自分が見える人間すらいなくて、その上『現実』の強力な否定にさらされて……もう消えるのを待つばかりなのだ、そう思っていたのに。後はどうやって厄を振りまかずに、人知れず消えようかと悩んでいたはずなのに、こんな事になつてしまつとは思ひもよらなかつた。

(そういえば……)

そこまで考えて、あることに思い当たる。こちらの世界に来てからむこう、ずっとさらされていた存在の否定が、この家に来てからは全くないのだ。

外の世界では、自分のような幻想の存在は否定され、時間と共に消えさつてしまう。だからこそ、妖怪や自分たち神々は『幻想郷』へと渡つていったというのに、これは一体どうしたことなのだろうか。

この家の中は、許容に満ちている。現実の冷たい否定ではなく、ただ温かいだけでもない、優しい許容に。それはきつと……

(あの人間が、そうだから?)

彼が戻ってきたら、自分のことを話してみるのもいいかもしれない。住んでいる家の雰囲気を作るのは、当然そこに住むものだ。こんな許容に満ちた空間を作ることのできる人間なら、否定せず聞いてくれるかもしれない。

(……違う。だめよ。なにを考えているのかしら、私)

とそこで、雛はまるでそれまでの考えを否定するかのように小さく首を横に振った。

話すことはいい。きつと彼は事情を話さなければ、自分がすぐに離れることを納得してはくれないだろうから。だけどそれは、受け入れてもらうためにはない。いなくなるためだ。

自分の存在は、彼に不幸をもたらす。本当なら今すぐにでも、ここから離れなければならぬのだ。

(ああ、でも……)

今は、今少しだけはこの居心地のいい空間に、身を浸していたい。現実の冷たさに凍えてしまっていた心が、そう訴えていた。

きつとこのまま勝手に出ていってしまったら、あの様子なら彼は探しに出てしまうだろう。だから帰って来て事情を話し、納得してもらうまでは、自分が出ていく訳にはいかない。

そんな拙い、理論武装。それが免罪符にすらならないであろうことは自覚していながら、雛は次第に襲ってくる睡魔に負けて優しい微睡みの世界に身を沈めていった。

休まずに、走り続けられる者はいない。休まずに、飛び続けられる鳥はいない。休まずに、泳ぎ続けられる魚はいない。しかし家がなければ、人は休むことができない。巣がなければ、鳥は羽を休めることはできない。住処がなければ、魚は休むことができない。

そこはきつと、人のために生き続けた神……『厄神』鍵山雛にとって初めて得ることの出来た、心休まることのできる空間だったのかも知れない。

2話

すーっと音を立てないように戸を開けて、静かに部屋の中を見る。するとそこには小さく寝息を立てて眠っている雛の姿。お粥が完成したので様子を見に来たのだが、これならまだ用意するのは後にしたほうが良さそうだ。

甲斐は雛を起こしてしまわないように足音を忍ばせながら、ゆっくりとその傍らに腰を下ろす。どうやら最初に会った時よりは、だいぶ顔色も良くなってきたようだ。

出会った時や出かける前はゆっくり観察している暇などなかったから分からなかったが、こうして余裕ができて改めて眺めてみると、まるで人形みたいに整った容姿をしていることが見て取れる。

美しさの中にどこか愛らしさを秘めた、大人と子どもの中間のような顔立ち。見た目で判断するのなら、歳は甲斐の二つか三つほど下だろうか。身長は甲斐より頭一つ小さいくらいだから、女性としては平均的な高さだろう。

更に目につくのは、地毛なのかイマイチ判断のつかない鮮やかな緑色の髪の毛、その髪型だろう。長さはセミロングほどで、それを胸の前まで伸ばして大きめのリボンで束ねているという少々変わり種なそれ。似合っていないというわけではないのだが、あまり見るものでもないのになんとなく目が行ってしまっていた。

「ん……」

とそこで、雛が小さく吐息を漏らした。

それと同時に甲斐は雛の髪から視線を外すと、少しずれてしまっ

ていた布団をかけ直してやる……が、あまり眠りが深い方ではないらしく、その拍子に雛が目を覚ましてしまったようだ。

「……あ、帰ってきてたのね」

「ああ、悪い。起こしちゃったかな」

「別に、気にしないでいいわ。お世話になってるのは私の方だもの」
「それこそ気にしないでいいって。全部俺が勝手にやったことだしな」

助けてくれと頼まれたわけでもなく、自分が好きでやってることだ。正直な所、変に気にされてしまっても困ってしまう。

「そう……」

雛のその一言を最後に会話が途切れてしまい、そして部屋の中に沈黙が流れる。気まずい、という程でもなかったが、さりとして気持ちのいいものでもなかったので、甲斐はその沈黙を破るために再び口を開いた。

「もう晩飯の用意は出来てるんだけど、アンタはどうする？　すぐに食べてもいいし、食欲がわかないようならもう少し」

休んでからにするか？　と甲斐が口にしようとした所で、

「鍵山雛」

その言葉は、雛の静かな声で遮られた。

「ん？」

「私の名前よ。できれば”アンタ”じゃなくて、名前で呼んでくれ

ないかしら」

「あ、名前ね。バタバタしてたのもあるけど、すっかり忘れてたな」

雛の言葉に甲斐は合点がいったように頷くと、

「苗字と下の名前、どっちで呼んだほうがいい？ それと、さんはつけたほうがいいか？」

と更に問いを重ねた。

「変わったことを聞くのね」

「そうか？」

「ええ、そうよ。……私のことは、呼び捨てでいいわ。雛、ってね」

雛がそう言うと、甲斐は小さく笑顔を浮かべて頷いた。

「あいよ、分かった。それと、俺は門倉甲斐っていうんだ。まあ俺のことも、好きなように呼んでくれ」

「じゃあ、甲斐で」

「おう」

甲斐が頷いたのを確認すると、雛はどこか安心したように目元を緩めて微笑んだ。

「ほんと、変な人間」

「失敬な。なぜか他のやつにもよくそう言われるけど、俺は至って平凡な一般学生だぜ？」

「全然普通じゃないじゃない。今後自分のことをそう言う時は、自称ってつけたほうが良さそうね」

「おいおい、ひでえなあ。こんな一般人捕まえてそんな事言うなん

てよ」

甲斐がおどけたように言葉を返すと、雛がくすくすと笑みを漏らした。それに甲斐も、ふつと笑い返して目を細める。それからしばらく二人の間には再び沈黙が流れたが、今度のそれは悪いものではなく、むしろ心地のいいものだった。

「少し……」

「え？」

しばらくして、ぼつりと雛が目を閉じながら口を開いたので甲斐はそれに耳を傾ける。

「もう少し、眠らせてもらっわ。そうすれば多分、今よりは動けるようになれそうだから……その時に、色々説明させて。そしたら、ここを出ていくから」

「ああ、分かった」

自分の出ていくという言葉にあっさりと言った甲斐の様子に少しだけ不満のようなものを感じながら、雛はゆっくりと襲いかかってくる睡魔に身を委ねていった。

「そつだ。俺は飯食ってくるつもりだけど、大丈夫か？ 何だったら、雛が起きるまではここにいて」

「……いいえ、いいわ。私には構わないで、貴方は食事を……」

その一言を最後に、雛は完全に眠りに落ちた。

「そつか。まあゆっくり寝て、早く元気になれよ」

そしてその様子を見て、甲斐も最後に囁くような声でそう呟くと、
食事を摂るために立ち上がるうとする、が

「あれ？」

そこで自分の服の裾が雛のその白魚のような指に掴まれているこ
とに気づいて、すぐにその動きを止めた。そして少し考えてから、
浮かしかけていた腰をもう一度そこにおろして、

「やれやれ。仕方ないな」

と優しくに笑うと、ゆっくりと裾を掴んでいた指を解いてその手
を握る。そして空いていたもう一方の手で雛の手の甲をぽんぽんと
軽く撫でてから、そのままぐうと主張を始めた腹の虫を宥めるため
に自分の腹を押さえた。

3話

鍵山雛は神である。神とは言っても全知全能の、という意味ではなく、日本で言う所の八百万の神の石柱だ。そんな彼女の役割は、『厄神』。それは『厄』と呼ばれる、不幸をもたらす穢のようなものを集めるというものだった。

その『厄』というものは彼女の身の内にはなくその周囲に溜め込んでいるので彼女自身に影響はないが、それ故彼女に近づく生者全てに不幸という名の牙を剥く。

だからだろうか。彼女は人や妖かしの不幸を防ぐという、本来ありがたがられるようなご利益のある女神だというのに、あまり誰かに好かれることはなく、また誰かと関わることも殆ど無い。どころか、嫌がられ遠ざけられているというのが実態だった。

他にも彼女自身それがあたりまえだと考えて、自ら人妖と接触を持つとしないことも、恐らくそう思われる原因の一つなのだろう。そんな彼女の神としての始まりは、今から数百年前の日本……その山間部の、とある村でのことだった。

昔々ある所に、小さな村がありました。その村には、一人の幼い少女がいました。少女は早くに親を亡くし、一人で生活していました。

少女には家こそ両親の残してくれたものがありました。しかしそれでもまだ子ども。農作業をするにも上手く行かず、狩りをするのもままならない。細々と近くの家の手伝いをして、どうにか食いつないでいくのが精一杯の毎日でした。

だけど少女は、自分のことを不幸だとは思いませんでした。家に帰ればいつも見守ってくれている、一つの人形。それは母が亡くなる前に少女に作ってくれた、手作りの雛人形でした。

少女はその人形を見るたびに母のことを思い出し、父のことを思い出して……きっと自分のことを両親が見守ってくれているのだと信じて、一生懸命に生きていました。

そんな少女のもとに、ある日旅の修験者が現れました。その修験者は修行の旅の途中で村に訪れて、宿を探していたところを偶然少女が家に招いたのです。そのまま修験者は少女の家で数日を過ごし、そして再び旅へと戻る前に、少女に一つ言葉を残しました。

貴女の周りには、不幸の影が見えます。それをそのままにしてしまつたら、きっと貴女はいつか酷い目にあつてしまつてしまうでしょう。だから

母の遣した、大事な大事な雛人形。それを自分のヒトカタとして川に流しなさい。そうすればその人形が少女の纏った厄を代わりに引き受けてくれる。

そんなことを最後に言い残して、修験者は村を去つて行きました。それから一日経ち、二日経ち、一週間の時が経つても、少女は修験者の言葉通りにすることができませんでした。彼の言葉を信じていなかったわけではありません。ですが少女にとってその人形は、母の残してくれた唯一のもの。そう簡単に手放すことは出来なかったのです。

しかし、そうして眠れぬ夜を過ごしていた少女に、一つの転機が訪れました。

ある日突然村を襲った、激しい豪雨。それはいつもの山に恵みを

もたらす慈雨ではなく、災禍をもたらす神の怒りのようでした。

川は氾濫し、村の一部は崩れた山に巻き込まれ、作物は全てダメになり、幾人かの人が流される。それはそれは、大変な不幸でした。村人たちはその豪雨が収まった後も、しばらくは満足な食事もままならず、とてもとても苦労しました。

そして少女はそれを、自分が修験者の言葉を無視したせいなのだと、そう思い込んでしまいました。

それが事実がどうかは、分かりません。本当に少女に降り注いだ不幸がその豪雨を呼んだのかなど、神様にしか分からないことなのです。ですが少女には、それが間違いのない事実なのだと思います。てしまったのです。

少女は雨が止んで、まるで少し前の天気が嘘のように晴れたある日、ふらふらとお腹を空かせて臍気な足を引きずりながら山の上、川の上流へと向かいました。少女の母が作ってくれた人形を、その小さな胸に抱いて。

そして川の上流へとたどり着いた後、少女は夜なべして作った小さな木の船に人形を載せて、そつと川に流したのです。

その船は、少女の最後の心遣いでした。せめて人形が溺れてしまわないように。そして出来れば自分の知らないどこかで、親切な誰かに拾われてくれますようにという、幼い願い。

その後少女はそこで力尽きてしまい、先の豪雨で増水した川に落ちてしまいます。始め少女は一生懸命泳ごうと抵抗しましたが、雨のせいで早まった流れはそれを許してくれません。

やがて少女は抵抗をやめて、力尽きてしまいました。まるで流した人形と一緒に流れるように。これである子も寂しくないかなと、そんな思いを残して。

そして、その日の夜。少女がいつも手伝いに行っていた家の夫婦が、少女がいなくなってしまうことに気づきます。

今はまだ村の復興も終わっておらず、山は雨で地盤が緩んでいるし、川も酷く増水している。子どもが独りで歩くのはあまりに危険過ぎます。

慌てた夫婦はどこかに手がかりがないかと探して、少女の家で修験者が残した言葉を少女が書き記した、その紙を見つけました。

その横には一言、ごめんなさいという言葉。それはまるで、遺書かなにかのようでした。

それからすぐに、手の開いている村人総出で少女の搜索が始まりました。程なくして一人の村人が、川の下流に打ち上げられた壊れた人形と、それに寄り添うようにして倒れていた少女を見つけます。ですが少女は既に事切れていて、助けることはできませんでした。

村の住人であり、それも健気な子どもが人知れず死んでしまったことに、村人は皆嘆き悲しみました。そして同じようなことがもう起こらないようと、少女の遺体を埋葬した後傍らにあったその人形を供養して御神体として祀り、毎年同じ時期にヒトカタを川に流すようになりました。

それからいく年かの年月が経ち、やがて祀られた人形には信仰が集まり、それは一柱の神となりました。

……それが、人のために生きる神。『秘神流し雛』の異名を持つ鍵山雛という名の神の、始まりだった。

雛には、自分が人形だった頃の記憶が残っていた。そして少女の死を悲しんだ、村人たちの想いを受けて彼女は神になった。

故に彼女は、人が好きだった。たとえどれだけ嫌われようとも構

わない。それで不幸になる人々が、ひとりでも減るのならばと。

自分のためではなく、自分のせいで周りを不幸にしまったことを何より悲しんだ少女。不幸をもたらした少女を恨むことなく、少女を死なせてしまった不幸を疎んだ村人たち。優しい優しい、人間たち。その記憶がある限り、なにがあつたとしても雛が人間を嫌うことはないだろう。

役割だから、『厄神』として在るのではない。自らが望み続けたから、今も『厄神』として変わらず在るのだ。だから厄を集め続けることも、それによって人や妖かしから疎んじられることも苦とは思はなかつた。

だけど

(時々、酷く寂しくなることがある。これまでもこれからも、ずっと独りであることが)

自分に誰かが近づくということは、厄によってその相手を不幸にしてしまうということだ。それは嫌だつた。だから常に独りであることは、自ら望んだことでもあつたのだ。しかしだからと言って、何も思わずにいることは、例え神とはいえど無理だつた。

神とて、心持つ存在。それも八百万の神は、どれも人に望まれて生まれたものばかりだ。故に人を求めるのも、必然のことなのだろう。正の方向にも、負の方向にも。

人がいなければ神は存在することは出来ず、そして人は神に寄つて恩恵を受ける。

神と人との共存。それが八百万の神々が作ってきた、神と人との関係だつたから。

だから、なのだろうか。この……手から伝わってくる、初めて感じた人の温もりが、どうしても離れがたいものだと感じてしまうのは。

「……、え？」

微睡みの中で自分の思考にふと疑問を感じて、思わずパチリと目を覚ます。そうして体を起こしてすぐに目に入ったのは、うつらうつらと船を漕いでいる甲斐の姿と、その彼に握られている自分の手。そしてそこから感じられる、確かな人の温かみ。

「え、あ、どうして……？」

こうして男性に手を握られたことなんて、ついぞ経験したことがなかった。不思議と会ったばかりの相手だというのに嫌悪感こそなかったが、だんだんと恥ずかしくなってしまうて離は頬を紅潮させ、つうと顔を俯ける。

体はもう、本調子とは言えないまでも普通に動く分には問題なさそう。ならば一刻も早くここから、この家から去らなければならぬ。

「……」

（人の体が、誰かの温もりがこんなに優しいものだなんて……知らなかったわ。今まで人とは距離をとって生活していたし、誰かに触れようだなんてしようとも思わなかったから……）

どうしても、それは離れがたいものだった。そんな事は、本来あってはならないことなのに。

早く甲斐を起こして一言お礼を言って、そしてここから離れなければ。理性はずっと自分にそう訴えかけていたが、どうしても唇が声をだそうと動いてくれない。

そうして幾ばくか離が逡巡していると、その気配に気づいた甲斐がふつと目を覚ました。

「ああ……起きたのか」
「ええ」

それと同時に……ぐつと何かを飲み込んで、雛は静かに頷くと視線を未だ握られている手に向けた。

「あの、離してもらえるかしら」
「あ、悪い」

すると小さく謝って、甲斐はすぐにその手を離す。それにどこか名残惜しさを感じながらも、雛はどうして自分の手を握っていたのかと疑問を口にしようとしたが、

「これ……この服、私のじゃ、ない？」

そこでようやく、自分が着ている服がいつものドレスではなかったことに今更気がついて、小さく目を見開いた。

「ん、なんだ、気づいてなかったのか。何も聞いてこなかったもんだから、おかしいとは思ってたけど」

雛が着ていたのは何故か、ボタンの付いた無地の白いシャツ一枚。その下は下着のみで、シャツ自体が大きいから仮に立っても見えはしないだろうが、それは酷く心もとないものだった。

「甲斐、まさか貴方……」

ここに居るのは、自分を除けば甲斐一人。ということはこの服に着替えさせたのは

「なんかひどい疑いの目で見られてるから誤解を受ける前に先に言っとくけど、それに着替えさせたのは俺じゃないぞ。実は家にはもう一人、み〜ことっていうメイドがいてな。俺が雛を連れてきた時それじゃあ寝づらいだろうからってあいつがあんたの服を脱がしてそれを着せたんだ。服が何故かワイシャツ一枚なのもあいつが勝手にやったことだから、もし文句があるようなら後で会ったときにでも直接言ってくれ」

「あ、そうなの……。それなら、いいのだけど」

どこかほつとした様子で吐息を漏らした雛に、ふつと甲斐は苦笑を浮かべる。

「まあ何にせよさつきよりだいぶ調子も良さそうだし、取り敢えず飯にしようぜ。ついでだから、俺もここで食べちまうかな」

「え？ 甲斐もまだ食べてなかったの？」

甲斐の言葉に思わずといった様子で聞き返してきた雛に「ああ……」と小さく呟きを漏らすと、甲斐はぽりぽりと頭をかいた。

「前日から徹夜だったせいかな、あの後俺も気づいたら一緒に寝ちまっただけだね。まあそういう訳だから、まずは温め直さないと駄目だな。ちよつと待っててくれ」

「待つのは別に、構わないのだけど……」

それからすぐに、どこか腑に落ちないような顔をして首をかしげている雛を残し、甲斐は踵を返して部屋を出ていった。

そして雛はなんとおはなしにその背中を見送った後、寝る直前のこととを思い出しながら先程まで甲斐に握られていた手のひらに視線を落として、じつとそれを見つめていた。

4話

甲斐は雛を寝かしていた和室を出ると、居間を通り過ぎ対面型のキッチンまで歩いて行く。そしてそこで何やら作業をしているメイド　み〜ことこの背中に声をかけた。

「み〜こと」

「あ、甲斐ぼっちゃま。お目覚めになられたのですね」

何度言っても一向に治らないぼっちゃん呼ばわりに内心でため息を漏らしながらも、甲斐は小さく頷いた。

「ああ。それと雛……朝に連れてきたあの子も目を覚ましたから、飯にしようと思ってな。悪いけどみ〜ことは、お粥の方をあつためてくれるか。俺は自分の食う分やるからさ」

「それでしたら大丈夫ですわ。いつお二人が起きられても食べられるようにとどちらにも定期的に火をかけて温めておきましたので、いつでも食べられちゃったりしちやいますです」

「あ、そう……」

何度聞いても力の抜ける、変な敬語だこと。甲斐は相変わらずの卒のなさに感心しながらも、どこか気の抜ける思いで頷きを返した。このみ〜ことの時折出る奇つ怪な敬語は、何でも製作者曰く仕様なので仕方無いとのことだった。

そう、仕様。このちよつと奇抜な名前をしている『み〜こと』というメイド、実はただのメイドではなく、なんと驚きのロボットなのである。なんでも以前岡崎教授が自分の身の回りの世話をさせるために作ったメイドロボの姉妹機らしく、余ってしまったからとモニターがてら任されたのだ。

どこか赤みがかった金色のロングヘアに、くりくりと可愛らしく大きな目。見た目からは絶対にロボットとはわからないような自然さで、だけどやっぱり完璧すぎてどこか不自然さを感じてしまう北欧風の顔立ちをしている。

容姿端麗で料理は美味しく家事は万能と、それだけ聞けば言うことではないのだが、ところどころにその頭脳と才能の代わりに常識というものを母の腹の中にもおいてきたのだろう岡崎教授の妙な趣向が凝らされているのが困ったものだった。

まあそれが嫌だというわけではないし、今ではすっかり家族のようなもの。もはや彼女は門倉家にとって、なくてはならない大事な一員なのだ。

「？ どうされましたか、ぼっちゃま。わたくしの顔をじつと見つめて……、 はっ!? そ、それはもしかして、まずは飯なんかよりお前を食わせるという意味の合図だったのですかっ? もう、そうでしたらきちんとおっしゃってくださいれば、わたくしはいつでもお相手しちやいますのに!。奉仕はメイドのお勤めですもの、夜のご奉仕もこのみ〜ことにちよちよいとおまかせ下さいませ!」

「いきなりハイテンションでなにいつてんだ。んなわけあるかい」「あ痛!?!」

いやんいやんと一人で悶えていたみ〜ことの頭にごちんとげんこつを落として、さっさと食事の用意を始める甲斐。そしてみ〜ことは自分で頭を撫でながら、涙目になって痛みを訴えてくる。

「うう、ひどいですわぼっちゃま。いきなりグーで叩くなんて……。ああ、ですがわたくしは主人に忠実なメイドロボ。どんなにひどい事をされたとしても、何も言わずに付き従うのがさだめなのですわ

……」

よよよと泣きまねをしながら妙な寸劇を始めたみ〜ことを無視して、甲斐はお盆に載せた食事を持って和室へと向い始める。それを見たみ〜ことはあつと声を上げて、慌てて泣きまねをやめて立ち上がった。

「まあっ、お待ちになっってください！ わたくしもお客様にご挨拶をしたかったのでございます！ ああぼっちゃま、待って〜」

「だったらよ来い、置いてくぞ。……あ、ついでにお粥用のレンゲ持ってきてくれるか？ すっかり出すの忘れてた」

「あ、はい、分かりました。すぐにお持ちして参りますわっ」

なんだかんだ言いながら、一人で全部をやらずに自分に仕事を残してくれる優しい主人に喜びを覚えながら、み〜ことは急いで要求通りレンゲをとって甲斐の元へと駆け寄って行く。

その姿はなんだか主人が投げたものを取ってきた犬のようにも見えて、直後に甲斐はほとんど無意識に微笑を浮かべながらみ〜ことの頭をなでてしまっていた。

「？」

それに一瞬首をかしげたみ〜ことだったが、すぐに頬をほころばせて嬉しそうに笑顔を浮かべる。

「よし、それじゃ持ってくか」

「はい！」

そうして甲斐が和室の戸の前に立つと、み〜ことが自然な動作でそれを開ける。すると雛が直ぐに二人に気づいて声をかけてきた。

「あら、甲斐と……貴女は、どちらさまかしら？」

「はいっ。わたくし、甲斐ぼっちゃまにお仕えさせていただいております、メイドのみ〜ことと申します！」

と話し始めた二人の声を背景に、甲斐は持つてきた食事を置くための押入れから小さな木のテーブルを出して足を立たせると、更にその上にみ〜ことが用意しておいてくれたカバーをかける。そして避けておいたお盆をテーブルに乗せると、再び二人に視線を戻した。

「そうなんでございますよ〜。もう甲斐ぼっちゃまったら毎晩毎晩激しくて、求めてくださるのは嬉しいのですが、少し大変で〜」

「まあ。見た目によらず意外と元気なのね、甲斐って」

そしてそれと同時に、甲斐はひくりと頬がひきつっていくのを感じてしまう。何やらちよつと目を離していた隙に、随分と調子にのって有ること無いこと色々としゃべってくれたご様子のようにであった。

「おいこらその駄メイド。なにデタラメ吹きこんでんだ」

「駄メイド!？」

直後に何やら「ひどいですよ甲斐ぼっちゃまあ!」などとみ〜ことから抗議の声が飛んでくるが、それを適当に流して甲斐は雛に誤解されないよう弁解するべく口を開いた。

「一応言っとくけど、今そいつが言ったのは全部嘘だからな」

「あら、そんなに恥ずかしがらなくても……甲斐も若いのだし、いいんじゃないかしら?」

「まったく信じられてない上にむしろ肯定された!？」

「……ぷっ。ふふ、冗談よ」

甲斐がツツコミを入れた直後にクスクスと笑い始めてしまった雛を見てからかわれたことを理解すると、甲斐は憮然とした表情で肩を落とした。

とそこで甲斐は改めて雛の顔を見返して、その様子が最初とはずいぶんと変わっている事に気づく。なんだかただ顔色が良くなっただけではなくて、その表情や雰囲気は何と言うか……どこか大きな余裕を持った、何か超然としたものに成っているように思ったのだ。そしてその態度からは初めの頃に感じられた人間らしさを薄れさせ、まるで別次元の存在のような……そんな見えない壁を感じさせられた。

(これが、普段の雛なのかな?)

雛からは病院だけではなくて……どこにも、誰にも連絡をとってくれとは頼まれなかった。それは恐らく、普通の手段で連絡のつく仲間がいらないからなのではないだろうか。そんな状況であんな状態になってしまっていては、きっと心も弱っていたのだろう。こうして体が回復して、やっと普段通りに振る舞えるようになったということか。

(これならもう、本当に大丈夫そうだな)

そんな事を一人で考えて頷いていると、気づけば小首をかしげた雛から怪訝そうな目で見られていた。それで我に返った甲斐はいい加減食事をはじめようとテーブルを雛の近くまで移動させて、

「それじゃ悪いけど、雛にはみ〜ことが食べさせてやってくれ。俺もここで食ってるから、何かあったら言うてくれればいい」

「承知致しましたでございますよ」

甲斐の言葉を聞いて任せておけと言わんばかりに胸を張ったみごとを見て、雛はすぐに遠慮するように小さく首を横に振った。

「そんな……食事まで用意してもらって、そこまでして貰う必要はないわ。自分で食べるから、私のことは気にしなくても」

「いいえ、ダメですよ？ そんな遠慮はしないで、病人さんは大人しくいうことを聞いてくださいね」

しかしみごとはさっぱりこたえた様子を見せないで、少し強引なくらいの勢いで雛にお粥を勧めていく。そのみごとこの勢いに押されて、次第にじりじりと雛は身を引いていった。

(こつこつ時は、みごとこの押しの強さは助かるなあ)

しみじみとそんな事を考えていると、雛が助けを求めるような視線を向けてきた。しかし甲斐はそれにつこりと笑顔を浮かべると諦めると視線だけで答えを返す。そしてまるで我関せずと言わんばかりに、もそもそと食事を始めるのだった。

「さあさあ雛さん、観念して大人しくわたくしの手ずからこのお粥を食べるのですよ。そう、それはまさしく親から餌を与えられる鳥の雛のように！！ あら、わたくしついたら今ちよつとうまいこと言っただんじやないでしょうか」

「ちよ、ちよつと！ もう、私の話を聞いてー！」

そんな悲鳴じみた雛の声は、完全にスルーして。

別にさつきからかわれたことへの意趣返しも兼ねているだなんて、そんな事は全くなきにしもあらずだったりしなかったり。

5話

「うう……こんな初めて。私、穢されちゃったわ。厄神なのに……」

何やら口の周りにちよこちよこ米粒やらお粥の汁やらをつけた雛が、ペタリといわゆる女の子座りをしながら嘆いている。どうせまたみくことが調子に乗っちゃって色々失敗したのだろうけど、こは彼女の主人として一応謝っておくべき場面なのだろうか。

そんな事を考えながら食べ終えて空いた食器をお盆に載せなおして立ち上がった甲斐を置いてけぼりにして、二人はそのままわいわいと賑やかに騒いでいた。

「ああ……申し訳ありません！ いけませんわ、お粥で雛さんのお口周りがべったりです！ しかもそれが垂れてしまつて、首元にまです。これはすぐにでもお風呂に入っていただかなければ！」

「ええ！？ いえ、いいわそんなの！ タオルか何かを貸してもらえばそれでいいから本当にっ！」

「うふふ、そんな遠慮なさらずともよろしいんでございますことよ。さあさあ雛さん、これからわたくしとお風呂でゆっくりしっぽりと」

「はい、そろそろいい加減にしとけよ？」

「あふん!？」

『お前はどこのエロオヤジだ』などとそんな事を思いながら、手をわきわきとさせつつ雛に迫るみくことの頭頂部にビシツとチョップを落として動きを止める。それでみくことは痛みを悶えてか「あうう……」とうめいていたが、それは完全スルーの方向で甲斐は雛へと向き直った。

「悪いな、雛。み〜ことが悪乗りしちまったみたいで、迷惑をかけた。俺があんまり家に客連れてくることなんて無くて珍しいもんだから、こいつもついテンションが上がっちゃうたんだろっけど……」

「あ、いいえ……」

その謝罪の言葉を聞いて雛はすぐに首を横に振ると、こほんと一度咳払いをして佇まいを整える。

「迷惑なんかじゃないわ。ただ、誰かとこうして接するのなんてほとんどなかったから、ちよつと戸惑ってただけよ。……それより申し訳ないのだけど、さっきも言った通りタオルか何かを貸してもらえないかしら。色々お世話になっておいてこちらから頼むのは心苦しいのだけど、ちよつと気持ち悪いのよ、これ」

「ああ、それなんだけど」

「そこで甲斐は一度雛から視線を外して、未だ悶えたままのみ〜ことの方へと顔を向けた。

「み〜こと。さっきあんな事言ってたけど、もう風呂にお湯は張ってあるのか？」

そして甲斐がそう問いかけると、み〜ことはさっきまでの態度がまるで冗談のように柔らかな微笑を浮かべて立ち上がり、

「はい、もちろんでございますわ、甲斐ぼっちゃま」

とどこか恭しい態度で頷いた。

「そか。んじゃあ提案なんだけど、さっきみたいな冗談じゃなくて

ホントに風呂に入らないか、雛。もちろんさっきのこいつの悪ふざけは置いて、一人でさ」

「え、でも……」

「み〜ことじゃないけど、遠慮はいらないぞ？ そんなんになつちまったのはうちのメイドのせいなんだし、多分寝てる間に汗もかいてるだろ。あんたも女の子だ、風呂くらい入りたいんじゃないか？ 使い方は当然教えるし、別に減るもんじゃないからな。変に気にするこたあないさ」

甲斐がからりと笑ってそう言つと、雛はしばらくの間迷つていたようだが、

「それじゃあ失礼して、お風呂お借りしようかしら。確かに一度体を流しておきたいっていうのはあったから、それはすごくありがたいわ」

と言つて頷いた。

「おう、そうしとけそうしとけ。んじゃあみ〜こと、悪いけど雛の案内とかは頼むな。そっちは女同士のほうが安心するだろうし、俺は上で休んでっから」

「はい、分かりましたわ」

「えっ」

先程のことを思い出したのだろう。また何かされるかもと警戒した雛に甲斐は安心しろと軽く笑つて、対み〜こと専用の切り札を切る。

「み〜こと、念のために一つ言っておくけど……今度余計なことしたら、今後一週間はデザート作り禁止令発動するからな？」

まあ流石のみ〜ことも冷静になった後にお客様にそうそう粗相を働くとは思わなかったが、それでは雛の方が安心しないだろう。そう思った甲斐が一言そう口にする、み〜ことはビシッと軍隊の最敬礼にも劣らない機敏さで、

「畏まりましたわ、ぼっちゃま！ 決してそのようなことはいたしませんともっ！」

と叫び声にも似た声を出した。

「えっと……？」

「ほら、これでもう安心してもらって大丈夫だぞ。み〜ことの一番の趣味は、デザート作りでな。こいつはそれを凄く楽しみにしてるから、こういっとけば大抵の事はきちんとやるのさ」

戸惑いを隠せずに視線を彷徨わせた雛に対して、甲斐はどこか楽しそうにそう言った。

そうまでしないときちんといいことを聞かないメイドというのは、果たしてどうなのだろうか。この変わり者の主従のやりとりを見た雛が思わずそんな事を思ってしまったのは、きっと仕方のないことだろう。

「それじゃあそういうことで、俺は自分の部屋に行くな。あ、それと雛の服はみ〜ことが洗濯しておいてくれたんだけど、まだ乾いてないらしいから着替えはまた適当にみ〜ことにもらってくれ」

そして甲斐は最後にそう言い残して踵を返すと、静かに戸を空けて部屋を出ていった。

「それでは雛さん、早速お風呂へ参りましょうか。こちらですわ」
「……そうね。それじゃあお願いしようかしら」
「はい、お任せ下さい」

そんなやりとりを背中越しに聞きながら、甲斐はほとんど軽い足取りで階段を登っていく。そしてガチャリと自分の部屋の扉を開けると、早速机に向かって省スペース展開型の携帯端末を開いた。

その端末に保存してあった、岡崎教授の最新論文。それを流し読みしながら、甲斐は次の実験について思いを馳せる。

若干一八歳にして博士号をとった天才、岡崎夢美教授の研究内容は、『魔力』と『魔法』の存在証明。当然ゼミ生としてその研究室に所属している甲斐も、微力ながらそれについてのデータ集めや分析などの手伝いをしていた。

統一原理。現在この世界で一般的とされている、様々な力エネルギーに関する大原則に、真っ向から対立する『魔力』、『魔法』という法則。甲斐のそんなものの研究に関わっているという下地が、今回雛のような人外の存在をあっさり信じるということの一因だったのだろう。もつともそれだけが原因というわけではなかったし、おそらく『門倉甲斐』という人間の性質上、仮にそれらがなかったとしても、本人から告げられれば案外あっさり受け入れていただろうが。

「はあ……」

甲斐が自分の部屋に戻って論文を読み始めてから、およそ数十分ほどした頃……甲斐は突然小さく溜息を吐いて、携帯端末の展開型ディスプレイを収納しそれを非接触充電機の上に収めた。

(……相変わらず、さっぱりわけがわからない)

例えば、考古学の研究をしましょう。その場合普通研究者というのは、まず資料を集める事から始める。それは古い文献であったり遺跡であったり、そういったものを参考にしてそこから自分なりの答えを出していくものだ。

大抵の場合文系理系問わず、普通何かの研究というのは参考にすものや研究対象が先にあって、そこから研究を進めていく。しかし岡崎教授の場合はそうではなくて、『魔法』そして『魔力』という研究対象の実例が手元がないというのに、既存の原理を常人には理解出来ないほど複雑な論理を持って組み立てていき、そこから論拠を見出して理論をひねり出す……言うなれば、『どこにも隙のない机上の空論』とでも言うべきもの。それが彼女のその論文には記されていた。

そんなもの、ハッキリ言って常人どころか知識人にだって理解出来ない。実際問題、岡崎教授はその人格にさえ目をつぶれば一〇〇人が一〇〇人納得するような確かな天才だというのに、学会においてはその頭脳と理論が全く認められてはいなかった。

結局のところ、彼女のそれは早すぎたのだろう。かつて天動説が主流であった時代に地動説を唱えた学者のように。あるいは相対性理論という現代にも通じる理論を打ち出した過去のとある天才のように。

ではなぜ甲斐がその論文……いうなれば研究の大前提とでも言うべきものを理解できていないというのにその研究室のゼミ生になったかというと、これが全くと言っていいほど甲斐本人の意志が介在していなかった。

そもそもの原因は、およそ一年半前に遡る。その時甲斐はとある

知人の所属しているサークルの、その活動の手伝いをしていたのだ。そしてその過程で偶然岡崎教授と少し話す機会があつて、そこで彼女に妙に気にいられてしまい、そしてそのまま半強制的に研究室に入れられてしまった、というものだった。

とはいえ昨日から今日の朝まで徹夜でその研究の手伝いをしていたことから分かる通り、甲斐自身は案外今のこの状況を楽しんでいたりする。

基本的にこの門倉甲斐という人間、大抵の事をあっさりと受け入れるずぶとい神経をしているのである。

6話

「甲斐ぼっちゃま。お休みの所申し訳ありませんが、少々よろしかったりしちゃいますでしょうか」

「こんこんと、ノックが三回。そして扉の向こうから聞こえてきたのは、みくことの声だった。」

「ん、どうした？ もう雛は上がったのか？」

そんな事を口にしながら、甲斐は部屋に備え付けてあった時計に視線を向けて時間を確認する。どうやらもう部屋に来てから一時間は過ぎていたようだ。いかに女性の風呂が長いというのが通説であったとしても、流石にこれだけ経てば大抵の人は出ていることだろう。

「はい。それでなにやら、雛さんが甲斐ぼっちゃまにお話があるという事で……今はお着替えも済ませられて、居間でお待ちになっていただいておりますです」

「話？ ああ、あの時言ってたやつか」

甲斐の脳裏に、結局二人揃って寝てしまったあの時の光景が浮かんできてなんとなく笑みを漏らす。そしてすぐに机から立つと、扉を開けてみくことと共に雛の待つ居間へと向かった。

するとそこで待っていたのは、和室で寝ていた時と何ら変わらない服装でどこか恥ずかしそうにソファに座っている雛の姿だった。風呂上りのせいか体の前でまとめていた髪を下ろしており、さらにはほんのりと上気した肌ともじもじと上目遣いでこちらを覗いているその姿はハッキリ言ってひどい破壊力だったが、しかし甲斐は

それを適当に流して呆れ顔でみくことにジト目を向ける。

「……で、何で雛の服が相変わらずワイシャツ一枚なんだよ？ もつとなんかあつただろ、ましなのが」

「え？ それはもちろん、甲斐ほつちやまはこういうシチュエーションがお好きだろうと思ったからでございますけど。やっぱり男のロマンでございますよね、女の子が下着にYシャツ一枚の格好って」

「甲斐、貴方って……」

それを聞いた瞬間、思わず体を腕でかばいながら身を引く雛。

「いやいやいや、まてまてまてい」

甲斐はすぐにブンブンと首を振って、部屋の中に流れる嫌な空気を払拭するべく口を開く。

「確かにその格好がロマンだったのは否定せんが、だからと言って殆ど初対面みたいな相手にそれを頼むほど変態になった覚えはねえぞ」

実は内心ちよつとだけ『みくことグツジョブ』などと思つてたりしなかつたりしたりする甲斐ではあつたが、しかしまあそこはそれ。思つてしまうこととそれを実際に実行するかどうかには、大きな隔たりが存在するのである。

ということ、すぐに甲斐はつい流れて行つてしまっていた視線を雛からみくことに戻すと己の理性の訴えに従つて、

「取り敢えず、何でもいいからちゃんとした服を貸してあげなさい。確かメイド服以外にもなんかあつただろ、お前の服」

とみ〜ことに告げるのだった。
しかし

「雛さんにわたくしの服をお貸しするのは構わないのですが、そうすると一つだけ問題が御座います……」

「？ 問題ってなんだ？」

そう言っつて首をかしげた甲斐に向かって、み〜ことはとんでもない爆弾を投下してきた。

「わたくしの服だと、悲しいことにサイズが合わないのをごさいますよ。下は問題ないのですが、主に胸の方が」

「え……」

上着のサイズが胸のせいで合わない 当然ブラジャーのサイズも合うわけがない 今雛はYシャツ一枚の格好 イコール、

「あ、っ……！！」

甲斐がなにに思い至ったのか、何となくその表情を見て悟ったのだろう。とうとう雛は羞恥に顔を真赤にして声にならない悲鳴をあげると、ピューッとという擬音が聞こえてきそうな勢いで和室の中へと逃げて行ってしまった。

「ああ、お逃げになられてしまいました。ですが雛さんの恥ずかしかつていたあの表情、とってもお可愛らしかったですわ……」

「み〜こと、お前つてやつは……」

どこか恍惚とした表情でいじり根性満開な台詞を呟くみ〜ことに、これは確実に確信犯であろうと心底呆れた表情を浮かべ、甲斐は頭

を抱えながらうめき声のような声を上げる。

駄目だこのメイド、早く何とかしないと。甲斐はみくことにお仕置きするべくその小さな頭のでっぺんにげんこつをロックオンしながら、そんなことを考えていた。

「あの、ごめんさい。こちらから呼んでおいていきなり逃げだしてしまつて」

「いやいや、ありや俺とみくことが悪い。だから気にすんな」

「あううう……」

頭を押さえて涙目になっているみくことを背景に、二人はテーブルを挟んで向き合いながら話していた。ちなみに雛の服装は、ワイシャツの上からさらにカーディガンを羽織ることで落ち着いた。

「それよりも、雛から俺に話があるんだつて？」

この話題を終わらせるために少し強引に話を変えた甲斐を雛はなにか言いたげに見つめていたが、しばらくして諦めたように一つ吐息を漏らすとゆっくりと口を開いた。

「ええ。さすがにここままでしてもらつて何も話さないのも不義理だし、簡単に事情くらはいは話しておこうと思つて」

「ふむ。それなんだけど……ちよつと待つてくれないか？」

「？ 待つて……どうして？ あまりここに長居するつもりはな

いから、話すとしたら今しかないのだけど」

訝しげに首を傾げた雛の目を見返して、甲斐はそれに「ああ」と小さく頷いた。

「それは分かってるさ。だから要するに俺は、雛に無理に話さなくてもいいって言ってるんだ。もちろんアンタが話したいんだって言うんなら当然聞くけど、義理だとか……もしくは俺の説得のためだつてんなら、それは必要ないぞ。もう十分動けるようになってるみたいだし、前にも言った通りもう俺にアンタを引き止める理由はないからな」

それは凄く冷たい……いや、厳しい言葉だった。

誰にだって何かしら、事情があるのはわかっている。だからそれを話す理由に自分への義理人情を勘定に入れなくていいから、雛自身の話したいか話したくないか、そこだけで判断しろという意味での言葉。

しかし雛はその言葉を受けて、むしろその表情を柔らかくした。

「そう……分かったわ。そういう事ならお言葉に甘えて、貴方には話さないことにする。その方が、きつとお互いのためなもの」

ともすれば酷く冷たい、突き放したものと受け止められそうなの甲斐の言葉を、雛はその聡明さから正確に受け取っていたのだ。

「ああ、それとあと一つ言っておくけど」

「？ なにかしら？」

どこか微笑を浮かべているようにも見える穏やかな表情で聞き返してきた雛に、甲斐はからりと笑顔を見せて言葉を続ける。

「我が門倉家のモットーは『去る者追わず、来るもの拒まず』でね。だからもしもやっぱりここに残りたいたとか、その内またうちに来ることがあるんだったら……その時はいつでも、歓迎するぜ」

その言葉を聞いた雛は今度はハッキリと微笑を浮かべて、どこか嬉しげに目を細めた。

「ふふ、そうなの。それはとても、魅力的な提案ね」

もちろんその提案に、雛が頷かないことはお互いにわかっていた。しかし甲斐はなんとなく、それを今言っておかなければならないような気がしたのだ。

それから少しの間甲斐は二人の間に流れたどこか心地のいい沈黙を堪能していたが、おもむろにパシッと自分の膝に手をつくとゆっくり立ち上がった。

「あ、そうだ。一応言っとくけど、今日だけはうちに泊まっていけよ？ 外はもうすっかり夜だ。さすがにこんな真っ暗闇の外に一人で女の子を放り出したんじゃ、寝覚めが悪くてしょうがないからな」

それに雛はすぐには答えなかったが、しばらくして無言で頷いたのを確認すると、今度は甲斐は後ろで空気のように控えていたみに、

「俺がやったんじゃ気になるだろうし、悪いけど雛の布団のシーツの交換とかはみ〜ことに任す。俺はまだ徹夜の眠気が残ってるから、今日はもう部屋で寝るから」

と告げて去っていった。

「それでは雛さん、わたくしも家のことで少々することがございますので、これで失礼致しますわ。先ほど紅茶をお淹れいたしましたので、こちらに置いておきます。どうぞごゆっくりおつくるぎくださいませ」

「ええ。ありがとう」

その後みくことも雛のお礼の言葉ににっこりと笑顔を返すと、小さくお辞儀をしてから家の奥へと歩いていった。

それを雛は何気なく見送りながら、穏やかな表情で出された紅茶を口にする。

「ああ、あつたかい……」

そしてカップからゆっくりと桜色の唇を離して一言そう呟くと、雛は柔らかく微笑んで吐息を漏らした。

7話

ちゅんちゅんと、鳥のさえずりが聞こえてくる。障子で遮られた窓の向こうからは、うつすらと太陽の光。雛はその光を体に浴びながら、穏やかな表情で壁に寄りかかり座っていた。

そもそもこの話、鍵山雛にとって ひいては神という種族にとっては、睡眠という行為は必要のないものだった。もちろん寝ることができないというわけではなかったし、確かに昨日のように回復のために眠りにつくことはある。しかし体に不備がない時に、必ずしもそうしなければならないというわけではないのだ。言うなれば、娯楽の一つのようなものである。

(それにしても……)

この家の中は、間違いなく全ての幻想を否定した外の世界であるのにもかかわらず、まるで幻想郷の中にいるかのように居心地が良かった。まさか最後の最後に……それもほぼ全ての神々が去った後の外の世界で、こうして自分が受け入れてもらえるなんて、思いもよらなかった。

今の雛の体は、決して万全とは言い切れない。だが身動きがとれないほど衰弱しているわけでもなかったし、それに信仰のないこの世界ではこれ以上の回復は何をしたとしても望むことができないだろう。だからそれならば……自身の最期が近い今くらいは眠らずに、少しでもこの短い夢のなかに沈んでいたい、そう思った。

もしかしたらこの家……そして甲斐のそばにいれば、雛は消えずに済むのかもしれない。しかしそれは鍵山雛という神にとって、何

があろうとも絶対にとりえない選択肢だった。

当然のごとく雛の心の内に自殺願望が在るわけではなかったが、『厄神』である自分が人に限らず”誰か”のそばにいるということ、すなわちその誰かを不幸にし続けるということだ。それはかつての村人の想いを継ぎ、少女の魂を今でも想い……そして何より、神となったその時から変わらず人間を愛しその不幸を少しでも減らそうと生き続けた雛には、できようはずもないことだった。

それもよりにもよってその相手は、完全に赤の他人のはずの自分を無条件に助け、受け入れてくれた……優しい優しい、人間たち。もしもそんな選択ができるのならば、そもそも雛は『厄神』なんかにはならなかつただろう。

「こらみ〜こと。お前、いつつも言ってるだろ。妹キャラ作って腹の上に乗つかてくる起こしかたはもう止めろって」

「うう、だからってげんこつはひどいでございますことよ、甲斐ぼつちやま。ああ、ぼつちやまがわたくしの愛を受け入れてくださるのはいつのことになるのやら、まだまだ先は長いのですわ」

「まったくこの駄メイドは……」

ふと閉められた戸の向こう側から、賑やかな話し声が聞こえてくる。雛はその相変わらずの仲の良さが伺える会話の内容についていくすりと笑ってしまいながらも、寄りかかっていた壁からゆっくりと離れ、立ち上がる。

その後雛は昨日み〜ことから借りたカーディガンを羽織ると、敷いてもらった布団を簡単にたたみ、窓についていた障子戸を開ける。そしてそこから覗く明るい空の青さをしばらく堪能してから、部屋全体を軽く見回して汚れている所がないのを確認すると、雛は和室の戸を開けて居間へと出ていった。

雛が居間の中に入って甲斐の姿を探すと、すぐにキッチンに立つ

ている彼の姿が見つかった。それからすぐに雛はゆっくりとした足取りでとんとんと慣れた手つきで包丁を操っている甲斐に近づくと、対面キッチン越しに正面に立ち「おはよう、甲斐」と柔らかく微笑んで朝の挨拶を交わすべく声をかける。

「ああ、雛か。おはよう。よく眠れたか？」

「ええ、おかげさまで……いい夢が見られたわ」

「お、そうかそうか。そいつは良かった」

甲斐はそう言いながらどこか嬉しそうにニツと明るい笑顔を見せる。

「なんだか、随分と嬉しそうね？」

「そりゃまあ、一応これでも家主だからな。なんだか昨日は雛が起きてからずっと俺とみくことで騒いでばっかだった気がしたから、さっぱり気が休まらなかったって言われるんじゃないかと戦々恐々としてたわけですよ」

「ふふ、そんなことはないわ。甲斐もみくことも、とっても良い子だったもの。私も楽しかった」

「いい子って……さすがにこの歳で良い子呼ばわりは抵抗あるんだけど」

甲斐は小さく苦笑いを浮かべてそう反論するが、雛はくすりと小さく笑って、

「私はこれでも、あなた達よりずっと歳上なのよ？ 私にとっては子どもも大人も同じだよ」

とどこか楽しげにそう言った。

「へえ、そうなのかな。とてもそうは見えないけど……まあ、そういう事もあるか。ちなみに、具体的に何歳なのかな……」

甲斐が視線で伺いを立てると、雛は無言でニツコリと笑顔を見せる。

「はは、了解」

そう言って乾いた笑い声を上げると、甲斐はそれ以上この話題を続けるのをやめた。

「そうそう。女性には余計なことを聞かないのが、いい男の条件よ？」

「うい、肝に銘じておきます。……ああ、そうだ雛。アンタ、朝飯は何かいい？ 今丁度作ってたところだから、和食か洋食かくらいのリクエストなら応えられるけど」

「……いえ、私の朝ごはんは必要ないわ。そろそろお暇させてもらおうと思ってたから」

甲斐の朝食の誘いは断って、雛は小さく首を横に振った。

「え？ なんだ、もう出てくのか。別にそんな慌てなくても、せつかくなんだから朝飯くらい雛も食ってけばいいのに」

「だめよ。本当なら、こんなに長居をするつもりはなかったもの。これ以上、ここに居るわけには行かないの」

胸の内に名残惜しさがないと言えば嘘になるが、しかし雛はそんな思いが嘘のように晴れやかな表情で首を横に振った。

その表情を見て、雛が考えを変える気がないのが分かったのだろう。甲斐はそうかと頷くと、包丁を操る手を止めてキッチンから出

てきた。

「なるほど、なにか理由があるってわけか。オツケー、分かった。み〜こと！ もう雛の服は乾いてるのか」

「はい、もちろんでございます！」

「うおわ！？ おま、どっから湧いて出てきたっ」

てつきりみ〜ことは洗面台の方に居るものだと思っていた甲斐は、突然真横から声がしたことに驚いて思わず飛び上がってしまった。

「まあ……湧いて出てきただなんて、そんな虫みたいに言わないで下さいませ。この不肖み〜こと、甲斐ぼっちゃまにお呼ばれすれば、例え火の中水の中、マグマの中でだっていつでもすぐに参上しちゃいますですわ」

「……うん、まあこいつのことはほつといて……服はもう用意できてるそうだから、着替えは雛の寝た和室か洗面所を使ってくれ」
「ええ、分かったわ」

甲斐が呆れ顔で雛の服を手にながら語っているみ〜ことをスル〜してそう言つと、雛も空気を呼んで何も言わずに頷いた。

「ああん、ぼっちゃまのいけず〜。でも、そんな所も素敵ですわ！ さ、もう少しでお洗濯も終わりますし、雛さんがお出になられる前に一区切りさせちゃいましょ」

しかしみ〜ことは相変わらず堪えた様子を見せずに、そんな事を言いながら仕事へと戻っていく。

「はあ、やれやれ……」

甲斐はその姿を見て小さくため息をつきながら肩をすくめるが、しかし微妙にその表情が緩んでる辺り、なんだかんだ言いながらこの状況を楽しんでいるようであった。

8話

「それじゃあ……お世話になったわね、甲斐、み〜こと」

そう言っつて玄関先に立つと、ゆったりとした優雅な動作で頭を下げる雛。

頭にはフリルのたくさんついた大きなリボン。やはり地毛なのだろう相変わらずの綺麗な緑髪を体の前で束ねていて、服装は何やら渦のような不思議な模様のついた赤いロングドレス。そしてひっそりと浮かべている、あまりにも綺麗過ぎる秘めやかな微笑の姿。それはまるでここではない遠い所からこちらを眺めているような、いっそ神々しさすら感じさせるところか超然とした表情だった。

格好こそ始めてあつた時と同じはずなのに、表情ひとつでこれほど印象が変わるのかと甲斐は内心で驚きながらも、やっぱりさほど気にせずこれまでと変わらない態度で二カりと明るい笑顔を見せた。

「なに、前も言っただけど、全部俺たちが勝手にやったことだ。気にすることはないさ。な、み〜こと？」

「ええ、もちろんその通りですわ。雛さん、もしお近くを通られることがおありでしたら、その時はぜひまたお越しくださいます。今回はわたくしの作ったデザートも振る舞えませんでしたし、あまりお時間がなくて何もできませんでしたが、次こそは全力でおもてなししちゃいますですわ」

「私が甲斐に助けてもらったのは確かだし、み〜ことが何も出来なかったなんてそんな事絶対ないわ。貴方たちがいなくなったら私はきつと、今ここにはいられなかったもの。だから……本当にありがとう、ふたりとも。感謝してるわ」

二人の言葉に、雛は小さく首を横に振って感謝の言葉を口にする。

しかし甲斐はそれを聞いてふつと目元を緩めると、まっすぐに雛の目を見つめ返して言葉を重ねた。

「旅は道連れ世は情け、寄らば旅路の義理人情つてな。困ったときはお互い様。もしまた会うことがあったんなら、その時また笑顔の一つでも見せてくれれば、それで十分だよ」

「まあ、ぼっちゃまつたら変に格好つけて。だめですよ、まず口説くんなら誰よりも先にわたくしを口説いて下さいませ。浮気は男の甲斐性ですが、さすがに目の前でされては悲しゅうございます」

「色々やかましいわ。浮気以前にそもそも俺は誰とも付き合つてねえし、もしも誰かを口説くとしてもその相手をお前にすることは絶対にない」

「ああっ、酷いですわ！ 何も絶対とまで言わなくてもいいではありませんか！」

「……くす。本当、貴方たちはいつも楽しそうね。仲が良くて羨ましいわ」

いつも通りの主従漫才に、雛はくすりと笑みを漏らした。そして僅かな沈黙の後に、名残惜しそうに別れの言葉を口にする。

「さようなら……甲斐、み〜こと。短い間だったけど、楽しかったわ」

「あん？ 違う違う、雛。こういう時は、またねって言うもんだ。そっちの方が、これから先の楽しみが増えるからな」

「ふふ……、そうね。また会いましょう、二人とも」
「おう。またな、雛」

そうして雛は、ふわりと身を翻して去っていった。

その後ろ姿からは、ヒラヒラと手のひらに落ちてあっという間に溶けてしまっ一粒の雪の結晶のような、そんな儂さを感じさせられ

て……甲斐はなんとなく不安を感じて、ふいに眉尻を下げてしまう。とその時突然、み〜ことが身体の向きを変えてまっすぐに甲斐に向き直ると、ひどく真剣な表情で口を開いた。

「甲斐様」

「？」

み〜ことが家に来てすぐの頃にしかほとんど聞いた覚えのないその呼び方に、甲斐はどうしたのかと疑問に感じて首を傾げる。

すると次の瞬間み〜ことは、見るものがビツクリしてしまいそうなくらいに真剣な表情を崩さずに、どこか必死さを感じさせられる声で、

「わたくしは……み〜ことはこの身が壊れ停止するその時まで、必ずあなた様のお側におりますわ。ですからどうか……そんなお顔を、なさらないくださいませ」

と懇願するように語り甲斐の瞳を見上げた。

「……」

きつとみ〜ことは先程甲斐が浮かべた表情を、寂しさ故か悲しさ故のそれと勘違いしたのだろう。そんなみ〜ことの姿に甲斐は穏やかに微笑みを浮かべると、ぽんと一度み〜ことの頭を撫でて玄関先から去って行った。

「……あつ、待ってください、甲斐ぼっちゃま！」

それから少しの間み〜ことは呆っと立ち尽くしていたが、すぐにはっとして顔を上げるとその背中を小走りに追いかける。

……去り際に甲斐が小さく呟いた、「ありがとう」という言葉に、僅かに頬を緩めながら。

雛は門倉家を後にしてすぐ、その門の前でどこか驚いたように目を小さく見開いて立ち尽くしていた。

(これはいったい、どういうことなのかしら?)

始め雛は、自分が長く滞在してしまったことで甲斐とみくことに移ってしまったであろう厄を集めようと、手をかざして目を閉じ意識を集中させていた。しかしいくら家の中にある厄の気配を探っても見つからないという事実に驚いて、雛はどこか信じられない思いでどういふことかと考えこんでしまう。

(みくことは……分からなくもないわね。この感覚は、魔法の森の人形遣いのそれに近い感じだわ。全く同じというわけではないのだからけど……体が生き物のものではないというのなら、厄が移つてないのは理解できる)

どうしてそんな存在が外の世界にいるのかとも思うが、幻想の匂いはしないので彼女は自分が知らないだけで外の世界固有の何かなのだろう。

しかし

（甲斐のこれは、どういうことなの？ 完全にゼロというわけではないけど……だけこの量は、私と一緒にいて増えるどころか、普通の人間と比べても少なすぎるわ）

以前の異変の折にあった、あの巫子ならば理解できる。彼女はその能力によつて全てから、世界からですら浮いているからだ。しかし甲斐は外の人間であり、それに特に強い霊力を持っているというわけでもない。なにか特別な力を持った人間でもないということにこの量は、完全に異常だった。

（……、なんにせよ……）

せめてものお礼にと、二人の厄払いをしようと思っていたが……これでは仮にこれ以上ここにいたとしても、自分にできることはもうないのだろう。その事実には気分を沈めながら、ふらふらと臆気な足取りでこの場から去っていった。

番外編：上

「門倉。アナタ、今日からバイトやめなさい」

「……、はい？」

全ては岡崎教授の、そんなセリフから始まった。

「えっと……要するにまとめると、念のために作った発明品の予備が余ってしまったのでそのままお蔵入りするのももったいないから、データ集めがらついでにモニターをして欲しいのでバイト代を出す代わりにそれを俺にやってくれと、そういう事ですか」

「ええまあ、だいたいそんな感じね」

「岡崎教授。アンタねえ……」

「？ なによ？」

講義が終わって今日はゼミもないから、バイトまで家に帰って一眠りしようとしていた矢先にこれだ。相手の都合を全く考えないその傍若無人っぷりに、さすがの甲斐も少々呆れてしまう。

「……。いや、やっぱりいいです。教授にコミュニケーション能力を少しでも期待した俺がアホでした」

「ほっほう、言うわねえ門倉甲斐くん。せつかくあなたの状況を加味して給料は月20万にしてあげようと思ってたのに……そういう事言うなら、少し下げちゃおっかなー」

「はあ！？ 月給20万っ？ 教授アンタ、やっぱりバカです

か！？ 普通バイトなんて掛け持ちしてせいぜい一〇万超ですよ！
確かに未発表の発明品のモニターって聞けば多少給料が高いのは
分かりますけど、それにしたって月二〇万って、大学生の平均初任
給も超えてるじゃないですか！」

「な、なにさ……じゃあ、いらないの？」

甲斐の勢いに負けて若干身を引きながら岡崎教授がそう口にする
と、甲斐はそれまでの驚きの表情がまるで嘘のように平静な表情に
戻って首を横に振った。

「いえ。くれるって言うんならありがたく頂戴します」

「……いつもなんだかんだと言ってくれちゃってるけど、門倉もた
いがいよね、ホント。ていうかそもそも、モニターする発明品の詳
細も聞かないでそんな安請け合にしちゃっていいわけ？」

「かまいませんよ、別に。基本的に岡崎教授の作るものは仕様はぶ
つ飛んでることが多いけど不良品はないから使い方さえ間違えなき
や危険はないだろうし、まさか俺に武器やら危険物やらの試用は頼
まないでしょうからね」

甲斐が問題ないと頷いて了承の言葉を口にする、その瞬間岡崎
教授はプイツと顔を横に背けて、

「ふん、まあいいわ。門倉に頼みたいモノは研究室にあるから、
さっさと行って説明するわよ」

と言って甲斐の反応もまたずに言葉通りさっさと歩き出してしま
う。

「……？ って教授、俺置いてってどうする気ですか。ちょっと待
ってくださいよ」

そして甲斐も岡崎教授の様子に一度訝しげに首をかしげてから、その背中が完全に見えなくなってしまう前に小走りで追いかける始めるのだった。

「ちゆり、いる？ ……ちよつと、ちゆり？」

研究室についてすぐ、自分の助手の姿を探す岡崎教授。しかしいくら声をかけても一向にちゆりからの返事は来ず、その姿も見えない。どうやら彼女はどこかへ出て行ってしまっているようだ。

「全く……この天才、岡崎夢美の助手なら時空間くらい越えてどんな時でも私の要望に答えるくらいはしなさいよね、使えないなあ」
(……またこの人は、無茶苦茶言ってるなあ)

おいおいと一瞬苦笑を浮かべながら、甲斐も彼女に続いて研究室の中に入った。

「しょうがないなあ。それじゃあ門倉、ここは無能な助手に変わってこの私が直々に説明してあげるから、着いて来なさい」
「了解です」

コクリと頷き、紙束やらなにやらが散らばっている雑多なその部屋から奥の扉へと歩いて行く。そして直ぐに目に入ったのは、訳のわからない機械だらけの、学校の体育館くらいはある広さの部屋だった。

「
」

甲斐はパチリと目を瞬かせて、思わず無言で岡崎教授を見る。

確かに岡崎教授は天才だ。が、しかし教授は博士号を取って以降、世間には全く評価されていないのが現状なのである。その彼女のために、大学がこれほどの設備や部屋を割り当てるとは、到底思えることではなかった。

……と言つかそれ以前に、外から見た部屋の大きさをこの部屋は明らかに超えているのだが、これは一体全体どうということなのだろうか。

すると彼女はその視線で甲斐の疑問を察したのか、自慢気に胸を反らせてこの状況の説明をしはじめた。

「ふふん、この部屋はそこにある『おばあちゃんの知恵袋シリーズ第五号、らくらく空間上手くん』の機能で、本来の大きさ以上に広がっているよ。このらくらく空間上手くんは、指定範囲内の空間の拡張が出来る機械なの。どう？　すごいでしょ」

「いや、たしかに凄い……というかとんでもないけど、物理学者が気軽に物理法則超えんなよ」

思わず敬語を忘れて素の口調で突っ込んでしまう甲斐に対して、

岡崎教授はチツチツチと指を振ってにやりと唇を吊り上げた。

「何を言ってるのよ大学生。これはきちんと物理法則に則って、工学的に作ったものよ？　まだまだこれくらいで驚いてもらっちゃ困るわね。こんなのは今作ってる『可能性空間移動船』のついでに片手まで作った、ただの試作品の一つだし」

もうなんか、岡崎教授は『魔法』『魔力』の研究の前に、先にこれを学会に提出すればそれでいいんじゃないかな。

「いやよそんなの。つまらないし、悔しいじゃない。あの論文にはなんの間違いもなかったのに、頭の硬い懐古主義の老人どものせいで認められないだなんて、冗談じゃないわ。絶対にアイツらには完膚なきまでに確定的な『魔力』の存在証明を突きつけて、見返してやるんだから」

できれば口に出してないのに心を読むのはやめて欲しいと思ったが、もうこの人には何を言っても手遅れなのだと思いついた甲斐は適当に教授の言葉と現状を流して、

「それで、俺にモニターを頼みたい物つてのはどれなんですか？」

と話をすすめることにした。

すると岡崎教授は「むっ……」と呟きを漏らして一瞬唇を尖らせたが、すぐに「こっちよ、着いて来て」と言つてひよいひよいと床に転がってるよく分からない機械を避けながら奥へと進んでいく。

甲斐もそれに続いて慎重に物を避けながら歩いて行くと、何やらその先に薄ぼんやりと光っているメートルほどの高さのカプセルが3つ並んでいるのが見えてきて、教授がその前で止まったのでその横に立ちそれを見上げた。

「これは……」

「これが今回、門倉に頼みたいって言ったものよ。どうかしら？」

そこにあつたのは、よく分からない緑色の半透明の液体の中に浮かんでいる、美しい裸身の少女の姿だった。それを見た瞬間甲斐は腕を組んで胸を逸らしながら横に立っていた岡崎教授の肩をぽんと叩き、目を瞑って小さく首を横に振った。

「？ 何よこの手は？」

「岡崎教授……アンタついにやつちまったんですね」

「……は？」

その言葉の意味が分からず口をぽかんと開けたままの岡崎教授に甲斐は続けて、

「まさか研究材料に生きた人間をそのまま使うだなんて……確かに教授はマッドサイエンティストだしいつつもやることなすこと無茶苦茶だったから、いつかはなにかやらかすんじゃないかとは思ってたけど、いきなりこんな事をするとは思ってもいませんでした」

「は、はあ！？ な、んなわけあるか！ 門倉アンタ、なにいつてんの！？」

「ダメですよ岡崎教授、誤魔化しちゃ。これ、ちゆりさんは知ってるんですか？ いや、教授のやつてることをあの人が知らないわけないか。……大丈夫です。俺がちゃんと警察まではつきそってあげますから、きちんと二人で罪を償ってきてください。臭い飯でもたつぷり食って、ついでに常識でも身につけてくれると個人的には嬉しいですね」

「……そう。とりあえず、門倉が私のことをどう思っていたのかはよく分かったわ……」

半目でこちらを睨みつけてくる教授にあははと軽く笑い声を上げた後、「冗談だって、わかってますから」と笑い返して甲斐はもう一度口を開いた。

「つで、ホントにどこの人をさらってきたんですか？ なんにせよちゃんと家に返してやらないとダメですよ、岡崎教授」

「そののどが分かってるのよ！？ 全然わかってないじゃない！」

「わはははは！」

くわつと目を見開いて叫び返してきた教授にかんらんらと楽しげに笑い声で返答した後、甲斐はいいかげん話を戻そうとせいで息を荒げている岡崎教授へと向き直る。

「それじゃ、冗談はこの辺にして……どうして今更、人型のロボットなんて作ったんですか？ もう基本的には機械工学でそっちの分野の研究は出尽くしてて、機能性の面じゃ劣るからって今じゃこういう形のは介護関係のロボットとか、あの辺の業界くらいでしか使ってなかったと思うんですが」

すると岡崎教授はどこか不満気にぶつぶつと、

「まったく、本当なら裸のこの子を見て慌てる門倉を私がかからかってやるつもりだったのに平然としちゃって、相変わらず予定通りに行かないやつなんだから。ホントに男か、この不能め……」

などと呟いた後、目の前のカプセルの脇にある端末を操作してモニターを展開した。

そしてこほんと一度咳払いすると気を撮り直して、そのモニターに彼女のスペックや設計図などを表示する。

「それじゃあ説明するわよ。この子は型式番号E・003：家事手伝い用メイドロボット、名称みこと。隣にあるのは、この子の姉妹機ね。この子たちは元々私の身の回りの世話をさせるために設計したんだけど、それだけじゃ市販のやつと変わらないしつまみないからってついでに色々つけてみたのよ。設計コンセプトは、新しい機械生命体ってところかしらね。動力は三人とも超小型核融合炉を搭載してるから、壊れさえしなければ半永久的に稼働が可能よ。それ

「ちよつと待てい」

「……なに？ まだ説明の途中なんだけど」

つい反射的に待ったをかけた甲斐に、いきなり説明を遮られたことで不機嫌そうな視線を向ける岡崎教授。

「人間サイズのロボットに搭載できるような小型の核融合炉なんてまだ実用化してないはずだとか爆発したらどうすんだとか、気軽にそんなもん載せんなよとか色々ツッコミどころは多いけど……そもそもそれ以前にまず、これって日本政府に許可はとってんですか」

「大丈夫よ」

「え、本当に？」

流石の岡崎教授も核の扱いは適当じゃなかったかと一瞬ほつとしたのも束の間。そんな気持ちは、次の教授の台詞であつという間にどこかへすつ飛んでしまった。

「ちゃんと安全装置は二重三重にしてあるし、仮にどういふ壊れ方をしたとしても絶対に爆発のしない私自慢の新型機なんだから、安全性はバッチリよ」

「ってそういう問題じゃねえですから！」

「なんなのよ門倉、さっきから文句ばかり。そんなに心配しなくても、核融合炉はプルトニウムとか必要ないからヤバイ材料は使っていないし、そもそも誰もこんな大きさの核融合炉なんて在ると思わないからばれないわよ、絶対」

「あ、そっすか……」

相変わらずのやりたい放題な教授の態度に、これ以上はいつても無駄かと一度深いため息をつく、もう諦めて受け入れることにした。

実際問題、岡崎教授の言うとおりそれこそ中身を調べられさえしなければいけないだろうし、壊れても爆発しないというのも教授の言うことなら本当なのだろう。この人は自分の発明品のことに関しては嘘をつかないので、そこは信用していいはずだ。そう考えると、教授の言う通り大した問題ではないような気がしてくるから困る。

「どうやら納得してもらえたようだから、説明を続けるわよ。次はこの子たちの頭脳周りのことだけど……この子たちは、AIを搭載してないの」

「AIはなし？　じゃあ自律行動はできないのか」

「ノンノン、そいつは早とちりよ門倉甲斐くん」

(あ、なんか地雷踏んだ……)

甲斐の漏らしたつぶやきを聞いた瞬間に何故かものすごく嬉しそうな表情を浮かべた教授の様子に一瞬頬を引きつらせるが、そんな甲斐の様子はお構いなしに岡崎教授はものすごい勢いで話し始める。

「そもそもの話、ロボットに人工知能なんて搭載するのが間違ってるのよ。体は金属。神経もなければシナプスもない、心臓もなければ体は有機物ではなく無機物で構成されてる。命令の伝達方法はアナログではなくデジタルで機械言語。それなのに思考は人間に近づけようだなんて、土台無理な話なのよ。精神や人格は外的要因と内的要因の両方が複雑に影響しあって構成されていくっていうのに、内的要因が人とはかけ離れてる上に、外的要因の入力方式だってそもそもぜんぜん違うんだから。」

「じゃあどうすればいいのか？　答えは簡単。人工的ではなくて、自然に知性が生まれるようにすればいい。あんまり思考が人間とかけ離れすぎても家事手伝い用メイドロボとしては問題があるから、基本は人間と同じ……左脳、右脳、大脳新皮質、脳幹なんかの機能

を模した装置を組み合わせ、記憶域も意味記憶、エピソード記憶と分けたりしてるわ。一応知識に関しては事前にある程度入力してあるしモニタリングだけは私限定でできるようにしてるけど、後は私もノータッチなのよ。

この子たちは己の意思で動くことが出来、己の意思で主人を決め……そして己の意志で主人を見限ることができる、完全自律型ロボット。そんなロボットを作ること为目标として作られた、いわば新しく生まれた新しい種族。それがこの子たちなのよ」

「ええつと……」

勢い込んでまくし立てられ若干くらくらする頭で、話の内容をどうにか聞き取れた部分だけでも反芻する。

「つまりこのみくことっていうメイドロボとその横にある姉妹機は、教授が腹を痛めずに頭を捻って作った子どもみたいなものだってことでオーケー？」

「え。あー、まあ……そういう見方もあるかもしれないわね、確かに。だいたいそんな感じかも」

甲斐の言葉に一瞬キョトンと目を丸くしていたが、すぐに岡崎教授はなるほどという感じでうなずいてそう言った。

「ちなみにこの子 門倉にモニターを頼むみくことは、他の同型機と違ってその基礎性向……人間で言うところの性格も与えてないわ。だから多分この子は、最初のうちは数世代前のAI未搭載型ロボットとあまり変わらない受け答えしかできないはずよ。だけどこの子は自分で考え、覚えて、学習していく。いずれはきっと人ともまた違う精神性を持った、新しい存在として独自に成長していくはずだわ。そしてこの子を育てるのは甲斐、あんたよ」

「……」

（なるほど。これはモニターという体を保ってはいるけれど、その実態は小さな子ども一人を……それも性格、人格面では赤ん坊と変りない子を預かるのと同じようなものなのか）

そうになると、どうしたって気軽にはうなずけない。岡崎教授の説明を受けてそう考えた甲斐は、暫くの間腕を組んで顎に手を添え考える。そして教授がいつまで経っても帰ってこない答えにしびれを切らして口を開きかけた頃に、静かに顔を上げるとその彼女の目を真っ直ぐに見つめ返した。

「一つだけ、この話を受ける上で条件を付けさせてもらってもいいですか？」

「条件？ 何かしら。言つてご覧なさい」

岡崎教授がそう言つて頷いたのを確認してから、甲斐は「分かりました」と口にしてその内容を話し始める。

「俺のことをその彼女……み〜ことつて言つたつけ。その子が自分で俺が主人でもいいと言わなければ、この話は受けないということ。そしてもしその後にも彼女が俺と一緒にいるのが嫌だと言つたら、その時はすぐにモニターをやめて教授が引き取ってください。それが条件です」

「ふうん……。ようするに、門倉の所に行きたいかどうかは、その子本人の自由意志に任せることが条件だ、っていうこと？」

「まあ、そういう事ですね」

「なるほど。なるほどね……」

岡崎教授はなぜかうんうんと、どこか楽しげな表情を浮かべて頷くと甲斐に向かつて、

「それはすごく門倉らしい話だね。分かった、それでいいわよ。み〜ことがもし自分であなたの所に行くのが嫌だって言ったなら、その時はこの話はなかったことにするわ」

と言つて最後に小さく「まあ、それは多分ないと思うけど」と呟いてから、何やらみ〜ことの入っているカプセルの前にたつて作業を始めた。

「それじゃあみ〜ことを多目的休眠機から出すわよ。……あ、門倉は少しそこから離れてて。危ないから」
「了解です」

甲斐がそう言つて横に何歩かずれてから視線で確認すると岡崎教授が頷いたので、そこで立ち止まる。そしてそのまま作業の様子を眺めていると、しばらくしてカプセルの中に入っていたよく分からない液体が排出され、裸のままの『み〜こと』が屈んだままゆつくりと外に出てきた。

直後に甲斐が岡崎教授に視線を送ると、その視線に答えて彼女はもう一度小さく頷いた。甲斐はそれに頷き返すとすぐに数歩前に歩みでて、み〜ことの真横まで行くとパサリと自分の着ていた上着を彼女のむき出しの肩にかけて目線が合うように屈みこみ、穏やかな表情と共に声をかける。

「初めまして。俺の名前は、門倉甲斐って言うんだ。アンタの名前も、教えてくれないか？」

「門倉……門倉、甲斐様？ わたくしは……」

それが甲斐とみ〜ことの、最初の邂逅……そしてみ〜ことが門倉家の一員となった、その最初の日の出来事だった。

番外編：中

「初めまして。俺の名前は、門倉甲斐って言うんだ。アンタの名前も、教えてくれないか？」

名称：門倉甲斐。推定種族：人間。記憶域に一件の該当項目あり。
現在のマスター候補第一位。優先度、暫定高。優先度の変更をしますか？ NO

「門倉……門倉、甲斐様？ わたくしは……わたくしの名前は、み〜ことと申します。初めまして、門倉甲斐様」

み〜ことが初めて目覚めた時、一番初めに口にしたのは自分の名前ではなく、甲斐の名前だった。その事実がなんとなくみ〜ことには何か意味があるような気がして、この後甲斐が口にした自分の所に来るか否かという問いに是と答え、門倉家のメイドとして仕えることになった。それが、初めてのみ〜ことの『思考』だった

ガチャリと甲斐が家の鍵を開け、玄関の中へと入る。それに続いてみ〜ことも家へとはいつてその中を見渡した。

「さ、ここが今日からアンタの家だ。俺はちょっとこれから前のバイト先に行って色々やってこなきゃならないことがあるから、悪いけど適当にくつろいでくれ。中にあるものは好きに使っていいから、テレビでも食いもんでも……あ、物は食べれないのか。まあ、ともかくそんな感じで」

「畏まりました、マスター」

甲斐の言葉の後に、恭しい態度で頭を下げるみくこと。

「マスター、マスターね……。まあ確かにそういう事になるんだろ
うけど……。出来ればその呼び方はやめて欲しいな。名前で呼んでく
れ、名前で」

「畏まりました。では、今後は甲斐様とお呼び致します」

「様、ね。まあいいか。んじゃまあ、行ってくる」

「はい。行つてらっしゃいませ、甲斐様」

深々とお辞儀をして、軽く手を振って背中を見せた甲斐の見送りを
する。そしてボタンと扉が閉まって完全にその姿が見えなくなっ
た後に、みくことは早速動くことにした。

眼球のモードを写真記憶に変更。もう一度そこをぐるりと見渡す
と、まずは間取りの把握と他の部屋も同じく隅々まで記憶していく。
そして周辺地図も組み合わせて通常時、危急時、災害時などの最適
なルートを構築すると、次に家にある家具や家電などの把握を開始
した。

家の大きさに対して総じて置いてあるもののランクが少々低めで、
充実度もあまり高い方ではない。その上靴箱の中にも靴が一人分し
が存在せず、冷蔵庫の中の食材があまり多くはなかったことから、
一人暮らしと断定。次に清掃、洗濯、料理などの作業の効率化を図
るために道具の位置や種類を把握。不足物があればリスト化する。

それで大体の準備が終わったので、みくことはまず家の中の掃除
から開始することにした。初めに家全体のホコリの処理。さらに念
のために内蔵されている対防虫低周波発生装置を使用し、発見した
死骸の処理。次に清掃用無菌布とバケツを用意して窓の拭き掃除。
その後も風呂掃除や洗濯、料理の下ごしらえなど、大凡思いつくす

すべての家事を驚くほどの短時間で済ませていく。

そしてちょうどすべての作業が終了して、み〜ことがすぐに出てくることはだいたい終わらせた頃に、み〜ことの聴覚センサーに反応があった。どうやら甲斐が用事を終えて帰ってきたようだ。

み〜ことはすぐに使い終わった道具をしまうと、玄関へと移動して己の主人を迎えるべく待機する。

「ふう……、ん？」

「おかえりなさいませ、甲斐様」

そして扉が開いて甲斐が玄関へと入ってくると、すぐにみ〜ことは深々と頭を下げて出迎えた。

すると一瞬甲斐はきょとんとして首をかしげて動きを止めたが、

「ああ、そうか。今日からアンタが居るんだったもんな。……ただいま、み〜こと」

ふつとどこか嬉しそうに表情を緩め、目を細めてそう口にする。

その表情と声を聞いた瞬間み〜ことは、初めて名前を呼ばれた時と同じ何かを感じて、そつと自分の胸に手を添えた。

「み〜こと？」

「え、あ……」

「どうした、いきなりぼーっとして。なんか合ったか？」

靴を脱ぎながら首を傾げた甲斐に、み〜ことは少し慌てながら首を横に振って、

「い、いえ。なんでもございませぬ。……甲斐様。先ほど甲斐様がお出かけしていた間に掃除やお洗濯はすませておきましたので、も

う他にお出かけする予定がないのであれば、後はごゆっくりお休みくださいませ」

「あん？ 掃除も洗濯もやっといたって、この短い時間に全部か？ そりゃすごい。どれどれ？」

そう言いながら居間へと移動すると、甲斐は一度部屋の中をぐるりと見回して、ほうつと感心のため息を漏らした。

「おお、すげえ。どこもかしこもピカピカだ。まるで新築の頃に戻ったみたいだぜ。ありがとな、み〜こと。こりゃ今晚は気持よく眠れそうだ」

その後甲斐はみ〜ことに向かってにつと明るい笑顔を見せると、ぽんとその肩を軽く叩いて着ていた上着を脱ごうとする。

「いえ。この程度、メイドとして当然の務めでございます。それよりも甲斐様。お召し物はわたくしにお任せ下さい。お手伝いします」

み〜ことがそう言って上着を脱ぐのを手伝い受け取るが、甲斐はそれに思わず苦笑して、

「いやいや、み〜こと。家は上流階級でもなんでもないから、そういうのには抵抗があるんだ。だから家事手伝いはありがたいけど、必要以上の世話はいらさないから」

と言葉を告げる。

それにみ〜ことは「畏まりました」と口にしながら恭しく頭を下げた。その態度に甲斐はもう一度小さく苦笑を浮かべた後、居間から出ていき部屋へ戻ろうと廊下に出た。

「甲斐様。お部屋にお戻りになられる前に一つ、お聞きしたいことがあったのですが、少々よろしいでしょうか？」

「ん、なんだ？ 別にいいけど、まだなんか気になることでもあったか？」

「ありがとうございます。では……」

みくことはもう一度静かにお辞儀をすると、甲斐に確認事項を告げる。

「お部屋にあった、奥に積みかっていた雑誌類はまだ読まれることがあるのでしょうか？ もしもそうではないのなら、紙は埃がたまりやすいのでできるだけ廃棄をしたいのですが」

「部屋の奥にあった、雑誌……？ あっ」

甲斐の脳裏に、自身のコレクションたちの姿が浮かぶ。一人暮らしで誰に見られることもないものだから、特に隠しもせず積んであったのがまずかったかと顔を引きつらせて肩を落とした。若い男が”そういう類い”を持っているのは当たり前だが、実際にそれを女性に見られてしまうというのはさすがの甲斐も多少きついものがあった。

「あ、あー……、悪いけど、あの辺の本は今後ノータッチでお願いします、はい。一応今度からは、人目にはつかないところにおいておきますので……」

「？ はい、畏まりました」

とまあ、そんなこんなでこの日から、甲斐とみくことの共同生活が始まったのであった。

初めのうちは、初日のようにそれぞれの認識をすり合わせる必要があった。上着の時のように、彼女の過剰なおもてなしを控えても

らつたり、バイトが無くなって暇が増えたからと少し家事を回してもらつたりと色々だったが、みくことはともかく優秀で、何をするにも卒がなかった。そのたびに甲斐は感心したり驚いたり、ついでにみくことに頼まれたものを買って揃えてやつたりしながら、同時にその機械的な態度に少しだけ不満を覚えてしまう。

甲斐はいつも、他人に対して自分から何か干渉をするということが少なかった。それは甲斐の根本にある、何でもすぐに受け入れる気質の弊害とも言えるものだったのかもしれない。その相手を、世界をそのまま受け入れてしまうからこそ、そこにそれ以上の干渉をせずに自然の変化のみを受け入れる。

とは言えやはり、甲斐とて人間だ。仮にみくことが他人だったら、これまでのように甲斐は何も思わなかっただろう。しかし甲斐は早くに家族を亡くしており、その孤独を受け入れながらも忘れることはできていなかった。だから

「なあ、みくこと」

「はい。なんででしょうか、甲斐様？」

「そう、それだ」

甲斐はピツとみくことを指でさしてそう言った。

「……………」

みくことは訝しげに首を傾げて甲斐を見る。

「前はそれ、スルーしたけど……………なあ、みくこと。お前は当然、これからもこの家に居るつもりなんだよな？」

「甲斐様の質問の意図が理解できませんが……………、はい。おそらく甲

斐様がわたくしを返却しない限りは、こちらにいさせていただくことになると思います」

「そりゃありえないし、んじゃあみ〜ことはもう俺の家族ってことだよな？ それならやっぱり、お前さんは今後様付けで俺のことを呼ぶのはやめてくれ。できれば口調ももう少し崩してくれると嬉しいんだけど……まあ流石にそれは今は置いとくか」

「……しかし、マスターのお名前をメイドのわたくしがそのように呼ぶわけには……」

「さん付けでもダメか？」

「……」

無言で眉尻を下げて、視線を伏せるみ〜こと。そんな初めて見る彼女の困り果てた表情に、甲斐は一度残念そうに吐息を漏らすと小さく肩をすくめた。

「仕方ない、今は諦めるか。別にお前を困らせたかったわけじゃないからな。まあ、いつか自然に呼び方が変わることを期待するよ」

そして最後にそう告げると、み〜ことから視線を外してソファでテレビの続きを見始める。み〜ことはその様子を横目に見ながら、呆っと考え事をしつつ掃除の続きをするために手を動かせ始めた。

（家族……）

本来は、共に住んでいる直接の血縁者に対して使用する形容詞。

（わたくしはロボットで、甲斐様は人間。血縁どころか機械と人……

…何もかもが、違うというのに……）

そしてガシャンと、大きな音がする。続いてバシヤリと大きな水

音が。考え事をしていたせいなのだろう。みくことは手元が疎かになつてしまい、その時磨いていた半円級の水槽をつい手落としてしまったのだ。

「あ……！」

「ん？」

その音に甲斐が振り返ると、珍しく失敗してしまつたみくことの姿が。それを見た甲斐は目を丸くして驚きながら、「大丈夫か？」と反射的に声をかけていた。

するとみくことは、

「申し訳ありません、甲斐様。すぐにお片づけを……」

と言いながら深々と頭を下げた後、手早くその処理をし始めた。表情は無表情。同時に死んでしまつた水槽の中の魚達は手際よく処理して”ゴミ箱”へ。その様子を見た甲斐は一瞬眉を顰めて、「なるほど」と小さくひとりごちた。

先ほどみくことが頭を下げたのは、ただの反射行動。悪いと思つているから謝つているのではなく、悪いことをしたのなら謝らなければならぬから謝っている。そこに介在している感情はなく、”失敗”に関しては謝罪していても、それで失われてしまつたものは何も感じていないのだろう。

先ほどの表情を鑑みるに感情が全くないということはないのだろうから、これはやはり単純に教授の言つていた情緒の未発達が原因なのだろう。

「……ふむ。なあ、みくこと」

「はい。なんででしょうか？」

すべて片付け終えたみ〜ことに向かって甲斐は声をかけると、ソファーから立ち上がった、

「ちょっと出かけるぞ。悪いけど、少し付き合ってくれ」

「それはつまり……わたくしも一緒に、ということでしょうか？」

「ああ、そういうことだな。よし、行くぞ」

「……畏まりました」

そう言って上着を取って玄関へと向かった甲斐を追いかけて、み〜ことも玄関の方へと歩いていった。

番外編：下（前）（前書き）

まさかの前後編。初めは上下二部構成の予定だったのに、どうしてこうなったのでしょうか

番外編：下（前）

「まずは服だな」

家を出てすぐにそう呟いた甲斐が向かったその先は、家からバスで三〇分ほどの位置にある大型デパートの中だった。

「甲斐様。わたくしのこのメイド服は自動洗浄機能がついておりますので、修繕不可能な破損でも負わない限りわたくしに着替えは必要ございません」

「あのなあ、おまえ前もそんな事言っただけ自分の服は買わなくていいって言っただけ、女の子なんだからもう少し身だしなみは気にしたほうがいいぞ。まあたしかにそのメイド服は似合いますが、似合ってるしみ〜ことは冗談みたいな美人だから何着ても変じゃないけど、それにしたって外行きの服くらいはなんか買っとけ」

「しかし……」

み〜ことはそう呟いて困ったように眉尻を下げるが、

「しかしもだつてもかつてもない。俺が気にするの。お前はもう俺の妹みたいなもんなんだから、妹に服の一つも買ってやれない兄貴なんて情けなくて仕方ねえっての」

最後に甲斐はそう言ってみ〜ことの手を引き、適当に目についた女性服売り場に入っていく。そして丁度目の前を通りかかった店員に向かって話しかけた。

「あ、店員さん。ちょっといいですか」

「はい、何でしょうか？」

「いやあ、こいつ最近田舎から出てきた家の妹なんだけど、こつち来る時色々あつて服が全滅しちゃったらしくて。だから上下合わせたの何着か、適当に見繕ってもらえますか」

「まあ、持ってきたものの全部ですか。それは災難でしたね……。わかりました、それでは……。あら？ 妹さんがいま着られているの……。メイド服、ですか？」

心よく頷いてみることの方へ視線を移した後、一瞬動きを止めてその口にした店員に甲斐はさらりと平然とした表情で事前に考えておいた理由を口にする。

「ああ、もともとこいつ、そういう関係のイベントに出るために来てたんですよ。それでその服だけは別にしてたからたまたま無事だったんで、仕方なくそれで」

「へえ……。そうなんですか。分かりました。では、どうぞこちらへ……。それにしても妹さん、凄く綺麗な髪をしますね。顔立ちも外国の方みたいですし、まるでお人形さんみたいに綺麗」

「ええまあ、一応ハーフですからね。妹は親父の再婚相手の連れ子だから、俺は違いますけど。……。あれ？ ほらみること、なにやってんだ。お前の服選ぶんだから、お前が着いて来ないと意味ないだろ。早く来いよ」

甲斐がそう言って後ろに振り向き名前を呼ぶと、

「あ、え……。はあ……」

とみ〜ことも、若干目を白黒させながらその背中についていった。

「お客様、少々よろしいでしょうか」

「はい？ …… ああ、店員さんか。もう選び終わりました？」

おそらく服選びは長くなるだろうし、自分がいても女性の服は分らないからと途中で離れて店のすぐ側にあるベンチで待っていた甲斐に、先ほどの店員が話しかけてきた。

「ええ。先ほど何点が選ばせていただいて、今はご試着をさせていただいております。それで一度、お兄さんにも是非見ていただきたいと思ひまして」

「ん…… オツケー、分かりました」

甲斐が頷いてベンチから立ち上がると、「それではこちらへ」と言つて歩き始める。甲斐もそれに続いて歩いて行き、やがて店の奥にある仕切りの前で足を止めた。

「み〜こと？」

そして甲斐が声をかけると、

「あ…… は、はい」

み〜ことはどこか恐る恐ると言った様子でカーテンを開けて出てきた。

「おお……、すげえ似合ってるなその服。まるでいいとこのお嬢様みたいだ」

「ですよ、ですよ！ 妹さん髪も綺麗だしスタイルも良くて素材が凄くいいものですから、私もつい張り切って色々合わせちゃい

ましたっ」

何やらかなりテンションが上がってしまっている店員にうんうんと頷くと、甲斐はもう一度みくことに視線を戻す。

みくことの髪の色が映えるように上着は黒っぽい落ち着いた感じのトップスに、胸にはアクセントとして小さなリボン。更に色の近いカーディガンを上羽織って、スカートは花をあしらった黒と白のシックなデザインのもの。

「今回は全体的に抑えめのデザインで揃えて、素材の良さを引き立てる方向でコーディネートしてみました。妹さんは顔立ちがはっきりしていましたし、特に髪の色がよく映えるように全体的に色を暗色系で統一して、ワンポイントにリボンをつけて服が負けてしまわないようにしてみましたのですが、いかがでしょうか？」

「いや、たいしたもんだ。さっきも言ったけど、すげえ似合ってますよこりゃ」

「ありがとうございますっ」

「あ、あの……恥ずかしいのであまり見ないでくださいませ……」

二人の手放しの賞賛にすっかり顔を赤くしてしまったみくことは、小さくなってどこか小動物チックに抗議の言葉を口にする。

「いやいや、何が恥ずかしいのさ。すっげえ合ってるぞそれ。ほら、自分でも鏡見てみるよ」

「うう、そういう意味ではないのですが……」

しかし甲斐はむしろみくことにもそういう普通の間接感をあつたのかと嬉しくなって店員と一緒にテンションが上がってしまい、その後みくことのみくことのファッションショーは続いてしまつたのであつた。

「うう……」

「いやあ、悪かったって。ついつい調子に乗って店員さんと一緒に着せ替えちまったのは謝るからさ、そろそろ機嫌直してくれよ」

「……別に怒っているわけではございません」

これが甲斐以外の人間なら、きつとみくことは気にも留めていなかっただろう。しかし何故か甲斐に普段とは違う自分の姿を見られるのは、どうしても嫌だった。

……否、嫌と言うわけではなかったのかもしれない。そこに不快感は存在せず、しかしなぜだか甲斐の目を正面から見ることでできない。……それはきつと人間で言うところの、羞恥と呼ばれる感情だったのかもしれない。

「え？ そーなのか？」

「……はい、そうです。ですのでそのように、何度も謝って頂く必要はございません。どうかお気になさらないでくださいませ」

そもそもみくことの中に、マスターに怒りを覚えるという感覚はない。己の身は機械であり、そして主人に全てを尽くすメイドである。故に粉骨碎身し、たとえ自らが砕けようともし主人に仕えるのが責務だった。それどころか主人から物を与えてもらって、それに怒ることなどありえない。

とはいえみくことその本質は、ただのプログラムで動くロボットなどではない。だからそうではない行動を取ることも、もちろん可能なことであつた。しかしみくことの中には、そうする理由が存在しない。彼女にとって己とはあくまで被造物であり、そしてただの物なのである。

「む……」

そこで突然黙りこみ、そしていつものまるで能面のような無表情に戻ってしまったみくを見て、甲斐は小さくうめきを漏らす。その後甲斐は気を取り直すようにパンと軽く手を鳴らすと、「よし」と呟きみくことに視線を向けた。

「それじゃあこの話はもう終わりってことで、そろそろ次の目的地に向かうぞ」

「？ 次の目的地、でございますか？ それはいつたいどちらに……」

「ああ、次は公園だな。ほら、家の近くに割とデカ目の所があっただろ。そこに行く」

「公園、でございますか。畏まりました。お供いたします」

「おう。んじゃ行くか。そうと決まったら、まずはバスに乗らないとな。えっと、次のバスの時間は……」

甲斐はそう言ってバスの時刻表を携帯端末で確認しようとポケットに手を入れたが、

「今から一五分後に到着の予定でございます」

とみくことが代わりに答える。

「一五分か。なら少し急いだほうがいいな」

「はい」

最後に短くそう話して、二人はバス停へと向かうために足を早めるのであった。

「甲斐様」

「ん？ どうした、み〜こと」

み〜ことはバスを降りて公園へと向かう道すがら、不意に甲斐に声をかけた

「今日はどうして、甲斐様はこちらに来られようと思われたのですか？ それも、わたくしをお連れになって」

「ああ、そうだな……」

甲斐はしばらく沈黙して己の中で言葉を選んでいたが、やがて静かに口を開いた。

「み〜ことに少し教えて……いや、分かってもらいたいことがあったから。それで今日は、あちこち連れまわすことにしたんだ。もしかして、迷惑だったか？」

「いいえ、迷惑だなんてとんでもない。ただ、疑問に思っただけです。それにしても……分かってもらいたいこと、ですか。それは一体、なんなのですか？」

「そりゃ俺の口からは言えないな。というよりも、誰かが口で言っても意味のないことだ……って言ったほうが正しいか」

「？ それはどういう……」

「あ、見えたか。あそこが目的の公園だな。まあ、着いて来いよ」

み〜ことはさらに疑問を重ねようとしたが、甲斐はそれに答えず

さつさと歩いて公園の中へと入っていつてしまった。

「ああ、お待ちください甲斐様」

その背中を追いかけて、すぐにみることも公園へと足を踏み入れていった。

「あ、どうも荒見さん。お久しぶりです」

「あらまあ、門倉くんじゃないの。久しぶりねえ。どうしたの？最近に来てなかったみたいだけど」

「いやまあ、最近色々とありましてね」

甲斐は今、公園の中で首輪をつけた犬にディスクを投げて一緒に遊んでいた、恰幅のいい四〇代前半ほどの女性と話しをしていた。ここは近所の犬好きの集まる公園で、その散歩コースに使われたり遊び場に使われたりと、周りを見ればいくらでも犬のいる犬好きの天国なのである。甲斐は犬や猫が昔から好きだったので、時折ここに来て触ったり遊ばせてもらったりしていたのだ。

「あら、そうなの。……とここでさつきから気になってたんだけど、そちらの綺麗なお嬢さんはどちらさま？もしかして、門倉くんの彼女さんか何かかしら？」

「あはは、違います、妹ですよこいつは。家のおやじの再婚相手の連れ子なんで、全く顔は似てませんけどね」

「あらあら、そうだったの。こんにちは、門倉くんの妹さん。私は荒見つていいいます。お兄さんとは時々ここで会うことのある……まあ、犬好き仲間のようなものかしら」

その言葉を聞いて、み〜こともペコリと頭を下げる。

「こんにちは、荒見さん。わたくしの名前はみ〜ことと申します。いつもか、ごほん。兄がお世話になっているようで、ありがとうございます。」

「やだわ、お世話だなんてそんな事してないわよ。むしろ私のほうこそこうして若い子と話す機会が持てて楽しんでるもの。おかげでなんだか若返っちゃった気分にならせてもらってるくらい。感謝してるのは私の方だわ。」

「なにいつてるんですか、まだまだ若いのに。」

「もー、こんなおばさん捕まえてそんな事言うなんて、女泣かせねえ門倉くんは。」

「はは、まさか。」

朗らかにそんな事を話している甲斐に、み〜ことはちゃんと服の裾を掴んで注意をひくと、

「あの、それで結局こちらには何をしに来られたのでしょうか？」

と疑問をぶつける。

「ああ、そうだったな。悪いけどちょっと待っててくれ。……荒見さん、今から少しカイくん借りても大丈夫ですか？」

「ええ、いいですよ。あの子もあなたにはよくなついているし、きっと久しぶりにあえて喜ぶわ。」

「なら、嬉しいんですね。」

そう言って甲斐が向かったのは、ちょうどさっき投げたディスクを取って戻ってきた

「犬？」

「ふふ、そうよ。あの子の名前、カイっていうんだけど……私があの子を呼んだら偶然通りがかった門倉くんが返事をしてね。それがきっかけで、今のように話すようになったの」

「カイくん……」

みくことの脳裏に、大きな声で「カイちゃん」と呼ぶ荒見の姿と、それに反射的に返事をしてしまう甲斐の姿が思い浮かんで、つくすりと笑みを漏らしてしまう。

「ん？ どした？ なにか面白いものでもあったか？」

とちようどその時小さな犬 ミニチュアダックスフンドを胸に抱いた甲斐が戻ってきて、みくことは慌てて首を横に振りながら、

「い、いえ……なんでもございません」

と否定した。

「そうか？ んー、まあいいか。やっとみくことの初の笑顔も見られたことだし、細かいことは置いておこう。それよりみくこと、ちよつとこつち来いよ」

「？ なんででしょうか？」

甲斐の言葉に首をかしげてみくことが近づくと、「はい」と言っ
て甲斐が胸に抱いていたカイくんを差し出してきた。

「……え？」

「ちよつとお前も抱っこしてみるよ。大丈夫、カイくんは大人しい上
に人懐っこいから、変に力を入れすぎたりしなればいい」

「ですが、あの、わたくしは……」

みくことがもごもごと喋りながら視線を彷徨わせるが、少し離れたところでその光景を眺めていた荒見はニコニコとするだけで止めてくれない。

やがてみくことは一向に引く様子が見えない甲斐の顔を見て肩を落として諦めると、おずおずと腕を伸ばして恐る恐るカイクンを胸に抱き寄せた。

『わんっ』

するとカイクンは一度小さくみくことに向かって一鳴きすると、ふるふる尻尾を振ってぺろりと顔を舐めてきた。

「あ、え、あ……ちょっと待ってください、あの、あつ……」

そして初めみくことははあわあわと戸惑っていたが、しばらくするとカイクンのその行動にも慣れたのか、やがて小さく「ふふ」と笑顔を漏らした。それを見て甲斐は大丈夫そうだと安心すると、自分も荒見の横まで移動してその姿を見守る。

「どうやら妹さん、カイちゃんに好かれたみたいね」

「ええ、そうみたいです。いや、よかったですよ。実はあいつ最近までかなりの田舎にいた箱入りだったもんで、あんまり人とも動物とも触れ合ったことがなかったんです。だから今日は助かりました。ありがとうございます、荒見さん」

「あら、いいのよ。カイちゃんも喜んでるみたいだし、気にしないで。ほら、あの子ったらあんなに嬉しそうにして。よっぽど妹さんのことが気に入ったのね」

くすりと笑を漏らした荒見に続いて視線を戻すと、そこにはさつきにも増してぶんぶんと尻尾を振るカイくんの姿と、それに嬉しそうに満面の笑みを見せるみくことの姿だった。その光景は午後のやわらかな日差しとあいまって、凄く優しい光景で………ついついつまでも眺めていたくなるような、そんな穏やかさを感じさせられた。その様子を見た甲斐は一瞬どこか眩しげに眉尻を下げ目を細めると、その場に静かに座ってそんなみくことの姿を見守り続けるのであった。

番外編：下（後）

陽の光がだんだんと落ちてきて、時間も夕方に差し掛かった頃。甲斐の隣に座っていた荒見が「あっ」と小さく声を漏らした。

「大変、もうこんな時間。門倉くん、私そろそろ家に帰らないと。これからお買い物して晩ご飯の支度もあるから……ごめんなさいね、妹さん、あんなに楽しそうにしているのに」

「いや、気にしないでください。こんなに長い時間カイくんとは遊ばせてもらって、むしろこっちが悪いくらいですから」

「ふふ、それこそ気にしなくていいのよ？ 私も、それにきつとカイちゃんも楽しかったから。今日はありがとうね、門倉くん」

「こちらこそ。それじゃあ……み〜こと！ 遊んでる所悪いけど、そろそろ行くぞ。荒見さんもう帰るらしいからな」

「あ……」

甲斐の呼びかけに振り向いて、ピタリと動きを止めるとみ〜ことはカイくんを撫でていた手を離す。そこで荒見が「カイちゃん、行きましよう？」と言うと『わん』と一鳴きしてカイくんは荒見の元へと駆けていった。

「妹さんも、ごめんなさいね。あまり遅くなっちゃうと困るからそろそろ帰るけど……私たちはよくここに來てるから、また遊んであげて。それじゃあまたね、門倉くん、妹さん」

そしてそう言って二人に笑いかけると、荒見とカイくんは去っていった。

「ああ、行っちゃった……」

その背中を見つめながら、みくことは名残惜しそうにやり場を失った手を彷徨わせながら呟く。まるで悲しみを全身で表しているかのようなそのみくことの姿を見て甲斐がポンとその頭を軽く撫でると、そこでようやくみくことははっと我に返って甲斐に視線を向けた。

「今日はもう無理だけど……この公園はそんな遠くないし、元々俺も時々ここには来てたからな。今度からはみくことも、また一緒に来ればいいさ」

「……はい。ありがとうございます」

みくことは甲斐の手を頭に載せたまま小さく頷くと、そのまま沈黙して甲斐の撫でる手を受け入れていた。

「よしっ、それじゃあまた移動するか！ 次が最後の目的地だから、早めに済ませて俺たちも飯にしよう」

そしてしばらくしてから甲斐がそう言って手を離すと、みくことはいつものように恭しく、

「畏まりました」

と頭を下げ、静かに歩き始めた甲斐の背中を追い始めた。

甲斐たちが公園を出て最後に向かったのは、家の近所にある花屋だった。甲斐はそこに着くと店先でみくことの訝しげな視線を受けながら、おもむろに口を開いた。

「さ、今日の用事はここで最後だ。……みくこと」

「はい、何でしょうか？」

甲斐は未だに首を傾げているみくことから視線を外して栽培用の鉢植えに淹れられている花が置かれている一角に目を向けると、そのままみくことには顔を向けずに、

「お前、今日から一つ花を育ててみないか？ もちろん嫌だっていふんなら無理強いはいしないけど、よかつたらどれか一つ好きなのを選んでくれ」

「花を……育てる、ですか？ もしかしてそれが、今日こちらまで赴いた用事だったのでしょうか？」

「ああ、そうだな。ここが終わつたらもう用事はないから、後は帰るだけだ」

「……そうですか。それが甲斐様のご意向でしたら、わたくしに否はございません。ですが……好きなものを選びと仰られても、わたくしにはそういったものが存在しないのですが……」

「あー、そうだな……。好きな花が思いつかないんだったら、他に何か……好きな色とか形とか、それで決めてみたらどうだ？」

「色や形、でございますか……」

そういわれてもう一度そこに視線を向けると、なんとなく目が止まったものがあつた。そこに書かれていた花の名は、ハイビスカス。どこかみくことの髪の色を連想させる鮮やかなオレンジ色の、綺麗な花だった。

「お、それが気に入ったのか？」

「……それでは、それでお願ひします。他に気になったものはございませんので」

「オツケー、それじゃあレジ行つてくるからちよつと待つててくれ」

甲斐はそう言つてその鉢を持つて行くと、レジでお金を払い戻つてくる。そしてその花の入つた袋をひよいと掲げると、

「ほら、これはお前が持つとけ。きちんと責任持つて育てるんだぞ？」

「はあ……」

みくことの気のない返事を気にもとめず、甲斐は一度軽い笑顔を見せるとそのまま花屋から出ていく。そしてすぐにその姿を追つてみくことも店から出ていった。

一度家へと帰る途中で信号を渡る直前、信号無視をした黒いスモーク窓の車が突っ込んできて危うく事故にあいそうになったこともあつたが、それはみくことが未然に気づいてくれて事無きを得た。その後は特に何も起こらず、二人は家に帰るといつも通りに過ごしていた。一つ違いがあるとすれば、ほとんど寝るためにしか使つていないみくことの部屋に花が一つ増えたくらいだ。

それから、一月程の時がたった頃のことだつた。甲斐とみくことにとつて、一つの大きな転機となつた出来事が起こつたのは。

みくことの行動優先順位は、まず第一に甲斐に関わることである。食事の準備や、家の掃除、洗濯などの家事。その他すべての「優先してすべきこと」は甲斐を基準に決められている。

そのため、なのだろう。以前に買ったあの花。ハイビスカスは所有権が甲斐からみごとに移され、それが『己のもの』になってしまった瞬間に、その優先順位は酷く下がってしまったのだ。

自分のことは後回し。それがこの頃のみごとには当たり前だった。例えばみごとこの部屋の中にはほとんどどの家具が存在せず、岡崎教授から譲られた休眠兼メンテナンス用ベッドとタンス以外は何も無い。さらにはそろそろ秋も終わりが近く気温が下がってきたというのに、その部屋の中は暖房がつけられていないどころかその電源が落とされていた。

しかしある日偶然に、その時みごとがやらなければならなかったことが全て終わってしまった、完全に隙間となってしまうた時間が出来た時があった。

そしてようやくみごとことは己の部屋の隅に置いてあったハイビスカスのことを思い出して、足早に己の部屋へと足を向けた。何故かその時みごとこの胸のうちには小さな震えのような『悪い予感』が立ち込めていて、その足取りはいつもより重いものだった。

ガチャリと扉を開けて、部屋の中を見る。そして鉢に植えられているハイビスカスへゆっくりと近づくと、みごとことはその前で立ち尽くした。何故ならそれは

あの鮮やかだった花弁は全てくすんだ色になって地面に落ち、茎も完全に萎れて枯れ果てていたからだ。

「あ……」

みごとことは初め、マスターに任されたのに枯らしてしまうとはと、それしか考えてはいなかった。しかし同時に、何か予感がした気がしたのだ。

そして彼女は恐る恐る、その手を枯れ草色になってしまった茎へと伸ばす。直後、それに触った瞬間に、みくことは胸に震えを覚えて手を引っ込めた。しかしみくことはそれでももう一度それに触れ、今度は軽くそれをひとさし指と親指でつまんでみる。するとかつてハイビスカスであったその花は、カサリと”中身のない”音と感触を返してその身を小さく揺らした。

その瞬間、みくことは言い様のない冷たい感情を心の深い所に覚えて、思わずその手を胸にかき抱いた。

その手に残る感触は、決定的な死の影。それは生物の終わった後の姿。なにをしたとしても取り返しの付かない、全ての存在にいつか訪れるであろう終焉の感触だった。

「ああ……」

みくことは、自分がなぜこれほどに衝撃を受けているのか理解できなかつた。しかし己がしてはならないことをしてしまったのだと、そんな想いだけが心のなかに渦を巻く。

「……甲斐様……」

気づけばみくことは、居間にいた甲斐の元へとふらつきながら縋るように歩み寄る。その手には、枯れてしまったハイビスカスの姿があった。

「みくこと……？ どうした、顔が真っ青だぞ？」

そして甲斐は居間に入ってきたみくことの姿に気づいて声をかけ、次に遅れてその手にしていた鉢に気づいて視線を向ける。

「あ……、その花は……こないだのやつか。　　そうか。枯らしちまったんだな」

「甲斐様……。わたくし、どうすれば……」

なぜこれほどに、みくことは気に病んでいるのか。そこにはそのハイビスカスが既に『みくことのもの』になっていたことが起因する。

以前みくことが金魚を落としたて死なせてしまった時は、あくまでそれは甲斐のものであり、かつ家事の1つとして優先順位の高い作業としてその行為があったから、何も感じなかったのだ。

しかし今回のことは『しなければならぬこと』ではなく、また同時に『自分だけにしか関係のないこと』であったことから……それを覆うものの存在しない、完全に素の心のままでみくことはそれを受け取った。故にみくことは初めて己の心に入り込んできたその『死』という感触に、彼女の幼い心は強い衝撃を受けたのだ。

「……どうしようもないさ。生き物は、死んじまったらそれで終わりなんだ。もう二度と、生き返ることはないんだよ」

「ごめんなさい……」

「俺に謝ることじゃない。それよりも、お前が今何を気にしてそんなに落ち込んでるのか……それを忘れずに大事にして、自分なりに考えて欲しいんだ」

「……」

そして、翌日のこと。まるで追い打ちをかけるかのように、ある出来事が起こった。

その日甲斐はみくことと二人、連れ立って買い物に出ていた。昨日の今日で少し心配だったので、一人では行かせられないと考えた甲斐が無理を言って一緒に家を出たのだ。

行きは何事もなかったが……その帰り道

「……え？」

「なっ、み〜こと危ねえ!!」

突然の、ブレーキ音。

そしてその先にいたのは、以前にも見た黒塗りの乗用車の姿だった。車はどうかこちらを曲って避けようとしていたのだろうが、しかしそれはどうみても間に合わない。甲斐は咄嗟にみ〜ことに体当りするように突っ込むと、その体を抱き寄せて前方へと飛び込んだ。瞬間、足がわずかに車に接触。

「う、ぐっ……!!」

「甲斐さ、きゃあ!」

甲斐の体に勢いがついてしまって、二人はゴロゴロと道の端まで転がっていった。

「う、ごほごほっ、げほ、ごほ……、はー……」

足がかなり痛むのと、背中を強く打ち付けて息が詰まってしまっていたが、幸いなことに大怪我だけはせずにすんだようだ。これだけ派手に吹っ飛んで大事ななんて、まるでどこぞのスタントマンみたいだなと内心で苦笑しながら、甲斐は緊張を解すようにゆっくりと深い息を吐き出した。

「か、甲斐様! ご無事ですか!？」

慌てて身を起こして甲斐の腕から抜けだしたみ〜ことが、半ば叫ぶようにして甲斐に声をかける。

「ああ……何とかな。打撲くらいはありそうだけど、骨を折ったりはしてなさそうだ。そういうみ〜ことこそ、大丈夫だったか？」

「わたくしは　っ」

その瞬間、み〜ことの脳裏に昨日のハイビスカスの萎れた姿と、触れた時のあの感触が蘇った。

自分とは違い、生き物はすべからく脆く儂い。それは現在の己のマスターたる甲斐とて変わりはなく、そして死の恐怖を知ってしまったみ〜ことには、そうなってしまったかもしれないという事実だけで既に耐え難かった。

故に

「わたくしなんてただの物なのに……どうしてあんな、庇ったりなんかしたのですか！　わたくしは壊れても直せばそれでいい！　だけど甲斐様は、死んでしまったらそれで終わりなんですよ！」

それはみ〜ことがあのカプセルから目を覚ましてから、初めて抱いた怒りという名の感情だった。み〜ことは甲斐に、死んで欲しくはなかったのだ。甲斐が『あんな事』になってしまったらと、少しでも想像してしまうと……それは酷く、恐ろしいことだった。

今やみ〜ことにとって、目覚めてからのそのほとんどの時間を共に過ごした甲斐の存在は自覚なく……だけど絶対に、失いたくはないものになっていたのだ。

それは刷り込みのようなものだったのかもしれない。しかし目が覚めてから初めて話したのが、初めて目にしたのが、初めて口にした名前が、初めて何かをするのが……全て、甲斐と共にあった。故にその想いに人や機械の垣根はなく、確かな彼女の想いだったのだろう。

だからもう自分なんかほっといて、もっと体を大切にしてくれ

った。その身はあの花と同じく、失われてしまえば取り返しの付かないものなのだから。
だが

「……物だから、体が機械だから、壊れてもいって言うのか？」
「そうです！ わたくしの体なんて、壊れたら直せばそれで済むことなのです。甲斐様には、予備のパーツがありません。頑丈な体も、修理器具だって用意できない！ ですがわたくしは、何かあったら岡崎様に頼めばそれで直るのですからっ！」

「み〜こと、お前……」

ギチリと、歯が噛み締められる音がした。そして甲斐の表情から発せられる、確かな怒りの感情。それはみ〜ことが初めて他人からぶつけられた、感情の発露だった。

「ふっざけんなよ！ 治せるから壊れていいだなんて……そんなこと、あるわけあるか！ ……馬鹿な事言うんじゃないやねえよ、まったく」

み〜ことは甲斐に怒鳴られて、びくつと体をすくませると、まるで初めて親に怒られてしまった幼子のように視線を俯かせる。しかしその表情からは僅かな不満の色が漏れていて、どうやらどうして自分が怒られたのか理解してはいないようだった。

……甲斐は悲しかった。甲斐は何も、自分が大事じゃなかったからみ〜ことを助けたわけではない。自分のことは当然大事だけれど、それでもやはり今は妹のように思っているこの少女のことも大切だったから、半ば無意識に身を挺して庇ったのだ。

だけども〜ことには、自分がない。自分の中に自己が存在していないから、自分の身を案じるという考えがそもそも存在しないのだらう。

それはもしかしたら、ロボットとしては正しいことなのかもしれないが……しかし己の家族がそのように思ってしまったというこの事実は、甲斐には酷く悲しいことだった。

そして甲斐は、その悲しそうな表情をそのままに……未だ顔を俯けたままのみぐことの姿を見て、その体を静かに抱きしめた。するとみぐことはぴくりと肩を跳ねさせたが、しかしそのままにも抵抗せずにいる。

「なあ、みぐこと。俺の心臓、動いてるだろ？ 当然息だつてしてるし、体温だつてある。……俺だつて、生き物だ。いつかはこの心臓も止まって、冷たくなって死んでいく。だけどそれは……一度きりのものだからこそ、大事なモノなんだよ。それはもちろん、俺だけじゃない。カイくんだつて、お前が枯らしちまったあの花だつて……いつだったかお前が水槽を落として、死んじまったあの金魚だつてそうだ」

甲斐はそこで覗くようにして見上げてきたみぐことの視線を感じて、視線を下に向けるとその目をまっすぐに見つめ返した。

「そしてお前だつて、いつかは死ぬんだよ。形あるものは、いつかは壊れる。そこに人間だとかロボットだとか、そんな些細な違いは関係ないんだ。治すことも元に戻すこともできないような、決定的な死はお前にだつていつかかならず来る。……だけどだからこそ、お前だつて大切なんだよ。みぐことは一人しかない。今ここに居るお前は、一度失われちゃったらそれで終わりなんだよ。だからもう、自分のことを壊れてもいいだなんて……そんな悲しい事は、言わないでくれ」

みぐことは甲斐の言葉を聞いて、無言でそつと視線を伏せた。甲

斐はそんなみ〜ことの様子を見て、おもむろにその小さな頭に手を載せそつと撫でる。

「すぐに解れとは言わない。だけどいつか何かを感じた時に、俺の言葉をもう一度思い返してくれ。それが俺からの、初めてのみ〜ことへのお願いだな」

「お願い……………」

そして甲斐はポツリと呟いたみ〜ことに一度苦笑を浮かべると、

「…………悪いな。もっと上手く伝えられればよかったんだけど…………俺も人間としてまだ未熟だつてことなんだろうな。まあ、まだまだ時間はたつぷりあるんだ。これから一緒に成長していこうぜ。家族なんだからさ」

そう言ってみ〜ことの体を離すとその頭から手を避けた。

「あ〜」

とその時、突然横から声をかけられた。すわあの車の運転手かとそちらを見ると、そこにいたのはなんと

「…………ちゆりさんに、岡崎教授？ 何であんたらがここにいますか？」

甲斐は目を丸くして、どこか問い詰めるような口調でそう言った。状況が状況だったのと、この二人が揃っている時は大抵ろくなことが無いのでほとんど無意識にそのような口調になってしまったのだが、

「あはは……。いやー実は、あの車を運転してたのってアタシだったりするんだよ……」

「いやーまいったまいった。まさか門倉が庇いに行くとは思わなかったもんだから、焦っちゃったよ」

どうやらそれは、甲斐の勘違いではなかったようだ。

バツが悪そうに白状するちゆりとぼりぼりと頬をかきながらそう口にした岡崎教授に、今度こそ甲斐は「はあ!?」と叫んであんぐりと口を開けた。

「結局、この子たちに最初に与えなければならなかったものは、死の恐怖だったのよ。自我の構築には、死への抵抗が必須なの。人間だって基礎的な欲求は、全て生存欲に依存する。生物が生きていく上で、必ず一度は意識しなければならぬことなのよ、これは。門倉だって、それはわかるでしょ? ……この子たちはただの機械じやなくて、もう一つの生命だから。それを教えないわけには行かなかったのよ。人と暮らす上で、人とかけ離れた精神性を持たせるわけには行かないからね」

「……んで、それを実感してもらったためにわざわざちゆりさんに無理やり運転させてあんな事をした、と?」

「そうそう、そういうわけなのよ。まさか門倉があそこまでしてみくことをかばってくれるとは思わなかったけど……まあ、それは嬉しい誤算だったわね」

「まったく、アンタって人は……」

甲斐はみくことの入っているカプセルの前においた椅子に座りながら、心底頭が痛そうな顔をして額に手を添えた。

「ちよつと、そんな顔しないでよ。一応これでもあの子たちの強度は把握してるからね。絶対に大丈夫なように車の重量とかスピードまで計算してたんだから、せいぜいちよつと傷がつくくらいだったわよ。それなら十分、あの子の自己修復でまかなえる範囲だったはずよ」

「あのねえ……そういう問題じゃないっつもの！ 今度似たようなことしやがったら、その時はアンタが計算してる数式に誤情報混ぜてエンドレスループ地獄にはめてやりますからね！」

「うあ待って、それはやめて！ もうしない、絶対もうしないから！」

岡崎教授には、ヒューマンエラーが存在しない。計算ミスをしないので。それ故彼女は何かの計算をしていても自分が間違っているのかもしれないという可能性を初めから排除してしまうので、中に誤情報が存在するとどうして答えが合わないのかと思考の迷路にはまってしまうのだ。

「……はあ。それで、みくことは大丈夫なんですか？ 一応メンテナンスするからって聞いて着いてきたけど、どっか悪いとことかは……」

「それはなさそうね。どっちかって言うところにはメンテナンスよりモニタリングがメインの作業だから、そんなに心配しなくても大丈夫よ」

「そうですか」

最後に相槌を打って、甲斐は黙りこんでしまう。そして岡崎教授もみくことの入っているカプセルの前に戻って、作業を再開した。

それから、しばらくした頃。甲斐は座ったまま瞑っていた目をゆつくりと開き、カタカタと音を立てながら仮想キーを打つ岡崎教授の背中に向かって、再びおもむろに口を開いた。

「教授」

「なに？」

作業を続けながら短く答えた岡崎教授に、甲斐は静かな声で言葉を続けた。

「……その内、今のこのモニターのバイトが終わったとしても……みることは、家にいさせてはもらえませんか。もちろん本人の気持ちありきだけど……あいつがいいって言ったら、その時は……お願いします」

一瞬だけ、甲斐の頭の中にバイト代をゼロにすることを条件にこれを頼もうかという考えもよぎったが……それはつまり、金でみることの取引をするということだ。それは彼女を家族のように思っている甲斐には、最早できないことだった。

よってその選択肢は早々に却下して、甲斐は岡崎教授にただ頼むことを選択した。もちろんこれで向こう側から何か条件を言われたとしたら、大抵のことはそのまま飲むつもりだったが

「この子はもう、私の所有物なんかじゃないわ。独立した一個の生命体なのよ。だからこの子が自分でそうしたいといったのなら、私に止める権利はない。……要するに、門倉にこの話を頼んだ時にアナタが言った通り、初めから全部この子の意思次第ってわけ。だからその言葉は、私じゃなくて本人に言いなさい」

岡崎教授は一度動かしていた手を止めて、甲斐に振り向くことな

く静かな声でそう語った。そして最後に、

「門倉。もう私からは、この子に一切手だしはしないわ。だからこの子のことは、アナタに任せたわよ。この子がちゃんと、自分のことを一つの命なのだと思えるように……門倉が、それを教えてあげて」

と言葉を締めくくると、再び作業を開始する。

「俺にそんなだいそれた事ができるかはわかりませんが……俺はもう、みくこのことは大事な家族の一員だと思ってます。だからこれからも、俺はみくことと一緒に生きていきたいと思ってますよ。きつと俺に出来ることは、それだけなんだと思いますからね」

「……そう。ありがとう。やっぱりこの子を門倉に任せたのは、正解だったみたいね」

甲斐の言葉は少なく拙いが、その想いだけはなんとなく伝わった。だから岡崎教授もそれ以上は多くを語らず、一言そう言うだけでその唇に言葉をのせるのを止めた。

……ちなみに。

実は二人のこの会話は、カプセルの中にいたみくことにも聞こえていた。本来は聞こえるはずがない……どころかその中にいる間の意識は完全になくなるはずなのだが、教授の計らいで今回はそうなっていた。

みくことにはまだ、自分が二人の言うように甲斐や岡崎教授と同じ命なのであるということが、理解できなかった。そして、甲斐の言う家族という感覚も分からない。

ただどうして休眠機の中で揺蕩いながらこれまでのことを思い出していくと、自然ともっと甲斐と一緒にいたいのだという気持ち

が湧いてきた。そしてそうしていればいつか自分も、自分のことが一つの命なのだと……自分が甲斐の家族なのだと、そう思えるようになるのではないかと、そんな風に思えた。

そしてなによりみくことは、自分から『甲斐の家族』になりたいのだと、そんな気持ちが胸の内に存在するのを自覚した。

だから

まずは呼び方を変えるところから、始めよう。呼び名というのは、きつと大事なもののなのだ。以前にマスターも様付けはやめてくれと言っていたから、それはきつと間違いない。だけどはじめから名前だけで呼んだりするのは馴れ馴れしい気がするから、まずは少し変えるところから。

それに話し方も、少しだけ崩してみよう。だけど敬語を止めるのも、自身のあり方を考えればやはり抵抗がある。それなら今よりは柔らかく、だけど敬語だけはそのままにして話してみよう。

それと今度は、もっと人間のユーモアについても学んでみるのもいいかもしれない。そうすればもっと、マスターは笑ってくれるかもしれない。

……時折家の中に一人でいる時に見せる、寂しそうな表情。あれはもう、見たくなかった。マスターの笑顔は、いつも自分を温かい気持ちにさせてくれる。だから今よりもっと明るく振る舞って、何度も笑わせてあげるんだ。

そんなことを、みくことがカプセルの中で微睡みながら、どこか夢の中にいるかのようにボンヤリと考えていると、次第に意識が鮮明になってきたのを感じた。どうやら全ての作業が終わったようで、もう外に出られるようだ。

そしてカプセルの中から半透明の液体が全て排出された後……み

「ことは不意に肩にかけられたタオルに気づいて顔を上げ、そこに甲斐の姿を確認すると表情を緩めて体にタオルを巻きつけながらゆっくりと立ち上がった。

「なあ、みくこと。いきなりこんな事言われても困ると思うんだけど……お前はさ、今のモニターのバイトが終わった後も、俺のうちに住むつもりはあるか？」

普通であれば急なその問いかけに面食らうところだろうが、みくことは外で二人の間に交わされていた会話の内容を知っていたので特に驚くこともせず……そしてとても嬉しそうな満面の笑みを浮かべると、

「もちろんですわ、甲斐ぼっちゃま」

と明るい声で、答えるのだった。

そうしてこの日から、門倉家では毎日明るい声の飛び交う賑やかな日々が始まるのだが……それはまた、別の話。

名称：門倉甲斐。 種族：人間。 分類：マスター。 優先度変更 優先度、極高。 優先度を極高にすると自壊する場合でもそちらを優先して保護してしまい、また容易には再変更をすることはできなくなります。 本当に変更しますか。 Yes

番外編：下（後）（後書き）

まず始めに、このようにつたない文章を最期まで呼んでくださった全ての方に感謝を。ありがとうございました。

まさかこれほど長引いてしまうとは思っておりませんでした、とりあえずこれで甲斐とみくことの過去話は終了です。

初めはもっと短くするはずだったのですが、終わってみるとなんだかちよつとした短編ぐらいの長さになってしまい、まだまだ自分の構成力等々の未熟さを思い知らされてしまったところでございます。展開もなんだか甘い気がしますし、もしかしたら後で微修正くらいはするかもしれません。

が、なんにせよまずは本編の方も書き上げなくてはなりませんね。なんとか完結までこぎつけるよう、今後も頑張っていきたいと思えます。ちなみにもし感想をいただけたら作者のモチベーション的な意味で盛り上がるので、気が向いた方は書いてくださると嬉しいです。

ではでは、長々と話しているのも何なので、このあたりで失礼をば。さようなら。

9 話

「そういえば、さっきは聞き損ねてしまったのですが……」
「？」

昨日は眠気に負けてしまつて入らなかったので、大学に行く前に風呂に入ろうと着替えを受け取った所で、みくことに話しかけられて甲斐は動きを止めた。

「先ほどわたくしの目には玄関でお別れした雛さんの姿が、その後すぐに消えてしまわれたように見えた気がするのですが、あれは気のせいだったのでしょうか？」

「あれ、言つてなかったっけ。詳しくは知らないけど、何でも雛つて実は人間じゃないらしいから……多分そのせいだろうな、それは初めて会った時もしかそんな感じだったし」

甲斐がそう言うと、みくことは手を胸の前で合わせておっとりとして、「まあ、そうでしたの」と呟いて、

「でしたら今度お見えになられた時は、食べられるものが人と同じなのかも聞きしちやったりしなければなりませんね」

「あ、なるほど。たしかにその辺は確認してなかったな。晩飯の時は何も言つてなかったから、多分米は大丈夫だったんだろうけど」

果たしてその話を聞いて気にするのはそこでいいのだろうか。この二人、主従揃つてズレ過ぎである。

「まあなんにせよ、今はその話はいいだろ。んじゃ俺は、いい加減風呂に入るかな」

「そうですね。では、参りましょう」

……。

「……おい」

風呂場の前まで移動した後、何故かみくことも一緒になって着いてきたので甲斐は思わず顔を引き攣らせながらその顔を見返した。

「？　どうかされましたか？」

「いや、どうしたかじゃなくて……」

あまりにも平然と聞き返されたものだから、甲斐は一瞬自分がかしいのかと思ってしまうたがすぐに、

(いやいやおかしい。これは絶対おかしいだろ)

と思い直す。

「だからどうして、お前も一緒に風呂場に来るんだよ？」

「それはもちろん、甲斐ぼっちゃまのお背中をお流ししちゃうおうと思っっちゃったりしちゃうたからでございますわっ」

「……そうかそうか、そいつはありがたいな。よし、みくこと」「はい？　なんでございますか、ぼっちゃま？」

未だに風呂場の前から動かさずキョトンとした顔で小首をかしげているみくことに、甲斐はニッコリとした笑顔で一息に、

「デコピンとげんこつとチョップとグリグリ、どれがいい？　どれかひとつ選びやがれ」

と言いつた。

「……え？」

そして呆けたような顔で目を丸くしているみくことに、甲斐は棒読み無表情なのに何故か明るい口調で、

「あ、なに？ 全部がいつて？ 仕方ないなあみくことは。そんなに俺にお仕置きされるのが好きなのか。よしパパ張り切っちゃうぞー」

「え、ええっ！？ あ、ちょ、ちよつとま、お待ちください甲斐ほつちやま！ 謝りますっ、謝りますか」

慌てて言い募るみくことこの言葉を無視して、甲斐はジリジリと近づいていき

「みゃー！？」

直後、特大の悲鳴が門倉家の中に盛大に響き渡ったという。

そして後にはプスプスと頭から煙を上げるみくことと、少しだけ手を痛そうにさする甲斐の姿のみが残ったのであった。

男女七歳にして席をどうじゅうせず。ここ門倉家では、不埒な真似は許されないのである。

「さて、飯も食ったし忘れ物もないし……そろそろ出るかな」

そう独りごちると「んー」っと伸びをして、甲斐はソファから立ち上り玄関へと歩いていった。

そして靴を履こうとするといつの間にか待機していたみ〜ことが、「どうぞ、ぼっちゃま」と靴べらを差し出してきたので、「おう、ありがと」と小さく礼を言ってそれを受け取り靴と踵の間に差し入れ靴を履く。

「……よし。それじゃあ行ってくる。今日はゼミもないし用事もなかったはずだから、多分そんなに遅くはならないはずだ」

「承知いたしました。それでは行ってらっしゃいませ、甲斐ぼっちゃま」

ペコリとお辞儀をしたみ〜ことに軽く手を上げると、甲斐は身を翻して玄関から出ていった。そしてみ〜こともそれを確認してから無言で頭を上げると、主人のいぬ間に家事を済ますべくパタパタと家の中へと戻っていったのであった。

「う……」

ふらりとぐらつく体。思わず漏れるうめき声。甲斐の家で回復した力などとうに消耗ききって、雛は今にも倒れそうな体を引きずりながら歩いていった。

周りを見渡せば、どこに行っても人間ばかり。しかしこれだけ弱りきった姿を隠らずも晒してしまっているというのに、誰一人雛に声をかけてくるどころか、その姿を目に留める者すら存在しなかった。とは言えそれはここに居る人間が特別冷たいというわけではなくて、単に甲斐のように雛の姿を見ることのできるものがいないというだけのことなのだろう。

……弱った心に、影がさす。あれだけ共にいて厄が移らないのなら、幻想郷へ帰る方法を見つかるまで甲斐のもとで厄介になってもいいのではないのかという思いが生まれてしまう

(ありえない)

しかし雛はそんな情けない思いが浮かんだ瞬間の中で握りつぶすと、ふらふらと周囲に視線を巡らせて少しでも人や動物の姿が少ないところを探しながら歩を進める。

(……どこか、生き物のいない所。いえ、せめて普通より広い所があれば……)

とその瞬間、雛の膝からすうつと力が抜けて、まるでひどい貧血になってしまったかのように意識が遠ざかっていってしまふ。

(駄目よ。こんな人間の多い所では、倒れられない。私が……『厄神』が、人に不幸を撒き散らす訳にはいかないもの)

そして雛は無意識の内に崩れ落ちてしまっていた片膝に手をつけて力を振り絞るとどうにか立ち上がり、ゆらりと臆気な足取りで再び歩き始めた。

その様はまさに、風前の灯火。己の末を知った螢火のごとく明滅

する、儂くも美しい煌きの姿だった。

「……」

時は進み、時刻は時計の針が12の文字を僅かばかり過ぎた頃。大学に着いて午前の講義を済ませた甲斐は、本来ならば昼食をとるべきこの時間に食堂へも行かず、屋上で一人フェンスに手をかけて体に風を受けながら佇んでいた。

(……なんなんだろうな、この胸騒ぎは)

家を後にしてしばらくたった頃から、甲斐はずっと胸の内に滞る嫌な予感に苛まれていた。そのおかげで午前の講義にはまったく集中できなくて、全ての話は右から左に抜けていってしまいメモの一つもまともに取っていない始末。

とはいえまだまだ出席回数には余裕があるし、そもそも大学の場合高校と違って一度や二度聞き逃した程度では講義についていけないようになるようなことはない……というか、講義内容は全て携帯端末に録音されるようにしているので、それに関しては問題なかった。

しかし……

(ホント、なんなんだろうなこれ。もしかして、いわゆる虫の知らせってやつなのかねえ？ ただの勘違いだと嬉しいんだけど……なんにせよこれじゃあ、さっぱり講義に集中できねえ。こまったもん

だなあ……)

一応先ほど、『岡崎夢美のひみつ道具シリーズ第七号、未来型系電話くん』 耳の裏に貼ることのできるシール型思考操作式携帯電話 で家に連絡をとって見たが、それは変にみくことこのテンションを上げてしまう結果に終わっただけで、向こうでは特に変わりがなかったようだ。

「はあ……」

一向に正体の知れない身体の内にはたちこめる不快感に、甲斐はつい深いため息を吐いてしまう。

甲斐はタバコの類いを吸わないが、こういう時はその排斥が最早世紀単位になっても未だ絶滅しない喫煙者の気持ちだが、なんとなく理解できる気がするな……などと、ぼつとしながらそんなことを考えていると、その時突然耳元から

「わたしメリーさん。今貴方の後ろにいるの」

という、なんともずれたユーモアに満ちた声が聞こえてきた。それを聞いた瞬間甲斐はのったりと後ろに振り向いて、その声の主は胡乱気な目を向けて口を開く。

「……また随分と悪趣味な冗談だなあ、マエリベリー」

「む、悪趣味とは非道いわね。……うーん、それにしても今回は全く気づかれてなかったし、自分でも上手く行ったと思ったのだけど……やっぱり貴方は驚かないのね。たまにはちよつとくらい動揺したところをみせてくれると、もう少し可愛げがでて面白くなると思うわよ？ ……主にわたしが」

色素の薄い金髪のロングヘア、お嬢様然とした上品な紫の服の隙間から覗く肌は抜けるような白磁の肌。そして謹製のとれた細面に……まるで水晶のように透き通った、見ていると吸い込まれてしまいそうなブルーの瞳。そして今にもどこか遠くへいなくなってしまうのではないかと不安を抱かせる儂げな雰囲気と、それに相反するようにいつも浮かべている、赤く艶かしい唇を曲げた楽しげな笑み。

この、街を歩いていれば十人が十人とも振り返ってしまいそうな絶世の美女の名は、マエリベリー・ハーン。通称メリー。大学に入学してすぐに知り合ってから、何故だか甲斐にちよくちよくちよっかいを掛けてくる、さっぱり考えの読めないよく分からない女性だった。

ちなみに甲斐にメリーのことをどんな人間かと問いかけると、『半分は優しさで出来てる昔の頭痛薬みたいな奴』という答えが返ってくるのだが、それはまた別の話。

「別にアンタを楽しませる理由は俺にはないから却下だ。それで、何か用か？」

「あら、冷たいお言葉。偶然とはいえせっかく仲間に出会ったというのに、用がなければ話しかけちゃいけないの？」

相変わらず、人を喰ったような喋り方をする。それ自体は嫌いではないしむしろ会話していてもわりと楽しいのだが、正直な所今のように平常運転じゃない時は少々疲れるというのが本音だった。

「……………」

そうして甲斐が何も喋らず黙っていると、メリーは楽しげに弧を描かせていた唇の形を元に戻して、「あら？」と何か意外なものを

見たような表情を浮かべて首を傾げた。

「もしかして門倉くん、今はご機嫌斜め？」

「まあ、よろしくはねえかな」

「へえ……それはまた、珍しいこともあるものね。余程のことがあつても貴方はいつも、”いつも通り”なんだと思つてたけど……ここに来る途中で妙な境界も見ると、なんだか今日は珍しいことが続く日だわ」

「妙な、境界？」

「ええ。さつき大学に来る道すがら、『世界との境界が酷く薄れている何か』を見たの。それで何かと思つて少しの間それを観察してみたのだけど、ゆっくりと移動する境界以外には特に何も見えなくて、それ以上はなんだかわからなかったのよね」

境界。それすなわち、何かと何かを分け隔つ境。それがメリーの目には見えているという。その範囲は多岐に渡り、空と海の境界なんていう当たり前のものから、結界の境界なんていうオカルトじみたものまで、ありとあらゆる境界が”見えてしまう”のだとか。

「……マエリベリー。その話、もう少し詳しく教えてくれないかな？
なんだか……」

やけに、気になる。

急に表情を引き締めて、真剣な顔になった甲斐にメリーは一瞬目を丸くしたが、すぐにいつも通りの笑みを口元に浮かべると小さく頷いて、

「構わないわよ。どうも冗談ごとくなさそうだし、今回はタダで教えてあげる。その代わり……」

「その代わり？」

甲斐がメリーの言葉をオウム返しすると、メリーは極上の笑みを浮かべてその続きを口にした。

「その用事が終わったら、今度デザートか何かを食べに連れてって。もちろん、門倉くんの奢りでね?」

「マエリベリー。それは無料とは思わないと思うぞ」

メリーの言葉に、甲斐は思わず呆れ顔で突っ込んだ。

「あら、よく言っじゃない。タダより高いものはないって」

「それはつまり、これはむしろまけてやったんだとでも言いたいのか?」

「ええ、そうよ。それとも門倉くんは、どこかの高級レストランにでもご招待の方が良かったかしら? デートのお誘いでしたら、いつでもお受けしますけど?」

メリーが小首をかしげて可愛らしく告げた言葉に、甲斐は「はは、そいつは勘弁だ」と軽く笑って首を横に振った。

どうやらメリーと話している間に甲斐も調子を取り戻したらしく、表情は変わらず真剣なものだったが、しかし最初に浮かんでいた暗い影はどこかへと消えていた。

「んじゃ今度なにかデザート奢りで決まりってことで……詳しいこと、教えてくれるか?」

「ふふ、残念ね。これで高級おフランス料理は食べ損ねてしまったわ。まあそれは、未来に期待ということにしましょうか。それじゃあ」

そうしてメリーは甲斐に件の『妙な境界』の詳細を説明し始めた。

「ここは……」

どこをどう歩いたのか全く覚えていなかったが、雛はとうとう探し求めていた『ある程度広さのある土地』を見つけて力なく胸を撫で下ろした。

(……人も殆どいないようだし、ここなら……)

そう思ったと同時に、ガシャンと背後から音がした。そして首を回して後ろを見ると、そこにはフェンスの姿。雛は安心して気が抜けてしまった瞬間に自分でも気づかない内に倒れこみ、背中からフェンスにもたれかかってしまっていたのだ。

(ああ……どうにか、間に合った。後は厄を薄めて世界に還しながら、消えるだけ)

元々雛は、人妖に滞った『厄』を払い自分の周囲に溜め込む能力しか持っていないかった。よって溜め込んだ『厄』を更に別の神へと譲渡して還元してもらっていたのだが、外の世界ではそれをするとは当然不可能。そのため今の雛にできることは、できるだけ生物に影響が無いよう『厄』を大気のように薄く伸ばして、それを拡散させることだけだった。

「あ……」

とその時、雛の薄く小さな唇からかすかなうめき声が漏れる。これまで気力だけでもたせていた意識が、とうとう限界を迎えて潰え

ようとしていたのだ。

(まだ……まだ、気を失う訳には……)

雖は魂を振り絞ってどうにか意識を保とうとしていたが……しかしその最後の抵抗も虚しく、彼女の華奢な体はズルリと力なくフェンスから滑り落ち、倒れ伏した。

「運動場……」

甲斐がメリーから聞いた話では、件の境界はゆっくりとこの大学の運動場の方へと移動していったそうだ。

朝の時点では講義もあるしいつまでも観察しているわけにはいかなかったからと、なんでも後でまた見るためにその移動先を分析、計算して割り出しておいたのだとか。

岡崎教授のようにトンデモ発明こそしていないものの、メリーもメリーで相変わらずとんでもない頭脳の持ち主である。

ちなみに余談ではあるが、元々メリーはそれを上から眺めるために屋上に来ていたのだそうだ。

何はともあれ甲斐はその話を聞いた後、メリーに礼を言ってほとんど駆け足で階段を下ると、昼時間であることもあってほぼ無人の運動場のあちこちを見て回っていた。自分がどうしてそこまで境界それを気にするのは甲斐自身分からなかったが、何故だが一刻も早く

見つけなければならぬような気がしてならないのだ。

その後甲斐は運動場の、大学の校舎側半分はざっと確認して甲斐は反対側 外側からの入り口の方へと小走りに近づいていく。

そしてその周辺をぐるりと見渡して、

「あれは……」

ついに甲斐は、”それ”を見つけた。

「黒い、陽炎 って、まさか！」

地面に広がるその黒い陽炎は、甲斐が慌てて近づくと案の定すぐに人の姿をとる。

「雛！」

甲斐は急いで雛の直ぐ側に駆け寄って地面に片膝を着くと、体の下に手を差し入れて刺激してしまわないように慎重に抱き起こす。

そうして露わになった、雛のまるで蠟人形のように真っ白になって血の気の失せた顔色が目に飛び込んで来ると、甲斐は愕然とした思いで目を見開いて息を呑んだ。

「朝は普通だったのに、何でこんなに衰弱して……!?!」

すると雛は薄眼を開けるようにかすかに目を開いて、甲斐の顔をうつろな瞳でおぼろげに捉える。

「か、い……? あ、れ……どうして甲斐が、ここに……? だめ、よ……こないで。すぐに私から、離れて……」

「お前、そんな状態でなに言ってるんだ! すぐに医者に いや、

それは意味ないんだっただか……、クソっ！ どうすりゃいいんだ！？」

「甲斐、だめよ……だめ。わたし、わたしね……人間じゃ、ないの。わたしはもともと……『げんそうきょう』っていうところに住んでた、やおよろずの神のひとりなのよ。それも、やくじんっていう……人や妖怪のふこうを……やくを代わりに溜め込むやくわりを持た、神。だから……わたしの近くに來たら、甲斐がふこうになっちゃうの」

そのどこかうわ言のように言葉を途切れ途切れに口にする雛の姿を見て、甲斐は一瞬まるで泣くのを我慢しているかのように表情を歪めると、自身の胸に湧き上がる感情を持って余して唇を噛み締めた。

「神様だから、不幸になるから……だから見捨てろっていうのか！？ そんなの 冗談じゃない！」

神であるということ。共に在れば不幸になるということ。なるほど、それは確かに誰かが雛を忌避する理由になり得るのだろう。

しかし、『鍵山雛』という存在が持っている”なにか”は、決してそれだけではない

鍵山雛は、女の子だ。見た目は幾つか年下に見えるけど、実年齢は本当はもつと高いらしい。

鍵山雛は、まるで宝石のように髪が綺麗だ。サラサラとしたその髪は見るからに気持ちよさそうで、一度でいいから触らせてもらいたくなるようなとても艶のある髪をしている。

鍵山雛は、意外と恥ずかしがり屋だ。普段は冷静で大人っぽく見えるけど、たまにその態度が崩れてまるで幼い子どものような顔を覗かせる時がある。

鍵山雛は、とても優しい女の子だ。ほとんど初対面のはずの他人

を不幸にしたくなくて、自分の方が今にも死んでしまいそう顔をしているというのに、それでもその相手の心配をしている。

たった一日共に過ごしただけの甲斐が知っている……今すぐに思い浮かぶことだけでも、これだけのものが出てくるのだ。そしてそれだけあるのなら、甲斐が雛を助ける理由には最早十分だった。

「こんな、少しの間外にいただけでここまで消耗するなんて……どうして、どうして何も言ってくれなかったんだ!? 確かに俺はあの時事情を話さなくてもいいとは言ったけど、あれは何もお前の話を聞きたくないって意味で言ったんじゃないか! 言えないことは言わなくていいから、必要なことだけ話してくればそれでいいって意味で言ったんだっ」

その時甲斐の脳裏には、あの時余計なことを言わなければこんな事にはならなかったのではという考えが過ぎっていた。

しかし雛はその甲斐の考えを悟ったのか、息も絶え絶えになりながら小さく震えるように首を横に振った。

「……それは、ちがうわ。あの時止められなかったとしても……どちらにせよ、ふかいところは話さずに、すぐにこうして出ていくつもりだったから……。……だからこれは、貴方のせいじゃないのよ。……ごめんなさい。けっきょく甲斐にめいわく、かけちゃった……」

そして雛は最後に今にも消え入りそうな細々とした声で「……かい、わたしのことは気にしないで、はやくとおくへ……」と呟くと再び意識を失いぐったりと目を閉じた。

その様子を見た甲斐は顔を俯けて少しの間肩を震わせていたが、すぐにガバツと勢い良く顔を上げると

「ああもうちくしょうつ、もう知らねえ！ 自殺したいんだってんなら、そんなもんは俺の知らない所でやりやがれ！ 見ちまったら、知っちまったら……もうほっとけねえだろうが！ こうなったらお前が何を言ったって絶対に、見捨ててなんかやらねえからな！」

まるで天に噛み付く獣のように吠え……そして数瞬の後、雛に負担をかけないようにと慎重に抱きかかえて立ち上がった。

（気に食わねえ……！）

気に食わない。そんな言葉が一瞬の内に甲斐の脳裏に浮かび上がり、そして体の中を駆け巡っていた。

人の……生き物の生き死には、世の常だ。だからもしもこうして倒れている雛に気づかず、後日誰かに自分の知らないどこかで雛が死んでしまったのだという話を伝聞として聞かされていたとしたら……甲斐は悲しみこそすれ、それを受け入れて納得したはずだ。

しかし今、雛は他のどこでもない。甲斐のその目の前にいる。だから

（生きてる奴が死ぬのを納得するのは……死を受け入れるのは、生きる努力をして精一杯足掻いた、その後の話だろうが！）

それは義務ではない。生きとし生けるものは全て、生きていく以上常に死を隣人としている。故に死を自ら招くかどうかは、本人の自由意志なのは確かなのだろう。

だけどやっぱり、甲斐にはそれが納得行かなかった。

甲斐が今、これ以上ないほどに”必死になつて”雛を助けようとしているのは、相手が雛だったからだ。

しかしもしもそうではなくて、仮にこれが全くの他人だったとしても、やはり甲斐はその”誰か”を全力で助けただろう。

門倉甲斐は、『あらゆる存在^{モノ}を受け入れる。しかしやはり……それでも甲斐は、人間なのである。

故に 受け入れるのは、結果でいい。その過程までも放棄するのは、それは最早生きることを放棄しているのと同じ事。

考えうることを全て考えて、できることを全てやって……そうしてようやく、成るように成って出た結果を、甲斐は受け入れられるのだ。

だが……あんな啖呵を切ったとはいえ、甲斐には自分が雛を助けるために何をすればいいのかが、まるで分からなかった。

……結局のところ、人間最後に頼るのは『己の家』であり、また自身の最も信頼する『家族』なのだろう。一体どこをどう歩いたのか。気づけば甲斐は雛を背中に背負って全身汗だくになりながら、自身の家の眼前に立ち尽くしていた。

確かに、昨日は家で寝かせることで雛はある程度回復していた。しかし今の容態は、素人目に見ても瀕死にしか見えない。

どこを見ても怪我らしきものは存在しないことから単純に衰弱しているだけのようには見えるが、仮にそうだったとしてもなにか他

の問題があつたとしても、とてもではないが寝かせているだけであつた以前のように目を覚ますとは思えなかつた。

(……なにか、できることはないか。なにか……)

冷静に、冷徹に、厳然に……論理的に、思考の回転は最大数へ。

熱を持った脳は、冷えた心で冷却する。自身の所有物・技能・能力・知識・記憶・状況・状態　全てを以てして模索。

結論。何も、できることはない。

これは多くの人々が既に遙か記憶の彼方に忘却してしまつた神秘オカルトの領域なのは間違いない。つまり物理的、科学的なそれは何も役には立たないはずだ。教授やメリー達に関わることで今まで培つてきた、特異な経験から来る勘がそう告げていた。

ならば、それができる誰かに任せればいい。

甲斐の手元に最後に残つていた手札　人脈。

甲斐は特別顔が広いわけではなかつたが、しかしその脳裏に浮かぶ顔ぶれはどれもこれもが変わり種。つまり今回のような変わり種な出来事に、その内の誰かが対処できる可能性は十分にある。

そして甲斐が立ち上げるのは、思考によつて起動するその機能。耳に取り付けられている岡崎教授製の電話に備えられた、緊急コールモード。それは相手の端末が現在どんな状態であろうとも、強制的に割り込んで通話を繋がらせる機能を持つていた。

「マエリベリー、いきなりで悪いが聞いてくれ！」

そして甲斐はこの状況に対処できる可能性の最も高い人物に、鋭い声で呼びかけた。

外では太陽の日差しがジリジリと突き刺さり、その日の気温も最高潮へと達しようとしていた昼下がりの午後。

メリーはあの後甲斐はどうしただろうかと頭の片隅で気にしながらも、そんな悪夢じみた暑さとはまるで無縁な”環境調整”の行き届いた講義室の中で講師の話は何気なく聞き流していた。

そもそもメリーがこの大学で専攻している分野は、相対性精神学という学問。その相対性精神学というのは、精神の絶対的基準点を設定し、そこから人の心の動きをプラスマイナスいずれかで数値化するというのが基本理論の学問なのである。

しかし今ホログラム越しに講師が熱弁を振るっているのは、古典文学に宗教的なアプローチをするという専攻とは全く真逆に位置する興味のないものだったので、メリーは適当に流しながら単位が取れる程度に要点を押さえておくだけに留めていた。

とそんな風に、メリーが要領よく手抜きをしながら講義を受けていると、その時突然

『マエリベリー、いきなりで悪いが聞いてくれ！』

「わきゃっ!？」

メリーの持つてきていた手提げ鞆の中から、講義室中に響き渡るような甲斐の大声が聞こえてきて、メリーは椅子から転げ落ちそうになりながら驚いて立ち上がった。

ちなみに何故そのような大音量になってしまっているのかというと、あの電話を持っていないメリーにはあずかり知らぬ所ではあるが、実は緊急コール機能を使って通話をすると音量の増幅もされて

しまう仕様になっているからである。

「な、なに？　なんでっ？　なにことなの！？」

そうしてメリーが頭の上に《！》と《？》を量産しながら講義室中の視線を一身に集めていると、その時慌てて拾いそこね取り落としてしまった鞆から、もう一度大音量で甲斐の聲が流れ始めた。

『すまん！　急なことで混乱するとは思うけど……後で土下座でも何でもいくらでもするから、今は何も言わずに大至急うちまで来てくれ！　お願いだマエリベリー……頼む！』

メリーが未だかつて聞いたことのないような、甲斐のあまりに余裕のない必死の声色。それを聞いた瞬間メリーはそれまで見せていた動揺を瞬時に収めると、まるで仮面を被ったかのような冷静な表情に戻り同じく平静な落ち着いた声で、

「　分かったわ。今すぐ講義室から出るから少し待って。それと電話、一旦切るわね。どういうわけか知らないけど、門倉くんからの通話音量がなんだかおかしいことになってるから」

『あつ……、』

メリーが文句も言わずに了承してくれたことに、お礼の言葉でも口にしようとしたのだろう。甲斐は何事かを言いかけて、しかしすぐに状況を思い出しその言葉を咄嗟に飲み込んだ。

そんな甲斐の様子にもメリーは何も語ることなく、素早い動作で腰をかがめて床に落ちていた鞆を拾い上げると、

「取り敢えず、ここを出たら移動しながらかけ直します。それではまた」

短くそう口にして颯爽と身を翻し出入り口へと足を向け、相手の反応を待つことなくすげなく通話を切って歩き始めた。

コツコツと、硬い靴底が地面を叩く。メリーはその自分の足音を耳にしながら、先を急ぐべく更にリズムを早めて視線を上げた。そして歩きながら携帯端末で事前に大学の門前に呼んでおいたタクシに、まるで無駄のない滑らかな動作で乗り込むと、

「行き先は電話ですぐに確認しますので、急いで出していただけますか？」

と運転手の瞳を覗き込みながら、まるで一刻の猶予もないのだと言わんばかりの硬い口調で言葉を告げる。

「う、承りました」

すると運転手はどこか気圧された様子で即座に車を発進させたので、メリーはそれを確認すると手早く短縮ダイヤルを押して甲斐に電話をかけ直した。

直後にメリーの耳に届いた呼び出し音が、ほとんど鳴るか鳴らないかという刹那の間で甲斐の応答を示すように途切れる。

それからすぐに、メリーは甲斐が口を開きかけたその間隙を狙って鋭い口調で、

「門倉くん。まずは状況の説明の前に、貴方の家の住所を教えてください。わたしは今タクシーに乗ってるから、それを先に運転手さんに伝えないといけないの」

これまでのやり取りは全て、お互いに言葉は少なく説明不足。しかしどうやら状況は理解出来ないまでも、あまり余裕がない様子なのは察することができる。なのでメリーは甲斐なら問題なく対応できると信頼を込めて、余分は全て締め出し必要最低限なことしか口にしなかった。

甲斐は実際、その言葉に電話先で一瞬驚きの気配を見せたが、しかしさほどの間を開けずに立ち直るとメリーの予想通りすぐに無駄を省いて必要事項のみを伝えてくる。

『南東京区鶏ヶ瀬平町〇〇だ』

そしてメリーはそれを全て聞き終えた後、運転手に門倉家の住所を教えるともう一度携帯端末を耳に当てて電話に戻った。

「それじゃあそろそろ、そっちの状況を教えてくれる？ どうしてわたしを呼んだのか。貴方はわたしに一体何をして欲しいのか。そのために、必要なことはなんなのか。全て簡潔かつ正確に……お願いいね、門倉くん？」

その口元に浮かぶのは、いつものごとく余裕の笑み。それは自信の現れなのか、それとも強さの現れなのか。それを知る者はただ一人、マエリベリー・ハーンその人しか存在しないのである。

「……」

甲斐は今、先日のように和室に寝かせている雛の姿を硬い表情でじっと観察しているメリーの様子を、固唾を飲んで見守っていた。

「これは……。……」

そんな視線の先で小さくつぶやきを漏らし、再び沈黙してしまつたメリーの答えを促すように甲斐は、

「マエリベリー」

と静かな声で彼女の名を呼んだ。

「……わたしの見える境界のことは、確か以前にも少し話したことがあつたはずよね？」

メリーはそう言つて雛からゆっくりと視線を外すと、そのまま甲斐の方へと向き直つて静かな口調で自身の能力によつて見える境界について語り始めた。

「人は……それに”全て”は”何か”と境があるからこそ、存在できる。自分と他人の境界。身体と精神の境界。肉体と魂の境界。生と死の境界。そして、世界と自分との境界。ただこの女の子は、その中でも一番大事な……世界との境界がもうほとんど、見えなくなつてしまひそうなほどに薄れてるみたいなの」

そこでメリーは一息つくと、わずかに表情を暗くして視線を落とした。

その様子を見てメリーが言葉にしようとしていた続きを半ば察し

ながらも、甲斐は視線だけで頷いて無言で先を促す。

「境界というのは、隔たりがあるからこそ生まれるもの。世界との境界がなくなってきているということはつまり、この女の子が世界と同化して消えかけてしまっているということなのでしょう。」

「……多分、単純にこの娘は自分の存在を維持するために必要な何かを底を尽きかけているから、こんな状態になってしまってるんじゃないかというのがわたしの予想よ。この家の中ではその早さが緩やかになっているようだけど……どちらにせよこのままじゃ、恐らく時間の問題でしょうね。」

それが対処可能であるにしては、あまりにも曖昧なその物言い。

その事実が何を意味するのかを頭の冷静な部分で理解してしまった甲斐は、直後にまるで底なし沼にでも嵌ってしまったかのようなぬかるんだ気持ちで濁りのないメリーの透き通った瞳を見返した。

その視線を受けたメリーはもう一度静かに頷いて、甲斐に一切の誤魔化しを混ぜずに説明を続ける。

「それがなんなのか……そしてそれをどうすれば、この娘に補充できるのか。それはわたしにも、分からないわ。……正直に言ってしまうえば、畑違いなの。例えば秘封倶楽部が本物のオカルトサークルだとは言っても、わたしたちがいつも見て回っていたのは結界の境界だから。仮にここに蓮子が居たとしても、わたしと同じで何も出来なかったと思う。」

「……そう、か。」

もう他に、オカルトに対処できそうな誰かの宛は存在しない。そしてそれはおそらく、メリーも同じなのだろう。もしもそれがあるのなら、とうの昔に彼女は紹介してくれたはずだから。

それに、そもその話。

雖に残された時間は、最早それ程長くはないであろうことはオカルトに造詣の深くない甲斐ですら理解できていた。

即ち　ここから更にオカルトに関わりのある”誰か”を探して赴いて、そこから事情を説明して移動してもらおうなどという悠長なことを待つだけの時間は存在していないのである。

よってメリーに事態が対処不可能であった以上、必然……既に結果は出たに等しかった。

それは、欠片の誤魔化しも許してはくれない確かな事実。

甲斐が感情の部分でそれを納得せざるとも、『全てを受け入れる』という過去より培った甲斐の”人生”がそこから目を反らすことを許してはくれなかった。

「積み、か」

そして甲斐は、覚悟を決めた。

たとえ己がどうなってしまうおとも、彼女を必ず最期まで看取る覚悟を

そしてそこに己に対するどのような影響が存在しようとも、絶対にそこから目を反らさず受け入れる覚悟を決めた。

「マエリベリー。こんな急な頼みを聞いてくれてありがとうな。ここからはもう」

直後に甲斐はここまでしてくれたメリーに何かあつては困るので、礼を言つて家から離れてもらおうと落ち着いた口調で話しかけたのだが……

その瞬間、部屋の中の空気が変質した。

緊張した、というのとまた少し違う。決して張り詰めているわけではないが、しかし弛まず緩みを無くした不思議な空気。

その原因は、甲斐の眼前にいる一人の人物。その一瞬前まではメリーであったはずの、姿は変わらずとも全てが変わってしまった彼女だった。

「甲斐様、お下がりにください」

甲斐がそれらを認識したのとほぼ同時、それまで数歩下がった位置で全てを見守っていたみくことが、目にも留まらぬ素早いもとい、高速の動きで甲斐を背中に庇う。

その表情に浮かぶのは、“極大”の警戒心。“最高”ですら生温い。目の前に存在するのは危険という言葉すら既に通り過ぎてしまった『ナニカ』なのだ、みくことの五感^{センサー}ではないどこかが喚き散らしていた。

「門倉、甲斐」

しかし、警戒心を剥き出しにして睨みつけるみくことを無視して、彼女はまるで遙か遠い霞の先から話しているかのような不思議な声色で甲斐に話しかけてくる。

「貴方は、その厄神を救いたい？」

その問いを聞いた瞬間甲斐は、すぐにみくことの肩に手をおいてその横に歩み出た。

「……できるものなら、今すぐにでも」

「甲斐様！」

「大丈夫だ、みるごと」

彼女の『ナニカ』はみるごとと同じく肌で感じていたが、なぜかそれでも甲斐の勘は、彼女を信用は出来ずとも信頼はしていいと告げていた。

「俺は、何をすればいい？ 教えてくれ」

「これを……貴方に、お渡ししましょう。これからしていただくことに、必要な物ですので」

そう言っただけで彼女が差し出したのは、一つの扇。そんな物は先程まで持っていなかったはずなのに、彼女はまるで宙より取り出したかのようにそれを甲斐に手渡した。

「それを手にしたまま貴方がそちらの厄神に触れられれば、自動でその扇が貴方の靈気を神力へと変えて彼女にそれが流れこむようになっております。そうすれば、その厄神は力を取り戻しはずれ目を覚ますでしょう」

さらに彼女は、甲斐に忠告するように最後に言葉を付け足す。

「ですが、お気をつけを。靈気とは即ち生氣。いわば命に等しいモノ。それを全て失えば、同じく命も貴方の指の隙間から零れ落ちることでしょう」

「なっ……！！？ 甲斐様、そのようなことはおやめ下さい！ そもそも本当にそれで雛さんが目を覚まされるのかどうか……この方が、本当のことを言われている保証はないのですよ！ わたくしには到底信用なりませんわっ」

そういつみゝことの気持ちも理解できる。元々メリーには何を考
えているのかわからないような所があったが、今の『彼女』はまる
でその美貌から表情が抜け落ちてしまったかのように無表情で、普
段のそれを通り越して考えが読めないどころかもはや妖しいといっ
ても過言ではなかったからだ。

しかしそれでも甲斐は静かに首を横に振ってみゝことを制すると、
確認のために彼女に再び話しかけ先を急ぐ。それは当然雛に時間が
残されていないであろうことも理由としてあったが、それだけでは
なく何故か目の前のこの女性に余裕が無いように見えたからだった。

「それをしたら、俺はどうなる？」

「勿論、命を捧げるとは申しません。流石にそれは過分故。ですが
暫くの間動けなくなってしまうような大きな疲労と、それに恐らく
気絶されてしまわれるくらいの覚悟は、していただく必要があるで
しょう」

彼女の言葉を聞いた甲斐は少し安心したようにほつと息を吐くと、

「そうか。その程度ならお安い御用だ。このままできることがある
のに何もしないで雛に死なれちまうなんて、真つ平御免だからな」

と言つて未だ納得行かなそうにこちらを見ているみゝことに顔を
向ける。

「そんな心配そんな顔をするなつて。そもそもこれで俺を騙したつ
てこいつに得る物なんて何も無いんだから、そうする理由なんてな
いはずだろ？ こいつがなんなのかは知らねえけど、俺を騙すにし
ちゃあ意味が分からなすぎる。どちらかと言つてこいつは、雛の関
係者なんだろうさ」

「この際それが本当かどうかは関係ありませんわ！」

それを聞いたみ〜ことは強い否定の言葉を返すと、甲斐に詰め寄り薄く瞳に涙を溜めながら、

「わたくしが心配なのは、甲斐様のお体の方でございます！ それに甲斐様にだって、今のハーンさんが普通では無いことくらい分かっているはずですよ……！」

と捲し立てる。

そして最後にまるで穴の開いた風船のように急にその勢いを失速させると、今にも貯めた涙を零しそうになりながら……ひくりと喉を震わて、本当に心の底から悲しそうな声を絞り出した。

「……万が一、万が一にでも甲斐様が死んでしまうようなことがあったら……わたくしは、どうすれば良いのですか……」
「み〜こと……」

甲斐は自分の目の前で肩を震わせるみ〜ことの様子に困ったように眉尻を下げた後、その小さな背中に腕を回してとんとんとまるで子どもをあやすようにそつと撫でた。

「ごめんな。お前のそんな悲しそうな顔は見たくなかったけど……それでもやっぱり、俺は止めるわけには行かないんだよ。……そうじゃなきゃ俺は、受け入れられないから。何もしないで誰かを見殺しにした自分を、受け入れられなくなるから……」

そしてこちらを見上げるみ〜ことの視線を感じながら、甲斐は目を細めてみ〜ことに語りかける。

「だから、頼むよみ〜こと。心配するなどは言わないけど……せめ

て、信じて見守っていてくれないか。俺が自分を、許せなくなりたいために。俺が……俺である為に」
「……」

するとみくことは返事の代わりに暫く沈黙した後、か細い声を出してもう一度口を開いた。

「せめて……」

「うん？」

「せめて、約束して下さい。絶対に、死んだりしないって。甲斐様は絶対に、わたくしの前からいなくなったりしないんだって、約束して下さい。それが信じる条件……です」

甲斐はまるで懇願するように、上目遣いで瞳を覗き込んできたみくことの頭をぽんと撫でると穏やかに微笑んで、

「ああ、分かった。約束するよ」

と囁いた。

するとまるでそれを待っていたかのようなタイミングで、

「どうやら話が纏まったご様子」

と彼女が口を挟んだので、みくことはそれに気づくと慌てて甲斐から体を離れた。

そんなみくことを尻目に、彼女はそれまでと変わらぬ無表情のままにまるで感情の読めない平坦な声で、

「それではワタクシはそろそろお暇させて頂きますので、この場は貴方にお任せいたしますわ。またお会いできる日が来ることを楽し

みにしております、門倉甲斐。では、御機嫌よう」

と言葉にすると上品にお辞儀をして踵を返した。

甲斐は彼女の姿が見えなくなってしまう前に、慌ててその背中に声をかける。

「待ってくれ。その前に、マエリベリーはどうなったんだ？ 大丈夫なのか？」

すると彼女は背中を見せたまま一度足を止めて、

「ご心配には及びません。ワタクシは彼女の……もう一つの人格のようなもの。今は意識がありませんが、数分後にはワタクシではなく元の彼女に戻っていることでしょう」

「そうなのか。……色々ありがとな。アンタには、感謝してもしきれないよ。また会えるかは分からないけど……元気でな」

「……いいえ。こちらこそ……ありがとうございました」

そして何故か彼女は去り際に、甲斐に聞こえるか聞こえないか分からないくらい小さな声でお礼の言葉を口にして去っていった。

「……さて」

彼女の姿が完全に見えなくなると、甲斐は渡された扇をしっかりと右手に持ちなおして布団の上で苦しそうに寝ている雛の横に片膝をついて屈み込む。

「ぼっちゃま……」

するといつもの呼び方に戻ったみ〜ことが不安げな視線を送ってきたので、甲斐は大丈夫だと小さく笑いかけると、胸のあたりで布団の上に乗せられている雛の手に視線を落とした。

「あ、う……」

それと同時に小さく呻き声を漏らした雛の苦しそうな顔をもう一度見つめると、甲斐は意を決したようにその手を空いていた手で握りしめる。

「ぐっ……!!」

そしてその瞬間、甲斐の意識は吸い込まれるようにして闇の中へと落ちていった。

12話

人を愛し、生命を愛して、生ける者の不幸を避けるために生き続けた神、鍵山雛。

しかし彼女のその生は、まさに愛したその者たちに疎まれ続けるというものだった。

それを辛いと思ったことはない。己の胸には、常にかつての思いがあった。

それを悲しいことだと思ったことはない。営みを続ける彼らの、元気な姿が嬉しかったから。

それを恨んだことなんてない。全ては己が望んでことだから。

だけど……寂しく思うことだけは、止めることはできなかった。

長い時の中で慣れ、心の奥に秘め忘れていたその思い。それは与えられた人の温もりと共に、思い出してしまった想いだった。

それはなんと、残酷なことなのか。

決して誰の隣にも、己の居場所は存在しない。

それは確かな事実であると同時に、もはや自ら望んだ事実だったはずなのだ。

初めからそんなものは有り得ないと思いついていけば、求めることはしなかった。そうすれば、耐えるのは簡単なことだったから。

しかしもう、雛は知ってしまったのだ。

誰かの隣にいる温かさを。誰かと共にいる楽しさを。

だから雛は、神という永い生を……これから先、心の奥で”誰か”を求めながら、自ら遠ざけて生きなければならぬのだ。

”誰か”と一緒にいたい。”誰か”の隣に居場所が欲しい。

全てを肯定してもらいたいわけではない。だけど、許容して欲しかった。自分がここに存在するということを、否定しないで欲しかった。

絶対に離れないで欲しいとは思わない。だけど寂しくなった時に伸ばしたその手を、払わないでいてくれればそれでいい。

特別なことはいらない。誰かに受け入れて欲しかった。神ではなく『厄神』でもない、鍵山雛という”自分”を。

そしてだからこそ今のこの感覚は、耐えようもなく離れがたかった。

己の全身を包み込む、柔らかな誰かの温もり。それがあまりにも優しくて優しく、雛の胸の内には思わず泣き出してしまいそうなそんな気持ちがかみ上げてくる。

頭に浮かぶのは、自分は今受け入れられているのだという言葉。身の内に流れ込む誰かの心が、そう告げてくれていた。

この感覚に、いつまでもどこまでも、浸っていたかった。しかし、明けない夜がないように。覚めない夢がないように。終わらない世界がないように。

雛の意識はゆっくりと、温かい幻想ではなく冷たい現実という名の”否定”の中に、戻っていつてしまうのだ。

だれか わたしのてをとって

それが夢のような微睡みの世界の中で最後に想った……何の虚飾もない、雛の素直な心だった。

薄ぼんやりと、目が覚める。

そしてまず最初に、目が覚めたということに疑問を持った。『自分分は消えたはずだ』という考えが、脳裏に浮かんでくる。

しかし、直後に雛はびくりと身動きすると、ようやく自身の状態を理解して驚きに固まってしまった。

見覚えのある部屋の中で寝ている自分。何故か隣で寝ている甲斐と、その手の平に握られている己の手。

まるで昨日の、焼き直しのような状況だった。違うのは上に毛布をかけて横になっている甲斐の姿と、その脇に転がっている扇くらい。

それら全てを認識した雛は、先ほどまでの感覚が夢ではなかったのだと理解すると、その瞬間に何か……体の芯の部分に、寒気のような震えを感じた。

元々雛の纏う厄は、幻想郷ではなんの力も持たない人間ですら見

えてしまうほどのものである。それも今は、とある事情により厄の量が普段以上に膨れ上がっていた。

故にありえない話ではあるが、仮にその全てが一度に誰かに渡ってしまうことがあったとしたら……それは最早不幸という曖昧なものであるにもかかわらず、容易に命を奪い去ってしまいかねないほどのモノだった。

それはまるで、呪いのごとく。

だから雛は、心の底から震えを感じた。

それは、恐怖だったのかも知れない。今まで誰にも受け入れられなかったがなかったからこそその、初めて得ることができたかもしれないそれを自分のせいで失ってしまうという恐怖。

そして雛はその初めて感じた恐怖という名の感情に従って、ひくりとしゃくりあげるように息を吸い込み布団を払いのけると、まるで甲斐から逃げるように部屋の端へと飛び出した。

「んわっ、なんだ!？」

するとその拍子に、甲斐も頓狂な声を上げながら飛び起きる。そして部屋の隅で怯えるようにしてこちらを見ている雛の姿を見て、きよとんと目を丸くした。

「……あ、雛？ 何だ、今はアンタか。何事かと思った……。元気になったみたいなのは嬉しいけど、そんな所で何やってんだ？」

そして甲斐が雛に近づこうと足を一步前に踏み出した所で、

「だ……ダメ!」

と大きな制止の声が飛んでくる。

それを聞いた甲斐はビクリと肩を跳ねさせて動きを止めると、「
雛……？」と訝しげに呟いた。

「わ、私に近づかないで。早く……早くここから離れないと。甲斐、
お願いだからそこをどいて！」

その時の雛の姿は、甲斐の目にはまるで何かに怯える子どものよ
うに見えた。

「どうして……なにを、そんなに怖がつてるんだ？ 雛。また消え
そうになっちまうのが怖い……ってわけでは、ないんだよね？」

それならば、そもそもこのような事態にはならなかったのだろう
からそれはわかる。しかし、ならばいったい何に雛は恐怖している
のか。

「私は……」

そんな甲斐の疑問の言葉に、雛は沈黙を返して自身の内に埋没す
る。

（私になにを、恐れているのか……）

そうしている内に、次第に自分を取り戻していった雛は、やがて
以前のように超然とした雰囲気で、どこか厳かに口を開いた。

「私は厄神、鍵山雛。人の不幸への嘆きの想いより生まれた、幸福
を妨げる厄を落とし不幸を防ぐ神。故に私が恐れるのは己の消滅に

あらず。”誰か”に振りかかる、災厄を恐れるのみ”

その声はまるで、森の中で響く葉擦れの漣のごとく揺ぎ無い……
あるいは最高級のガラス細工が奏でる鈴音のごとく透き通った、神秘的な響きを以て甲斐の耳朵を震わせた。

そしてその言葉を聞いた瞬間甲斐は、人とは違う精神性を持った神という存在を改めて認識し、

「なるほどな……」

と小さく溜息を吐いて呟いた。

そして甲斐はもう一度顔を上げると、静かに口を開いて言葉を紡ぐ。

「……雛。俺はアンタがここを離れたいっていうんなら、それを否定する気はない。雛の心は雛のものだ。だからそれを否定する権利は俺にはないし、初めからそのつもりもない」

「あ……」

その時雛の花弁のように秘めやかな唇から漏れたのは、安堵かそれとも別の感情か。それが何だったのかは、ついぞ雛自身にも分かっていなかった。

何故ならそれは、甲斐がその次に口にした言葉が、雛にとってあまりに予想外だったからだ。

「だけど、悪いな」

そして甲斐は一度言葉を切ると……静かな足取りで雛の目の前まで歩み寄り、どこまでも真っ直ぐな瞳で立ち尽くす雛の瞳を見つめた。

「俺はもう、絶対に雛を見捨ててなんてやらないんだって決めちゃまったんだ」

「甲斐、貴方……」

その言葉を聞いた瞬間、雛は思わず口に手を当てて絶句する。

甲斐のその瞳はたとえ言葉にしなくとも、絶対に自殺まがいの事はもうさせないと語っていた。それは雛の気持ち否定するのではなく……受け入れた上で、それでも自分の主張を曲げる気がないのだという意味なのだろう。

「どうして……、どうしてよっ。私がここにいたら、貴方は不幸になるかも知れないのよ！ そんな疫病神を助けたって、貴方に得なんて一つもないのに！」

そして必死になって甲斐を説得しようとするが、しかし甲斐は軽く笑顔を浮かべてこともなげに「知るかよ、そんなの」と答えた後、その笑顔の質を見るものがほっとしてしまっような温かいものへと変化させて、

「昨日も言っただろ？ 俺のモットーは『去る者追わず、来るもの拒まず』なんだって。だから俺は、神様だろうが厄だろうが不幸だろうが……相手がどんなやつだって、来るんだったら受け入れるんだよ」

ほんと困惑する雛の頭をあやすように優しく撫でた。

「それに、得ならあるさ。俺は雛が生きててくれることの方が、嬉しいからな」

そして最後に甲斐はそのままの笑顔でそんなことを口にすると、そっと目を細めて本当に嬉しそうに笑みを深めるのだ。

その表情を見て甲斐の言葉がすべて本気なのだと理解した瞬間に、雛はくしゃりと顔を歪めてその大きな瞳に思わず涙を貯めてしまう。

「そんなこと……そんなこと言われたら、もう逃げられないじゃない。ばかぁ……」

雛の泣きそうになっているその表情を見て、甲斐は少しだけ笑顔に苦笑の色を混ぜて「悪い悪い」と呟くと、

「ま、今のままじゃとてもじゃないけど放っておけないから、俺に追い掛け回されるのが嫌だったら、早く外に行っても無事でいられる方法でも見つけるか、ちゃんとした行く宛を見つけてこつたな」

とどこか冗談めかして言いながら、雛の目尻に浮いた涙を空いている方の手でそっと拭った。

「謝らないでよ、もう……」

雛は心の中がいろんな気持ちでいっぱい、分けがわからなくなってしまうそうだった。嬉しくて、切なくて、温かくて……もうこれ以上甲斐を拒絶することは、雛には出来そうもなかった。

こんなに誰かと接したのは、初めてだった。

こんなに誰かに心配してもらったのは、初めてだった。

こんなに誰かが自分とまっすぐに向き合ってくれたのは、初めてだった。

そして雛は気づけばその宝石のような瞳からポロポロと涙を零し

ながら……いつまでもいつまでも、頭を撫でる甲斐のその温かい手を受け入れていた。

雛は確かに甲斐のおかげで力を取り戻していたが、しかし失った体力はそれとは別のもの。だから甲斐は色々な説明を後回しにして、一先ず雛にもう一度布団で眠るようにと促した。

すると布団に潜り込んだ雛が、顔だけを出してどこか恥ずかしそうに、

「一つだけ、お願いがあるの。聞いてくれる？」

と話しかけてきたので、甲斐は首をかしげて「お願い？」と聞き返した。

「あの……その、ね。もう一度……私の手を、握ってくれない？
ずっとじゃなくて、私が眠るまででいいから……」

その言葉に甲斐がキョトンとした顔で「え？」と声を漏らすと、雛は不安げな瞳で甲斐を見つめて確認するように、

「だめ、かしら……？」

「いや。別にそれくらい、構わないよ」

それを聞いた甲斐はすぐに首を横に振って小さく笑みを浮かべると、そう言つて雛の手を取り柔らかく握りしめる。

その瞬間雛の脳裏に、『だれか わたしのてをとつて』という言葉が浮かび上がつて、そしてすぐに消えていった。

(ここに、居る。私の手を払わないでいてくれる、”誰か”が)

そうして雛は安心したようにほっと吐息を漏らして目を閉じると、ぎゅっと甲斐の手を握り返して優しい微睡みの中へと落ちていった。

12話（後書き）

ここまでで中盤の終わり、と言ったところでしょうか。予定では、次かその次あたりから終盤戦に突入致します。

ただ、ちょうどいい区切りなのでまだ決めてはいませんが、もしかしたら次はメリーと甲斐の出会いとかを先に書くかも知れません。

どうでもいいことだけど、作中時間でまだ二日目であることにびっくり

13話

時は少々遡り、甲斐と雛が目を覚ました直後のこと。

みくことはその、人とは比べ物にならないほどの優れた聴覚で、二人が起きだしたことに気づいていた。そして直後に、何やら中の様子がおかしいことにも気づく。

その聴力をもってすれば、例えば家のどこにいようとその中でのお話を聞き取ることくらい造作も無いが……みくことは流石にそれはあまりにマナー違反だろうと考えると、聴覚から一部の条件を満たさないかぎり人の声を遮断するフィルターをかけて、閉じられている和室の戸の前で小さくため息を吐いた。

(……本当なら今すぐにも、ぼっちゃまの様子を確認しかったのですが)

それはもう、今すぐに駆けつけたかった。今すぐにと言うか一刻も早くと言うか刹那の間もかけずと言うか瞬間的にといつかむしろコンマゼロ秒で駆けつけたかったが

(とりあえず健康面での異常はなかったのですから、そこまで心配する必要は……)

ないのだと己に言い聞かせて、どうにかみくことは一向にそこから動こうとしてくれない自分の足をその場から引き剥がした。

それに中の様子こそ分らないが、どうせ甲斐がいつも 自分 の時も含めて のように自覚なしに雛を口説き落としているのだろつと考えると、その邪魔をするのはあまりに空気が読めていない気がしてしかたなかった。

それとついでに、メリーが帰る前の時のことを思い出すと、少し

だけ気恥ずかしい思いが湧いてくるのも……その足を前に踏み出さなかつた理由に追加しても良かったかも知れない。

「はあ……」

本当に、あの甲斐のどんな相手にも優しくする性格は考えものであつた。男であろうが女であろうが、人間であろうが動物であろうが、それこそ人外にですら気にもとめずに平等に接する。

それはもはや異常といつてもいいほどに、甲斐は誰に対しても平等であつた。

甲斐は、人間である。故に性格もあるし、心もある。だから完全な不干渉をとることもなく、確かな自分をもつて眼の前で起こつたことに対して自分なりに行動する。しかしその結果に関しては、例えどのようなものになつたとしても受け入れるのだ。

ただ受け入れて、全てを否定しない。それは時に厳しく、残酷でさえあるものだつた。

甲斐が誰にでも優しく接するのは、偶然甲斐の性格が優しいものに育つたから。もしもそうではなかつたら、甲斐は一体どんな人間になつていたのだろう。

……とはいえそのような仮定は、何の意味もないことだ。

「さあ、いつまでもこうしているわけにも参りませんし、まずはご飯の支度をすませてしましましょう」

み〜ことは一度頭を振ると思考を切り替えて小さくそう呟き、そのままいつもより少しだけ重い足取りで料理を作るべくキッチンへ

と向かった。

実はこの時代に、きちんと材料を調理して一から料理を作る人間というのは少数派であった。それどころか一般的な家庭では、大抵の場合簡易キッチン程度のものしか家についていないというのが普通である。

では外食をしないものはどのようにして食事の用意をしているのかというと、殆どの料理をレンジで温めれば作ることができるように店頭で販売されているのだ。現代において食事というのは、二〇世紀後半で言うところのレトルト食品が主流なのである。

しかし甲斐は母親が生前食事にこだわっていて自分で必ず料理をしていたためにその感覚が抜けず、そのため一人暮らしになっても自分で料理をしており今ではかなりの腕前になっていた。

そしてみくことももちろんレトルト（厳密には違うが）などという手抜き料理を甲斐に出すはずもなく、結果として門倉家のキッチンは甲斐が作るうとみくことが作るうと常にフル稼働というのが平常運転なのである。

……しかしだからといって、いくら何でも今のように水道、レンジ、調理器具、コンロ、包丁などがほとんど同時にトンデモない勢いで動き回っている姿は、流石に異常な光景であった。

雛が寝静まって、自然とその手から力が抜けたのを見計らって和

室から出てきた甲斐は、その瞬間に思わずぽかんと口を開いて固まってしまう。

「……なあ、み〜こと?」

「……」

「おーい?」

しかも甲斐が呼びかけたのにみ〜ことが反応しないなどと、これは本当に珍しいことである。一体どうしたのかと思って甲斐は対面キッチン越しに目にも留まらぬ素早い動きで料理(?)をしているみ〜ことの顔を覗き込んだ。

しかしみ〜ことはそれから逃げるようにぶいっと顔を背けると、更に料理という名の大道芸に没頭していく。

「あー、み〜ことお前……もしかして、拗ねてるのか?」

「……そんなことはございませんとも。例えものすごく心配していたのに何時間もほっとかれようと、メイドとは主人にお仕えするのが責務ですから、ええ。 ああ、滅私奉公。なんと素晴らしい言葉なのでございましょうか」

(ああ、こりゃ完全に拗ねちまつてるな……)

一瞬だけ動きを止めた後むすりと口を開いてすぐにまた作業を再開したみ〜ことを見て、甲斐は「はは」と乾いた笑い声を上げて顔を引き攣らせた。

このままだと家にあった食材という食材が全て調理されて、しかもそのほとんどを一人で平らげなくてはならなくなるような未来が待っているのを悟ると、甲斐はなんとかみ〜ことの機嫌を取るべく頭を捻らせる。

が、そんなものが都合よくぱっと思ひ浮かぶはずもなく、結局甲

斐は本人に聞くことにした。

「えっと、み〜こと。別にほっといてたってわけじゃないけど、あんな事あったのに二時間も音沙汰なしだったのは謝るからさ、機嫌直してくれよ。……そのー、あれだ。なんだったらなんか一つくらい、埋め合わせに言うこと聞くからさ」

なかなか和室から動けなかったのは甲斐のせいではないが、甲斐には手を使わずともかけることのできる電話がある。それを使って会話だけでもするくらいのは出来たのだから、その点に関しては言い訳のしようもないだろう。

そう思って素直に反省した甲斐が小さく頭を下げると、み〜ことはピタリと動きを止めてゆっくりとした動作でこちらを見た。

「……それは本当でございますか？」

「おう、もちろんだ。今ならだいたいのは聞くぞ？」

「それなら……」

そうしてキッチンから出てきたみ〜ことが甲斐に要求したのは、ぴっと部屋の真中にあるソファアを指さして「まずはそちらに座って下さいませ」というものだった。

その内容に首をかしげながらも、おとなしく指示通り甲斐はソファアへと座り込む。するとその直後にみ〜ことは、無言でどかりとその膝の上に乗っかってきた。

「み〜こと？」

直後に甲斐は訝しげにもう一度名前を呼ぶが、それには答えずみ〜ことは、

「手を」

と短く口にして自分の腕を体の内側に入れる。

それを見た甲斐は「ああ」と合点が行ったように呟くと、みづこを抱きしめるようにして腕を前に回した。

そして内心で、

(まるで猫みたいなやつだ)

などと思いながらそつと苦笑する。

「甲斐ぼっちゃまが……」

「ん？」

「甲斐ぼっちゃまが悪いわけではないのは、分かっておりますが……」

初めみづことは、料理をしながらも時々そわそわと心配で和室の前で右往左往したり、たまに恥ずかしさに煩悶としながら悶々と過ごしていた。しかしそれから三〇分経つても、一時間経つても一向に甲斐は部屋から出てこなかった。もう雛と会話しているわけでもないのだ。

それどころか、声の一つもかけてくれないのである。みづことの耳ならば、小声で名前を呼んでくれればそれだけで十分聞こえるというのに。

甲斐の健康状態は異常があった時のみわかるようになっていから、何かがあったというわけではない。

つまりきつと甲斐は自分のことを忘れているのだろうと、みづことはそう解釈した。

だから、つい拗ねてしまったのだ。

実際には、動けなかったのは雛がずっと手を離さなかったからという理由だったし、忘れたところか甲斐はこの後み〜こととメリーについてどうフォローしようかなどと考えていて、別に直接移動しなくても会話する手段があることを失念していただけなのだが、

そして甲斐は若干頬を紅潮させながら顔を俯けるみ〜ことの様子を見て、ついついこらえきれずくくつと笑い声を漏らしてしまう。それを聞いたみ〜ことはむつと唇をとがらせると、

「……何かおかしいのですか。わたくしは怒っちゃったりしちゃっているのですよ、甲斐ぼっちゃま」

と抗議する。

しかし甲斐は堪えた様子を見せず、み〜ことの体をぎゅつと抱きしめるとにかつと笑い、

「お前はほんつとに可愛いやつだなあ、み〜こと」

と耳元で呟いた。

「ふみや!?! か、からかわないでくださいゃんせ! いきなりなんぞでございますのことよ!?!」

「み〜ことみ〜こと。口調がわけわからんことになってるぞ?」

その時の甲斐の眼差しは、まさに兄が可愛い妹を見守っているかのように優しいものだった。

「そ、それは甲斐ぼっちゃまが……!! ……っ、もう知りません!」

そしてみづことはぶいっつと顔を背けると黙りこんでしまう。しかしそれでも膝の上からはどろろとしなくて、それがついつい可愛くなってしまった甲斐はもう一度明るい笑顔をみせると無言でぽんとその頭を撫でた。

「いらっしやいませ。一名様ですか？」

「いや、ここで知人と待ち合わせをしているので……」

甲斐は大学の側にある喫茶店の店員の問いにそう答えると、店内に待ち人　　メリーの姿を探す。

「ああ、いたいた。あのテーブル……金髪の女性の居る席です。そこで」

「畏まりました。それではすぐにご注文をお伺いに行きますね」

「ええ、どうも」

甲斐はそう言って店員に小さく会釈をすると、話しながら視線で示していた席へと歩いて行く。

甲斐はみくことの機嫌がどうにか収まった後、ずっと気になっていたメリーに確認の意味も込めて電話をかけてみた。

するとメリーから直接会って話したいという言葉が告げられたので、メリーに大きな借りのある甲斐はみくことの作った料理を急いで全て平らげて　　そうしないとみくことのせつかく治った機嫌がまた悪くなりかねなかった　　この喫茶店へと赴いていた。

なんでもメリーはあの後ずっとこの店にいたらしく、この上更に家に呼び出すのは違うだろうと甲斐の方から向かうことにしたのだ。他にも以前にしたデザートを奢るといふ約束を果たすのに丁度良かったという考えもあったが、まあそれはついである。

「マエリベリー、さっきはありがとな。おかげで雛も助かったし……それに迷惑もかけた。丁度いいから約束のデザート奢りと……」

あとお詫びも兼ねて、今日は何頼まれてもここは俺が全部払うぞ」

甲斐はそう声をかけながらメリーの向かい側の椅子に腰を下ろした。そして料理の食べ過ぎでシクシクとまだ少し痛む胃を宥めながら顔を上げてメリーと目を合わせると、そこで小さく首を傾げる。

(…………おや?)

その表情からはいつも口元に浮かべていた笑みは消えており、精彩を欠いていた。視線も若干俯きがちであるし、どうにも浮かない顔をしている。

それに、反応も悪い。いつもの打てば響く様なテンポのいい返事は返ってこず、暫くの沈黙の後メリーはようやく重そうに口を開いた。

「…………あの人はあんな事言ってたけど、どうやら貴方は大事なみたいね。あの離ってという子はその後、どう?」

その『あの人』という表現に少し引つかかるものを感じながらも、甲斐はすぐに相づちを打つ。

「ああ、おかげさまでもう大丈夫そうだよ。今は疲れて寝てるけど、前と比べたらずいぶん元気になった。多分もう、無茶をしなきゃ前みたいな事にはならんだろ」

「そう…………」

ポツリとメリーが呟きを漏らして、会話が途切れる。

とそこで丁度店員からの注文を求める声が聞こえてきたので甲斐は紅茶を頼み、メリーはショートケーキを頼んだ。

しかしそれ以降メリーは黙りこんでしまって、何があったのか分

からない甲斐も戸惑いを滲ませながら視線を彷徨わせ口を嚙むしかなかった。

そして重苦しい沈黙が、このテーブルの周りの空気をどんよりと包んでいく。

仮にここにメリーの相棒でもありサークル仲間でもある蓮子がいたとしたら、

「相変わらずポンポン頼んではパクパク食べてくれちゃってるみたいだけど、デザートは女の子の友達であると同時に明日の敵でもあるんだからね。……最もわたしの本当の敵は、それだけ何も気にせず好きなだけ食べてるくせに完璧なプロポーションを誇ってらっしゃりやがる、メリーの方なんだけど」

などとメリーのおなか周りを睨みながら呟いて、自然とこんな空気が打ち消してくれたのだろうが、甲斐には真似できそうもなかった。

元々甲斐は、あまり弁が立つ方ではないのだ。人の話を聞くのは好きだったが、自分から積極的に話すことはあまりなかった。

なので甲斐は色々と考えた末に結局メリーが話し始めるまで待つことを決めて、静かに店員が持ってきた紅茶に口をつけると穏やかな空気を纏わせながら、このまま沈黙を守ることにした。

「門倉くんは……」

「?」

そうしてしばらくして、ようやく口を開き沈黙を破ったメリーの声を耳にして視線を上げる。

「門倉くんは、あの時出てきた『あの人』のこと、何か知ってる?」

「あの人、と言うと……当然あの扇子を俺にくれた？」
「ええ」

その言葉を聞いた瞬間、甲斐はわずかに意外そうな表情を浮かべて目を瞬いた。

甲斐はあの時去り際にメリーの言う『あの人』の口にした、『自分分はメリーの別人格のようなもの』という言葉に納得していたからだ。

初めは雛の関係者だと思っていたが……、一人の人間に、二つの人格。それは即ち身の内に境界を宿すことに通じるのではないだろうか。そう解釈した甲斐はメリーの力が生まれた背景にはこれがあったのか、と考えていた。

だからついでにやけに色々詳しくかったことについても聞いてみようと思っていたのだが、どうやらそれは外れだったらしい。

実際甲斐のその考えを聞いたメリーも「いいえ」と首を横に振って、

「仮にわたしの中に別の人格なんてものがあつたら、そこには門倉くんの言った通り境界が生まれる。だけどそんなものは、昔も今も見えたことがなかったもの。だからあれはわたしとはなんの関係もない、全くの別人」

という答えを返してきた。

「あれから『あの人』は真っ直ぐにこの喫茶店まで歩いてくると、しばらく紅茶だけを頼んでここにいて、そして突然わたしの意識が戻った」

「記憶は、残ってるんだな」

「そう、ね。あくまでわたしの体がどうという行動をとっていたか…

…だけで、『あの人』が何を考えていたのかとかは、分からなかったけど」
「……………」

それは…………いくらメリーでも、不安に思うのは無理もなかるう。いきなり誰かもわからない何者かに体を乗っ取られて、その上本当に何も分からないのだから。

メリーは多少浮世離れしたところはあるが、しかしそれでもやはりあくまで普通の女の子なのである。確かに色々と変わったところはあるし、性格も当たり前のものとは言えない。でも、異常かと言ったらそんなことはない。普通の感覚だっけ持ってるし、一般的な女の子とそう変りない感性をしているところもたくさんある。

そういったメリーの普通なところを、それなりに付き合ひのあった甲斐は知っていたから、その不安もなんとなく想像することは出来た。

「あくまで、俺の視点から見た話だけだ」

「え？」

「マエリベリーのいう『あの人』は多分、悪いやつじゃあないと思う」

「…………どうしてそう思うのか、伺ってもよろしくて？」

相変わらず暗い表情のまま、じっと甲斐の真意を探るようこちらを見ているメリーに頷きを返すと、

「一番最初に思ったのは、正直に言つただけの勘だ。信用はできないけど信頼はできるって、見た直後になんとかそう思った」

「……………」

「だけど、根拠はそれだけじゃない。…………なあ、マエリベリー。あ

いつはさ、なんであの時に出てきたんだと思う？」

「なんでって……そんなの、分かるわけない。それが分かったら……」

こんなに不安になんてならなかった、ということだろう。

そしてその、心にのしかかる重い不安。それがマエリベリーの思考を停止させていた。

しかし、それも無理は無い。もしかしたら気づかない内にまた体が乗っ取られるかも知れず、その上今度も自分に戻れる保証なんてないのだから。

「俺は……いくら勘でそう思ったって言ったって、あの時あいつの言葉を全部信用したわけじゃなかった。嘘ではなくても何か言っていないこと……隠してあることがあるとか、それくらいには考えてたんだよ。だけど……」

そこで甲斐はふつと表情を少しだけ緩めると、そのまま続きを話すべくもう一度口を開いた。

「結局そんなものはなかった。雛の体はきちんと回復したし、俺もどこもなんともない。それにあの後何かおかしなことが起こったわけでもなかった。……ってことはだ。あいつは多分、初めから雛を助けるためだけに出てきたんじゃないかって思うんだよ。というか、他に目的が思いつかないって言ったほうがいいかな」

甲斐の言葉を聞いてメリーがぱちりと一度目を瞬かせる。

「だって、考えても見るよ。あれがマエリベリーとは全くの別人だってことは、別に体に乗っ取るのはアンタじゃなくても良かったはずだ。それこそ俺の体に乗っ取って、勝手に雛に神力とかいうのを

渡すことだつて出来たはず。だけどあいつはそうはしないで、俺にどうするかを選択肢を残してつた。何か目的があつたり他の意味があつたんなら、そんな結果がどうなるかわからないやり方なんて、しないだろ？ それしか手段がなかつたんならわかるけど、そうじゃないんだからさ」

そして長いセリフを言い切つた甲斐は最後に、

「つていうことで、恐らくあいつはただのおせつかいのお人好しだつたんじゃないかつていうのが、俺の考えだな。ま、誰かの頭ん中なんざ分らないし……これは俺のただの予想だから、証明終了キョーイデーとは行かないけどよ。自分でも、多少無理があると思わなくもないしな」

と締めくくると、ぽりぽりと頬をかいて苦笑いを浮かべる。

メリーの心はメリーのものだ。そしてそこから見える世界は甲斐にはわからない。だから想像は出来たとしても、気軽にその気持ちができるなどとは言えなかつたし、保証のない慰めなんて言えなかつた。

「だから、心配はするなつてこと？ きつとわたしの体を勝手に使つた誰かはお人好しなんだから、もうそんなことはしないでらうつて」

「そういつ訳じゃないさ。……正直言つて、どうしたつて俺にそれを防ぐ手段なんて思いつかないし、だったら無責任なこととは言えないから自分の思つたことをそのまま口にしたただけだ。だからそれをどう受け止めるのかは、アンタに任せるよ」

どこまでも、自分の姿勢を崩さない男だつた。そこで「何があつてもお前は俺が守る」くらい言つてしまえばもつと格好もつくとい

うのに。

「だけどその、『いつも通り』の甲斐の姿は、むしろメリーに心地よさを感じさせた。そして安心とまでは行かなくとも、少しだけ気持ちを上向きにさせたメリーはその時ふつと湧いた興味をそのまま口にしてみることにした。」

「それじゃあ門倉くんは、また『あの人』が今度は悪意を持ってわたしの体に乗っ取ったら、その時はどうするのかしら？」

「ん……そう言われても、俺がその時そこにいるかは分からないしなんとも言えねえけど……まあ、それが俺にできることで何とかできそうだったらそうするだろうし、そうじゃなかったら何とかできそうな人を探すだろうな。それぐらいしか、俺にゃあ出来ねえしよ」

甲斐はさも当たり前のようにそう言うけれど、果たしてそれをしてくれるような人間がどれだけ居るものか。

『境界』なんて意味のわからないものが見えていると言いはる人間が、今度は体に乗っ取られるかも知れないからどうする？ などと聞いてきて、そして当然のごとくその時は助けようとするだろうと答える。

それも甲斐は、もしもそうなったとしたら実際にそうするのだろうか。

メリーには、そこに嘘や気負いは何も存在せず、本当にただ思ったことを口にしただけにしか見えなかった。これで嘘を言っているのだとしたら、きっと甲斐は稀代の詐欺師になれるのではないだろうか。

「ふふ……」

「なんだか、本当に安心してしまった。」

甲斐の口にした論拠は穴だらけで、解決策も対抗策も見つかって

いない。あれが誰なのかだって分からない。どうして自分だったのか、また同じことがあるのかすらわからない。

だけでも何かがあったとしても、当たり前のように助けに来てくれる人がいるのだと思うと、それだけでもう不安に思うことは出来なかった。

仮にそれでどうにもならなかったとしても、きっとメリーは甲斐を恨んだりはしないだろう。だって甲斐は本当に、自分にできる限りのことを全力でしてくれるのだろうと信じれたから。

さすがにそれで恨むのは、筋違いだろう。それはきっと腕をもう一本増やせとか、生身で時速一〇〇キロで走れとか、そんな無茶を言うのと変わらないのだろうから。

「ありがとう、門倉くん」

「……別に、礼を言われるようなことはしてないと思うんだけどな……。結局マエリベリーの安心できそうなことも思いつかなかったし、気休めの一つも言えなかったんだから」

「いいの。わたしが貴方に感謝してるのはホントなんだから、こういう時は素直に受け取るものよ？ どういたしまして、ってね」

メリーが本当にいつも通りの明るい表情に戻っているのを見て取ると、甲斐は「そっか。そうだな」と呟いて、小さく微笑を浮かべた。

「ところで……」

「ん？」

「今日のここのお代は、門倉くん持ちなのよね？」

目をいたずらっぽく輝かせながら問いかけてきたメリーの疑問に、

「ああ、そのつもりだけど」

と甲斐は頷きを返す。

「じゃあ、たつぷりごちそうにならないとね。それこそ、このお店の材料が空になるくらいには」

「え……」

メリーのお菓子好きっぷりが尋常じゃないことを知っていた甲斐は、思わずピタリと固まってしまった。それが冗談なのは分かっているが、しかし全てが冗談というわけでもないのだろう。

「ああ……楽しみだわ。最近出費が多くて、あまり食べてなかったのよね」

「あー、できれば俺の懐が氷河期にならない程度には遠慮していたんだけど、とつても嬉しかったりするのですが……」

「さあ、どうしようかしら？」

小さくバンザイして白旗を掲げる甲斐に、しかしメリーはまるで小悪魔のように魅力的な笑みを浮かべて可愛らしく小首を傾げてみせる。

（流石に門倉くんのお財布が空っぽになるまで食べるのは、勘弁してあげましょ）

そしてそんなことを考えながら、メリーはいつもより少しだけ遠慮を忘れることにした。それは基本的に素直ではないメリーの、彼女なりの甘え方だったのかも知れない。

最後にメリーはもう一度「ふふっ」と心の底から楽しそうな笑顔を浮かべると、目の前に運ばれてきたケーキやパフェの山にとりか

かり始めた。

なにより結局のところ、マエリベリー・ハーンという人間は基本的に、快樂主義者で楽しいことが大好きなのだ。せつかくこんな楽しそうなことが目の前にぶら下がっているというのに、それを止めることなどできようはずもなかったのである。

「ぼっちゃん。甲斐ぼっちゃん。起きて下さいませ、もういつもの時間だったりしちゃいますでございますよ?」

「ん……」

ゆさゆさと、優しげな手つきで体がゆすられる。そして甲斐はゆつくりと、眠りの世界から意識を浮上させていった。

甲斐は特別に朝に弱いわけではないので、本来無理にみくことに起こして貰う必要はない。事実朝早くに起きなければならぬ時や前日に遅くまで起きていたりしなければ、自分から何時に起こしてくれと頼むこともないのだ。

しかしそれにも関わらず、甲斐が寝起きにみくことの顔を見ない日というのはほぼないと言っている。

それは何故かという、いつもみくことは甲斐の脳波などから起きるタイミングを把握して、あえてその直前に起こすようにしているからである。完全に機能の無駄遣いであることは間違いない。

「みく、こと……?」

みくことは半分以上寝惚けながら、未だ薄目すら空けずにその名前を殆ど寝言のように呟いた甲斐を見つめると、くすりと幸せそうに目を細め微笑を漏らしてそっと耳元に自身のその瑞々しく形の良い唇を近づける。

そして次の瞬間みくことは、

「そろそろ起きて下さいまし、ア・ナ・タ」

などとそれはそれは甘い……まるで前日に結婚式を挙げたばかりのほやほやの新婚さんのように甘ったるい蕩けそうな声で、甲斐に熱っぽく囁きかけた。

「うあい!? ってだから、毎回妙なキャラ作って起こすのやめい!」

みることも昨日からすればすっかり調子を取り戻して、完全に絶好調のようだ。

とまあ、毎朝だいたいこんな感じの一幕を繰り広げ、その後起き抜けの甲斐に怒られて場合によってはお仕置きをされるといのが、門倉家のおおまかな一連の流れであった。

……やっぱり駄目だ。このメイド早く何とかしないと。

とはいえこれもひとつのじゃれ合いのようなもの。なんだかんだといってもこの二人、結局はいいコンビなのである。

とんとんと軽い足音を立てながら、階段を降りていく。そして小さくあくびをしながら廊下を通り過ぎ居間の扉を開けた所で、雛の姿を見つけた甲斐は軽く手を上げて、

「あ、雛。おはよう。もう起きて」

朝の挨拶をしようとしたのだが、その瞬間に雛がぴゅーっと逃げて行ってしまったので途中で言葉を止めてほとんど無意識に苦笑いを浮かべてしまう。

「甲斐ぼっちゃま、昨日目を覚ました雛さんに何かしちやったりしたのですか？」

「あー、いやあ……何かしたってわけじゃないんだけど」

ただちよつと怖がらせた後泣かせてしまい、それを慰めてから手を握っていただけである。

(……なんかこうやって事実だけを並べると、俺ってとんでもなく悪い男みたいだな……)

自分の思い浮かべてしまった考えにひくりと頬を引き攣らせ、もう一度苦笑を漏らす甲斐。

甲斐も自身がおおよそ一般的ではない行動をとっていることは周りの反応などから悟ってはいたのだが、基本的に素で行動しているためにその時に自覚することはできないのである。

「あ、まさか……!」

「え？」

「まさか雛さんが弱っていたのを良い事に、そこにつけこんで押し倒してしまっただけでは……!? だめですわよぼっちゃま、夜這い朝這いはわたくしだけにかけてくださいませ!」

「んなわけあるか。ていうか朝這いつてなんだよ」

突然妙なことを言い出したみくくことに、呆れ顔で甲斐はげんこつを落とす。

「うみゆ!？」

そして甲斐は頭から煙を出しているみじことを尻目に、雛の逃げ行行ってしまった和室の戸の前に立ち止まると、「んー」と小さく唸りながら腕を組んで考える。

数瞬の後、甲斐は不意に顔を上げると目の前の戸をノックするように軽く叩き、

「雛」

「な……なにかしら?」

「やっぱり俺たちはまず、お互いの認識のすり合わせをするべきだと思っんだ」

甲斐は雛が衰弱した根本的な原因やその他の状況について全く知らず、そして雛はどうやって自分が助かったのかを知らないはずだ。そう思っただでできたのが、今の甲斐の発言だった。

「……ってことで、できれば朝飯を作り終わった頃には来てくれると助かる。まさか部屋越しにそんな話をするわけにも行かねえしな」

「ま、前向きに努力させていただくわ……」

甲斐は直後に返ってきたどこその責任逃れをする政治家のような台詞につい笑みを漏らしながら、

「ああ、そうしてくれ」

と返事をする甲斐はキッチンへと向かって歩いていった。

「うっ……、さすがに完全に無視されるのは悲しいですわ……。ここは嫁に嫉妬する小姑のごとく嫌味の一つでも言ったほうがよろしいのでございましょうか……」

肩を落としながらなにやら地面に座り込んで嘆いている、みるこをスルーしつつ。

「それで、もう話しても大丈夫か？ 雛」

甲斐は未だ若干頬に赤みを残している雛と差し向かいに座りながら、おもむろに口を開いた。

「ええ」

そして雛が頷いたのを確認すると、甲斐も頷き返して、

「それじゃあまずは、雛の方から説明を頼む。こっちの説明をするには、雛の詳しい事情を知ってからのほうがいいと思うからな」

「……そうね。それなら順を追って、本当に初めから話したほうがいいかしら。……ちょっと長くなると思うけど、大丈夫？」

「ああ、もちろんだ」

心よく頷いてくれた甲斐の姿を見て、雛は一度目を瞑っていくらか沈黙して頭の中を整理すると、ゆっくりとした口調で語り始めた。

「この日本には、私たち八百万の神々や妖怪、妖精、悪魔などといった……幻想の存在が最後に行き着く所があるの。その場所の名は」

幻想郷

その語り口はまるで村の賢者たる長老の昔語りのように厳かで、それでいて神々の神託のごとく神秘的な、不思議な響きを持っていた。

そんな雛の声を甲斐はどこか心地よく感じながら、静かに……そしていつものように穏やかに耳を傾けた。

雛の住んでいた幻想郷と言う所では、忘れ去られ幻となった様々な存在が流れこんでくるといふ。勿論例外的なものはどこにでもあるものだが、今はそれは割愛する。

そして雛たち神々も、忘れ去られ消えてしまう前にそこへ流れ着いたそうだ。

そうせざるを得なくなってしまった原因は、人間の信仰心。科学や文化の発展にともなって、次第に忘れ去られて行ってしまったそれが、神にとつての力の源なのである。

神は力の塊であり、あるいは精神の生き物だ。よってそれが尽きてしまえば、ただ消え去るのみ。だにその上幻想郷の外の世界では、もはや『オカルトなんて存在するはずがない』『科学万能のこの時代にそんなものは有り得ない』という人の否定の精神が満ちている。

それは人の信仰心というものを糧とする神にとって、毒にも等し

いもの。

そのため雛は外にいただけで力を失っていき、消滅の危機にあったのだという。

ただし門倉家の中にいればその限りではなく、ほぼ力の消費は抑えられるのだそう。それはこの家の中が甲斐と同じく『全てを受け入れる』という精神に満ちているためなのだという。

そして同時にそれに満ちている甲斐の周囲にいても、同じ効果は得られるそう。もしもそれがなかったら、雛は甲斐が家へと連れてくる前に、消滅してしまっていたはずである。

「……つまり」

「？」

そこまで語った所で、雛はゆっくりとした動作で立ち上がった。それだけの動作の中にも誇りや気品を伺えられるのは、恐らく雛のその在り方故なのだろう。

「私が今、ここでこうしていられるのは……本当に一から十まで全て、貴方のおかげなの」

そして雛は甲斐の姿をまっすぐに見つめると、静かに深々と、頭を下げた。

「だから、甲斐。貴方には心から……感謝しているわ。ありがとうございました。こんな私を、助けてくれて。そして、受け入れてくれて」

その時に雛の顔に浮かんでいた笑顔はいつものひっそりとした微笑とは違い、まるで父母の下に居る童女のごとく純粹で、そして嬉

しそうなものだった。

そんな雛の笑顔を目にした甲斐はなんだか自分までも嬉しくなってしまうと、にかつと明るく笑い返すと、

「いやあ、そんな可愛くて綺麗な笑顔が見られたんだから……雛が元気になってくれてよかったよ、ホント」

「か、かわ……きれいって、からかわないでよ甲斐……」

「からかってなんてないって、本気で言ってるんだから。もしかして、そうは見えなかったか？」

どこか無邪気な動作で首を傾げた甲斐から、雛はすっかりりんごのように赤くなってしまった頬を誤魔化すように顔を背けて、

（見えるから困ってるんじゃない……）

と内心で頂垂れていた。

神というのは基本的に、人の精神の変化には敏感なのである。故に甲斐の本気がわかってしまった雛は、胸の内から湧いてきたいろんな感情を抑えこむのに必死だった。

「あ、そういえば……」

とそこでふと、甲斐が何かを思い出したように口を開いた。

それを話を変える好機と悟った雛は一度こほんと咳払いをして座り直すと、

「な、なにかしら!？」

と甲斐に聞き返した。

若干気持ちは逸って勢いがついてしまったのは、仕方のないこと

であろう。

「ああ、いや……さっきの話を聞いてちょっと、どうして雛がわざわざ明らかに危険な幻想郷の外にでてきたのか、気になったただけなんだけど……」

その雛の勢いに押されて少し顔をのけぞらせながら、甲斐はふと胸の内に浮かんでいた疑問を口にした。

「そ、それなら事故でこっちに来ちゃっただけだから、気にしないで頂戴っ」

「あ、ああ、そうなんか……」

それから少しの間二人の間で沈黙が流れたが、数瞬の後に甲斐も一度咳払いをして気を取り直す。

「えっと、とりあえず話を戻すけど……つまり雛はその、幻想郷ってところに帰られれば問題ないってわけだな？」

「……ええ、その通りよ」

少しだけ……少しだけあまりにもあっさりと言い切ってしまう甲斐の姿に雛は寂しい物を感じてしまうが、しかし雛の中にも幻想郷へ帰らないという選択肢は存在しない。

雛はあくまで幻想の存在であり、外の世界ではその身は異物。

それに『厄神』である自身を捨てるつもりなど、雛には微塵も存在してはいなかった。それはそうであるために己の消滅をも厭わなかった彼女にとって、考えるまでもなく当たり前のことなのである。

受け入れてもらうということとは、依存するという意味ではない。居場所というのは、そこに縛られるものではない。

雛は自身を甲斐に受け入れてもらったからこそ、その選択をすることだけはできないのである。

それは感情だけでもなく、理性だけでもない。確かな『自分』であることのできる居場所にいるからこそその、ある意味必然とも言える雛の生き方だった。

「それで、そこにはどうやっていけばいいんだ？ 協力位はするつもりだけど……何か宛はあるのか？」

「そうね……」

それつきり雛が考えこんでしまったので、甲斐も同じく沈黙を選んでみ〜ことの出しておいてくれた緑茶をすする。ちなみに当然のごとくみ〜ことは話の間、空気のように同化して甲斐の後ろに控えているのだが……それはもはや、言うまでもないことだろう。

「幻想郷は……」

どうやら考えがまとまったようで、静かな口調で再び話し始めた雛の声を耳にして甲斐が視線を上げると、その視線に同じく目だけで頷いて雛は続きを口にした。

「博麗大結界、そして幻と実体の境界と呼ばれる二つの結界によって遮られているの。これは論理結界といって、物理的なものじゃないから普通に歩いたり飛んだりして移動することはできないわ」

（飛んだり……？）

雛の口にした飛ぶという単語に反応して甲斐は首を傾げたが、そのまま雛の話の邪魔をしないように口は挟まなかった。

「だから外から幻想郷へ入るにはたぶん、博麗神社に行く必要がある。博麗神社っていうのは、外の世界と幻想郷の狭間にある……簡単に言うと接点のような場所ね。そこまで行けば多分、幻と実体の境界が勝手に私を幻想郷へと引き込んでくれるはずよ」

「なるほどな。理論は今一理解出来ないけど、とりあえずその博麗神社っていう所を見つければ、あとは何とかなるわけだ」

「ええ」

「ふむ……」

自分の質問に雛が頷いたのを確認すると、甲斐はそのまま顎に手を添えて小さく唸る。

ここは京都。神社仏閣に詳しい権威なんて恐らく相当数いるだろう。そしてその知識人の力を借りられれば、恐らく簡単にそこを見つけることはできるはずだ。

しかし甲斐にはそこへ至るまでの手段がない。一介の一大学生が、そうそう関係のない教授クラスの人間に接触を持つのは難しいし、誰がそうであるかもわからない。

とはいえインターネットなどを利用すれば、時間をかければ甲斐にも調べられないこともないが、そこから更に話を聞くところまで持っていくというのは一苦勞だろう。

となると、

(やっぱり教授に頼るのが一番か)

しかし岡崎教授は別に悪い人間でもないが、理由もなしに人に手を貸してくれるほどお人好しでもない。彼女に頼みごとをするためには、ギブアンドテイク……何か彼女に利益のあるものを提示できなければ駄目なはず。

(俺が当分の間研究の手伝いを今以上にするとかじゃ、無理だろうな……)

元々甲斐が頭脳面で協力することは難しい。それは別に甲斐の頭が特別に悪いというわけではなくて、むしろ教授が規格外すぎるのだ。そういう訳で普段甲斐が手伝っていることといえば、もっぱら彼女の発明品の試用くらいなのである。

(……って、あれ？ 博麗神社？ 博麗、博麗……)

とその時甲斐が突然に、

「……、あつ」

と声を上げて、まるで何かを閃いたような表情を浮かべて顔を上げた。

「？ どうしたの、甲斐？」

「いや、今ちよつと思ひ出したことがあつただけど……」

「思ひ出したこと？」

「ああ。……なあ、雛」

「何かしら？」

その訝しげな雛の視線を感じながら、甲斐はニヤリと口角を持ち上げて言い放った。

「その博麗神社っていう所……案外すぐに見つかるかもしれないぞ」

雛は「ちょっと待っていてくれよ。確認してくるから」といって部屋へと戻っていった甲斐の背中を見送ると、そのままソファに座って戻ってくるのを待っていた。

甲斐はあんな事を言っていたが、果たして本当なのだろうか。なんだかそこまで行ってしまつと、偶然を通り越していつそ作為的なものを感じてしまつ。

甲斐には雛を助けることで得られるメリットなどないし、邪な考えがないであろうことは一目でわかるほどに伝わってくる精神が穏やかすぎる。だから甲斐が自分を騙しているなどは露程も思わないが、とはいえこの状況を全て偶然で片付けてしまつていいものかなどと考え事をしていると、不意にその時みくことから、

「雛さん、紅茶のおかわりはいかがですか？ それとこちらに、お茶づけもございますよ」

と声をかけられたので、雛は手元に視線を落とす。

すると目に入ったのは、白いカップの底に描かれている装飾部分。どうやら自分でも気づかない内に飲み干してしまつていたようで、いつの間にか中身が空になっていた。

「それじゃあいただきます。ありがとう、みくこと」

そして再びソーサーの上にカップが置かれると、雛はまずみくことが一緒に出してくれたお茶づけ……小さな円形のお菓子に手をつけた。

「あら。このお菓子、すごく美味しい。なんていうお菓子なの？
和菓子ではなさそうだし……西洋由来のものかしら？」

口にした瞬間に感じる事のできるサクサクとした口触りのいい食感と、鼻腔をくすぐる芳醇な香り。甘さも丁度良く、少々口の中が乾いてしまうのが難点といえば難点だが、しかしお茶請けとしてなら最高の物だろう。

「はい、そうですね。ちなみにそのお菓子の名前は、クッキーと言います」

「クッキー……。そう。あまり西洋由来の物は幻想郷に多くはないから初めて食べたのだけど、たまにはこういうのもいいものね」

「というと、あまり洋菓子などは食べられないのですか？」

「ええ、そうね。幻想郷が隠れ里から今のようになって以来、外とは隔離されているから……西洋の物に限らず、あまり舶来のもものは多くないのよ。全くないというわけではないし、行くところに行けば手に入るのだけど。……あ、そういえば前にみくことがお菓子を作るって話をしてたけど、もしかして？」

雛が紅茶を手にながらそう質問すると、みくことは「はい」とすぐに頷いて微笑を浮かべた。

「それはわたくしの手作りでございますわ。先ほど甲斐ぼっちゃまが朝餉を作られていた時に空いたスペースを使っただけの片手間でしたので、あまり凝ってはおりませんが」

その言葉を聞いた雛は、どこか意外そうに小首を傾げた。

「そうなの？ 片手間でこれだけの物が作れるんだったら、さぞや本気のみくことの腕前はすごいのでしょうね。甲斐が羨ましいわ。」

いつでもこんなに美味しい物が食べられるんだから」

「あ……ほ、ホントにそう思われますか？」

「もちろん。だって本当に美味しんだもの、これ」

「そうでございますか……」

「？」

雛の賞賛の言葉を聞いてなんだか本気で胸をなでおろしているみくことを見て、雛は不思議そうな視線を向ける。

「あ、いえ。わたくしには……その、機能としての味覚は存在していても、やはり全く人のそれと同じというわけではございませんで……実は少しだけ、不安だったのです。甲斐ぼっちゃまもいつも美味しいとは言ってくださるのですが、それが本音である保証はなかったのです……」

その説明を聞いた雛は、すぐに合点が行ったように頷いた。

「ああ、確かに甲斐なら、自分のために作ってくれた物を不味いとは言わなさそうですものね」

「そうですね。ですので雛さんに美味しいとっていただけで、正直ホツとしておりました。やはり身近な者以外の意見というのは、また違うと思いますので」

そう言って言葉通り安心したように微笑んでいるみくことを見て、雛はついくすりと笑みを漏らしてしまった。

「みくこと、貴女……すごく可愛いわね。そういうの、いいと思うわ。とても健気で可愛い。みくことは本当に、甲斐のことが好きなのね」

「えー!? そ、そんな好きだなんてそんなことない　とは言えま

せんけどいえやっぱり今の発言はなかったことにして下さいませ！」

突然カツと赤くなってアワアワと慌てるみくことの際に、雛はとうとう吹き出してくすくすと笑い出してしまった。

「どうやら普段から似たようなことを自分から言っているくせに、誰かに逆に言われるのは苦手らしい。いや、むしろだからこそ、だるうか。」

「なんかやけに楽しそうだな……ってどうしたみくこと、そんな真っ赤になつて？」

とその時丁度戻ってきた甲斐がその状況を見て頭の上に《？》を浮かべる。

「な、なんでもございません！ ええ、なんでもございませんとも！ ですよね、雛さん！」

「ふふ。ええ、そうね。特に何もなかったわよ？」

「？ そうか？ まあいいけど。……っと、それより雛。さつき知り合いにメール……すぐに届く手紙みたいなもんだけど、それで確認してみたらやっぱり、博麗神社を知ってそんな奴の宛が見つかったぞ」

甲斐の言葉を聞いた雛は、一度目を閉じて間を取った後、

「……本当に、見つかったのね」

とおもむろに口を開いた。

「ああ。俺がメールしたのはマエリベリっていう、昨日雛を助ける手伝いもしてくれたやつんだけど……ついだから、そのへん

の説明も今しちまうか。丁度いいしな」

「ええ、分かったわ」

そして甲斐ももう一度ソファへと座り込むと、昨日雛が倒れた後に何が起こったのか、どういった経緯で助けられることが出来たのかを語り始めた。

メリーの力。それを知っていた甲斐が彼女に頼ったこと。初めは何も出来なかったが、その後にメリーの様子が変わったこと。その後の彼女の台詞や行動。そして最終的に彼女からもらった扇を使って、甲斐が雛に力を渡したこと。

「……」

それら全てを聞き終えた雛は、どこか深刻な様子で黙りこんでしまった。

（それは恐らく、妖怪の賢者。やっぱり、無事だったのね。だけど……あらゆる境界が見える女の子？ いえ。それも気になるけど、それよりも……）

そして雛はゆっくりと、甲斐の瞳をまっすぐに見つめ覗き込みながら静かに口を開いた。

「甲斐。貴方は……」

「うん？」

「貴方は本当に、人間なの？」

そのセリフを聞いた瞬間、甲斐は面食らったように目を丸くした。

「へ？ なんだいきなり……どうしてそんな事思ったんだ？」
「雛さん……？」

こうして見ている限りでは、甲斐が人間であることを疑ってしま
うような要素は特に存在しない。姿形や、感じる事の出来る感覚。
体から微かに漏れ出る霊気。その全てが雛に甲斐が人間であるとい
うことを訴えていた。

「だけど、

「今の私の中に満たされている神力の量は、下手をすればかつての
全盛期時代にも迫るくらいの量なのよ？ もしもこれが全て甲斐の
霊気から齎されたものだって言うんなら……甲斐がこうして普通で
いられるはずがない。いえ、それどころか」

雛自身もまるで理解できていないような、眉を潜めたままの表情
で言葉を続ける。

「多分きつと、死んでなければおかしいって言うくらいには……、
ううん、違うわね。それでもさらに、足りないくらいだよ」

場合によっては、複数人を儀式や術式といった形で増幅させて命
を捧げる、くらいの事をしなければ無理かもしれない。

「だけど私の目から見ても、やっぱり甲斐の体はなんとも無い様に
しか見えないの。もちろん健康面に関しては見た通りしかわからな
いけど……霊気が空になってるかどうかわからないなら、私にもわかる
のよ」

雛も甲斐が嘘を吐いているわけではないのは分かるのだ。しかし
だからこそ、どうしても納得が行かないのである。

それだけではなく、ずっと気になっていた……何故か甲斐には今だに厄がつく様子がないことも最初の質問に繋がった要因だったのだが、それについては今は何も言わなかった。

「うっん……？」

「」

雛の説明を聞き終えた後、甲斐は腕を組みながら首を捻り、そしてみくことは僅かに顔を青ざめさせていた。特に死んでなければおかしいというくだりは、みくことにとっては聞き逃せないところだったのだろう。

「甲斐。その話に出てきた扇子、ちょっと私にも見せてくれないかしら。もしかしたら、それに何かがあるのかも」

あの妖怪の賢者なら、何をしでかすか分からないのだ。それを見て分かることがあるかは微妙だが、それしか手がかりがないのだから仕方ない。

「ああ、いいぞ。すぐ持ってくるから、ちょっと待ってて」

とその時甲斐の了承の言葉に割り込んで、みくことが口を挟んだ。

「お待ちください。それでしたらわたくしがお持ちしてまいりますので、甲斐様は雛さんと一緒にここでお待ちになって下さいませ。

それでは、失礼致します」

「あ、おい。みくこと？」

恭しくお辞儀をして踵を返したみくことを、ほとんど反射的に呼び止めてしまふ甲斐。

「……なんでしょうか」

「あー、いや。そうだ、あの扇子が俺の部屋にあるってことは……」
「存じておりますので、ご心配には及びません」

そうピシヤリと言い放って今度こそ居間から出ていったみくことの背中を見送りながら、甲斐は困ったように眉尻を下げると雛と顔を見合わせて、そしてほとんど同時に苦笑いを浮かべた。

「雛さん、こちらがそうでございませう。どうぞ、ご確認ください」

少しして、みくことの持ってきた見た目は何の変哲もない扇を受け取る。

「ええ、ありがとうございます。……それと、ごめんなさいね、みくこと」

と同時に、雛は小さく頭を下げて謝罪の言葉を口にした。

「……なぜ、雛さんが謝られるのですか？」

「だって、私のせいで甲斐が無理をしたみたいだから。……甲斐も、ごめんなさい。その上私は、貴方を疑うようなことを言ってしまった」

「んー」

すると甲斐は小さく唸って、ちょいちょいとみくことを手招きし

た。

「甲斐ぼっちゃま？」

直後にみくことはその意図が分からず、訝しげな視線を甲斐に送るが

「いいからみくこと、ここに座りなさい」

……そう言って甲斐が指し示したのは、自分の膝の上だった。

「……え？」

「ほらほら、早く」

「本気でございますか……？」

そして甲斐は二人から突き刺さる視線を気にも留めず、にっと軽い笑顔を浮かべると頷きながらも一旦自身の膝をポンと叩く。

その様子を見たくことは甲斐に全く引く気がないのだと理解すると、数瞬躊躇うように視線を彷徨させた後、ゆつくりとそこに腰を下ろして真正面に居る雛から目を逸した。

さらに甲斐はまるで借りてきた猫のように大人しくなったみくこととの体の前に腕を回して抱きしめるようにすると、今度は顔を上げて雛に真っ直ぐな視線を向ける。

そして真剣な表情を崩さずに、まるで何か宥めるかのような穏やかな口調で、

「別に俺があの時その扇子を使ったのは……、雛の”せい”じゃないよ。あれをやったのは、何より自分の”ため”だ。もしもあのまま雛を見殺しにしてたとしたら、俺はそれをしなかった自分を受け入れられなかっただろうからやっただけ。そういう意味じゃあ、

雛と同じだな」

「私と、同じ？」

雛は初め目を白黒させながら甲斐とみくことを交互に見ていたが、その言葉を耳にした瞬間顔を上げて甲斐の真意をはかるように視線を合わせた。

「ああ。雛は自分が不幸を払う『厄神』だから、誰かが不幸になるのをよしとしなかったんだろ？ それと同じで、俺も自分が『門倉甲斐』であるために……自分がそうでいたかったから、そうしたんだ。だから結局のところ、俺は俺の都合で勝手をやっただけなんだよ。ま、それを聞いてどう受け取るのかは、”二人に”任せるけどな。その上で雛がまだ俺に謝りたいっていうんなら、その時はその謝罪も受け取るさ」

「いえ」

甲斐の語った言葉の内容を反芻しながら、だんだんとその意図が理解できてきた雛はニツコリと屈託の無い笑顔を浮かべて、

「もう謝るのは、止めておくことにするわ。多分貴方に伝えるべきなのは、謝罪じゃなくて感謝だと思うから。二度目になっちゃうけど、もう一度……ありがとう、甲斐。……私からは何も、言葉しか返せるものはないけど……きっと甲斐には、それ以上は余計なんでしょうね」

「ああ。どういたしまして、ってところかな。それが余計とは言わないけど、気持ちだけ受け取っとくよ。みくことも、そういうことでもう……いいか？」

「……」

最後に甲斐が確認するように視線を落としてそう告げると、みく

ことは体を横にずらしてまるで甘えるように服の裾をぎゅっと掴み、

「……………にゃ〜」

と答えの代わりにネコのように一鳴きすると、紅潮した顔を隠すようにして甲斐の腕に体を預けた。

そして甲斐と雛は同時に目を細めてまるで子どもを見守る親のような表情を浮かべると、少し前と同じように顔を見合わせて笑い合った。

17話

「……はあ」

暑い。いくら夏とはいえ、まだ午前中。朝といってもいい時間帯だというのに、空に浮かぶ太陽は容赦なく地面を照らしており、普通に歩いているだけでもじんわりと額に汗が浮いてしまう。さらにその熱は自身の通う大学への道のりを歩いている甲斐の体を襲い、その思考能力を奪っていく。

が、それでもやはりどうしても気になることというのは、勝手に頭の中に浮かんでしまうものだった。

そうして自然と脳裏に浮かんできたのは、あの後例の扇を調べた雛の言葉。

『どうやらこの扇子には、特別な力はなさそうだね。あるのは人の力を変換して対象に渡す能力と、その使用者に悪影響がない程度に抑えるための制御能力だけみたい』

万が一があつた時を考えると、それをまた使ったとしても死ぬような事にはならないという事実はありがたいものだと言えるが……

『もしかしたら甲斐にも何か、能力があるのかも知れないわね。私や……貴方の話してくれた、そのマエリベリーっていう女の子みたいに。もしも甲斐が無意識の内にそれを使っていたのだとしたら、一応の説明はつくから』

(……能力、か)

正直に言えば、全く心当たりがないでもない。

以前……初めて大学でメリーに出会った時甲斐は彼女から、甲斐にはどんな境界も見えないのだと言われたことがあった。元々それがきっかけて彼女と知り合いになったようなものなのだが……あれがもしもその『能力』とやらのせいなのだとしたら、納得できないこともない。

とそこまで考えた所で、

（まあでも、あってもなくっても正直な所、どちらでも構わないかな）

甲斐には何故か昔から、自身が世界のどこにいたとしても己でいられる確信があった。

ならば、何を恐れればいいのだろうか。いつでも変わらぬ己でいられるのなら、他に必要なものなどにもないのだ。場所も、状況も、どんな時でも変わりなく、結局はいつもと同じ事をするだけなのだから。

そして甲斐は顔を上げると、まっすぐに前を向いて歩き出した。

メリーに頼んで合う約束をもらった蓮子との待ち合わせ時間は、大学が終わってからだ。それまではいつもどおり、勉学に励むことにしよう。

そんなことを考えながら歩いていたら、甲斐の遙か後方。そこには手に持った携帯端末をじっと見つめて、画面に映る甲斐の姿を監視する一つの人影が存在した。

日常に潜む影達は己の気配を消して隠れながら、ひたりひたりと甲斐のすぐ近くまで迫っていたのである。

宇佐見蓮子は、門倉甲斐が苦手だった。とは言え別に嫌いというわけでもない。もしもそうだったとしたら、たとえメリーの言うことであつたとしても秘封倶楽部の活動を手伝ってもらつこともなかつただらう。

というかむしろ、人間的には好きな部類に入るのかも知れない。彼のあのよくわからない包容力のようなものは、自分たちのような変わり者にとっては特に居心地のいいものだらうから。

しかし男性として好きかと言つたら、それは全くの躊躇なく否と答えるし、そしてそれ以上に恐らく甲斐が自分を好きになるということはあるまいだらう。

そして宇佐見蓮子は、天邪鬼だった。だからメリーとの約束をした時なんかはわざと少し遅刻してみせたり、ちよつとした悪戯を仕掛けることなんかもよくある。

元々はそれが高じてオカルト好きになつて秘封倶楽部なんて言うサークルを立ち上げたのだから、本当に筋金入りの天邪鬼なのである。そしてだからこそ、甲斐のあのあつさりとなんでも受け入れる性格は苦手だったのだ。

例えば甲斐に、蓮子が「わたしはあんたなんか嫌いだ」と言つたとしよう。すると甲斐はきつとあつさり「そうなのか」と頷いて、適度な距離を保ちつつ必要があれば普通に接するのだ。

そして後から「ホントはさっきのは嘘だった」と言つたとしても、きつと特に怒りもせず「そうだったのか」とあつさり頷いてやっぱり気にせず普通に接するのだらう。

メリーのように皮肉の一つでも返してくれればこちら悪びれることなく笑うことができるのだが、それもあっさり流されてしまうとむしろこちらが困ってしまうというのが本音だった。

ということをやっぱり基本が天邪鬼な蓮子は甲斐のことが苦手だったので、その甲斐と待ち合わせをするというのは嫌ではなかったが少しだけ複雑な気分だった。

積極的に付き合いたくはない……というほどに苦手意識を持っているわけでもないのだけど、それでもやっぱり自分から会いに行ったりはしない。

蓮子の甲斐に対するスタンスは、だいたいがそんな微妙なものなのである。

とまあそんなこんなで、時刻は午後四時を少し過ぎた頃。蓮子と甲斐は大学の食堂で約束通り合流すると、かたや手元に被っていた帽子を下ろして弄りつつ、かたや適当に取ってきた水を持って椅子に座って対峙していた。

「……ふうん。門倉がわたしにわざわざ聞きたいことがあるなんて言うから何事かと思ったら、わたしたちが前に秘封倶楽部の活動で行ったあの神社の住所が知りたいって？」

「ああ、そうなんだよ。今朝マエリベリーに聞いてみたら、そういう行き先なんかはいつも宇佐見が決めてて自分は詳しい場所は知らないから、そっちに聞いてくれて言われてな。それでこうして、待ち合わせの約束を取り付けてもらったってわけだ」

「それはわかったけど……なんで今さらあんなところに行きたいの？ あそこは一般人が行ったとしても特に何の変哲もない、ただの普通の神社なんだけど？」

訝しげに首を傾げた蓮子の言葉に甲斐は軽く首を横に振って、

「いや……詳しいことは省くけど、正確に言うとそこに行きたがってるのは俺じゃなくて、俺の知り合いなんだよ」

「門倉の知り合いって……この大学の人？」

「いや、違う」

「あれ、そうなんだ。それでその人って、男？ それとも女？ 名前はなんて言うの？ あと歳は同年代？ 学校はどこに通ってるの？ それとも社会人かな？」

「あー、ちよつと落ち着いてくれよ。ちゃんと質問には答えるからさ」

蓮子は自らサークルを作っであちこちを飛び回るくらいには好奇心旺盛な上に積極的な性格をしているので、喋るときも勢いがあることが多い。そんな蓮子に苦笑いを浮かべながら、甲斐は一度蓮子を宥めて一つ一つ当たり障りがない程度に質問に答えていった。

流石に雛が神であるとか、幻想郷のこととかは話していない。メリーや蓮子には話しても別にいいといえぱいいのかも知れないが、仮にそうするとしても雛の意思を確認してからの話だろうと思ったからだ。

そして甲斐が全ての質問に答え終わると、蓮子は小さく首を傾げて、

「ねえ、その子って可愛い？」

ずいぶんと率直な物言いであることを口にした。

甲斐は大抵の場合話をしても聞き役に徹することが多く、また積極的に人に関わる方でもない。そんな甲斐の口から女性の名前

が出てきたものだから、蓮子は上手く行ったら珍しく甲斐をからかうことくらいはできるかも知れないと思って、自然と自分の口元が釣り上がって行くのを感じていた。

「ん？ そうだなあ……。まあ雛を見て可愛くないっていうんだったら、世の中の美人の八割くらいは普通に分類されるんじゃないかってくらいには可愛いんじゃないか？」

「あ、そうなの……」

が、全く恥ずかしげもなく甲斐がそんなことを口にするものだから、それは早々に諦めた。

相変わらず、可愛げのない男である。その点に関しては、蓮子も甲斐に対してメリーと共通の見解を持っていた。

なので蓮子は、少々切り口を変えて見ることにする。別に場所を教えること自体は構わなかったのだが、このままあっさりとただで教えてしまうのもちょっと面白くない。

甲斐が自分に頼みごとをしてくるなんて珍しいことはそうそうないのだし、少しくらいは楽しみたいというのが蓮子の本音だった。

「んー、じゃあさ……。近い内にその雛って子と一度、会ってみたいな。ちょっと色々興味も出てきたことだし、その子と一日一緒にみんなで遊ばせてもらうっていうのが神社の場所を教える交換条件ってことで……。どうかな？」

「　　っていうことなんだけど……どうする、雛？　もし嫌なんだ
　　ったら、宇佐見には何か別のことにしてくれって頼んでみるつもり
　　だけだ」

甲斐は蓮子との会話を終えて家へと帰った後、早速雛に話し合い
の結果を報告していた。

「いえ、嫌ということはないのだけど……」

そしてその話を聞いた雛は、どこか困ったようにして頬に手を添
えた。

当然のごとく、一日誰かどこかへと出かけるだけで幻想郷へ帰
れるというのなら、雛が断る理由はない。だがしかし、そこには外
へ出ることによる力の消耗や、その相手や周りの人間に厄が移って
しまう可能性があることなど、様々な問題がまるで眼前に聳える山
のごとく横臥していた。

しかしそれら雛にとっては致命的とも言つべき問題を同時にどう
にかする方法が、一つだけ存在する。……するのだが、むしろ雛に
とってはそれこそが、正に一番の問題とも言えた。

（まさか外にいるあいだ四六時中、常にびつたりと離れずそばにい
てくれなんて、そんなこと言えるわけない……）

それはその状況を想像するだけで胸中に湧いてくる恥ずかしさだ
けの問題ではなく、雛のこれ以上甲斐やみくことに迷惑をかけた
くないという、ある意味必然とも言つべき気持ちの問題だった。

確かに少しでも恩返しをしたいと思つて今日一日ずっと家事を手
伝おうと色々やっていたが、しかし雛は外の世界の道具などに詳
しくはなく、その上みくことの手際が余りにもよすぎてむしろ邪魔

にしかなくていなかった気がしてならない。

ただでさえ今も衣食住すべて頼り切り　ちなみに下着はみくことが買ってきてくれていた　だというのに、更にそのようなことを甲斐に頼むというのは、もはや雛の性格上できようはずもなかったのである。

「ふむ……」

そして暗い表情で顔を俯けて黙り込んでしまった雛を見て、甲斐は大体のその心情を察していた。

事前にそばにいれば外にでも大丈夫らしいことは聞いていたし、後は雛の立場にたって考えてみればそれは自明の理とでもいうべきものだったからだ。

甲斐にしてみれば仕方のないことなのだし遠慮することはないと思うが、雛からしてみればそうも行かないだろう。しかし現実問題博麗神社の場所を聞くことは必要なことであるし、この機会を逃してしまうのは忍びない。

ということ甲斐は、あえて道化に徹することにした。

「なあ、雛」

「……何かしら？」

視線に疑問を込めて顔を上げた雛に対して、甲斐は明るい表情のまま話しかける。

「雛は、プールって知ってるか？」

「ぷーる？　いえ、知らないわ」

「ん、そうか。えっと、そうだな……一言で言っちゃえば、水遊びをするために人の手で作ったおっきな池みたいなもん、ってところ

かな」

「へえ……外の世界には、そんなものがあるのね。それで、それがどうかしたの？」

当然と言えば当然の雛の疑問に、甲斐は少しわざとらしいくらいに真剣な表情で、

「いや、さっきの話の中で宇佐見が『夏って言ったたらやっぱプールでしょ！』とか言ってるな。だから雛がいつて言ったたら、宇佐見はそこに行くつもりらしいんだ」

「？ うん、それで？」

「つまり当然、水場で遊ぶってことは水着も必要になるよな？」

「ええ、そうね」

雛が水着のことを知っているのか多少疑問だったかが、問題なく知っていたようだ。

そして甲斐は雛が相槌を打ったのを確認すると、

「雛はスタイルもいいし美人だからさ……すごい見たいんだよ、その水着姿。だからさ、一緒に行こうぜ、雛？」

しごく真面目な顔でそんなことを口にした。

「な！？ な、な、な、」

その瞬間、雛はまるで頭から湯気でも出ているのではないかというくらい真っ赤になって硬直してしまった。

「いきなりなに恥ずかしいこと言ってるの！？」

「恥ずかしくなんてないし、見たいものは見たいんだから仕方ない

じゃねえか。な？ プール行こうぜ雛。こんないい機会を逃しちまったら、俺は当分の間每晚枕を濡らす羽目になっちまうよ」

とその時突然、

「わたくしに言ってくだされば、そんなものいつでもお見せいたしますわ！」

「うおわ！？ ってだからいきなり湧いてくんなってみ〜こと！」「そんなことより、ぼっちゃまはビキニをご所望ですか？ それともワンピース……マニアックな所でスクール水着でございましょうか！？ さあさあ、遠慮なさらずにどんどご希望をお伝え下さったりしちゃってくださいませ！」

咄嗟の甲斐のツッコミも意に介さず、そんなことを捲し立てるみ〜こと。

「いや、家の中で水着になってどうすんだよ。ちょっと落ち着け、み〜こと」

「なんとつれないお言葉つ。ぼっちゃまがわたくしの水着姿を見たといったのではありませんか！」

「ちげえよ、俺はお前じゃなくて雛に言ったんだ！」

「まあ、鼻肩はイケマセンわぼっちゃま！ ですのでどうかわたくしの水着姿も褒めてください！」

「あー、もう訳わからん……」

とそこで甲斐がみ〜ことの勢いに押されてげんなりと呟いた所で、

「ぶっ、ふふ、あはは」

とどうとう雛は吹き出して、くすくすと笑い出してしまった。

「あ、ほらみ〜こと、雛にまで呆れて笑われちまったぞ」
「全く構いませんわ。わたくしは己の心の命ずるままに行動したま
ででございます」
「たまにはその命令に反抗したほうがいいと思うぞ……?」
「それは無理です」
「即答!？」

そして未だに続けられている主従漫才に、雛は目尻に涙を浮かせながら暫くの間笑い続けた。……そこにはただの可笑しさだけではなくて、もしかしたら感謝の気持ちも込められていたのかも知れない。

『もしもし、宇佐見か? 今日言ってた話、大丈夫だったさ』
『あ、ホントっ? ラッキー! 前からプールには行きたかったんだけど、メリーは付き合い悪いし一人じゃ嫌だったんだよね!』
『ああ、雛にとってもいい気晴らしになってくれればいいんだけどな。……と、そうだ。それとこの話、俺も一緒にすることになっちゃうんだけど、いいか?』
『え? いいよいいよ、それくらい。その子も知らない人間だけじゃいずらいだろうし、元々そのつもりだったからさ。それじゃあ、はい。博麗神社の住所、メールで送つといたから』
『あれ、いいのか? まだプール行ってないのに教えてくれて』
『別にいいよ。初めから、行けなくてもそうするつもりだったし。』

たかが場所を教えるくらいで、そんなに引つ張るつもりはなかったからね』

『そっか、ありがと。助かったよ。日にちは明後日でよかったんだよな？』

『うん、それでオツケー。それじゃあまた明後日。楽しみにしてるわ』

『おう、またな』

(……、明後日)

日の下に立つ影法師。それは今まさに、甲斐達のつま先へと重なるうづとしていた。

17話（後書き）

ようやく終盤戦に突入かも。

ああ、それにしても感想等がさっぱり増えなくて少し切ない。まだまだ精進せねばなりませんな。

甲斐達の通っている、とある大学の奥にある研究室。その更に奥にある冗談のように広い部屋で、岡崎教授は何やらよく分からない機械の前で作業をしていた。しかししばらくするとその手を止めて、がんと軽く八つ当たりするようにそれを叩く。

岡崎教授は、苛立っていた。それはいつも警戒し監視を怠っていなかったはずのそれが、少し目を離していた隙にとんでもないことをしようとしていたからだ。

これは到底、許せることではなかった。

これ以上、その好き勝手を許すことはできないのである。

そして岡崎教授は自身の助手の名を、まるで今感じている苛立ちをぶつけるような鋭い口調で呼びつけた。

「ちゆり」

「ん、何だ？ 呼んだか、教授？」

「呼んだわ。ちゆり、すぐに出る用意をしなさい。装備はMの1型よ」

「Mの1!?!? それって……!!」

「ええ、そうよ。つまりそれだけの事態だつてこと。ほら、グズグズしないでさつさと準備してきなさい。40秒以上かかったらお仕置きね」

「ええっ、そんな理不尽な!?!」

「いいから早くしなさい。すぐに行くわよ」

「いやだから、行くなってどこに!?!? せめて少しくらい説明してくれよ!」

「……はあ、仕方ないわねえ。それじゃあ行く場所くらいは教えてあげる。これから私たちが向かうのは」

南海山公園前プール

そこは近年少しずつ作られるようになってきた、パノラマ型の水泳場である。

パノラマ型水泳場とは、簡単に言ってしまうえば映画のセットのよくなものを楽しむことのできるプールのことだ。場内のそこかしこに映し出された立体映像と演出効果。更に設備機器と砂などの小道具を組み合わせて擬似的に特定の環境を再現する。

再現する環境はそのプールによって違いがあるのだが、ここ南海山公園前プールでは南の島 恐らく沖縄あたりだろう の海を再現していた。

天井に広がる、まるで本物のようにしか見えない抜けるような青い空。透き通ったエメラルドの珊瑚の海にしか見えないプール。さらに足の裏にサラサラとした感触を感じる、白い砂浜。

「ねえ、蓮子。わたしはたしかに嫌だって言ったはずなのに、どうしてここに居るのかしら」

「そりゃあわたしがあんたを無理やり連れてきたからに決まってるじゃない、メリー」

そしてその砂浜にビーチセットを出して寝そべりとてもイイ笑顔を浮かべているメリーと話しながら、蓮子はイタズラっぽくニコリと笑った。

「じゃあどうして嫌がるわたしを無理やり連れてきたのかしら、蓮子」

「それはもちろん、嫌だと言われたら多少無理やりにも連れてきたくなるのが人情だからよ、メリー」

「……そう。なら、もしもわたしがいいって言ってたらどうしてたの？」

「え？ 何言ってるの？ いいって言うてるのに連れてこないわけ無いじゃん」

蓮子がさも当然のようにそう答えると、メリーはとうとう「この天邪鬼め……」と呟いて押し黙った。

「……」
「……」

そして蓮子も沈黙すると、二人は無言でじっと見つめあう。

「蓮子」

「なに、メリー？」

その後しばらくするとメリーは、まるで男女問わず見るもの全てが蕩けてしまいそんな極上の笑みを浮かべて、

「向こう一ヶ月わたしに無視され続けるか、今すぐここで謝るか……どちらか選んでくださる？ もちろん、今すぐに」

「ゴメンナサイ！」

それを聞いた瞬間、蓮子はほとんど反射的に土下座同然の深々さで謝っていた。甲斐のことが苦手であるということからわかるよう

に、蓮子のようなタイプにはなにより無反応が一番きつかったりするのである。

「よろしい」

まあメリーも元々本心から怒っていたわけではないし、それで水に流すことにする。こういったやり取りはある種日常のようなものであるし、二人にとってはじゃれ合いに近いものであった。

というかそもそも本当の理由は、三人よりもメリーを含めた四人のほうがいろんな意味で都合がいいと考えたから誘ったのだろう。それなら納得はできなくもないし、仕方ないと妥協してあげなくもないからメリーも本気で抵抗はしなかったのだ。

とメリーがそんなことを考えていると、その時ふと蓮子は顔を上げて、

「ところで……」

小さく呟きを漏らしながらプールの方へと視線を向ける。

そしてその視線を辿っていくとその先には

「あの二人って、やっぱり付き合ってるのかな？　なんか合流した時からずっとびっくりするほどくっついてるし、しかもやたら仲いいし」

ばしゃりばしゃりとバタ足をして一生懸命泳ぐ練習をしている難の姿と、その手を引いて補助をしている楽しい甲斐の姿があった。

「ああ……」

メリーもその疑問の声を聞いて、思わず納得したように小さく首を縦に振ってしまう。

多少事情を知っているメリーからすれば恐らく付き合っているということはないと思えるが、それでも蓮子がそう思ってしまうのも無理もないと思ったからだ。

なにせ二人と合流した時もその後、雛が水着を持っていないからと直前に入ったショップの中でも、その試着の時さえも試着室の側に待機して甲斐は片時も離れようとはしないのだ。

しかも合間合間に見せる雛のギャップのある反応が余りにも初々しくて、何度かメリーまで勘違いしてしまいそうになったほどである。

ちなみに余談ではあるが、甲斐が持ってきた水着が普通のトランクスタイプだったのを見て蓮子が、

「何だつままないな！。どうせならブーメランとか持ってきてよ、ブーメラン」

「いやいや、んなもん持ってないから！」

などとという一幕があったのだが、それはまた別の話。

「むむむ……。可愛くて彼氏もいてしかもスタイルが良くてその上おっぱいもおっきいなんて」

とその時急に蓮子が何やら呻くように喋りだしたので、メリーが考え事を中断してそちらを見ると、

「わたしなんて大学に入ってからさっぱり恋人なんて縁がなく、密かに裏で百合サークルとか実は二人でデートしてるだけの不良サークルとか言われてるくらいなのに……リア充爆発しろ！」

くわつと目を見開きながらそんなことを叫んでいたの、思わず呆れ顔で小さくため息を吐いた。

「あの大きさ、多分C以上……いやさ、Dはあると見た!」

しかしメリーのそんな反応も意に介さず、直後に蓮子はフリルのついた上下一体型の赤っぱい水着の胸部部分を押し上げる雛の双丘を睨みつけながら、びしつとそう言い切った。

「髪に隠れてて最初は分からなかったけど隠れ巨乳だなんて、お雛ちゃん……恐ろしい子!」

「はあ、全くもう……。蓮子、別に女性の魅力ってそこばかりじゃないでしょ。あんまりそういうことばかり言っていると、人間が安っぽく見えるわよ?」

「むかつ」

その痛烈な皮肉を聞いた瞬間蓮子は唇を尖らせて、

「それはメリーもスタイルがいい上にそんな立派なもの持ってるから言えるんだからね! くー、こうなったらそのけしからんおっぱいに持たざる者の怒りをたっぷりと思いきらせてやる!」

そんなことを叫びながらすぐ横にいるメリーに飛びかかると、むにゅむにゅと言葉通りに大きなメリーの胸を揉みしだく。

「え!?! きゃっ! ちょ、ちょっと……ひうつ、やめ! あっ、もう、いい加減にしなさい!」

水着姿で絡みあう、二人の美少女の姿。その様子は、完全にいちやっついて百合百合しい花がその場に咲き誇ってしまっているように

しか見えなかった。

こんなことばかりしているから、周りから百合サークルなどと言われてしまうのだが……しかし蓮子にはそのあたりの自覚が、さっぱり足りていなかったのである。

「……？ 二人とも、なんかあったのか？」

元々最低限溺れてしまわない程度に泳ぎを教えようと言っていた。一旦離れていただけなので、その後メリーと蓮子に合流するべく浜辺へと戻ってきた甲斐は、直後に二人の様子を見て目を丸くする。

胸を腕で隠すようにしながら顔を赤くしているメリーと、頬に真っ赤な紅葉マークをつけている蓮子。ちよつと見ただけでは何があつたのかさっぱり想像のつかないその状況に、甲斐と雛は二人揃つて首を傾げた。

「なんでもないから、聞かないでちょうだい……」

「にやはは……」

そして疲れたようにため息を吐くメリーと誤魔化すように明るく笑う蓮子にもう一度首を傾げた後、甲斐は「そうか」と頷いてスル―することにした。

すると直後に蓮子が少々不自然なくらいにテンションを上げて、

「そつだ！ それよりさ、向こうにウォーターライダーがあるか

「ら今度はわたしと一緒にいこうよ、お雛ちゃん！」

と言って雛の手を取ろうとする。

しかし雛はススッと自然な動作でそれを避けて蓮子から距離を取り、

「えっと、ごめんなさい蓮子。私、甲斐と一緒にじゃないとダメなの」

と申し訳なさそうに口を開いた。

その雛の激しく誤解を招く言い方に、案の定蓮子はすっかり勘違いして驚いたような表情を浮かべると、

「おお、まさかそこまでとは……！ ごめんねお雛ちゃん。もうお邪魔はしないから、ウォーターライダーにはみんなで行こうか。それならいいでしょ？」

と確認してきた。

「？ それはいいのだけど……お邪魔って？」

その言葉の意味が分からなくて聞き返した雛に、蓮子はきょとんとした表情で、

「え？ だってお雛ちゃん、門倉のことが好きで好きでたまらないから一瞬でも離れたくないんでしょ？ さっきのはてっきり、そういう意味だと思ったんだけど」

「確かに、今のセリフはそうとしか聞こえなかったわね」

メリーもすぐにそれに同意すると、うんうんと頷いてにこりと微笑んでいた。ちなみに内心では、ものすごくこの会話を楽しんでい

たりする。

そしてその瞬間、雞はまるで瞬間湯沸かし器で沸騰させられたかのようにかあつと頬を紅潮させると、

「え！？ あ、ち、違つわっ、今のはそういう意味じゃなくて！
これはその、あの」

と慌てて否定するが、蓮子はまるで効いた様子もなく分かっていると云わんばかりに手を振った。

「あはは、いいっていいってそんなに照れなくてもー。それじゃあ
メリー、行こっか」

「そうね。そうしましょうか」

ちなみに甲斐はそのやりとりを無理に否定するわけにも 蓮子
になんと事情を説明したものがわからなかった 行かず、さりと
てうまく助け舟をだすこともできなくてぽりぽりと頬をかきながら
眺めているしかなかった。

いつの時代も、女性の会話に男が割り込む隙間などないのが世の
常なのである。

あの後甲斐たち一行は、

「念のために言っとくけど、雛も一緒なんだから押すなよ？ 宇佐見」

「え、なにそれ振り？ じゃあ、えいつ！」

「つておい！」

「え、え！？ な、なにこれっ？ きゃあああ！」

「蓮子、貴女芸人じゃないんだから」

とウォータースライダーで騒いだり、

「くらえ！ これがわたしの必殺の魔球だ！」

「ビーチバレーで魔球って何？」

「いやあ、この状態で動くの大変だなあ」

「もう、変に落ち着いてないで少しは焦ってよ甲斐！」

「おお、お雛ちゃんったら門倉のこと引きずりながら動いてるよ」

「すごい身体能力ね」

「っていうかそこまでして離れたくないのかなあ？」

などと浜辺で道具を借りてバレーをしたりしていたが……

しかし楽しい時間というものは、いつもすぐに過ぎ去ってしまうもの。やがて全員が遊び疲れ、自然と満足して帰る用意をし着替え終わると、一行は外に出てそれぞれ別れの言葉を交わしていた。

だが、それではこの日は終わらなかった

それはとつぷりと陽も暮れて行き、時刻も夕方へと差し掛かった頃。

人と人との別れ時。陽が落ちきり、昼が夜へと移り変わる直前のその境界線。

一日で最も禍々しい、幼子が魔へと出会い何処かへと消えてしまふ隙間時。

人はそれを、逢魔ヶ刻と呼ぶのである

そして其の刻に出会ったのが魔ではなく人であったという事実は、一体誰にとつての皮肉だったのだろうか。

鍵山雛は、油断していた。

いや、それを安心と呼ばず、油断と呼ぶのはあまりにも酷だろうか。しかし、事実雛は忘れていたのである。自身がこの世界にとつて異物であるということ……甲斐のせいだ。

そしてなにより、甲斐のお陰で。

マエリベリー・ハーンは、驚いていた。

その時目に入った黒いスーツに身を包んだ壮年の女性が、自分や蓮子、甲斐と同類であることが境界を見てしまつて分かつたから。

宇佐見蓮子は、面喰らつていた。

一度だけ自分に会いに来たことのある、自身の人生の中でもトックラスの要注意人物が、このタイミングで己の目の前に現れたこ

とに。

そして門倉甲斐は、警戒していた。

突然に現れて、自分たちの行く手を硬い空気を纏わせながら塞いだその黒いスーツの女性を。さらに周囲に視線を巡らせれば、十数人の黒服の男たちがこちらを囲みながらカメラや何かの機材を出して道を開けさせて、まるで映画か何かの撮影のように力モフレンジユし始めたのを確認して。

(本当にテレビや映画の撮影の類いでは、ないよな)

そう考えるには、矛盾が多すぎる。すぐに一瞬浮かんだその考えを否定して、甲斐は視線を尖らせ目の前の女性の様子を伺った。

何かを判断するにも、行動するのにも、余りにも情報が少なすぎる。率直に言って、わけがわからなかった。

これだけ大々的に公道を占拠して、どこからの警告の一つもないならばこれは、正式な申請の元に行われていることなのだろうか……。

(まさか、警察？ いや)

警察が一般人を騙すようなことまでして、こんなことをする意味が分からない。仮に、全く有り得ないだろうが仮定として、自分たちの中に誰か犯罪者がいたとしても……警察がこんなことを果たし得るだろうか。

(無い、な)

ならばこの集団は、一体……？

と甲斐が己の中の疑問を消化しながら思考を巡らせていると、その瞬間唐突に、

「確保」

”ミシリ”とまるで、空気が軋むような音がした。

それは比喻でも何でもない。文字通り、確かにそんな音が甲斐の耳へと届き、そして雛の耳元で鳴ったのである。

直後、雛の体が動かなくなった。

本当に、全く体のどこの部分も固まってしまったかのように動かせなかった。手足だけではない。首も動かなければ腰を曲げることも出来ず、口を開くことすら出来なかったのである。

「んっ!?!」

そのせいで雛は口からくぐもった声しか出せなくなりながら、唯一動いた目だけを驚愕に見開いた。

そして次の瞬間、甲斐はいつの間にか迫ってきていた男たちに押さえこまれ、

「な!?!」

さらに雛の体はまるで風船のようにフワフワと宙に浮かんでいるような不思議な動きをしながら、黒いスーツの女に拐われてしまう。

「雛!」

「鍵山さん!?!」

「お雛ちゃん!」

直後

雛は外の世界に来てから今までで、最大級の否定の意思をその身に受けた。

「む、んう……！」

それはまるで、毒のように。そしてあるいは、呪いのごとく。雛の身体を、精神を、存在を浸していく。その盲目的で、妄信的な否定の意思は……外の世界全体に満たされているその、比ではなかった。

それは今雛の体を良く分からない方法で浮かせ抱えている、その黒スーツの女が纏っているもの。

その意志は正に、甲斐の許容の意思とは真逆。絶対不可侵の現実という名の、冷たく残酷な幻想を喰らう怪物の如き固い意志だった。そして雛はそれに力を急速に打ち消されていってしまい、すぐに意識を手放してしまう。それは少しでも力の消耗を抑えようとする、無意識の防衛機構のようなものだったのかも知れない。

（くそ！ なにがなんだかわけが分からねえ……！）

何もかもが唐突で、甲斐たち一行の誰一人として全く状況について行けていなかった。

だが、雛が甲斐から離れるということは、即ち先日の二の舞になるということだ。故に甲斐には、これをこのまま見過ごすつもりは毛頭なかった。

状況を把握したり、会話や説得や交渉をするのは、仮に出来るとしてもどちらにせよ全て雛を取り戻したその後。

しかし、それを成すのは一人では無理だろう。甲斐にはこれほどの人数を一度に相手取るだけの、力も能力も権力もないのだから。だから甲斐はその瞬間、大きく息を吸って己の肺に酸素を一杯満たすと、自身に出せる限り最大の大声で、唐突に虚空に向かって一言その名を叫んで彼女を呼んだ。

「み〜こと、来てくれ！」

「は？」

「え？」

「何を？」

「……？」

そして常人以外……その名を知っている者も知らない者も、誰もが甲斐の奇行に首を傾げた、その刹那。

甲斐の体を拘束していた二人の黒服が、ものすごい勢いで吹き飛んだ。

「はい！ 呼ばれて飛び出て参りました、ぼっちゃま！」

「ぐあー！」

「な、なんだ！？」

とそこで初めて、身を翻し用意していた車に乗り込み雛を連れ去ろうとしていた黒スーツの女が動きを止めて、

「岡崎教授製のガイノイドか」

と警戒もあらわにみ〜ことを睨みつける。

しかしみ〜ことはまるでその場の空気を（あえて）読まず、「いいえ！」と首を横に大きく振って元気良くそれを否定すると、

「わたくしはもはやロボットでもなければガイノイドでもない、ただだ甲斐ぼっちゃまだけのメイドでございます！」

とよくわからない宣言をした。

「……メイド？」

「とうか一体いつの間にここに？」

「警戒班は何をしていた」

「あのガイノイドが家を離れたという報告はなかったぞ。どうやって現れた？」

直後に色んな意味でのわけのわからなさにざわつく黒服たちに、
み〜ことはさらに続けて、

「主人がこの身を呼んでくださったというのに、たとえどこにいようと瞬時に駆けつけないメイドがこの世におりますか！ 取り敢えず監視とか空間とか距離とかは適当にブッチして飛んで参りました
！」

とりあえずで物理法則やらなんやらを無視しないでください。

「ねえメリー。最近のメイドって、すごいんだね」

「……お願いだから目を覚まさない蓮子。そんなわけないでしょ」

もうなんか、シリアスとか色々とか台無しであった。これがみ〜こ
とクオリティの恐ろしさである。間違いなく、色々と間違っている
が。

しかしおかげで、場が動いた。

「み〜こと！ まずは雑を助けるのが最優先だ、頼む！」
「承知いたしました」

その瞬間、先ほどまでの態度が嘘のように硬質な返事と共に、み〜ことが高速で地面を低く駆け抜けた。

その踏み込みは、まるで重機か何かのように容易にアスファルトを砕き……もはや残像を残さんばかりの、人には決して叶わない速度を実現するもの。

そしてみ〜ことが完全に黒服たちの虚を突いて、黒スーツの女に死なない程度の拳を向ける……が、

（硬い！？）

ガキンとあたりに響き渡る快音。

黒スーツの女はその拳に、素手のまま手をかざしていただけというのに……それはみ〜ことの拳にまるで鉄でも殴りつけたかのような硬い感触を返して、平然と跳ね返した。

「……速いな。それに、いい奇襲だ」

み〜ことの攻撃を受けてそう呟いた女が次にしたことは、

「まずは門倉甲斐を確保しろ。その方が早く無力化できる」

という指示を出すことだった。

「くっ……！」

そのためみ〜ことは、要所要所で牽制を入れてくる黒スーツの女

の攻撃を防ぎながら、全ての黒服の相手を同時にしなければならなくなつた。

いくらみくことが人にはありえないような身体能力を有していたとしても、それを発揮する体は一つだけ。分身でもできない限りは、殺さないようにこれだけの人数を同時に相手取るのは流石に不可能。

そしてとうとう、一人の男が甲斐を捉えようと無表情のままに掴みかかってくる。それを見てようやく事態に追いついてきたメリーと蓮子が、背後ではっと息を飲んだのを甲斐は気配で感じていた。

向かってくる男は見るからに屈強。そして甲斐はどうみても普通の体格をしている。そんなただの一般人が、自らを鋼のごとく鍛えた男に対抗できるものではないだろう。

だが、しかし。

「
」

それを見つめる甲斐の瞳には……そしてみくことの表情にも、焦りの感情は全くみられなかった。

甲斐には少なくとも、戦いに使えるような特別な能力はないし、武術を習っているわけでもなければ、喧嘩慣れしているわけでもない。

が、

「ぐが、じほつ!？」

その時甲斐に掴みかかった黒服の男は、自身の伸ばしたその手が相手の体に届くことなく地面に引倒されたことを、その衝撃に息をつまらせてからようやくやく驚愕と共に理解した。

向かってきた力を受け入れて受け流し、そしてそれを利用する。

甲斐はどうしてか昔から、誰かに教えてもらったわけでも習ったわけでもなかったのに、それだけは当たり前のように何時の間にか自然とできるようになっていた。

どうしてかはわからない。強いて言うのなら、できるからできるのだ。そのまるで、魂に刻まれていたかのような技術を何かと騒動に巻き込まれやすい甲斐はかなり重宝していた。特に岡崎教授たちと付き合うようになってからはその頻度が高くなり、以前よりもその精度は高まっている。

受けて流して、大地へ還し……循環させる。それはまるで、輪舞の如く。

甲斐一人の戦力は、そこまで大きくはない。甲斐には自分から攻めることができず、一対一でなければあっさりやられてしまうだろうから。だがしかし、逆に言えば一対一の状態を常に作り上げてやれば、甲斐はやられないのだ。その事實は、みることによってかなりこの状況を楽にしてくれるものだった。

この一対一の状態は、全てを自身だけでは捌き切れないことを悟ったみ〜ことが意図的に作った、甲斐への信頼の証でもあったのだ。

「ちっ……」

このままでは、下手をすれば全滅するのはこちらの方がも知れない。甲斐とみ〜ことに次々と無力化されていく自分の部下たちの姿を見てそう判断した黒スーツの女は、一度小さく舌打ちをするとついに強行手段へと出ることにした。

「そこの二人。それ以上抵抗するな」

そしてその言葉に振り向いた甲斐の目に飛び込んだのは、甲斐が雛を助けようとしていることをその会話内容から理解していた黒スーツの女にナイフらしきものをつきつけられている、気を失った雛の姿だった。

19話（後書き）

予定通りではあるけれど、実はちょっと超展開ワロタと言われないか不安だったり。

岡崎夢美は、門倉甲斐を気に入っていた。少なくとも、甲斐に手を出されて平然と無視できない程度には、気に入っていたのである。それはなぜかという点、甲斐があつさり『魔力』そして『魔法』を信じたから……というわけではない。

さすがの甲斐とて、証拠も実例も理由もなしに何でもかんでも信じるわけではないのだから、初めからまるっきり全て信じていたわけではないのだ。

故に岡崎教授が甲斐を気に入ったその理由は、”岡崎夢美が”本気で『魔力』と『魔法』の存在を確信しているという、岡崎教授にとつての世界を否定せず受け入れてくれたからというものであった。

おまけに今回の相手は、あの自分の研究を信じようとしなかった老害たちよりもある意味で更に憎たらしい、岡崎教授にとつては宿敵のようなものだったのだ。それが自身のテリトリーに無遠慮に侵入してきたというのに、無抵抗でいるはずなどあるはずがない。

だから彼らが甲斐とその周辺に手をだそうとしていることを知った時、岡崎教授は部外秘も良いところである自らの再秘奥の一つすら持ちだして、それを放った。

科学魔法

「 莓クロス！」

「 なに！？ 」

その名の通り、莓色の巨大な十字架。それが岡崎教授の宣言後に地面を抉りながら弾丸のように飛んでいく。しかし黒スーツの女は

声と同時に背後へと振り返り、すぐにまたそれに手をかざすと弾き返した。

そして教授の放った十字架は、その後まるで空気に溶けるようにして消えていく。

その光景を目にした瞬間、岡崎教授はフンと鼻を鳴らして腕を組んだ。

（確か……硬と軟を操る程度の能力、だったわね。予定通り防がれたか）

そして教授はそのままの体勢で多少わざとらしく首をかしげて、

「うーん……魔法が素晴らしいのは間違いないんだけど、名前を宣言しなきゃいけないことだけは難点よね。そこは科学魔法でもおんなじだし、奇襲には使いにくいわ」

「ちっ、岡崎夢美か……！」

甲斐は驚いていた。岡崎教授が何故かここにしていることや、突然よくわからないものを放ったから、ではない。岡崎教授がレーザーだろうが十字架だろうが何をだそうと正直今更だったので、それは大して驚かなかつた。この人はあのみくことの生みの親なのである。常識に通じないのは元からなのだ。

だから問題は、そこではなく

(もしかして岡崎教授には、雛が見えてないのか!?)

門倉家、もしくは甲斐のそばにいる時は、外の世界でも力の有無にかかわらず雛は誰にでも見える。そして数日を共にしたことで、甲斐とみくことには雛との繋がりができていたから、もはや外の世界のどこにいようとその姿を視認することができるが、果たして岡崎教授はどうなのだろうか。

その可能性に思い当たった瞬間、甲斐は慌てて黒スーツの女越しに岡崎教授に叫んだ。

「教授！ 今俺達は人質を取られてるんだっ。だから手を出さないでくれ、頼む！」

「えー、人質？ 全く、わざわざ来てやったのにいきなり指図されるなんて、面白くない上に面倒くさいなー」

と同時に岡崎教授は言葉通り本当に面倒くさそうな顔をして、はあっとため息を吐いた。

(……?)

なんだか随分と、岡崎教授らしくない発言だ。それに、

(今の、目配せは……)

「まーったく、今ごろちゆりはどこで油売ってるのかしらね。ちゆりもいたら大分楽になったのに、肝心な時にいないなんて……相変わらず使えないんだから、ホント。あとでお仕置き決定ね」

それはもしかして、ちゆりが来るまでの時間稼ぎをしるといふことなのだろうか。

だが、この状況で甲斐が動かせるのは口のみだ。そしてあの黒服たちと会話する材料なんて、甲斐にとってはないに等しい。時間稼ぎをする以上、黒スーツの女が聞く必要のある内容の話をしなければならぬのにもかかわらずだ。

(……可能か？ いや……)

今のこの状況は、ほぼ三竦みとなっていると言ってもいい。

甲斐たちは言わずもがな動けないが、教授には人質の意味がないのだ。岡崎教授が今止まっている理由は、偏に甲斐の言葉のみが原因。そして黒スーツの女にはもはや手勢は存在せず、何らかの要因で人質を失えばその瞬間に挟み撃ちされる状況にある以上、迂闊には動かないだろう。

(これなら、話しかけるのを黒服にする必要はないかもしれない)

そして甲斐は黒スーツの女への警戒を怠らないように気をつけながら、岡崎教授に向かって、

「ところで岡崎教授は、どうしてここに居るんですか？ もしかして、こいつらが誰かを知って？」

と疑問をぶつけて見ることにした。

「もちろん知ってるわ。いえ、知ってるどころの話じゃないわね。言っちゃえば私にとっては、目の上のたんこぶみたいなものよ、この連中は」

岡崎教授が学会へと研究成果を発表した時、その多くの人間はそれを一笑に付した。しかし、学者という人種全てが誰一人例外なく

それを否定するということなど、本当にあり得るのだろうか。

答えは、否である。

一部だけ、本当に一部の数少ない人間だけではあったが、岡崎教授の研究に興味を示したものは確かに存在したのだ。しかし、そんな彼女らの意見と興味は全てなかった事にされた。

それを行ったのが、今ここに居る黒服たち。それを知る者にはただ『監視者』とだけ呼ばれている、日本政府直属のブラックボックス。

『監視者』の目的はただひとつ。現実を守り幻想との均衡を保つこと。現実が幻想に侵食されないために結界が誰にも暴かれないよう監視し、そして再び現実が幻想へと至るのを阻止するために幻想を否定することだけが目的の組織だった。

「あれが本当は正しいことだってことを知っていながら否定してくれちゃったこいつらは、学者という真実を正義とする人種全てにとつての敵。だからこいつらは、私にとっては障害であると同時に最大の天敵なのよ」

「ふん。なんだ、今までなかなか尻尾を見せなかったが……やはりあの研究は続けているのか」

「当たり前でしょうが。あれが間違ってたんなら素直に諦めただろうけど、ホントは正しいのに否定されるだなんて冗談じゃない。私たち学者っていう生き物は、知識欲と諦めの悪さだけが心情なのよ。舐めてもらっちゃ困るわね」

「そうか。だが……」

とその時黒スーツの女はもう一度ふんと鼻を鳴らすと、思わず見る者の背筋を凍らせてしまうような苛烈な視線を雛に向けた後、

「まずはこれを処理するのが先だ。

時間を稼いでいたのは、何

も貴様達だけではない」

グレネード
手榴弾

最後に女がそう呟いた瞬間、甲斐たちの眼前に禁断の果実アップルの別名で呼ばれる金属塊が何処からか転がり込んできた。

直後にみることは刹那の間もかけず瞬時に甲斐を庇うようにして地面に押し倒したが……しかし次の瞬間その場に溢れたのは、爆炎と共に生じる破片の雨……ではなく、

「煙　スモークグレネード 発煙弾！？　あ、まさか……逃げるつもりか！」

元々黒スーツの女は雛が身に纏うそれを認識していたために、この場でどうにかするつもりはなかった。

雛の厄は厄災の元。今すぐに雛を消してしまえば、それは制御を失いあたりに撒き散らされてしまうだろう。よって経過は違えど彼女がここで撤退という二文字を選択したのは、むしろ予定調和の通りでもあったのだ。

しかし人ならざる瞳を持つことにとっては、これはむしろ好機となり得る。

そしてあたりに煙が充満する中何時の間にか立ち上がって前へと一歩踏み出したみくことこの足を　本来は硬いはずのアスファルトの地面が、グニヤリとまるでぬかるんだ泥のごとく絡めとった。

「　！？」

これにはさしものみくことも流石に転倒せざるをえず、屋外であったことから視界が晴れるまでにはさほど時間がかからなかったと

いうのに、その時にはもはや黒スーツの女と雛の姿はどこにもなかった。

直後に甲斐はふらふらと立ち上がりながら周囲を見渡しそれを確認すると、一度「クソ！」と悪態をついた後己のメイドへと向き直る。

「み〜こと〜！」

「はい〜！」

そして甲斐はみ〜ことからすぐに返事が返って来たことを確認すると、次にとんでもないことを口走った。

「お前、俺を抱えても飛べるか!？」

だがしかし……み〜ことの生みの親は、独力で現代に魔法というものを擬似的にはいえ再現させたあの岡崎教授なのだ。

「主人に求められればそれを果たすのがメイドの務め。そのくらい、お茶の子さいさいでございますわ」

故にその程度のこと、出来ないはずがないのである。

「なら、追っぞ〜！」

「承知いたしました！」

そして甲斐の身体を軽々と抱え上げたみ〜ことは、すぐに空へと向かって飛び上がったのであった。

岡崎教授は雛を連れ去った車を追うべく頭上へと舞い上がった甲斐とみこの姿を見上げながら、内心でほくそ笑んでいた。

甲斐とみこのことにとって最も危険なのは、今回のように一度に相手取る人数が多すぎる状況である。

しかしこうなってしまうえば、後はあの女とのタイムン勝負。この場にいる黒服たちが復活して援護に向かわないように拘束しておけば、後はあの二人が片付けてくれるだろう。

さらに『監視者』からの新しい人員の導入はないように、昼間の内にすでに岡崎教授は『監視者』との交渉を終えている。そして今回の件がこちらの勝利で終わってしまうえば、これ以上甲斐や自分には少なくとも当分の間手出しは出さないという条件も飲ませていた。

しかも、

(今回は色々と、素敵なデータがとれたわね)

ちゆりにはデータ収集に専念させていたので、教授にとってはかなりの収穫が見込めるだろう。

そしてそれに専念させていたということはつまり、多少露骨に時間稼ぎをしようとしているように見せかけていたのは、実は黒スーツの女にこの場に留まっていたはこちら側の援軍があると勘違いさせるためのブラフだったのだ。

そのお陰でもう、これで万が一にも他の黒服の援護はあの女に届くことはないだろう。

確かに岡崎教授は甲斐のことを気に入っていて、そしてそれを助けるために自身の秘密兵器の一つまで明かしてしまった。しかし逆に言うと、手札を一つ明かしただけでこれだけの様々なリターンを得ているとも言える。

この岡崎夢美という人間は、基本的に転んでもただでは起きない性格と頭脳の持ち主なのであった。

ということまで、

「あ。あのメイドさん、とうとう空飛んじやったわよ」

「なんか、わたしの知ってるメイドと違う……」

「なんていうかわたしたちって、今回完全に置いてきぼりの蚊帳の外よね……」

もつとも割を食ったのは、もしかしたらこの二人かも知れなかった。

20話（後書き）

親方！ 空にメイドが！

み〜ことの廃スペックっぷりがヤバイです。そして教授工。

21話

黒スーツの女 形式優希かたしきゆうきはどこまでも冷静に、鋼の意志を以て自身を制御していた。

感情を力とするのは精神を糧とする幻想ばけものの側の十八番。現実の側に属し常にそれを心がけている人間として、理性を忘れる訳にはいかないのである。

冷徹に、理知的に、そして何より理性的に。何故なら知性こそが現代において現実から幻想をほぼ完全に排斥するに至り、人の世をここまで発展させてきた我々の最大の武器にして力なのだから。

しかし自身を制御をしているということは、即ち制御しなければならぬ感情を今も変わらず有しているということでもある。

つまり形式は、実は心の底では苛立っていたのだ。

そこには彼女の根底に眠る、様々な想いが原因としてあった。それはまるで感情の坩堝のごとく、形式の腹の底へと沈殿し渦を巻いていく。

かつて彼女が幻想郷へと迷いこんだ時の記憶を発端とする、幻想の存在全てへの憎悪。

もはや世界からほぼ排除できていたはずの幻想の存在が、まだ外の世界に隠れ潜んでいたことに対する苛立ち。

結界の向こう側を殲滅しようという自分たち強硬派の意見を一顧だにもせず、過去にあの胡散臭く憎らしい妖怪の賢者と結んだ不可侵条約を未だに守り続ける上層部の弱腰への不甲斐なさ。

己だけではそれを成せず、しかも今回実質的にはたったの二人を相手にしただけでほぼ全滅にまで追い込まれてしまった弱い自分とその部下に対する怒り。

そして 此方側に属しているはずの人間が、向こうの存在を何故か助け守ろうとしたことに対する強い軽蔑の気持ち。

(門倉甲斐は報告通りなら、岡崎夢美と関わりがあるだけの何も知らない一般人……少なくとも、表の人間であることは間違いなかったはずだ。だというのに、あの近接格闘能力はなんだ？ それに何故)

そして脳裏に甲斐に対する疑問と怒りが浮かび上がったその瞬間……、けたたましい音と共に激しい衝撃が形式の運転していた車を襲いその思考を強制的に中断させた。

みることに搭載されている飛行ユニットは岡崎教授謹製の特別な装置であり、そしてそのためその機能や性能も少々特殊な物であった。

重力制御式任意落下装置

それがみることに搭載されている、飛行ユニットの名だ。

普通重力というのは、常に地面に向かって下に働く力である。しかしこの装置は、任意に自分にかかる重力の方向を変更することができるのだ。

要するに真上に飛ぶ時は空に落ちて、前に飛ぶ時は前方へと落ちて自身の落下エネルギーによる加速で空を飛ぶのである。

この装置の利点は、物体の質量や大きさによって必要になるエネルギーの量が変わらないことだ。例えば仮定としてこの装置で船を

空に浮かそうと考えたとしても、人一人分飛ばすのとかかるエネルギー量はほぼ変わらないのである。

ただし、この体は元々戦闘を前提にはしていないため、これとは別の推進力は保持していない。この装置を使って落下速度以上の速さで飛ぶためには、それとは別の推進力がオプションとして必要となってしまうのが難点だった。

そのため、形式の運転している車を補足すること自体はその高い身体能力によって苦勞していなかったのだが、それ以上……中々車に追いつくことは出来ておらず、今より距離を引き離されないように追跡することが限界だった。

だがここで、形式が拐った相手が雛であったことが甲斐たちにとっての追い風となる。

その時雛を乗せて人気の少ない裏道を走行していた車は、雛に触れたことで形式に移ってしまった厄に齎された不幸によって、交通事故を起こして派手に横転し無人の工事現場へと突っ込んだのだ。

しかも雛の体は形式の能力によってその周囲の空気が固められていたので、それがまるで防護膜のようになってその身体を守ってくれていた。

本来それは拘束用のものだったのだが……形式にとっては本意なことに、そのお陰で雛は横転した拍子に車から放り出されてしまったというのに、傷ひとつ負わずに済んでいたのだ。

ただ、あくまで人である甲斐には上空からその状況を正確に把握することなど当然できようはずもなかったのだ。

「おいおい、冗談だろ!? いや、そんなことより 早くあそこに降りて、みることはそのまま雛の保護と手当を！ 俺があいつの相手をして引き付けるから、それが終わったらすぐに家に連れて行

ってやってくれ！」

とすぐに慌ててほとんど叫ぶようにみくことに指示を出した。

が、しかし甲斐とは逆にその優れた視力と分析力によってその時目に映った全ての光景をほぼ正確に捉えていたみくことは、慌てず騒がずしごく落ち着いた冷静な態度で、

「どうか落ち着いて下さいませ、甲斐ぼっちゃま。どうやら雛さんには外傷はないようですので……もちろん急ぎはしますが、そこまです慌てる必要はございませんわ」

「……そっか、無事なのか。良かった……」

みくことのその、まるで疑う必要のないであろう落ち着いた声を聞いた瞬間、甲斐はほとんど無意識にほっと胸を撫で下ろしながら小さく独りごちた。

すると今度はみくことが、

「ですから今はそれよりも、あそこに到着するまででいいので……どうしてあの女と相對するのがわたくしではなく甲斐ぼっちゃまなのか、そう判断した理由を教えてくださいませ」

と先の指示に対して感じた不満混じりの疑問をぶつけて来たので、甲斐はすぐに落ち着きを取り戻して「ああ、分かった」と相槌を打つと、それを頭の中で簡潔に纏めながら早口に説明し始めた。

「まず一つ目の理由は……みくことがあいつに決定打を与えるには、さっきの様子を見た限りじゃそれなりに時間がかかりそうだったから。そして二つ目は、雛をいつまでも外に居させるのは危険だしまずは家に連れてくことを優先すべきだと思ったから。そして最後に当然の話だけど、その場合俺よりもみくことの方が遥かに早く雛を

連れて家に帰れるだろうからってのが、だいたいのおおまかな理由だな」

「ですが……確かぼつちやまのそばに居れば、それだけで雛さんは外にいても大丈夫なはずでは？ それならわたくしがあの女と戦っている間、ぼつちやまが雛さんを守っていて下さればそれで事は済むはずですよ」

「だけどその場合、みくことを掻い潜ってまた雛に何かされる可能性もゼロじゃないだろ？ さっきのあれがただの煙幕だった以上、多分向こうにはこつちを殺したりするつもりはないはずだ。ならば、何より現在進行形で力を失くしていつてるはずの雛の安全を確保するのが一番じゃないか？」

既に先ほど岡崎教授から通信で、残りの相手は彼女のみであることは聞いていたので……もはや彼女が車という移動手段を失った以上、このまま上手く一度引き離す事が出来れば門倉家が安全地帯も同然であることは間違いないはず。故に雛の安全の確保には、そうしたほうが確実なのは確かだろう。

「むづ……」

しかしそれでもみくことにとっては、仮にどんな理由があろうとも絶対的に、甲斐の安全が最優先であることは変わらないのだ。だからすぐにはそれに領けず暫く渋っていたのだが、いくら思考を巡らせど甲斐を上手く説得できそうな理由も良案も思いつけず、しかもそうしている間にとつとつ地面についてしまう。

みくことは危地において最もしてはいけないことが、判断に迷いそれに縛られ動きを止めてしまうことであることを知っていた。

なので結局きちんとした反論が出来なかった以上すぐに甲斐の言う通り動かざるをえず、内心でこんな時でも冷静に的確な判断をし

てしまう己の頭脳を恨みながら雛を瞬時に抱えると、即座に家へと向かって飛行ユニットも併用しながらもはや自動車もかくやというスピードで駆け自身の体を加速させた。

「甲斐様、どうかご無事で！ 雛さんを家までお連れしましたらまたすぐに戻って参りますので……それまでは絶対に、もたせていて下さいませ！」

そして甲斐はそのみくことの去り際の言葉に無言で頷きを返しながら、ドアを壊して車から這いでてきた形式を真っ直ぐに見据えて身構えた。

形式は車から抜けだした後注意深く周囲を見渡し、そして雛の姿が何処にもないことを確認すると、

「貴様……、門倉甲斐。そうか、わざわざここまで追ってきたのか」
すぐにこちらに顔を向けてそれはそれは忌々しそうな表情を浮かべると、甲斐の事を睨みつけた。

そしてその後またすぐに元の無表情へと戻ると、次の瞬間

「ふっ………！」

鋭い呼気を吐きながら、素早い足取りで滑るように近づいてきた形式の回し蹴りが飛んでくる。

「　　っ！？　いきなりかよ、危なっ！」

甲斐はそれに多少意表を突かれ面くらいなながらも、咄嗟に受け流して前の黒服と同じように形式を地面に倒れさせようとする。

「ちっ、その技……厄介だな」

が、形式は甲斐のそれを事前に見ていたので、体制を崩された瞬間に能力を使って擬似的なエアバックを形成。それを利用して反動をつけながら飛び起き一度距離を取ると、動きを止めて見に入る。

そして甲斐も形式が動かないのなら自分から何かをする理由はない　そもそも甲斐には自分から責められるほどの実力がないので、同じく動きを止めて注意深く形式の様子を伺った。

硬直状態。この場で油断なく対峙している二人の一方には攻める理由も手段もなく、そしてもう一方も攻めあぐねている以上、そうなってしまうのは必然とも言えるだろう。

そしてそれから暫くの間二人は互いに沈黙を守っていたが……先にその状態を破ったのは、またしても形式の方だった。

「なら飛び道具なら、有効か？」

形式はボソリと呟きを漏らした後ズブリと砂利の混ざる地面につま先を勢い良く埋めて、そのまま土混じりの砂利の硬度を操作しながら甲斐に向かって蹴り上げた。

「やっばー!？」

そして当然そんなものをどうにかすることはできない甲斐は、慌

ててその場から飛び退き避けようとする。しかしそうしている間にも形式は次弾の用意をしていて、甲斐はそのまま狙いを定めさせないように動きまわり逃げることしか出来なかった。

それから数度それを繰り返し、時折飛んでくる塊を一部受けて体に痣をつけながら、息を荒げて走りまわっていた甲斐の体力が限界へと近づいてきた頃、

「？ はあつ、はあ……」

突然形式が散弾のように土と石の雨を飛ばすのを止めたので、二人は再び動きを止めて睨み合う。

とその時、

「一つだけ……」

形式はおもむろに、まるで腹の底から響いてくる唸り声のような声を喉から絞り出した。

「一つだけ聞かせる。貴様何故、そこまでしてあれを助けようとする？ 一緒にいた以上、貴様も知っているのだろう？ あれは我々人間とは決して相容れない、幻想という名の化物だぞ」

「……」

向こうから攻撃を止めて時間を稼がせてくれるというのなら、甲斐にとっては渡りに船だ。だからそれを無視する理由はないが……

(何故、か)

きつとそれは、甲斐が”誰か”を助ける理由ではなくて……”雛を”今助けようとしているその理由を、問っているのだろう。

(俺が雛を、放っておけない理由……?)

そんなものは正直に言つて、最初からその時思った通りに行動してただけで大した理由はなかったのだ。

だからあえてそれを言葉にしると言つのなら

「知つちまつたから、かな」

あの真つ直ぐでもあまりにも優しすぎる、可愛らしい少女のことを。

「だから、気に食わねえんだ。あの子が失われてしまうことが、悲しい事だと思つちまつた。多分俺の動機なんて、初めからそれだけだ」

その時の甲斐の表情には、とても言葉では表現しきれない何かがあった。あえてそれを何かに例えるのならば、凧いでいる穏やかな大海原か……それとも春になって草木の芽吹く、萌ゆる大地の様とでも言つような……そんな不思議な表情だった。

だが形式はそんなものは歯牙にもかけず、それまで内に抱えていた感情を爆発させたかのような恐ろしい表情を浮かべ犬歯を剥き出しにして吼えた。

「知つたからつ、気に食わないからつ、悲しいと思つたから……助けるだど!? ふざけるな! もはやこの世は人のものだ! やつら化物のものではないのだぞ!? 奴らがこの世界を貪り侵すのを、貴様は人でありながら容認するといふのか!」

しかし甲斐はそんな激情も柳のごとく受け流し、変わらず静かな表情のまま穏やかに首を横に振つた。

「……違うよ。世界は誰のものでもない。ただ流れて、巡るだけだ。俺たち人間も雛たち幻想もただの世界の流れの一つとして、平等にどこまでも」

世界は否定も肯定も拒絶も暴力も正義も悪も何もかも受け入れて、巡り巡って行くだけだ。

個は全を構成し、そして全は個の集合体でもある。故に甲斐たち人間だって世界の中の一要素にすぎないし、同時に雛たち幻想の存在だって確かに世界を形作っている個の一つなのである。

「知ったような口を……！」

そしてその時形式のその身から吹き出したのは、鬼気と呼ばれるもはや形をなした人の黒いユメ。

そこに込められていたのはきつと憎悪や殺意や悪意という、あらゆる負の感情の集合体。

そしてそれが形をなしたものを、人は呪いと呼ぶのだろう。

だが

呪いなんて、とつくに受け入れている。殺意なんて、とつくに受け入れている。悪意なんて、とつくに受け入れている。だって甲斐はとうの昔に、世界全てを受け入れているのだから。

「な……なんだ、能力が通じない！？ 何故……貴様、何をした！」

彼女が何に驚いているのか、甲斐にはまるで理解出来なかった。ただ甲斐は己が理解できるかどうかすら関係なく、ただ世界を

受け入れて在り続け、生きていだけなのだ。

いつだって、世界に生きるただの一人の人間として。変わらず世界全てを愛してそれを受け入れながら。

受け入れていないのは、過程だけ。まだ出てもいない結果を何もせず看過してしまう自分という、人として生きること放棄したあり得るかもしれない己のみ。

何を受け入れても変わらず在り続ける”自分”が、狂気だろうと憎しみだろうと諦めだろうと絶望だろうと死だろうと何を受け入れても変わらない”心”が、これからもすべてを受け入れ続け『門倉甲斐』として在るために、それだけは受け入れるなと喚いていた。

『門倉甲斐』は、あらゆる全てを受け入れる。そしてそのために必要なことは、何を受け入れたとしても変わらず在り続ける”己”のみ。

だからこそ甲斐は全てを受け入れても、それでも変わらず『門倉甲斐』で在り続けるのだ。

故に 何人たりともその存在、決して侵すこと能わず

「貴様本当に……何者なんだ!？」

「別に、何者でもないさ。俺はただの、人間だよ。きっと死ぬまで変わらず”俺”で在り続ける、ただの一人の人間だ」

正直に言えば……、甲斐は彼女が雛を消そうとしていることだつて、否定するつもりはなかった。

多少行動自体は過激だが、きっとそれは現実に生きる人間としてむしろ当たり前側の反応なのだろう。

自分のほうが普通ではないことをしているのは、初めから理解していた。もしかしたら正義ってやつも、向こうの側にあるのかも知れない。それに反抗しているのは別に、今日の前に居るこの相手が憎いわけでも気に入くないわけでもなくて、ただ何もしないで雛を見殺しにしてしまったら自分が許せないだろうからこうしているだけ。

だから、

「アンタだって、俺には否定するつもりはない。受け入れるさ。アンタも俺と同じ人間で、変わらず世界の一部分なんだから」

「門倉……かどくら、かい!!」

そして甲斐は自身の切り札を無効化された事実混乱して突っ込んできた彼女の真っ直ぐな拳を受け入れると、それを否定せず流れに身を任せて世界へと循環させた。

最終話

「ん……」

甲斐は小さく吐息を漏らしながら、ゆっくりとベッドから起き上がり目を覚ました。

甲斐はあの後通信してきた岡崎教授に後始末を任せ やけに夕イミングが良かったのでどうせ何かで見えていたのだろう て、戻ってきたみくことと共に家へと帰り、そしてその後疲労困憊していたために、みくことに勧められるままにすぐ泥のように眠ってしまったのだ。

外はすっかり夜の帳が落ちて、真っ暗闇。まだ夜中というほどの時間ではなさそうだが、それでも随分な時間寝てしまっていたらしい。

「ふう……よっ、と」

そして甲斐は小さく伸びをしてからすぐに立ち上がると、自身の部屋の中に置いておいた例の扇を手にして扉を開けると雛に力を渡すべく部屋を出た。

元々甲斐は家へと戻ってきてからすぐに、消耗しているであろう雛に力を渡そうとしていたのだ。しかし明らかに疲れている上に怪我まで負ってしまった甲斐を心配したみくことに止められ、さらに雛を見てくれたメリーに前のようにすぐに消えてしまいそうになるほど消耗はしていないからと諭されて、一旦それを止めて仕方なく休んでいた。

しかしそのお陰でもう体は全快とは言わずとも体力は戻っているので、雛はまだ寝ているかも知れないが取り敢えず力だけでも渡しておこうと考えて、甲斐はそのまま階段を降りると雛を寝かせてい

たはずの和室へと向かった。

みくことは甲斐の部屋の隣にある自分の部屋の中で、その優れた聴覚でもってして甲斐が起きたことに気がついていた。そして甲斐がすぐに部屋から出ていって、おそらくは雛の元へ行ったのだろうこともほとんど同時に悟る。

しかし仮にあの扇を使っても大きな危険はないことは聞いていたし、さすがにここで過剰に心配して止めてしまふというのは無粋が過ぎるだろう。

(……もう博麗神社の場所もわかって、雛さんは明日幻想郷というところにお帰りになられるご予定。これ以上はきつと、心配でも何でもなくただの余計なお世話になってしまうのでしょうか……)

そんなことを考えながら甲斐がとんとんと階段を降りていく音を耳にしていたみくことは、一度小さくため息を吐くと万が一にも邪魔をしまわないう、ベッドに横たわり意識を休眠モードに変更して静かに目を瞑った。

雛は少し前に目が覚めてから今の今まで、ずっと暗闇の中で自身の体にかけていた布団をぎゅっと抱きしめながら、胸の奥から沸き上がってくる震えと一人戦っていた。

その姿からはまるで、酷い寒さに襲われて必死に我慢しているかのような……あるいはまるで、強い孤独感に苛まれながらもそれに一生懸命抵抗しているかのような……そんな見る者全ての心を絞めつけてしまっ、心細さを感じさせられた。

あの時……、形式に捕まった時に彼女から流れてきた、その否定の精神。

外の世界に常に満ちている、漠然とした”幻想全てに対する否定”とは違う……『鍵山雛』個人へと向けられた、強い否定と拒絶の意志。

さらにはそれに存在が食われ、侵され、そしてなにより……己の全てを否定されていく、あの感触。

それら全てが今もお前がここに存在することを許さないと声高に訴えかけているかのように思えてしまって、もう大丈夫なのはわかっていてもどうしても雛の心にこびりついて離れず強い震えをもたらしていた。

恐怖とも孤独ともつかない、なんとも言いがたい寂しさのような……己自身を否定されてしまったことによる、どこか悲しみにも似た感覚。

その感覚に打ちひしがれ、本当なら今すぐにでも誰かにすがりつきたくなるような強い不安を感じているというのに……しかしそれでも雛は神として培ってきた強靭な精神を以ってして、それら全てをどうにか押さえこもつと気力を振り絞っていた。

自分からは何も返せていないというのに……甲斐にもみ〜ことに

も、これ以上迷惑をかけられない。そしてなによりあの二人に、もう心配を掛けたくなかったから。

だから雛は明日の朝になったらまたいつもの自分に戻っていられるように、ぎゅっと目をつむりながらもう一度布団を抱きしめ直して強く唇を引き結んだ。

しかし、その時……

「雛、起きてるか？」

雛が寝ている場合のことを考えて配慮したのであるう控えめな小さい声が、ぴったりと閉じられていた戸の向こうから聞こえてきた。しかし雛はその呼びかけに、自分から返事をする事が出来なかった。

今の自分の姿を見られたくない。弱っている自分を見ないで欲しい。だけどやっぱり、気づいて欲しい。”誰か”にそばに居て欲しい。

そんな複雑な想いが雛の体を雁字搦めに縛り付けていて、その白く細い喉から声を出すことを許してはくれなかったのだ。

「ん……やっぱり寝てるのか」

そして甲斐は一向に返事が返ってこないことからそう考えて、小さく咳きを漏らした後音を立てないよう静かに和室の戸を開いた。

「甲斐……」

「あれ、雛？　なんだ、起きて　」

その後甲斐が部屋に入ってきたのを確認して、ひっそりとその姿を見上げながらポツリと名前を呟いた雛と目が合った、その瞬間……

…甲斐は計らずも目を見開いて絶句してしまふ。
それから暫くの間、甲斐は眉尻を下げた曖昧な表情で……そして
雛は未だ微かに震えながら、何かを言いたそうなの……それでいて
強い迷いと躊躇に苛まれている複雑な表情を浮かべて、無言で見つ
め合っていた。

「
」
「……」

その時甲斐は……無言で雛の吸い込まれるような綺麗な瞳から目
が離せなくなりながら、同時に深く悲しんでいた。

ただただ雛が苦しんでいるように見えるのが悲しくて……そして
その表情に、その姿に、その揺れる瞳から伝わってくる感情に胸が
締め付けられて……それをどうにかしたかった。

だけどそのためにどうすればいいのかわからなくて、どうすれば
その震えが止まってくれるのかもわからなくて……そして言うべき
言葉も、甲斐にはどうしても見つけることができなくて……

だから

「か、甲斐……!?!?」

気づけば甲斐は、雛を優しく抱きしめていた。

「……ごめん。嫌だったら、振りほどいてくれて構わない。それだ
つたらもう、雛には触らないようにするから……」

甲斐にはこれ以上、何もせず見ているだけで居ることが耐えられ
なかった。だから何の考えも配慮もなしに、気持ちが溢れてただ心
のままに行動してしまっていた。甲斐の今のその言葉は、それを自

覚していたために出たものだったのだ。

だけど雛はそうはしなかったし、出来なかった。

「あ……」

雛はただただ、安心していただけだ。

まるでぼかぼかと暖かい、陽だまりの中にいるような心地いい温かさ。

今雛の心の中は、まるで先程まで感じていた冷たい心細さを打ち消すかのように、真逆の温かい気持ちで一杯に満たされていた。

（ああ……私は今、世界に抱いだかれていますんだ）

お前はここにいてもいいのだと、世界かいがそう伝えてくれた。

そして雛はどうして甲斐のそばに居れば自分の力が減らないのか、そして厄がどうして甲斐には意味がなさないのかを本当の意味で理解した。

『全てを許容する程度の能力』

それが甲斐の保持している、能力の名前だったのだ。

そして

『門倉甲斐』は現実も幻想も……あらゆる全てを受け入れている。

あらゆる全てを受け入れているということは、それ即ち世界全てを受け入れているということでもあった。つまり……世界全てを受け入れているということは、『門倉甲斐』は個でありながらあらゆる個を受け入れる全であり、世界と等しいということでもあったの

だ。

よって転じて、それは

『世界と等しくなる程度の能力』

でもあると言えた。

世界はあらゆる個を円環のごとく循環させ、受け入れて許容する。それこそが『門倉甲斐』という全でありながら人間であるという個を失わない不思議な存在の、本質であったのだ。

(それは……)

それはなんて、温かい力なんだろうか。

ただそこに優しく在るだけの、自分のためではなく自分以外の誰かのための力。

この能力は、甲斐自身には何も齎さない。だって甲斐は『門倉甲斐』という自分を絶対に捨てず、そしてそれ故に全てを受け入れられるのだから。

個こを捨てず、しかしそれでも全せてを許容し受け入れる。

それは絶対的な受身の力であり、不変の器があるからこそその受容の力。

故に『門倉甲斐』はただの人間であると同時に、ただただ全てを受け入れて、ただただそこに存るだけの世界なのだ。

そして雖は甲斐に体重を預けて身体を凭れさせ、静かに目をつむりながらその美しい眦から一筋涙を零した。

(きつともう、私は世界の何処に居たって絶対に……寂しいなんて
思わない)

だって自分の居場所は甲斐の隣にいつでもあつて、そして甲斐は
世界なんだから。

「……甲斐」

甲斐はずっと顔を俯けていた雛が不意に顔を上げて声をかけてき
たことに反応して、

「……ん？　なんだ、雛」

と優しく囁くように聞き返した。

「ありがとう。もう私、大丈夫だから……」

そう言われて意識を向けてみると、確かに何時の間にか雛の体の
震えはもう止まっていた。そしてそれを確認すると、甲斐は小さく
頷いて微笑を浮かべ体を離す。

「雛。悪かったな、いきなりこんな事しちゃって」

「いいえ……謝らないで。嫌だったら甲斐の言う通り、とうに振り

ほどいてたもの。むしろ、その……」
「？」

そこで甲斐が首を傾げると、雛は頬をほんのりと赤らめさせながら、まだどこか潤んだままの瞳で真っ直ぐに甲斐の目を見つめ返した。

「嬉しかったというか……私、安心してたもの。上手くは言えないけど……色々あって、ホントは心細かったの。だから……。それにもしかしたら、明日帰ることも寂しかったのかも知れない。ここに居るのは思いの外、楽しかったから……」
「そっか」

そして甲斐はもう一度微笑んで、ぱんと優しく雛の頭を撫でた。

「まあでも、仕方ないさ。出会いがあるってことは、いつか必ず別れることもあるんだからな。だけどまあ、だからこそ一度別れた人と再開する楽しさとか、また誰かとの新しい出会いがあるんだと思うよ」

「だから、『去る者追わず、来る者拒まず』？」

「ああ、そういうことだな」

そう言って甲斐がニカツと笑い返すと、雛も柔らかく目尻を下げて微笑んだ。

そして二人の間に、沈黙が流れる。

だけどそれは、何も語らずともとても穏やかな時間だった。

窓から差し込む柔らかな月光と、静かな静かな夜の静寂。

それはまるで花火が終わった後のような静けさと、ほんの少しの

寂しさを含んで……だけど二人とも真っ直ぐに、前を向いて佇んでいた。

「あ、そう言えば……」

「え？」

「いや……元々俺、また雛にこの扇子で力を渡すためにきたんだっ
たって思いだしてな」

「ああ、それで……」

雛は不意に沈黙を破った甲斐の言葉に合点が行ったように頷いた
後、小さく首を横に振って、

「大丈夫よ、甲斐。心配してくれたみたいなのは嬉しいけど……そ
れは必要ないわ。幻想郷に帰ればすぐに回復することはできるし
……仮にそうでなくても少なくとも、こっちのように急に力が無く
なってしまうようなことはないもの」

と言葉を告げるが、しかし甲斐は当然のごとくそれに頷かなかっ
た。

「あん？ やだよそんなの。やっぱ別れるときは気持ちよく、って
のが一番だろ。雛がふらふらになってるのを知ってるのに、それを
そのままほっといて気持ちいい別れなんてできないだろうしな」

「嫌だつて……。甲斐、ホント貴方って人は……」

「？ なんだ、俺なんか変なこと言ったか？」

甲斐はその何処か呆れたような言葉に首を傾げるが、雛はそれに
満面の笑みを返して、

「いいえ、なんでもないわ。甲斐は本当に、いつでもどこでも変わ

らないんだなって思っただけ」

そう明るく口にしながらか甲斐の頬に顔を近づけてそっと唇を落と
した後、きよとんと目を丸くした甲斐の顔を見てくすりとイタズラ
っぽく微笑んだ。

そして、翌日。甲斐と雛が出会ってから六日目の土曜日のこと。

「ここでもう、大丈夫。力のことも心配ないから、後は私一人で行
くわ」

「ん、そっか。了解。まあそれじゃ、また外に来ることがあったら
いつでも家に遊びに来いよ」

甲斐と雛は外の世界の博麗神社の石段の前で、別れの挨拶を交わ
していた。

「ええ。その時は必ず、そうさせてもらうわね。……それにしても

本当に、甲斐にもみ〜ことにも、何から何までお世話になったわ」

雛はどこか遠くを見るようにしてそう口ずさむと、すぐに甲斐とまっすぐに向き合って深く頭を下げお礼の言葉を口にする。

「ありがとうございます。み〜ことにも、後で私がそう言ったって伝えておいて」

「ああ、それを伝えるのは構わねえけどな。でもまあ、礼には及ばねえさ。我が門倉家のモットーは」

「『去る者追わず、来る者拒まず』だから気にするな、でしょ？」

「はは、そういうことだ」

そう言ってからからと明るく笑う甲斐に、雛も「ふふ」と柔らかな微笑を返した。

「それじゃあそろそろ……、さようなら。いえ。またね、甲斐」

「おう。またな、雛！」

そうして二人は軽く手を振ると同時に背を向けて、雛は一段一段ゆっくりと石段を登っていき、甲斐は少し後ろのほうで待っていたみ〜ことと共に駅へと向かって戻っていった。

「あ……」

雛が石段を登りきり、そして神社の鳥居をくぐったその瞬間……明らかに空気の質がそれまでとは違うものになった。外の世界とは

違う……幻想に対する否定のない楽園のような世界、幻想郷。

さらにその正面には、赤と白の巫女服に身を包んだ少女
『夢
と伝統を保守する巫女』博麗靈夢の姿。

「あら？ 貴女は」

完？

エピソード

雛を幻想郷まで見送った、その次の日。

甲斐は色々と迷惑をかけたメリーと蓮子、そして借りのできてしまった岡崎教授とちゆりを焼肉へと連れて行く約束をした後、朝風呂に入っていた。昨晩は特に暑くて寝苦しく、服が汗だくで気持ちが悪かったのだ。

「はー、すつきりした。やっぱり風呂は命の洗濯だなあ」

そしてそんな何処か年寄り臭いことを口走りながら髪から滴る水をぐいっと手で拭い、体を拭くべくバスタオルに手を伸ばした所で、

「あれ？」

何故か脱衣所に例の扇が落ちていたことに気づいてそれに手を伸ばした、その瞬間。

「え、は……？」

甲斐の体は突然空間の裂け目のようなナニカに落ちてしまい、そして門倉家の何処からも姿を消した。

「あ……、甲斐ぼっちゃま……？」

直後に家の中からその反応が突然消えたことに気づいたみくことは、すぐにその姿を探してすべての部屋を見てまわるが……

当然甲斐の姿は、家の中のどこにも見つかることはなかったのだ。

ある。

エピローグ（後書き）

これで一旦、東方界境輪舞は完結です。とは言えここまで読んでくださった方なら分かると思いますが、甲斐たちの物語はまだ続きます。言ってしまうえば現代入り完ということですね。

まだ章単位で分けるのか別の作品扱いにしてシリーズとしてまとめるかとかや、全体の見直しや推敲、プロットの細かいところを詰めたりと色々あるので少々時間がかかるでしょうが、その時はまたお付き合いいただけると嬉しいですよ。

間隙異変とその後（前書き）

幻想入り編を考える前に、前々から考えていた全てのプロローグとなる部分を投稿。

間隙異変とその後

間隙異変。それは後に、幻想郷で起きた数ある異変の中でも最悪の一つとされた異変の名だ。

異変の首謀者は、赤間都子^{あかまみやこ}。そしてその種族は、隙間女と呼ばれる現代では都市伝説の一つに数えられている妖怪だった。そして都子の保持していた能力の名前は『間借りする程度の能力』。

彼女は初め、その能力をもって幻想郷の境界の揺らぎによって出来た隙間から幻想入りし、そしてそれに気づいて様子を見に来た『妖怪の賢者』、八雲紫の体に乗っ取った。

紫の能力は『境界を操る程度の能力』。それはあらゆる境界を操る隙間の力であり、故に彼女との相性は最悪だったのだ。

能力とはその存在の象徴でもあり、そして物質的ではない精神に属する事象へと手を伸ばすことのできる、心の手足である。

そして境界を操るということは、境界の両端に手が届くようにあらゆる隙間の境界線上に存在していなければならない。都子はその紫の中に存在する境界線の隙間に入り込み、勝手に間借りして乗っ取ったのだ。

それからもう、酷いものだった。都子（紫）はスペルカードールなんて知ったものかと好き勝手に暴れまわり、更にはスペルカードールに不満を持っていた古い妖怪たちを軍門に降らせて、幻想郷の中でも他の追隨を許さない一大勢力を築いたので。

しかしそのような勝手な振る舞いがいつまでも許されるはずもなく、完全に操られる前に紫から指示を受けていた彼女の式、八雲藍

は博麗の巫女、博麗霊夢を始めとした各勢力の長を集め、対抗勢力を結成。

ここに幻想郷でも始まって以来最大級の、人妖総力戦が始まったのだ。

その中で主力とされたのは三名。

一人はもちろん、幻想郷においての最重要人物であり最大のバランサー、『楽園の素敵な巫女』博麗霊夢。

二人目は白黒ハッキリつける程度の能力によって生死の境界を弄られないようにするために呼ばれた、『楽園の最高裁判長』四季映姫ヤマザナドゥ。

そして最後に選ばれたのが、戦いにおいての不運を少しでも減らすために呼ばれた、『秘神流し雛』鍵山雛だった。

作戦はまず、雛に人妖全ての厄を集めてもらってから総力戦を仕掛ける。そして霊夢が出来るだけ消耗しないようにその他の人妖が都子まで続く道を作ると、中衛として映姫が霊夢の援護をしながら一対一の状況を作る。

最後にその戦闘で消耗した都子の隙をついて紫本人の意思が出てこれるようにした所で、藍が都子のみを封印するというものだった。

この作戦は概ね成功に終わったのだが……都子が封印される直前に紫の能力を暴走させてしまい、幻想郷中の存在の『世界と自分』との境界を、世界よりに操作してしまう。

これは特定の相手に向けられたものではなかったために力ある人間や妖怪、神、自然の具現である妖精などには通用しなかったのだが……力の無い人里の人間は世界との同化により全滅。その上その時偶然発動したスキマの中に雛が落ちてしまうという、惨憺たる結果に終わった。

その後正気を完全に取り戻した紫は、万が一にも再び己を乗っ取られないようにと自身を綿密な準備を元に構築した結界によって厳重に封印。これによって後に『間隙異変』と呼ばれた異変は完全に収束を迎えた。

しかし……

幻想郷は基本的に外の世界とは隔離され、そしてそこだけで成り立っているものだ。よってもはやそこは外とは違う法則を持つ一つの別の世界にも等しく、故にその中にある全ての要素は一つとして無駄なものなど存在せず正しく循環されている。

すなわちそれは球であり、そして球体は完全を表し世界を表しているのだ。

球 真円というのは、例えば表面のどの部分が損なわれてしまっただとしても、その瞬間に真円ではなくなってしまう。

この場合の真円とは元々の幻想郷の姿であり、欠けてしまった部分というのはつまり人間のことである。

そのため人間という要素がなくなってしまうと、幻想郷は成り立たなくなり滅んでしまうのだ。

今は霊夢を始めとした数人の力ある少女たちが居るためにそうはなっていないかったが、彼女たちは例えどれほどの力があるうとも人間である。そして人間である以上、いつかは寿命が来て死んでしまっただろう。さらには何かしらの不測の事態が起きて、事故や病気などで死んでしまう可能性もゼロではない。

そして仮に彼女たちのいずれかを不死の存在である蓬莱人にしたとしても、身体的には人間であってもそれはもはや人間とは別の存在。それでは結局のところ意味が無いのだ。

彼女たちの生命がいつか尽きて、全ての人間が死滅してしまった時……幻想郷は真の滅びを迎えてしまう。故にそれを危惧した紫は藍に自身を封印する前に、どうにか一人分を呼ぶだけの力を譲渡。本来ならば紫が完全に力を取り戻して世界と同化してしまった人間たちを元に戻すのが一番なのだが、それには大きな危険を伴う。そして複数の人間を呼ぶほどの力は今は紫にはない。そのためその力を受け取った藍は次善の策として、これによって呼んだ人間の男に子どもを作ってもらおうと考える。

そして藍は最後に紫が残した指示通りに、人間の男という条件以外は設定しないで無差別に一人人間を幻想入りさせるべく、その力を行使した。

これによって現れる人物は、一体誰なのだろうか。

無差別というのは、無作為とイコールではない。それを行った藍自身はこれによって現れる人物が誰かはわかっていなかったが……その人物の元にスキマが開いたのは、果たして偶然だったのか。それとも誰かの描いた絵面通りのものだったのかは……今はまだ、謎のままだった

間隙異変とその後（後書き）

念のために追記：最終話の霊夢表記と今回の霊夢表記は誤字にあらず。

プロローグ

幻想郷

そこは人間だけではなく神や妖怪、悪魔や妖精たちが自由気ままに闊歩する、幻の楽園。

しかし現在、この美しい楽園の如き世界は滅亡の危機に晒されようとしていた。

とある大事件……『異変』を発端とする殆ど全ての人間の全滅を原因とした、世界崩壊の危機。そして人間と共存関係にあった、神や妖怪の緩やかな死。

突発的な事態さえなければ、今すぐにどうなるものというわけではなかったが……しかしこのままであれば確実に、残り数十年も経てば幻想郷は滅ぶだろう。

しかしそのような状況を、この楽園の管理者が何の対策も取らずに看過するはずもなく。

その時幻想郷の端のどこかにある楽園の管理者、八雲の屋敷の一角では今、一人の人間が幻想郷の外から呼ばれようとしていた。

そしてそれを身動きの取れない主人に代わり成そうとしていたのは、道服のような服に身を包みひっそりと一人佇んでいた九尾狐の妖獣たる『スキマ妖怪の式』、八雲藍^{やくもらん}。

藍は今、緊張した面持ちのままに主人 八雲紫より預かった境界の力を行使するべく、慎重に集中力を高めていた。

「……」

万が一にも億が一にも、これを失敗する訳にはいかない。

もはや新たに主人から力を授けてもらうことは現状では不可能であり、そして受け取ることでできた力は人間一人分のみ。仮にこれを失敗してしまったとしたら、その瞬間に幻想郷の滅亡は確定されてしまうのだ。

「すー、はー……」

そして藍はまるで祈りを捧げるように目を瞑り深呼吸を繰り返した後、自身の集中力が最大へと高まったことを感じたその瞬間……意識と共にそれを解き放った。

この力を受け取った時に紫から受けた指示は、何故か人間の男を一人呼べという点のみ。そこには幻想郷の中なのか外なのか……世界の指定すらなされていなかった。

しかし境界の力は、紫の力であり彼女の象徴。そのためその力は八雲紫と強い繋がりのある彼女の扇の元へとそれを辿りながら、世界を越えて向かっていく。

そしてその力が向かった先は……現在の日本の首都、京都某所に住む人間、門倉甲斐のその足元。

そうなった原因は、彼がその時手にとっていた扇だけではなくもう一つ……彼の固有の能力にもあった。

甲斐が未だ自覚なく保持しているその能力は『全てを許容する程度の能力』であり、同時に『世界と等しくなる程度の能力』でもある。

そしてその能力は例え現実の否定に満ちた外の世界にあつてすら幻想の存在に限らずすべてを許容する。故に放たれた境界の力は漏斗の先にある穴へと収束していく水のように甲斐の元へと向かっていき、もつとも抵抗なく発動しやすいその直下にてその効力を発揮しスキマを開いたのだ。

「え、は……？」

直後、藍は幻想郷の救世主となるべく現れたその名も知らない人間に粗相がないようにと、その姿が現れる前から深々と頭を下げて待機し、できるだけ誠実に……かつ恭しい態度になるようにと心がけながら、

「まずは初めまして、と言っべきでしょうか。いきなりのことに混乱しておいでだろうし……貴方にはここがどこかも、今がどういう状況なのかも理解できていないと思います。ですが……、何を勝手なことをと貴方は思われるでしょうが、どうかその前に、私の話を聞いて頂くことはできないでしょうか」

と口上を述べた後、頭を上げる……と同時に、その姿を目にした瞬間藍はピキリとまるで石にでもなってしまったかのように固まってしまった。

「あー、なにがなんだか訳が分からねえが取り敢えず……どんなのでもいいから服を一着、先に貸してくれねえか？」

「えっ、あ、あ……いい、」

そして次の瞬間藍は「いやー！？！？」「つとまるで絹を裂いたような悲鳴を上げながら、反射的に目の前に立っていた素っ裸のままの甲斐の頬に全力のビンタをお見舞いしてしまう。

「うあぐえっ！？」

「て、あつ！ な、何をやってるんだ私は！？」

その後すぐに正気に戻った藍は思わずやってしまったと言わんば

かりに目を見開いて、全力で慌てながら潰されたカエルのような声を上げつつ吹っ飛んでいった甲斐の介抱をするのであった。

「本当に、申し訳ありませんでした！」

土下座であった。それはもう一片の曇りもなく完膚なきまでに潔い土下座であった。

あの後お互いの自己紹介を済ませてすぐに、藍は目にも留まらぬ勢いで地面に額をこすりつけて、それ以来ずっとこんな調子なのだ。そんな藍の自分に向けられた頭頂部を帽子越しに見つめながら、借りた着流しに着替えて座布団の上に腰を下ろしていた甲斐は、思わず苦笑を浮かべてしまう。

「まあ気にするなどは言わないし、確かに暴力はいただけなかっただろうと思うからその謝罪は受け取るけど……しかしまあ、いきなり素っ裸の男が目の前に現れたんだ。女性としてはありゃ、普通の反応だろ。ってことで別に俺は初めから怒ってないんだし、もう頭を上げてくれよ、藍さん」

「しかし……！」

甲斐たちの居るその部屋は、まるで時代劇の世界にでも入り込んでしまったかのように純和風の内装をしていた。故にある意味ではその土下座という行為は、この場には似合いすぎるほどに似合っているのだろうが……まず普通の神経をしていれば、初めから怒って

もないのにそんなことをされてしまったのは、むしろ居心地が悪くなるのは謝られている方であった。

まあ最初の騒動とその彼女の様子のおかげで、すっかり初めにあった驚きやら何やらは吹っ飛んでしまったので、その点だけは良かったのかも知れないが……だからと言っていつまでも、初対面の女性にこのようなことをさせてしまうのは気持ちのいいものではない。

だから甲斐はもう一度その口元に苦笑を浮かべた後、ポリポリと頬をかきながら未だ頑として頭を下げ続ける藍に向かって穏やかな雰囲気、彼女を説得するべく再度話しかけてみることにした。

「なあ、藍さん。俺は最初にアンタが言った通り、少し前まで家に居たはずの自分がどうしてこんな所に居るのか、それにここがどこなのかも、全く理解できてないんだ。だからこの状況がもしもアンタのやったことだってんなら、せめてその説明くらいは早くして欲しいし、それに……」

「そ、それに……?」

そこで一旦言葉を切ると、甲斐は目だけをこちらに向けてオウム返ししてきた藍にふっと軽い笑顔を見せて、

「アンタはもう十分反省して、自分が悪かったんだと思ってるんだろ? だったらこの上で俺がアンタを責めたとしても、そりゃあただの憂さ晴らしになっちまう。正直俺は、そういうのはあんまり好きじゃねえんだ。だからさ……できればもう謝るのはやめにして、そろそろ頭を上げてくれないか?」

「あ……」

こう言ってしまったは大げさに聞こえるかも知れないが、藍はこ

の時甲斐の言葉に心から安心し、さらには感激すらしてしまっていた。

もしも能力の行使に失敗してしまっていたとしたら。仮に成功していたとしても、まかり間違つて人間以外の存在が現れていたとしたら。そしてもし幻想入りして来た人間に話も聞いてもらえずに拒否されてしまっていたとしたら、もはや本当の意味で後がないとも言えるこの状況で……頼るべき主もおらず、幻想郷の存亡すらも自身の双肩に掛けられていたその重圧は、藍の精神を極限にまで追い詰めていたのだ。

そのため藍は例え現れた人間にどれだけの罵声を浴びせられようと構わないと思っていたし、仮にここに残る条件として己の体や命を差し出せと言われようともしも幻想郷のためなら甘んじて受けようと考える程度には、強い覚悟をしていたのである。

だのに実際にはむしろ、全てこちらの都合で勝手に呼び出してしまったというのに、動揺もしなければ驚きもせず、その上出会い頭にあんな事をしてしまったというのに、怒るところかその相手に気を使つてもらつてすらいたのだ。

いくら藍が長い年月を生きてきた力ある妖怪だとは言つても、これでも何も思うなというのが無理な話だったのである。

「ありがとうございます……本当にありがとうございます、門倉殿……」
「え？ あ、はあ……」

しかし甲斐はその涙すら滲ませた藍の様子に、きよとんと目を丸くして気のない返事を返すのみであった。

とは言えそれもそのはずで、これは甲斐にとってはいつも通り、状況を受け入れて自分なりに思ったことをただ口にしただけであり

…… かつ藍の精神状態など知りようはずもない甲斐にとっては、ここまで過剰反応が帰ってくるとは思っていなかったのである。

そうしてどこか感極まっていた様子の藍と、とりあえず先程の深刻な状態は脱したようだからまあいいかと納得していた甲斐の間には、しばしの間不思議な沈黙が流れていた。

しかしそれからしばらくした頃、ようやく完全に立ち直った様子の藍がおもむろに視線を上げてまっすぐに甲斐の顔を見返すと、先ほどとは打って変わった落ち着いた様子でゆっくりと口を開いた。

「もう、大丈夫です。すっかり取り乱してしまっただけで申し訳ない、門倉殿。それではまずは…… 門倉殿は外人なのだから、初めにこの世界…… 幻想郷がどういう場所なのかという話から、させていただくことにしましょう」

とその時、つい最近聞いた覚えのある単語に反応した甲斐は「ん……？」と小さく声を漏らして、

「幻想郷？ なんだ、ここってあの幻想郷なのか？」

思わずといった様子でそんなことを聞き返した。

確かに藍の背中に見えるもふもふとした九つの尻尾を見た時からその可能性は考えてはいたが、まさか本当にそうだとは思わなかった。

甲斐がそんなことを考えながら微かに目を見開いていると、直後に藍は甲斐のその言葉に当然疑問を感じて、訝しげに首を傾げる。

「ええ、確かにそうですが……」 あの” ということは門倉殿はもしかして、幻想郷のことを既に知っておられたのですか？」

「ああ、まあ知ってたといえれば知ってたんだけど…… だからと言っ

て、詳しく知ってたわけじゃあないからな。今はその辺の説明は後回しにして、まずは先にそっちから色々教えてくれないか？」

「そう、ですね。承知しました。それでは……」

確かにより状況を詳しく知っているのはこちらなのだから、先にそうしたほうが効率はいいだろう。そう判断した藍は甲斐の言葉に頷いて、一つ一つ噛み砕くようにわかりやすく、また丁寧にこの幻想郷とその現状について説明し始めた。

「……なるほどな。簡単に現状を整理すると……幻想郷が今は存亡の危機にあるから、その解決策として人間を増やすために俺に誰かと結婚して欲しい。できることならさらにそのまま複数人と関係を持つてもらって、その上で子どもを作って欲しいと、だいたいそんな感じなわけだ」

「はい。概ねその様に解釈していただければ、間違いありません」

藍から大体の状況を聞き及んだ甲斐は、すぐに返ってきたその肯定の言葉を聞いてから小さく頷いて腕を組み顎に手を添えると、暫くの間何事かを考えこむようにして沈黙した。

「どうでしょうか、門倉殿。もしも何か条件がありがたいようでしたら……この様な状況ですので、大抵のことはお受けする準備がこちらにはございます。それこそ、命に関わることであるうとも」

甲斐はその、真っ直ぐにこちらの目を見据えながら口にしてきた藍のセリフを、

「まず始めに、」

途中でピシヤリと遮るようにして、静かな口調で更に言葉を続けた。

「俺がこの幻想郷に残るか否かについては、無条件に受け入れるつもりだ」

「ほ、本当ですか!？」

あまりにもあっさりとした甲斐の了承の言葉に、藍は興奮した様子でつつい甲斐に詰め寄ってしまう。

その反応を見た甲斐は変わらず穏やかな雰囲気で頷くと、

「ああ、本当だよ。こんな大事なことで冗談を言うほど不真面目じゃないつもりだし、当然嘘をつくつもりも俺にはないさ。だから少し落ち着いてくれよ、藍さん」

そう言って軽く手を上げて、顔を輝かせて興奮してしまっていた藍を制す。

するとすぐに藍は「あっ」と声を上げた後我に返って、甲斐に小さく頭を下げると元の位置に座りなおした。

「いや、申し訳ない。お見苦しいところをお見せしました。しかし、それにしても……いえ、当然貴方の言を疑っているわけではないし、こちらとしては勿論そのお言葉は嬉しい限りなのですが……門倉殿は、本当にそれでよろしいのですか？」

「……そりゃあ当然、良くはないさ。だけど」

そこで甲斐は一度言葉を切ると、重苦しい雰囲気を目を瞑って沈

黙ってしまう。しかし藍は突然黙りこんでしまった甲斐を無理に急かすこともなく、焦らず次の言葉を同じく沈黙して待った。

そうしてしばしの間を空けた後に、甲斐がおもむろに口にした言葉は、

「仮に俺がここでその条件として、アンタの命が欲しいって言ったとしても……きっと藍さんは当たり前のように、さほどの躊躇もなく頷くんだろう?。」

どこかため息を混じらせた、だけどここの現状を確かに受け入れている……諦めとも似て非なる、納得を滲ませたそんな言葉だった。

「はい」

その時の藍の答えには……”然程の”どころか、一切の躊躇すら存在していなかった。その命すら厭わない強い覚悟を藍の真っ直ぐな眼差しと揺るぎない声から確かに感じた甲斐は、もう一度小さくため息を漏らした後、どこか仕方なさそうに肩をすくめる。

「なら、仕方ないさ。その様子じゃあ、仮にどれだけ騒いだとしても俺を帰してくれる気はなさそうだ。と言うかそもそもそのための手段は藍さんにはないんだろ? だったらそれに関しては、取り敢えず受け入れるよ」

そしてそう語った後甲斐は最後に、

「少なくとも今ここで、アンタに出す条件は俺にはないさ。まあ強いて言うのなら……暫くの間最低限の衣食住の保証くらいは、して欲しいところだけだな」

と付け足すようにそう言って、言葉を締めくくった。

「それは当然、言うまでもなく」

「だろうな……」

直後にあっさり強い頷きを返してきた藍の様子を見て、甲斐はまるで予想通りだとも言わんばかりにもう一度肩をすくめて吐息を漏らした。

衣食住どころか……現状を鑑みるに、おそらく最大限の安全の保証やきつとそれ以上のものですら、大抵のものは了承されてしまうのであるうことは想像に難くない。もちろん甲斐には必要以上のことを要求する心づもりはなかったが……そんな覚悟を見せられてしまつては、現状ではそれを受け入れざるを得なかった。

それになにより、仮に今すぐ帰る手段があつたとしても……自分がここを離れることでここが滅んでしまうのだという話を聞いた後に、何もしないで帰ることなど甲斐にはできようはずもなかったのである。

「しかしそれに関しては、ということは……」

「ああ。それ以外のことで三つほど、藍さんに頼みたいことがある」「分かりました。門倉殿の希望には、可能なかぎりお答えさせて頂くつもりですので……どうぞ遠慮なさらずに、気兼ねなく仰ってください。貴方には、それだけのことをしていただくのですから」

甲斐は藍のその、真っ直ぐすぎるほどに真っ直ぐで真面目な声と面持ちに内心で苦笑を浮かべながら、「それじゃ遠慮なく」と頷いた後にそれを告げることにした。

甲斐はあの後藍とすべての話を終えた後、一旦一人になってゆっくり考えたいと告げ、案内された個室の中で畳の上で胡坐をかきながら腕を組んで思案にふけていた。

その瞳に浮かぶのは、強い意志の光。

甲斐は初めから、この状況にただ何もせず諸々と従うつもりは微塵もなかった。

それは甲斐の本質の一つでもある、どんな時でも不変であるという性質を表すように……いつも通りに出来る限りのことをして、そしてその後に結果が出るまでは……全てを受け入れるつもりはなかったのである。

そのために甲斐があの後藍に出した条件は、二つ。

まず始めに、現状に時間的な余裕がなくなるまでは、誰とも関係を持たないし結婚もしないということ。ただしそれだけだと漠然としすぎているので、何事もなければ三年の間は自由にする、ということにした。

次に二つ目は、甲斐が必要とする知識を教えてくれることと、求めた質問には答えられる限り答えること。

そして最後にもう一つだけ、それとは別に出した条件というか、確認したことがあった。その内容は、己の唯一無二の家族であり今や妹のような存在……みくことに意思の確認をとって、彼女が了承したのなら同じく幻想入りさせることは可能かということだった。

(……だけど、やっぱりそれは無理だった)

それは先の話にもあった通り、藍には元々甲斐を幻想郷へと呼び込んだスキマを開くことは単独では不可能であったためだ。故にその話を聞いた時、藍は心底申し訳なさそうに他に代替案はないかと聞いて来たが……しかし甲斐にとってみくことの代わりなど当然有り得ないのだから、それはすぐさま断って前の二つだけを藍に頼むことにした。

(まあ……仕方ない、か。お互いが生きている限り、諦めるつもりはないけど……今は納得するしかないな)

これが死別やきちんとした別れならばそれも受け入れたが、今回のこれはそうではない。ならば甲斐がその過程を放棄することなどありえないが……しかし同時に、“現状では”それは不可能だという結果が出ているのだ。それを受け入れないのもまた、『門倉甲斐』には有り得ないのである。

(どちらにせよ……)

甲斐が現状の打破をするためには、この状況の最たる原因、藍の主人である八雲紫の開放をしなければならぬ。

幻想郷から元の世界へ帰るためにも、みくことと再会するためにも……そして幻想郷が滅ばないようにして、甲斐が納得してここから去るためにも……必要な道は、全てそこに集約されていた。

(後ひとつ、気になることと言えば……)

当然、ここ幻想郷に帰って来ているはずの、雛のことであった。現在幻想郷の管理は藍が引き継いでおり、それ故誰かが結界を通ったかどうかは基本的に把握している。なのに先週でのことを藍に説明した後に確認をとってみたところ、そのあまりの偶然に驚きながらも、彼女は幻想郷には帰ってきていないと言われてしまったのだ。

少なくとも、今の状況で博麗神社から結界を越えて来た存在を神であろうが人間であろうが藍が、あるいはそこに住む博麗の巫女が気づかないはずがないのだから、それはほぼ間違い無いと言われてしまった。

(一体、どうということなんだ……?)

ここ幻想郷に帰ってきているはずの、しかし結界を越えては来ていないという雛の行方。

藍の主人……紫を苛んでいる、また体に乗っ取られかねないという問題を解決する方法を探し、また封印を破る方法も見つけること。

色々と、考えなければならぬことややらなければならないこと。気になることは山積みだった。

(まあでも、結局のところ……)

今がどんな状況だとしても、やることは一つだけだった。己にできることを全てやって、考えられることは全て考えて……結果を受け入れ、過程を生きる。

それが

『不変の全てを受け入れる個人世界』

門倉甲斐の、在り方なのであった。

1話

幻想郷にある妖怪の山の麓、霧の湖の畔には、館全体が赤い色調に統一された大きな洋館が存在する。

その名も『紅魔館』。それが五〇〇年の長きを生きる強大な吸血鬼を当主と戴く、悪魔の館の名であった。

「咲夜」

「はい、お嬢様」

その館の最奥部、外装と同じく赤く紅い当主の部屋の中に、静かに佇む二人の人影の姿があった。

一方は優雅な仕草で椅子に腰掛け己の従者を見つめる吸血鬼、『永遠に紅い幼き月』レミリア・スカーレット。そしてもう一方は己の主人の傍に恭しく控えている幻想郷でも数少ない生き残りの人間、『完全に瀟洒な従者』十六夜咲夜。

「例の人間が呼ばれるのは、たしか今日のはずだったわね」

「はい。八雲からは、確かにそうと聞いております」

「そう。……本当に、いいのね？ 咲夜」

「当然です。この身は既にスカーレット家の……そしてお嬢様のためにあるのですから」

今の幻想郷の現状で、純粋な人間を抱える勢力が”それ”をしないのは、今は良くとも未来の紅魔館にとって大きな弱点となりうる。故にそれを全て理解していた咲夜は主人の問いに微塵の躊躇もなく是と答え、そしてその答えを聞いたレミリアは表情を曇らせた。

「そんなお顔をなさらないください。私は納得しているのですか

ら……、お義母様」

「。アナタが私のことをそう呼ぶのを聞いたのは、久しぶりね……」

咲夜のその、今ではほとんど聞くことのなくなった呼び名を耳にしたレミリアはそつと瞳を閉じて口をつぐみ、そして咲夜は主人の次の言葉を待つ。

と、次の瞬間。レミリアは唐突にそれまでの威厳に満ちた態度と秀囲気をかなぐり捨て、ガーツと椅子から立ち上がると大きな声で、

「あーもう、コンチクシヨウ！ どうしてどこの馬の骨とも知らない男にうちの咲夜をあげなきゃならないのよ！！ ホント気に食わない！ これはもう、すつごく気に入くないわ！」

そんな親バカ丸出しのセリフを口走り始めた。

「咲夜！」

「あ、え？ は……、はい？」

「もうこうなったら私が直々に、その男が咲夜にふさわしいのか見定めてやるわ！ 最初に会うのは流石に霊夢に譲るしかないと思うけど、明日になったらさすがにそいつをここに連れてきなさい！」

「えっ、あ、あの……お嬢様、どうか落ち着いてください。先日八雲から、当分の間は妖怪に限らずその人間には同じ人間以外不干渉をと忠告されて」

そうして突然爆発しだした主人に驚いて若干オロオロしながらも、咲夜はどうにか落ち着かせようと説得を試みるが、それは一向に効果を成さずむしろレミリアの興奮を煽る結果に終わってしまう。

「そんなもん、むこうが自分から納得してここに来たってことにすればいいでしょ！ いいから適当に丸め込んでさっさとここに連れてきてついでに一発殴らせなさい！ でないとお母さん、絶対にアナタの結婚なんて許しませんよ！！」

とその時、

「はいはい。気持ちはわかるけど、まずは落ち着きなさいなレミイ。アナタがいきなり分けのわからないことを言い出すから、すっかり咲夜が困ってるわよ？」

そんな落ち着き払った冷静な声が何処からか聞こえてきて、レミアの背後からまるで太陽のような輝きを放つ光線が飛んできた。

「ぴぎゃ！？」

レミアはそれに背中を焼かれて飛び上がり、よくわからない悲鳴を上げながら慌てて背後に振り返る。

「ちょ、ちょっとパチエ！ いくら私でもそれは普通に痛いんだけど！？ ていうかいつの間そこに！！」

「別に、またレミイが暴走したら困るからって、念のために気配と姿を消して監視してただけよ。案の定だったけどね。……それにしてもまったく、レミイは短絡的なんだから。そんなことしたら、あつという間に紅魔館が幻想郷中の敵になっちゃうわよ……」

そんなことを口にしながら、レミアの背後に立ってその背中に手をかざしていた少女の名は、『動かない大図書館』パチュリー・ノーレッジ。

「いい？ こついう時はね」

それは冷静にして冷徹なる魔女の名であり、彼女は幻想郷でも有数の知識人であったはずなのだが……

「冷静かつ慎重に、外堀を埋めて状況をクリアにしてから抹殺するのよ」

どうやらそれは、偽りだったようだ。

もしかして紅魔館とは悪魔の館ではなく、親バカが代名詞だったのだろうか？

「なるほど、さすがパチエ！ それでこそ私の友達だわ！」

そして味方が増えたレミリアは、すぐにまるで我が意を得たりと言わんばかりに表情を明るくしてぐっと親指を立てるが、その直後

「いや、なるほどじゃねーですから。いい加減落ち着いてください
つてば、お二人とも」

という声がある場に響いて、二人の頭に突然げんこつが飛んできた。

「あ痛ッ！？」

「むきゅ！？」

そうしてこの部屋に最後に現れ、拳から煙を出しながら呆れ顔をしているのは紅魔館の最後の良心、『華人小娘』紅美鈴。彼女はのんびり屋さんで基本抜けている性格をしているのだが、しかしこつ

いつ時は頼りになるようである。

「まあでも……お嬢様やパチユリーさんじゃないですけど、一度その方を見てみたいっていうのはわたしも同感ですね。咲夜さん、やっぱりそれは難しそうですか？」

「ああ、美鈴までついにそんなことを……」

そう言っただけで咲夜がため息を吐きながら肩を落とすと、それを見た美鈴は軽く両手を上げて苦笑しながら首を横に振り、

「いやいや、わたしはお二人みたいに無理を言うつもりはないんですよ？　ですけど……馬の骨云々は置いとくとしても、咲夜さんが全くどんな人かもわからない人間といきなり結婚……どころか妾にさせられちゃうだなんて気に入らないっていう気持ちは、わたしにもわかりますし」

と自身の考えを語り始めた。

「……というかそもそも話、呼ばれた人間の男っていうのがまだどういう反応をしているのかもわかっていませんから、その辺の事情も把握しておきたいっていうのが本音ですかね？　もしかしたらその人の性格次第では霊夢さん以外とは結婚しないとか、誰と誰は妾にするとか……そんな話になりかねないんですし」

「それは確かにそうだけど……なにせよ急な話だから、その人間もまだ落ち着いてないはずでしょう？　よっぽどの変わり者でもない限り、明日なんていうのは無理だと思っただけよ？」

因みにその時美鈴のセリフを横で聞いていたレミリアは、

「なに、うちの咲夜のどこに不満があるっていうのよ！？　そんな

わけないでしょ！ 来たのがどんな人間だって、男だったら咲夜を選ばないわけ無いわよ！」

と喚いていたが、それは二人ともスルーしていた。

「まあどちらにせよ明日、一度博麗神社には行ってみるつもりだから……それで様子を見て、相手の出方次第で決めるということにしましょう」

「そうですねえ。それが一番無難なところでしょうか。まあなんにせよ、今はどうしようもない話ですし」

とそこで美鈴が言葉を切って目を合わせてきたので、その視線の意味を理解した咲夜はもう一度ため息を吐いてから頷いて、

「まずはお嬢様とパチュリー様が暴走しないように、説得しないといけないわね……」

部屋の隅で何やら顔を突き合わせてああでもないこうでもないとい抹殺計画を立てているレミリアとパチュリーを止めるべく、まるで戦場に向かう兵士のような表情を浮かべて二人の元へと足を向けた。

1話（後書き）

今回は短め。……というか、紅魔館工……
第一話にしてどうしてこうなった。

2話

「ん……？」

今一瞬、何か悪寒のようなものを感じた。

一体何なのだろうか、この……どこかで自分を襲撃する算段でもされてるかのような嫌な予感。

(……て、んな訳ないか)

この情勢で、自分のことをそういう意味で害そうとする存在が早々居るとも思えないし、ただの考え過ぎだろう。

そう考え直して甲斐は思考を打ち切ると、もう一度藍と話をすべく立ち上がって廊下へと出る。そうして甲斐の目に映ったのは、いかにも日本家屋らしい見事な庭と、青く抜けるような空に浮かぶ太陽の姿。

(幻想郷にいようが外にいようが、やっぱり夏の暑さと空の青さだけは変わらないもんなんだな)

更に聞こえてくるのは、もはや都会の中ではめったに聞くことのないであろう、ジー、ジーっというセミの声。

「んー、風流だねえ」

ついでに何処からか聞こえる風鈴の音、何てのもあるとなお良かったな……などと考えながら、甲斐が前を向きなおして廊下を歩くべく足を一步前に踏み出した、その時、

(……?)

なんとなく、誰かの強い視線を感じて再び足を止める。
今度のはさっきの冗談のようなものではなくて、もっとハッキリとした感覚だった。

(気のせい……ならいいんだけど)

いかに現状の幻想郷にとって甲斐の存在が重要だといっても、それは必ずしも安全と繋がるものでもない。

藍はそんなつもりはなかったようだが、例えば甲斐を無理やり生かさず殺さず監禁して最大限利用する、という方法だってあるだろうし、幻想郷全体を一枚岩に考えるのは危険過ぎる。

こう言っただけだが、要は甲斐の体さえ健康であればいいのだ。危険視はされるだろうが、その身柄を確保して独占できればその勢力はかなりの地位を得られるだろう。

とは言え実際のところは、八雲の屋敷はほとんどの者にその所在地すら知られておらず、かつ結界によってその場所が特定されないように厳重に保護されているのだが、当然そんなことを知らない甲斐は念のために警戒を怠らず油断なく周囲を見渡した。

と、次の瞬間。

「おい、お前！」

がさりと庭の一角にある茂みの中から、一つの人影が飛び出して甲斐にビシリと指を突きつけてきた。

(? 子ども……?)

藍とは色もデザインも違うが、恐らくは道服と呼ばれる大陸由来の服。被っている帽子から覗く猫のものらしき耳と、背中であふよふよと揺れる二股の尻尾。多分化け猫……もしくは猫又と呼ばれるたぐいの妖怪だろう。

（種族は違いそうだし、まさか藍さんの子どもじゃないだろうけど……。と言うかこの子も妖怪なら、見たままの歳じゃない可能性のほうが高いのか。一応警戒はしておくべきかな？）

そんなことを考えながら、甲斐は突きつけられた指を見て首を傾げる。

「えっと……どちらさんかな？ 俺に何か用事でも？」

「うるさい！ そんなことより、えーっと……お前が藍様に呼ばれた人間の男で間違いないな！」

「ん？ ああ、そうだけど……それがどうかしたか？」

甲斐がそう言って再び首を傾げた所で、背後からいきなり、

「あつ、橙！？ どうしてここにお前が居るんだ！ 今は来てはいけないと言っておいただろうっ」

という、それほど厳しくもないが、しかし確かに説教の色が混ざった藍の怒声が飛んできた。

「う……だ、だって藍様が……」

直後に橙ちえんと呼ばれた少女は、先ほどまでの勢いも何処へやら、シンと小さくなってモゴモゴと口ごもる。

「ふむ……」

そして甲斐は未だ目くじらを立てている藍と落ち込んでしまっている橙を順番に見やると、腕を組んでそつと顎を撫でた。

「なあ、藍さん」

「あ、ああ……申し訳ない、門倉殿。お恥ずかしいところを見せてしまった。……それで、何でしょうか？ 何か気になることでも？」

「いや、気になることって言うかな……」

甲斐は藍の言葉にぱりぱりと頬をかきながら、

「まあそつ頭ごなしに怒らないで、一度話を聞いて上げるくらいのこととはしてもいいんじゃないか？ 状況を見るに、その子は藍さんが保護者か何かをやってる子で、それでその子は藍さんの言いつけを破ったって感じなんだろうけど……、見た限りじゃ、何か理由がありそうだ。まあ身内の話に口をはさむなといわれたらそこまですし、そつ言われたら黙るけどさ」

と言った後、その是非を確認するように藍の眼を見返した。

その甲斐の眼差しに、藍はピタリと動きを止めて、

「む……。いえ、そのようなことを言つつもりはありませんが……」

とまるで独り言のように呟いた後、小さく頭を振った。

「……そうですね。私も状況が状況なだけに、少々神経質になってしまっていたのでしょうか。確かに理由を聞くくらいのは、しても良かったかも知れません」

そして藍はゆっくりとした動作で橙の元へと歩み寄ると、腰を屈めて目線を合わせ、

「なあ、橙。どうして私の言いつけを守らないでここまで来たのか、教えてくれないか？ 何か理由があつたんだらう？」

と先ほどとは打って変わった穏やかな態度で問いかけ、橙の次の言葉を無言で待った。

「だって……」

「ん？」

「だって藍様が、その人間にこっちが大きく出れないからって苛められるんじゃないかとか、意地悪されてるんじゃないかと思つちやつて……」

「あー……」

その言葉を聞いて、甲斐は思わず納得してしまった。甲斐自身にももちろんそんなつもりはなかったが、しかし確かにそれは十分ありえたかも知れないことだろう。

とは言え藍は気が気でなく、それを聞いた瞬間若干慌てて、

「こ、これ、橙っ。あまり失礼なことを言うものでは……」

と咎めるが、橙はそんなものはお構いなしに言葉を続ける。

「でもでも、藍様の分のご飯を取られちゃってるんじゃないかとか、大事な尻尾を引っ張られてるんじゃないかとか……もしかしたら想像もできないようなもつとひどい事もされてるんじゃないかって考えたら、もう橙は心配で心配でたまらなかつたんです！」

「橙っ！ 門倉殿はそのようなことをする方ではないぞ！ 謝りな

さい！」

「だけど今はそうでも、もしかしたら騙されてるかも知れないじゃないですか！？」 紫様は人間はすぐに嘘をつくから気をつけなさいって、いっつも言っていました！」

あまりこういう話に他人が入るのも何だが、だからと言って自分が原因な上……なんだか二人ともすっかり興奮してしまっていて、このままだと収集がつかなくなってしまいそうだ。

そう思った甲斐は、一旦二人を宥めるべく手を上げながら間に割って入っていく。

「まあまあ二人とも、ちょっと落ち着いてくれよ」

その様子を見た藍はすぐに矛をおさめてうっとうしく口を噤んだが、橙はまだ興奮した様子で甲斐を睨みつけていた。

そんな橙に甲斐は腰を屈めて視線を合わせる時、

「初めまして、だな。俺は門倉甲斐っていうんだ。そっちの名前も、教えてくれないか？」

と穏やかな表情のままに話しかける。

「……橙。苗字はなくて、ただの橙だ」

「ん、そっか。それじゃあ……呼び捨てとちゃん付けと、どっちで呼んだほうがいい？」

「……別に、好きに呼べばいいだろ」

そのぶっきらぼうな橙の態度に藍はもう一度咎めるべく口を開く。うとしたが、甲斐はそれを視線で制すと、

「じゃあ、橙ちゃん。さつきはあんな事言っただけだよ……橙ちゃん
の目から見て俺って、そういうことをしそうな人間に見えるのか
？もしそうだったんなら、まあ仕方ないにせよ多少シヨックなん
だけど……」
「え……？」

甲斐が静かな口調で語ったその言葉を聞いて橙はジーっと甲斐の
目を見つめていたが、しばらくしてから未だにちよっと不機嫌そう
に口を開いた。

「今はまだ、そういうことをしそうな感じには見えないけど……」

それを聞いて甲斐はほっと安心したように微笑を浮かべ、「良か
った」と呟きを漏らす。

「それなら……少しくらいは、信じてくれないか？ ちゃんと約束
するからさ。俺は藍さんを絶対いじめたりなんかしない、って」

「……ホント？」

「ああ、ホントだ。それでもまだ信じられないんだったら、そうだ
な……この際だから、一緒に指切りでもしようか。約束を破らない
ための、約束だ。それだけしたら、もう安心だろ？」

「……。……分かった」

しばしの沈黙の後橙はコクリと頷くと、甲斐の差し出した指を少
しの間見つめてからそこに指を絡める。

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲ーます。指切った」「」

そして甲斐は顔を俯けて自分の手に視線を落としていた橙にから
りと笑顔を見せると、

「それじゃあこれでこの話はおしまいってことで……」その後、橙ちゃんはどうするんだ？」

ともう一度声をかけた。

「……もう、帰る」

すると橙はそれだけを言い残して、ぷいっと顔を逸した後猫らしい身軽な動きでぴょんぴょんと木から木へと飛び移りながら去って行った。

「あ、橙っ。ちゃんと門倉殿に謝罪を」

それからすぐに藍は橙を引き止めるべく手を上げて口を開いたが、しかし橙の姿はあっという間に見えなくなってしまふ。

「まったくもう……」

そして藍は小さくため息を吐いて肩を落とした後、甲斐に向かって頭を下げた。

「申し訳ありません、門倉殿。あの子も悪い子ではないのですが、私の式だというのにどうしてか中々言うことを聞いてくれなくて…

…」

「はは、別に気にしてないさ。この状況じゃあ、ああ思うのも無理は無いしな。それどころか、いい子じゃないか。駄目だって言われたのに、藍さんが心配でわざわざ見に来たんだろ？」

「……」

藍自身の気はまだ済んでいないが、甲斐は気にした様子もなく、それに橙の気持ちは嬉しかったし否定もできない。そんな複雑な思いが胸中に渦巻いていてなんと行っていいものかわからなくなってしまうた藍は、困ったように曖昧に笑って見せてからもう一度小さく頭を下げた。

すると甲斐ももう一度軽い笑顔を見せて、藍に気にするなと首を横に振って目元を緩めた。

それから少しの間二人の間にはなんとも言えない沈黙が流れたが、数瞬の後に甲斐があつと何かを思い出したように口を開いてその沈黙を破った。

「そうだ。そういや元々藍さんに話を聞きたくて部屋から出たんだつた。藍さん、今時間は大丈夫か？ 何か用事があるようだったらまた後にするけど」

「ああ、そうだったのですか」

すると藍は合点が行ったように頷いて、

「それでしたら、丁度昼食の準備が済みましたので……食事をとりながら話をする、というのはどうでしょうか？ 私の方からも少々、門倉殿にお話しておきたかったことがあったので」

「あ、もうそんな時間か。わかった。それならそうしようか。……つていうか俺の分も用意してくれたんだな。ありがとう、藍さん」「いえ。この程度、当たり前のことです。門倉殿にはずいぶんと、大変なご迷惑をお掛けしているのですから……」

その真面目過ぎる藍の台詞に、甲斐はつい苦笑を漏らしてしまう。

「それはそれ、これはこれだろ。そんな固く考えなくてもいいと思っけどな。俺が勝手に感謝してるっただけだし。……まあなんにせ

よ、それなら先に案内してくれるか？ せっかく作ってくれたつのに冷めちまつたら、もつたないからな」
「わかりました、こちらです」

そう言つて藍は頷くと、踵を返して甲斐に背を向け食卓に案内するべく歩き始めた。

その道すがら、

「そういえば、藍さん。さつきちょっと気になったんだが……橙ちやんは苗字がないつて言つてたし、家も何処か別にあるみたいだったけど、妖怪つて家族と一緒に暮らしたりはしないのか？」

「ああ、そういう訳ではないのですが……八雲は幻想郷の管理者としての名ですので、その仕事をしていないあの子にはまだ与えられていないのです。家もそのためこととは別に。とは言え寝泊まりはしていないというだけで、大体は一緒に過ごしているのですが」

「へえ、そういうものなのか。中々複雑なんだなあ」

などという会話をしていたが、程なくして真ん中にテーブルの置いてある部屋に着いたので、甲斐は藍の「どうぞそちらにお座りください」という指示に従つて既においてあつた座布団の上に座る。

「それでは少々お待ちを。すぐに食事をお持ちしてまいりますので」
「あ、何だつたら俺も手伝うけど」

そう言つて腰を浮かしかけた甲斐に、藍はいやと首を横に振り、

「いえ、大丈夫です。どうか門倉殿はそのままです」
「ん、そっか。分かった」

その言葉を聞いた甲斐は素直に座り直すと、身を翻して去ってい

った藍の背中であぐらをかき尻尾をなんとなく目で追いながら食事を待つ。とすぐに藍がお盆の上に湯気の立つ美味しそうな食事を持ってきて食卓に並べ始めたので、それを受け取った後箸を手に取った。

「それではどうぞ、召し上がってください。門倉殿のお口に合えばいいのですが」

そう言った藍の手元には何もなく、甲斐は思わず首を傾げて、

「あれ、藍さんは食べないのか？」

と疑問を口にしてしまう。

すると藍は「ええ」とどこか深刻そうな面持ちで頷いた。

「人里の人間がほぼ全滅してしまったせいで、幻想郷の食料事情はあまり良いものとはいえませんから。幸いこの身は妖獣。普通の食事はただの嗜好品のようなもので、無理に食べる必要もありませんので」

「なるほどな……」

甲斐は納得したように頷くと、手にとっていた箸を食事に……伸ばさなかった。

「それなら藍さん、ここにあるものを半分こにして一緒に食わねえか？」

「は……？ いえ、しかしそれでは門倉殿が……」

甲斐のその言葉に藍はすぐに首を横に振るが、

「まあそう言わないでくれよ。……実はうちには一人メイドがいる

んだけど、そいつは必要な時以外物を食べられない体質でさ。だから一人で食事するのはわりといつものことなんだけど、けどだからこそなおさら誰かと一緒に食べるのは好きなんだ。それにほら、ここにあるものはもう調理した後の物しかないんだから、俺が食べようが藍さんが食べようが食料事情には関係ないだろ？」

仮に藍の分も新たに作って一緒に食べようという提案であったのなら、これ以上食料を無駄に消費する訳にはいかないと断ることもできたが……これではそれもできない。

そのため藍は何と断ったものかわからずに迷っていたが、

「もちろん藍さんが俺と食事するのが嫌だっていうんなら、これ以上無理に言う気はないけど……、やっぱり駄目か？」

最後に伏し目がちに告げてきた甲斐のその言葉に、とうとう折れてしまって自分の分の食器も持つてくるのであった。

2話（後書き）

作品とは関係ない話ですが、こうやって自分で投稿するようになってランキングに入るような作品ってすごいなあと以前より思うようになりました。

まだまだ力不足だけど、いつかはそのレベルに至りたいものです。

3話

「とまあ、そういうことですので……可能な限りできるだけ、最初に婚儀を結ぶのは博麗の巫女、博麗霊夢とにしていたきたいのです。それと子供のことに関しても、できれば初めは霊夢との子を成していただきたい。その後の事についてはこちらから、無理に頼むことはないのですが……最低限それだけは、どうかお願いしたいのです」

「……なるほどね。大体の事情は分かったよ」

食事がてら幻想郷の勢力状況や、博麗神社の立場、重要性などを説明された後に藍から出てきた言葉がそれだった。

藍も甲斐から時間制限などを出された時点である程度その意図は理解しているのだろうが、しかしそれは初めから期待していないのだろう。とは言えそれは甲斐を低く見ていると言うよりはむしろ、それだけそれが困難だということなのだろうが。

初めからそれができるのなら、藍や幻想郷の他の住人がとうにやっていただろうし……しかも今となっては紫の封印場所は、その式である藍ですら知らないらしい。これだけ悪条件が揃っていれば、確かにそう思うのもうなずける。

「まあその時が来たとしたら、俺から言うことは特に無いかな。状況が状況だし、異論なしだ」

「……そうですか。ありがとうございます」

ちなみにこの後二人は、先の話に出た博麗神社へと向かうことになっている。

藍としては本当ならこの屋敷で甲斐の面倒を、と言いたい所ではあったが……今の甲斐はある意味では極大の爆弾のようなもの。た

とえ管理者たる八雲といえど、甲斐が特定の勢力に肩入れするような状況になってしまふのは、後の幻想郷にとって大きな憂いとなりうる。

それにいくら八雲であると言った所で、藍も同じ妖怪であることには変わらないのだ。人間以外は不干渉をと言い渡した側だということに、特別な理由がない時にまでそれを自分からおいそれと破るわけにも行かない。

そういったその他もろもろの事情があるため、甲斐が今後寝泊まりするのは完全な中立地帯である博麗神社にして欲しいのだそうだ。

「ところで……私の方はこれで終わりですが、門倉殿からの話というのは一体何だったのですか？」

藍のその言葉に甲斐は顔を上げると、「ああ」と小さく頷いてから口を開いた。

「ちょっと聞きたかったんだけど……藍さんって、マエリベリー・ハーンっていう名前に聞き覚えはあるかい？」

その質問の意図は、その能力の類似性にあつた。メリーは境界が見えるだけで操りこそ出来なかつたが、しかしそれを操ることができるという八雲紫と全くの無関係とも思えなかつたのだ。

しかし藍はその名前を聞いた直後にきよとんとした顔で首を傾げて、

「マエリベリー……と言うと、日本ではなく西洋の名前でしょうか。そうですね……、……特に心当たりはないのですが、その者がどうかしたのですか？ 必要なことでしたら、お調べいたしますが」

と更に質問を重ねてきた。

しかしそれを聞いた甲斐はすぐに首を横に振って、

「いや、知らないんじゃないんだ。それほど重要な話でもないし、半分以上興味本位みたいなもんだったからな」

「はあ……そうですか。では、他には何かありませんか？ 門倉殿の質問には可能なかぎり答えるといふ約定がございますから、まだ何かおありでしたら気兼ねなく聞いてください」

「んー……、いや。今のところは、特に無いかな」

そう言っただけで藍の問いに否定を返し、甲斐は首を横に振った。

「分かりました。それでは食事も済みましたし……そろそろ博麗神社へと向かうことにいたしましょう。少々準備をしまいいりますので、ここでお待ちください」

「ああ、了解」

甲斐が頷いたのを確認してから、藍は立ち上がってお辞儀をした後部屋から去っていった。

(それにしても……博麗神社、か)

どうにも甲斐には、よほどそこの縁があるらしい。そしてそれと同時に、雛から聞いた話が甲斐の脳裏に過っていく。

(確か幻と実体の境界と……博麗大結界、だったか。藍さんは言わなかったけど……多分そこからでも外にはでられるはずだな)

そしてその方法ならば、甲斐は紫を解放せずとも幻想郷からでられるのだ。

その事実を、藍は甲斐に伝えなかったが……だからと言って、嘘

はついていない。甲斐からはそれについて質問していないし、初めから”自分には”その手段がないとしか言っていないかったからだ。もちろん嘘を吐いていなければいいというものでもないが……今の幻想郷の状況を考えるにそれもやむなし、といったところだろう。

(とはいえ、だ)

仮に現状でここから甲斐が抜けだそうとしても、間違いなくどんな手を使っても止められるだろう。それこそ、余裕がなくなったら強硬手段にすることも考えられる。

そしてそうされないようにするためには……

(見つからないようにする、というのは多分不可能。なら、世界に同化したっていう人間を助けるしか無い)

そうすれば甲斐には価値がなくなるのだから、幻想郷から出ようとも問題はなくなる。

(……だけど、正直それは現実的じゃないな)

世界に同化してしまった人間を、元に戻す。言葉にすればそれだけだが、一体どうすればそんなことがなせるのか。それならばまだ、それを実際に実行させられてしまったという八雲紫に頼ったほうが現実的だろう。

それに正直な所、もう知ってしまった以上この状況を放り出していつてしまうというのは甲斐には無理そうだった。雛の時と、それは変わらない。自分の出来る限りの事をした後ではないと、自分を受け入れられなくなってしまうから。

だけど同時に、それをした上でそれでも世界が滅んでしまうとい

うのなら……きっと甲斐はそれすらも、最後には受け入れてしまうのだろう。

(あ、来たか)

と、その時丁度、藍が何かを腕いっぱい抱えながら戻ってきたので、甲斐は顔を上げ視線を彼女に移して考えるのを止め、座布団から立ち上がり藍の元へと向かっていった。

「えー、これがまず、防護結界の護符と身体強化の護符。屋敷の結界を抜けられる識別符と、安全祈願に、通信用の符と……万が一危険が近づいたら私を自動的に呼び出せる式符。あとそれから……」

ブツブツとつぶやきながらドサリドサリと藍が目の前に何かを積み上げていくのを見て、甲斐は思わずぽかんと口を半開きにしながら目を丸くしてしまう。

「あの、藍さん？ 確かに心配なのは分かるんですが……いくら何でもこんな量、俺一人じゃ持ち切れないんですけど……」

そして何故か敬語になりながら甲斐がそう告げると、藍ははっと顔を上げて恥ずかしそうに頬をかいた。

「あっ、ああ、そうですよね……申し訳ない。それならえっと、これとこれを合わせて、これの一部を簡略化して、それから……」

その後も何度かまるで、『過保護な母親とそれに苦笑する息子』
のようなやり取りを繰り返して、甲斐の持てる限界まで色々と荷物を渡された後ようやく博麗神社へと出発する事になったのだが……

(…………お、お姫様抱っこ…………)

当然甲斐は空など飛べないので、移動のためには仕方ないかと大人しく動きを止めて抱えられるのを待っていた結果がそれだった。

「どうかされましたか、門倉殿。なんだかやけに顔が引き攣っておられるが」

「いやあ、なんて言うか……自分の足で歩く気もないのに文句言っ
て悪いんだけどさ、出来ればこの抱え方は勘弁して欲しいかな？

これならまだ、荷物みたいに肩に担がれたほうが正直ましなんだ
けど…………」

「？ そうなのですか？ 分かりました。ではちょっと失礼して……

……

で、次にされたのが、

「…………今度は抱っこ…………」

自分より背の低い女性に大の男が抱っこされている姿。超シユールである。これはひどい。

「ごめん、藍さん。文句ばかり言って申し訳ないんだけど、できれば脇に抱えるか…………それが無理そうだったら、せめて背中に背負ってください」

そして甲斐は再び頬を引き攣らせながら、思わず藍にそう頼み込んでしまう。流石の甲斐も、そうしなければならぬ理由もないというのにこの体制は勘弁願いたいのだろう。

「はあ。門倉殿がそれでよろしいのであれば、私は構いませんが…

…」

「それをお願いします。超お願いします」

とまあそんなこんなで随分と時間がかかってしまったが、それからすぐにもう一度甲斐の事を小脇に抱え直して、ようやく二人は八雲の屋敷を発つたのであった。

3話（後書き）

思ったより短めになってしまっただけ区切りが悪いかも知れないので、もしかしたら近い内に前の話と一緒にしてまとめるかも知れません。

4話

「カーチャンのためならエンヤコラエンヤコラ、トーチャンのためならエンヤコラエンヤコラ、っと」

「なんだか随分と楽しそうですね、文さん」

「いやあ、農作業なんて今までやったことなかったけど……意外とこれはこれで、なかなか楽しいものだと思うってね」

この言葉通りにやけに楽しそうな笑顔を浮かべてながら額に浮いた汗を首に巻いたタオルで拭いているのは、妖怪の山の鴉天狗『伝統の幻想ブン屋』しゃめいまるあや射命丸文。背中に見える美しい烏の濡羽色の翼が映える、好奇心旺盛そうな顔立ちをした天狗の少女である。

そしてその隣に立つのは哨戒天狗、いぬはしつともみ犬走椋。彼女は文の部下で、白い毛並みの狼の耳と尻尾を生やした、白狼天狗と呼ばれる種族の少女だ。

「はあ。相変わらず文さんは変わり者ですねえ。他の大体の天狗は、ずっとブツブツ文句を言いながら作業してるっていうのに」

そう言いながら椋が見渡した先には、人里のすぐ側に広がる農作物が植えられた畑と、そこで農作業に勤しんでいるどこか暗い表情をした山の妖怪たちの姿があった。

何故妖怪たちがこんなことをしているのか。その理由は当然今の幻想郷の状況……人間の価値の上昇に原因がある。

元々妖怪の山は、幻想郷の中でも最大勢力の一つであったのだが、しかし同時に頭に”妖怪の”と付くことから分かる通り、当然その組織内部に人間など存在していなかったのである。そのため山の首領である天魔は未来の山の地位を保つために藍と協議して、人手が

無くなってしまい荒れてしまうであろう田畑の管理と、主にそれを必要とする生き残りの人間たちへの食料の配達を請け負うことにしたのだ。

「それはそれは、もったいない話ねえ。なんだって興味を持って取り組めば、退屈なんて感じないのに。せっかく今までにないことができるんだから、これもいい経験だと思ってそのまま楽しんじゃえばいいのよ」

その文のセリフを聞いて、椛は呆れたような感心したような、そんな微妙な表情を浮かべて、

「そこまで前向きに考えられるのはいくら妖怪広しといえど、きっと文さんだけっすよ……」

と小さく肩をすくめた。

「そう?」

「ええ、そうです」

そう言っただけで椛が頷いたのを最後に、二人は会話をやめて再び作業へと戻った。

しかしそれからしばらくした頃……突然文が「ん?」と声を漏らした後空の遥か彼方をじっと見つめたので、

「? 文さん、どうかしましたか? 向こうに何かありました?」

と椛が再び声をかける。

「うん。ほら、あそこ。あそこに居るのって多分……八雲の妖獣よね？　なんだか脇に誰か抱えてるみたいだけど」
「え、ホントですか？　ちょっと待ってください。今確認してみますから」

そう言っつて椀は目を瞑ると、「んー」と小さく唸りながら能力を行使した。

彼女の能力は『千里先まで見通す程度の能力』。それはその名の通り、目を使わずに遠くまで見通すことができる能力で、哨戒天狗としては中々に便利なものである。

そして椀が偵察監視何でもござれなその能力を使った先に居たのは、博麗神社の方へと向かって飛んでいく藍の姿と、さらにその脇に抱えられている一人の人間の男の姿だった。

「ああ……なるほど。どうやら八雲さん、ちゃんと外の世界の人間の呼び出しには成功したみたいですね。あの方向からして、もう説明とかは終わって多分今から博麗神社に連れていくところなんですよ」

「ほほう……？」

その瞬間、キラリと文の目が怪しく光った。

「ねえ、椀」

「……なんすか、文さん」

その時椀は、ものすごく嫌な予感がしていた。何故ならこちらに話しかけてきた文の浮かべていた表情が、何か良い事　文にとっては　を思いついたとでも言わんばかりのニンマリとしたい笑顔だったからである。

「わたしつてさ、だいぶ前から進んでやってたから……もうかなり働いてたと思わない？ それこそそこら辺に居る、天狗二人か三人分くらいはやったと思うんだけど」

「……それは確かに、否定はできませんね」

事実文は楽しそうに、かつかなりのペースで畑仕事をやっていたので、彼女に割り当てられていた部分の作業はほぼ終了していたのだが

「じゃあ、もうやらなくてもいいよね？ ってことでわたしちょっと八雲とあの人間を追ってくるから、後よろしく」

だからと言って、まだ時間は終わっていないのだからサボっていいとはならないだろう。

「ええ！？ ちょ、そんな理由になりませんか！ 今のこの状態でサボりとか文さん、正気ですか!？」

「だって気になるんだもんっ」

直後に返って来た、頬をぷつつと膨らませながらの文の言い訳になつてない言い訳に、椛は愕然とした思いで反射的に突っ込みを入れてしまう。

「何ちよつとぶりっ子して可愛く言ってるんすか!？ ぶつちやけ同性にそんな事されてもいらつくだけ、って話を聞けー!!」

しかし椛のその必死な説得(?)もむなしく、結局文はその幻想郷最速とも謳われる飛行速度を最大限に活用して、「あはははは！ ネタがわたしを待ってますよー！」とよく分からない高笑いを上げながらあつという間に目の前からいなくなってしまった。

「ああもうつ、このままだと一緒に作業してた私まで怒られちゃう！ 文さんちょっと、待ちなさいってば」

そして椛が慌ててその背中を追おうとした、その瞬間、

「おい、人里の半獣がまた来たぞ！ 手の空いてる者は迎撃に備えろ！」

そんな声が後ろから聞こえてきて、椛は咄嗟に空をとぶのを止めてピタリと動きを止めた。そしてブルブルと肩を震わせながらどちらに行くべきかと心の中で暫く葛藤を続け、

「文さんのバカー！ 絶対あとで覚えてろよー！」

後で怒られるであろうことを覚悟で、仲間の助太刀をするべく結局文とは反対方向へと飛んでいくのであった。

幻想郷には、かつてそれなりの数の人間たちが人里に居を構えていた。しかし今、その立ち並んでいる住居の中でも実際に利用されているのは二つだけだった。

一つは人里の守護者と呼ばれている半人のワーハクタク、『知識と歴史の半獣』かみしろみわけいね上白沢慧音の住宅。そしてもう一つは、御阿礼の子と呼ばれる幻想郷の重要人物であったことから防護対策が施されて

おり、偶然生き残った数少ない人間の一人、『九代目阿礼乙女』ひえ 稗
田阿求だのあきゆうの住む屋敷である。

「妹紅さん……」

「ああ、分かっている。わたしも行ってくるよ。……慧音をこんなところで死なせる訳には、いけないもの」

現在その屋敷の中に存在する人影は、二つ。

一方は先に述べた少女、阿求。そしてもう一方は力の無い阿求を護衛するために一時的に移り住んだ迷いの竹林に住む案内人、『蓬菜の人の形』ふじわらのもいづ 藤原妹紅であった。

「それじゃあ、阿求。わたしたちが戻ってくるまでは、この屋敷から出ちゃだめだからね？」

そして妹紅は阿求に言い聞かせるようにそう言い残して、怪我が治った途端に飛び出して行ってしまった自身の友人、慧音を追うべく飛び去って行く。

「……」

阿求はその大きくも小さい背中を見えなくなってしまうまで見守り続け、その後にもるで祈るように目を瞑った。

慧音はあれ以来、近くににいる妖怪を見境なく攻撃するようになってしまった。

それでも初めの頃のように、塞ぎこんでまるで人形のようになってしまうていた頃よりはましなのかも知れないが……今では向こうに敵意があるうがなろうが関係なく、人里の近くにいらつというだけで過剰に反応してしまうのだ。

何度もあそこに居る天狗は大丈夫だと妹紅が言い聞かせても、いつ手の平を返して阿求を襲ってくるかわかったものではないと聞かないのだ。

元々彼女は、情の深い人間だった。しかも慧音にとって、人里の人間はもはや自分の子どものように大切な存在だったのだ。そしてそれ故に、全ての妖怪が悪いわけではないと頭では分かっている………気持ちのやり場が見つからなくて、自暴自棄になってしまっているのだらう。

今の彼女は、まるで少しでも関係があるなら構わないと襲いかかる、復讐鬼か何かのようだった。

だけど正直、慧音の気持ちもわかるのだ。

あんな事があってから、この屋敷も随分と広くなってしまった。

それでも、あの二人が戻って来なかったとしたら、自分も……

(……いえ、止めましょう。幻想に満ちるこの地では、精神と心の力が実際に現実へと影響を及ぼす。そんなことばかり考えていてしまっただけ、もしかしたらそれが実現してしまうことも十分にありえるのだから)

つまりは呪術や魔法というのは、そういうものなのだ。名前を持ち形をなした精神であり、心の力。そして制御された命の形。ただ想っただけで実際にそれが何らかの力を持つとは思えないが、だからと言って縁起のいいものでもない。

それにそもそも話………何の力も持たない阿求が心配しなければならぬほど妹紅は弱くはないはずだ。しかも慧音は次代の教育者としても歴史の編纂者としても期待されているため、そうそう殺されることもないはず。どころか今の彼女の妖怪への強い危惧と恐怖は天狗たちにとってはプラスに働いているため、下手をしたら重宝

されているのかも知れない。

だから、きつとだいじょうぶ。今は信じて、ただ待つことにしよう。ついでに帰ってきた二人を労うために、何か作っておくのもいいかも知れない。

(……)

どうして、こんなことになってしまったのだろうか。

これでは……御阿礼の子として幻想郷縁起を書いたとしても、読んでくれる人間が居なければ意味が無い。記すというのは、伝えるということだ。誰かが見てくれないければ、観測者が居なければそれは存在しないのと同じことではないか。

(……だめだ。やめようと思っても、どうしても……)

思ってしまう。

せめて……せめて自分の短い生が終わるまでは、平和でいて欲しい。そんな不謹慎なことまで、つい考えてしまっていた。

「誰か……」

誰かこの絶望を、終わらせてくれるものは居ないのだろうか。

八雲も動いていて、人妖全てが解決のために動いているのは知っている。だけどきつとそれは、たとえ成功したとしてもきちんとした形をなすのは全て自分が死んだ後のことだろう。

いくら妖怪の知り合いが増えて、転生することに対する抵抗の減った今の自分でも……これは流石に、悲しすぎるではないか。

それに恐らく、稗田の家は自分の代で潰えるはずだ。御阿礼の子として虚弱なこの体では、子を成すことは叶わないはずなのだから。

「寂しい、な……」

何もかもが、寂しくて悲しかった。人のいなくなってしまうた屋敷。喧騒の失われた人里の姿。すっかり追い詰められてしまっている慧音。それを守ろうと頑張っているのに報われない妹紅。

「ああ……」

そして阿求は最後に小さく嘆きの吐息を漏らしながら、今の自分の心境とは真逆の抜けるような青い空を見上げて、再び静かに目を瞑った。

4話（後書き）

今回は登場人物ラッシュ

それにしても、前半と後半の温度差が酷い……

5話

博麗神社に住む少女、博麗霊夢は博麗の巫女である。

しかし彼女は、今まで生きてきた中でその事を特に意識したことはなかった。博麗の巫女であるために何かをしようとか、博麗の巫女であるのだからこうでなくてはならないとか、そういうことは一度も考えたことがなかったのである。

そんな霊夢の保持する能力は、『主に空を飛ぶ程度の能力』。空を飛ぶということは即ち無重力であり、それ故に彼女はあらゆる精神的な束縛にすら縛られず、そして世界からも浮いているのだ。

つまり霊夢はあらゆる世界からの影響を受けない、全から外れてしまった完全な個なのだとも言える。

だから霊夢は、何に対しても興味を持たない。しかしそれは、何に対しても無関心であるのとは、少し違う。

彼女は何者にも縛られず、あらゆる影響からも外れている。つまりいつでも思っただ通り、”我が”ままに行動しているのだ。

ようするに、霊夢にとって今の自分に興味がないことは、後の自分にも興味がないことなのである。だから今関心のあることには以前から関心があるし、既に関心のないことにはこれからも永久に関心がないのだ。

なぜなら彼女は、変わらないから。外からの影響を受けないということは、変化しないということでもある。故にいつでも何処でもいつも通り。既に完成されてしまっている完成形。思っただおりに行動することこそが、常に正解であり正道。そしてそれが結果的に中立で在るべき世界の狭間に立つ博麗の巫女として正しい行動になっただけ。

世界のどこにも在ることはなく、どんな世界にも所属しない、何も周りに無い孤独な個。そして孤独であることに疑問を持たない、人であるうと妖怪であろうと神であろうと決して共には歩めない、人という枠からすらも外れた自由で孤高の存在。

それが、博麗霊夢なのである。

「……………」

幻想郷の外から連れてこられた外来人、門倉甲斐はいかなるものをも受け入れるという精神を持ち続け、さらにはそれに由来する『全てを許容する程度の能力』を持っていた。そして全てを受け入れているということは、即ち世界と等しいということでもある。

それ故甲斐は個でありながら全であり、全であるというのに個を決して失わない、『個人世界』とでも言うべき存在であった。

そして全てを受け入れるが故に、全てを受け入れても変わることのない不変の器（じゆぎ）を持っている甲斐は、しかし同時に常にあらゆる影響を受けているということでもある。

常に全てからの影響を身に受けようと、それでも己を失わず受け入れて行動する。あらゆる世界と共に在り、己自身も群（せかい）体としてありながら決して人間であるという”自己”を捨てない個体の存在。

それが、門倉甲斐という名を持つ人間の在り方なのである。

「……………」

そんな二人は、博麗神社の境内へと降り立って藍に引き合わされ互いに顔を合わせた瞬間に沈黙してしまい、ジーッと射すような視線で見つめ合いながらピタリと動きを止めてしまっていた。

「あの……二人とも？ 一体どうしたんだ、急に黙りこんでしまっ
て……………」

直後に横にいた藍から戸惑いを滲ませたそんな声が聞こえてきたが、しかし二人はそれにも反応せず、暫くの間無言で見つめあい続けた。

「……………」

そしてそれから更に幾許かの時が過ぎ、いい加減藍が耐え切れなくなってしまうともう一度声をかけようとしたその瞬間、

「「なんとなく、アンタとは生涯の敵かたきになるような気がする」「」

ようやく口を開いたと思ったら、今度は二人同時に突然そんなことを言い放った。

「え…………、ええ…………？」

畢竟、藍は驚きに目を白黒させて二人を交互に見比べるが、

「まあ、なんでもいいわ。なににせよ取り敢えず……話をするならこんな所で立ち話じゃなくて、中でお茶でも飲みながらにしましょ」

「ん、そうだな。その間ぼーっとしてるのもなんだし、ついでになんか手伝おうか？」

「ありがと。だったら食器棚から二人分の湯のみと急須を出しといてくれる？ 私は沸かしてあったお湯とお茶っ葉の用意をするから」

「おう、了解」

などと何故かやけに息のあった会話をしながら、甲斐と霊夢は連れ立ってさっさと神社の中へと入って行ってしまった。

「え……？」

そして藍は訳がわからないとでも言わんばかりに口をぽかんと半開きにさせて二人を引き止めるように手を上げた後、すぐにこれ以上自分から干渉するわけには行かないことを思い出し、その手を下ろして肩を落としながらその場で暫く呆然としていた。

二人が神社の中へと入って行き、その道すがら軽い案内を済ませつつ居間へと移動してちゃぶ台の前に座った瞬間、甲斐は不意に「あっ」と小さく声を漏らして何かを思い出したように顔を上げた。

「？　どうかしたの？　いきなり素っ頓狂な声だして」

甲斐はその霊夢の疑問の声に「いや……」とすぐに首を横に振り縁側から外を覗き込みながら、

「さつき藍さんのこと、別れの挨拶もしないで放っぽってきちまっ
たと思っつてな。……ああ、やっぱりもう居ないか」

と呟いた後、少しバツが悪そうに苦笑いを浮かべて頬をかく。

「別に、気にしなくてもいいわよ。ここに連れてきた時点でアイツ
にはもう用はなかったはずだし、どっちにしる同じことですよ」

「いやいや、そういう問題じゃないんだけど……ま、仕方ないか」

そして甲斐は言葉通り仕方なさそうに肩をすくめて「次会った時
にでも謝っておこう」などと考えながら、霊夢が出してくれたお茶
を受け取り「ん、ありがと」と小さく礼を言う。霊夢もそれに小さ
く頷きを返しながら、自分の分のお茶を持ちちゃぶ台を挟んで反対
側に座り込んだ。

それから暫くの間は、まるで長年連れ添った老夫婦のようなまっ
たりとした空気を醸し出しながらお互い無言でお茶を啜っていたが、

「そっぴやーん確認しておくけど……霊夢は俺と結婚することには
納得してるのか？」

とおもむろに甲斐が質問を投げかけてきたので、霊夢もつと顔を
上げる。そして直後に霊夢はその顔を何気なく眺めながら至極どう
でもよさそうな口調で、

「なんで？」

と特に疑問を感じてなさそうな平静な表情のままに首を傾げた。

「ああ……いや、何でもない。念のためにと思っただけだ、聞いた俺がバカだった」

「そう」

それからその後は、

「あれ？ 神社の境内の上に誰か飛んでるみたいだけど、あれ無視していいのか？ なんかすごいかまって欲しそうな顔してこっち見てるぞ」

「ああ、あれね。あれはただの天狗のパパラッチだから、放っておいたほうがいいわ。喋るとやかましいし、こっちから反応しなければ今は何もしてこれないはずだしね」

「ふうん、そうなのか」

といった会話以外は特になく、家事の分担や部屋の割り当てなどを済ました後はお互い自由に過ごしていた。

ちなみに二人で話し合った結果、家事は互いの部屋の掃除は自分でやる、朝と昼は甲斐が作って夜は霊夢、風呂は甲斐も上手く沸かせるようになったら交代で、ということになったのだが、それは余談である。

魔法の森に住む『普通の魔法使い』、霧雨魔理沙は苛立っていた。なぜなら魔理沙は、今の状況に非常に強い不満を持っていてからだ。自分で決めた相手ならいざしらず、勝手に結婚相手を決められるなんて冗談じゃないと思っていたのである。

魔理沙は基本的に、真つ直ぐな性格をしていた。なのでそういったことを強制されるのは相手が誰であろうと真つ平御免であったし、しかしそのためには多少手段を選ばない程度の気持ちも一緒に持ち合わせていた。そしてこれが仮に実際に魔理沙が好きな相手だったとしても、彼女はそれを誰かに強制される限り首を縦には振らなかつただろう。

つまり魔理沙は真つ直ぐであると同時に、非常にひねくれた性格もしていたのである。

何も常に真つ直ぐだということは、イコールで一直線であるという意味にはならない。魔理沙はいわば真つ直ぐでありながらジグザグに、曲線を描かずにあちこち飛び回るといふ……ある意味では奇特なひねくれ方をしていたのである。

しかしいくら魔理沙が気に入らないと思っても、今の幻想郷においてはもうすでに呼ばれたであろう唯一の男の発言力は大きすぎるし、外の人間とではスペルカードルールで決着をつけるわけにもいかない。そして何かで脅したり拐ったりしたとしても、今度は自分が異変の首謀者として霊夢に退治されてしまうだろう。

なら、どうすればいいのか。そうしてずっと悩んでいた魔理沙は、暫くしてからまるで天啓が降ってきたかのような、素晴らしい考えを思いついた。

(……そうだ、それならワタシがそいつに思いっきり嫌われればいいんだ。本人からアイツとは結婚したくないって思わせれば、逆に

その高い発言力のお陰で周りも文句は言えなくなるはずだぜ)

そして魔理沙はニシシと悪い笑顔を浮かべると、まずは相手の性格を把握するべく博麗神社に使い魔による盗聴を仕掛けることにした。

さすが真つ直ぐでありながら捻くれ者の魔理沙らしく、裏では努力を続けて下準備は入念に、でもいざとなったら直線かつあけっぴろげに突っ込んでいくのであろう。

ということと霧雨魔理沙という未だ普通を自称する魔法使いの少女は何と云うか、色々と複雑な性格をした難儀な人間なのであった。

5話（後書き）

1部は準群像劇のような形にしようと思っているのですが、そのためにどうも文が小刻みになってしまっているのが気になる。ううむ、中々に難しいものです。

それでは今回はこの辺で失礼致します。それと読者の皆様の批評や感想、ご意見ご質問等いつでもお待ちしておりますので、どうか気兼ねなくお送りくださいませ。

6話 加筆修正しました（前書き）

既に読んでくださった方には申し訳ないのですが、あとで見なおした結果前半部を大幅に加筆致しましたので再度更新致します。今後はこの様なことがないように注意いたしますが、出来れば今回ばかりはおつきあいいただきたく存じます。申し訳ありませんでした。

6話 加筆修正しました

あれから数刻の時が経ち、だんだんと陽も落ちかけて夕方へと差し掛かった頃。甲斐はほぼ無言で過ごしていた夕餉の時間の中で、ふいに霊夢に話して置かなければならないことがあったことを思い出して声をかけた。

「なあ霊夢。ちょっと話があるんだけど、いいか？」

「別にいいけど、何？ あなた」

そしてその呼びかけに帰ってきた答えは、そんな冗談なのか本気なのか判断のつかない微妙に悪趣味なものだった。いや、声の調子や表情から本気で言っていないことは分かるのだが……状況が状況なので、正直洒落になっていなかったのである。

「いや、あなたって……。霊夢にそう呼ばれるの、なんかすごい違和感があるんだけど……出来ればその呼び方はやめてくれないか？

呼び捨てで呼んでくれ、呼び捨てで」

「だったらまずは、名前を教えて欲しいんだけど？ 私まだ、アンタの名前聞いてないし」

「あ……」

最初が最初だったので、そんなことはすっかり忘れていた。どうやらさっきのは、霊夢の遠まわしの皮肉だったらしい。

そうして甲斐は随分と遅れてしまった自己紹介をようやく済ませ、
「なんだかすごい遠回りをした気がするな……」などとボヤいた後に再び会話の軌道を元に戻すべく、一度頭を振ってから口を開いた。

「まあいいや、それで話つてのは」

そしてその言葉の途中で、

『う か ちゃ』

突然どこからか途切れ途切れでよくは聞こえない、そんな微かな声
が耳に届いた気がして甲斐は「え？」と声を漏らしながら、咄嗟に顔を上げて視線を巡らせ周囲を見渡した。

「？　なによ、いきなり話の途中で変な声出して。どうかしたの？」
「いや……」

そう言つて甲斐は訝しげにこちらを見ている霊夢の視線に小さく首を横に振つて、

「多分、気のせいだろ。一応聞いてくけど、霊夢はさっき俺になにも言つてないよな？」

と言葉通り、答えが返つて来ることはまったく期待していないだろう口調で疑問を口にする。

「つて言うことは、幻聴でも聞こえたの？　私は特に何も言つてないわよ。というか、口を開いてすらなかったわ」

「……だろうな。まあ、いいか」

しかし甲斐がそう言つて頷きを返し、今度こそ話を戻そうと視線を霊夢に戻したその瞬間、

「　　」

不意に霊夢が、まるで世界のどこをも見ていないような……そんな不思議に遠い目をしながら、ポツリと呟きを漏らした。

「え？」

「ここは、幻想郷だからね。幻が実体を持ち、そして想いが形をなす所。つまりここで起こった頭に幻と付く言葉は、大抵の場合は本当だって言うことなのよ？」

「それは、つまり……」

そして甲斐はおもむろに、どこか答えを求めるようにして霊夢の視線を捕らえるべくその目を覗き込もうとするが、

「まあなんにせよ私には、どうでもいいことだわ。それよりいい加減、早くその話ってのを進めて欲しいんだけど？」

と霊夢がもうこの話は終わりだとも言わんばかりにあっさりと切り上げてしまったので、甲斐はそれにどこか面食らいながらも「あ、ああ……そうだな。悪い」と小さく謝り頷いた。

その後は甲斐が、誰かと結婚するにしてもそれは何事もなければ三年後の事になるだろうということや霊夢に伝えて、そしてそれに霊夢が相変わらず興味なさげに「そうなの。分かったわ」と短く口にした以外には、特に会話らしい会話もなく夕食を終えた。

甲斐と霊夢が食事を終えて各々の部屋へと戻ってから、およそ数十分ほど後のこと。とうとう外では陽が沈み完全に夜の帳が落ちきって、甲斐が幻想郷へと足を踏み入れてから初めての夜が訪れる。そしてそんな中甲斐は自身に割り当てられた部屋に敷いた布団の上で寝転がりながら、一人翌日以降の行動方針などを思索していた。しかし幻想郷の夜というのは、外の世界とは違って文明の利器の恩恵が少ないために、それよりも早く訪れそして永い。それに衣食住全てお世話になっているこの状況で、消耗品であり唯一の明かりであるロウソクを大した理由もなく浪費するということはありえなかった。部屋の中は既に真っ暗になってしまっていた。

だというのに今の甲斐は少し前に食事を終えたばかりだったので、それを未だ消化しきってはおらず満腹感を覚えている。そんな状態で真っ暗な中布団の上に寝転がっていたものだから、甲斐はウトウトといったの間にか船を漕いで微睡眠の中へと沈んで行ってしまっていた。

そんな襲い来る睡魔に負けそうになってしまっている自分を、甲斐は頭の何処かで自覚してはいたのだが……しかし今日一日だけでも色々なことがあったせいであるなりに疲労を感じていたために、どうにも抵抗しきれずにいた。

そしてそのまま微睡眠が睡眠へと移り変わり、暗闇から夢の中へと落ち行く意識の中でふと

『……………ぐす、ひくっ……………』

という誰かの泣き声が聞こえてきたような気がして、甲斐は何だろつと心の中で首を傾げた。

気のせいでは、きつと無い。ぼやけた今の頭でも……………何故かそれ

だけはハッキリと、分かっていたような気がした。それにその泣き声は、どうにも聞き覚えのある声だったような気がしてならなかったのだ。

だから甲斐はそのまま薄ぼんやりとした意識のままに、耳を澄ませるようにしてその声へと心を集ませた。

その、直後。

『うう、グスツ……。どこに……。どこに居られるのですか……』

甲斐ぼつちやまあ

確かに自分を呼ぶ悲しげなその声が……。心のどこかに、届いた気がしたのだ。そしてその声の主を、甲斐が聞き間違えるはずがなかったのである。だから甲斐は確信を込めて、すぐにその名前を心の中でそつと呟いた。

『み〜こと……』

それはただ……。その泣き声を止めたいという一心のみで、発せられた一言だった。

これはきつと夢の中の幻のような出来事で、現実を起こっていることではないはずなのに……。だけど甲斐はその時本心からその想いを込めて、その声をみ〜ことに届けたいと強く願った。

そしてそれはきつと本当に、彼女に届いていたのだらう。いや、届かないはずがなかったのである。

何故なら甲斐は、世界であるが故にあらゆる存在との繋がりが出来易く……。それに二人の間には互いが互いを想い合う、家族という名の強い絆と繋がりが、在ったのだから。

『あ……、甲斐ぼっちゃま!? どこですかっ? いったいどこに……!?!』

甲斐はそのみくことの悲しみを滲ませた必死な声に、どこか祈るようにして言葉を返した。

『俺はここに居るから……だからもう泣かないでくれよ、みくこと。俺はお前に泣かれるのが、一番きついんだ……』

『なら……わたくしの名前を呼んでください! そうしてくださいれば今すぐにも泣き止んで、そこに駆けつけますから! 貴方の居るところになら、どこにだって行きますから……!』

それはどこまでも必死で、どこまでも切実な想いだった。

『本当に……それでいいのか、みくこと。お前はここに、来るつもりなのか? 誰一人知り合いだって居なくて、何もかもが違ってる……それどころかまったくの未知の世界だっていうのに、それでも』
『当たり前です! そこがどこであろうとも関係なんてありませんわ! だってわたくしの居る場所はいつだって』

そしてその叫びは、ただただ純粋な想いの発露。世界のどこにしようとも、例え違う世界にしようとも、彼と共に居ることができますようにという……世界を超える、心の力。

『 貴方の隣なのですから!』

その声には、想いには、心には 疑う術がどこにも存在しないほどに一片の曇もなく……故に甲斐は彼女がその時最も望んでいた言葉を、力強く言い放った。

『分かった。　　み〜こと、来い！　俺の所に……俺の、隣に！』
『はい！』

そしてみ〜ことは甲斐の呼び声が聞こえたその瞬間、どこまでも真っ直ぐな返事と共に己の想いを解き放った。

彼の隣を、永久とわに歩み続ける程度の能力

その、次の瞬間。

「甲斐ぼっちゃまー！」

直前までは確かに甲斐一人であったはずのその部屋の中に、唐突にメイド服の少女　み〜ことがどこから現れて、まるで迷子になっていて親を見つけた時の幼子のように勢い良く甲斐の胸へと飛び込んできた。

「おっ、と……」

直後に甲斐はその勢いに押されて少し身体を仰け反らせながらも、どうにかそれを抱きとめて、

「甲斐ぼっちゃまあ……。うう、甲斐ぼっちゃまだあ……」

とそのままグスグスと再び泣き出してしまった自身の妹分の頭を、穏やかな表情でどこか愛おしそうにそっと撫でた。

どうしてみ〜ことが、まだ一日しか経っていないのにこれ程

までに追い詰められていたのか。その原因はみくことの元々持っていた、とある機能にあった。

みくことは本来、家事手伝い用のメイドロボである。そしてそこには機能として、介護にも対応できるようなものも備えられていた。そのため家という狭い範囲の中でなら、常にバイタルに異常があれば察知できるという機能もあったのだ。そしてその機能が、それまで家の中に居た筈なのに突然甲斐の反応が消失したことを察知したのである。

その事実には驚いたみくことは家中を探しまわった後すぐに、岡崎教授に頼りその搜索を依頼した。しかし彼女の技術を以てしても、当然甲斐は見つからなかったのである。

甲斐はその頃既に幻想郷へと呼び出されていたのだから、それは必然であったのだが……そんなことは知らない教授はみくことに、甲斐が世界のどこにも居ないと断定しそれを告げてしまう。

もちろん教授は既に『監視者』を通じてある程度幻想郷の境界の事も知っていたので、その不可解過ぎる失踪からその可能性も頭の中にはあったのだが……あくまでそれは可能性に過ぎなかったために、その時は言わなかった。

そしてみくことはその一言で既に無くなりかけていた冷静さを、ついに完全に失ってしまう。

それからみくことは教授の研究室から飛び出してあちこちを彷徨った後、ふらふらと幽鬼のような足取りで家へと戻り、教授からの通信にも耳を貸さず一人涙にくれていたのだ。

しかしもう……みくことが悲しむ理由はなくなった。これから先きつと、みくことが同じ涙を流すことは未来永劫ないだろう。何故なら彼女は最早永遠に、自身の主人でもあり最愛の家族でもある甲

斐の隣から、本当の意味で離れる事はないのだから。

み〜ことが己の能力を発現させて幻想郷へと現れてから暫くの時
が経ち……ようやくポロポロと流していた涙も収まり始め嗚咽も止
まってきた頃、

「そろそろ……落ち着いたか？ み〜こと」

と甲斐はその時浮かべていた表情と同じくらい穏やかな口調で、
自身の胸に顔を擦りつけていたみ〜ことに視線を落として静かに声
をかけた。

しかしその後に戻って来るべき返答はなく、甲斐は「？」と首を
傾げてもう一度、

「み〜こと？」

と問いかけるが、やはりみ〜ことからは一向に反応が返ってこな
くて、それどころか身じろぎ一つしなかったのだ。それに疑問を感
じた甲斐は僅かに体をズラしてみ〜ことの顔を覗き込むと、それか
らすぐに眉尻を下げふっと口元を緩めてしまう。

（どうやら泣き疲れて、寝ちまったみたいだな）

そして甲斐はもう一度穏やかに微笑を浮かべると、そのまま自分

も横になつて布団を引き寄せ眠りに就くことにした。

因みにそのほとんど抱きまくら同然の状態に、翌朝目を覚ました
みゝことはようやく取り戻したはずの余裕を再び失つてすぐに真っ
赤になりながらワタワタと慌てふためいてしまうのだが……きっと
それは、語るまでもないことだろう。

7話

外の世界、某所。太陽が昇りきる少し前。早朝とはもつ言えず、しかし単純に朝というには少しだけ早い時間帯。

「……」

岡崎教授は、唐突にみくことの反応が消失したことを示すメッセージがモニターに映し出されているのを見つめながら、一人思案に耽っていた。

（まさか、門倉に続いてあの子までとはね……。これは、確定かしら）

あの時ばかりは状況が状況だったために、岡崎教授は普段機能を停止させている発振器を起動させて、みくことの状態が逐一分かるようにモニタリングしていたのだ。それは映像こそなかったが、破損状況や健康データ、位置情報などを示す詳細なものだった。

しかしみくことはそれらに一切の異常を示すことなく、ある時突然まるで空気に溶けるようにして消えてしまった。

（これなら……恐らく破壊されていたり、機能停止しているということはないはず。それにジャミングのたぐいの可能性もほぼないと考えて良い）

電波妨害や電波障害が起きたのなら、それはそれでその事実を示すデータが出る。しかしあの時のログをいくら読み返してもそれすらも存在せずに、本当にみくことからのあらゆる反応がいきなり途切れてしまっているのだ。

つまりこれは通常の現象ではなく……

(……神隠し)

そして岡崎教授は顔を上げてモニターから視線を外すと、研究室の奥に安置されている建造中の”それ”の巨体を見上げた。

(あれの完成、少し急ぐ必要がありそうね)

まあなんにせよ、今やってることを済ましてからになるだろうけど。だいたいのことが片付いたら、甲斐たちの方に取り掛かるう。そんなことを考えながら、岡崎教授は身を翻してゆっくりとした足取りで研究室の中から立ち去っていった。

なんだかんだとありながら、それでも急ぐことはあっても焦ることとはない。結局のところ岡崎教授という人はどこまでも、自分のペー—isは崩さない人間なのである。

幻想郷の端に存在する博麗神社、その中にあるとある部屋の中では、今二人の男女が向かい合いながら話し合っていた。

その一方は、この幻想郷に来てからのおおまかな経緯や今の状況などを話す青年、門倉甲斐。そしてその反対側に座るのは、昨晩に発現させた己の能力によって現れたメイド服の少女、みくことだった。

初めみくことは、暫くの間頬を紅潮させながらも神妙な面持ちで大人しくそれを聞いていたのだが……やがてその話が進むにつれて次第にその表情は険しくなっていき、最後にはどこか拗ねたようなものになってしまっていた。

「……つまり甲斐ぼっちゃまは、わたくしが必死になって探し回っていたり見つからなくて泣きはらしていた頃に、向こうのことは忘れてこちらで据え膳よりどりみどり状況でまったりと普通に過ごしていたと、そういうふうに解釈してもよろしかったりしちゃいますですか？」

「あー、別にそういうわけじゃないんだけど……まあ、大きく間違っっては居ないかな」

それはだいぶ曲解しているようにも思えるが、確かにそういう風にも取れなくはないので特に否定はしなかった。

甲斐は基本的に、いつでも自分の出来る限り結果が出るまでは最後まで努力するが、しかし相手がそれをどう受け取るのかに関しては干渉しないのだ。なのでその時もそのみくことのセリフに特に弁解もせず、ただ困ったよう顔をして呻くのみであった。

そんな甲斐の反応を見てみくことは、ついくすりと笑みを漏らし、てしまうとすぐにその表情を崩して、まるでそれまでの態度が嘘のようにニコリと明るいい笑顔を見せた。

「冗談ですよ、甲斐ぼっちゃま。貴方がそういう方なのはとうに知っていましたから……全く気にしてないといえば嘘になりますが、本当に怒ってなどはおりませんわ」

「ん……そうか。悪いな、みくこと。なんだかお前には、いっつも心配ばかりかけちまつてる気がするよ」

甲斐のその謝罪の言葉にみくことは「いいえ」と静かに首を横に振った後、一切の曇りのない光を瞳に湛えた真つ直ぐな眼差しで、甲斐の目をじつと見つめてその桜色の唇に言葉を乗せ穏やかに語り始めた。

「どうか謝らないくださいませ、甲斐ぼっちゃま。甲斐ぼっちゃまが」そう”ではなかったとしたら……きつとわたくしは今でも昔のように、ただの『ロボット』のままだったのだろうと思いますから……。ですからそれを謝られてしまつては、むしろわたくしは悲しく思つてしまいますわ」

そのみくことの最早疑うべくもない本心からの言葉に甲斐はもう一度「そうか」と呟くと、ふつと微笑を浮かべながら「ありがとう」と小さく礼を言つてみくことの頭をぽんと優しく撫でた。

実はみくことが能力を発現させたのは、偶然ではなかった。

能力とは即ち、心から発生するあらゆる精神的現象への干渉だ。

そしてそれを発現させるためには、肉体を持つ存在はその自身の心を覆う体^{うわ}を凌駕するほどの強い精神……自我を持つ必要がある。

だが仮にそれを持つていたとしても、一部の例外を除けば大抵の者は幻想に対する強い否定に満ちている外の世界ではそれに押さえこまれてしまつて、能力を持つことは叶わない。

しかし甲斐が持つていた能力は、『全てを許容する程度の能力』。

それは現実だろうが幻想だろうが区別なく全てを許容するために、その影響下であれば外の世界であるかどうかは関係なくなつてしまふ。

そのため能力を持ちうる素養を既に持ち合わせていたみくことは、常に甲斐と共にいた事からそれをいつ発現してもおかしくはない状態だったのだとも言える。それが昨晚に至るまで自覚すらしていなかったのは、偏にそれを使う必要がなかっただけなのだという、ただそれだけの理由だったのだ。

が、今はその話は関係無いので閑話休題^{おいておいて}。

甲斐はあその後、既に起き出していた霊夢にみくこのことを紹介し、取り敢えず朝食を作った後すぐにそれを食べ始めた霊夢に向かつて居候が一人増えてしまったことを伝え大丈夫だろうかと問いかけた。

すると当然それに帰ってきた答えは、

「別に構わないわよ。今更一人二人増えたって大した変わんないし、それに一応メイドっていうんだから家事くらいはできるんでしょ？」

そんなそっけない口調によるあっさりとした了承の言葉だった。

「そりゃあもちろん。こいつは掃除洗濯炊事にお菓子作りからなんでもござれの、優秀なメイドだからな」

「そ。ならいいわ。そこまで言うんだったらむしろ私の仕事も減りそうなくらいだし、問題なし」

そして甲斐もその言葉を特に疑った様子もなくそれにあっさりと言くと、「そっか、サンキュ」と言って話を止め自分も茶碗を手にとった。

万が一にでも断られた場合は取り敢えず藍に相談して、最悪の場合野宿でもなどと考えていた甲斐ではあったが、同時に実際にはそんなことにはならないだろうとも何故か確信を持っていたので特に

確認も取らず、そのまま安心して食事を再開すると美味しそうに焼き魚と白米を頬張り始める。

とその時横からみ〜ことが、やけに訝しげな表情をしながら甲斐に話かけてきた。

「あの、甲斐ぼっちゃま？」

「ん？ どうした、み〜こと」

「その……こちらの博麗さんとは、昨日はじめてお会いになられたのですよね？」

「？ そりゃそうだろ。霊夢は幻想郷の住民なんだからさ」

その甲斐のキョトンとした表情と言葉にみ〜ことはどこか腑に落ちない様子で首を傾げて、

「その割にはなんだか随分と息があつてると言うか……なんだかまるで長年連れ添った熟年夫婦みたいに、お互いを分かり合ってるみたいな空気がある気が……」

とぶつぶつと独りごちていたが、すぐに思考を切り替えるべく小さく頭を振ってから霊夢の方に顔を向けた。

そしてすつと淀みない動作で立ち上がると、

「それでは、博麗さん。暫くの間甲斐ぼっちゃまとお世話になります……これからよろしくお願いいたします」

そう言って改めて畏まった態度で丁寧に頭を下げ霊夢に言葉を告げる。

するとその先にいた霊夢から、すぐに短くどこかぶっきらぼうな声が飛んできた。

「靈夢」

「え？」

「博麗さんっていう呼び方は耳慣れてないし、靈夢でいいわ。さん付けも別に必要ないから」

その靈夢の言葉に、みくことはすぐに「いえ」と首を横に振る。

「お名前でお呼びする、というのは了承いたしますが……どうか呼び捨てでというのはご勘弁くださいませ。甲斐様のメイドとしてもこれからこちらでお世話になる者としても、そのようにお呼び立てするわけにはいきませんので」

それを聞いた靈夢は特に気にした様子もなく、すぐに興味なさげに頷くと、

「そう。まあ、どっちでもいいわ。アンタの好きなように呼んでちょうだい」

と言って再び視線を落として食事を再開する。

「分かりました、靈夢さん」

そんな二人の様子を念のために横目でさり気なく伺っていた甲斐は、特に問題はなさそうだとほっと吐息を漏らすと空になった自身の食器を下げ始めた。

7話（後書き）

幻想郷に来てから二日目の朝の始まりと、博麗神社でのその後。あれ？ まだ二日目なのか……

妖怪の山の頂上付近には、外の世界からやってきた一つの神社が存在する。

この神社　守矢神社はその少々変わった成り立ちにより、祭神である神とは別にもう一柱、合わせて二柱の神が存在した。

その内の一柱は風雨を司る大和の戦神、『山坂と湖の権化』八坂神奈子。そしてもう一柱は崇り神であるミシヤグジ様を統べる山の神、『土着神の頂点』洩矢諏訪子という名の神であった。

そして神が祀られ神社が存在するのだから、必然その声を降ろし神意を伝え、それを崇め奉じる神職も存在する。ということでの神社にはさらにもう一人……現人神と謳われる風祝の少女、『祀られる風の間』東風谷早苗が住んでいた。

この少女、早苗は前述のとおり現人神と呼ばれてはいるが同時に純粋な人間でもあるため、幻想郷の一勢力として数えられている守矢神社としては、彼女を送り出さないというわけにも行かない。

そのため表向きはこの神社唯一の神として君臨している神奈子は、己の風祝でもあり自らの外の世界の生活を犠牲にしてまで幻想郷へと共に来てくれた家族でもある少女にその決定を、祭神として伝えねばならなかった。

「早苗」

そして神奈子はとうとう本格的に動き出さなければならなくなつた今日になって、神社の奥に存在する本殿へとどつかと座り込み早苗を呼び出すと……まるで能面のように感情を読み取れ無い表情で、かついかにも神としてふさわしい威厳のある態度で最後の意思の確認をとっていた。

「はい、神奈子様」

「先日話した例の人間の話、覚えているな？」

「もちろんです」

早苗も今はただの人間としてではなく守矢の風祝としての態度を心がけ、恭しい態度で静かに頷きを返した。

「では、異論はあるか。そうでなくとも何か意見や質問があったのなら、遠慮なく口にするといい」

「いえ、大丈夫です。私から神奈子様には、何も」

「……そうか。ならば守矢神社の風祝として、恥ずかしくない働きと成果を期待しているぞ。しかとその役目、果たしてみせよ」

「承知いたしました」

「では、下がって良い。その後はただちに博麗神社へと向かい、例の人間との接触を図るのだ」

その言葉を聞いた早苗は「はい」と再び恭しく頷いた後小さく一礼して、

「それでは失礼致します、神奈子様」

と言って本殿から退出しようとする。

直後に神奈子は、その凜々しくも凜とした背中に、

「……早苗」

とほとんど無意識の内に、わずかに震える喉から搾り出すような声を出して呼び止めてしまっていた。すると早苗はすぐに振り向いて、何かいい忘れたことでもあったのだろうか小さく首を傾げて

から静かに口を開く。

「はい。何でしょうか、神奈子様。まだなにかございましたか？」

その早苗の疑問に神奈子は「いや……」と首を横に振ってから目を逸らして、

「最近、山の天狗にも不穏な動きが多い。念のため、例の人間と顔を合わせたら注意するようにと伝えておいてくれ」

咄嗟にどこか言い訳めいた調子で早口にそんなことを口にした後、まるで逃げるようにしてすぐに立ち上がり身を翻してその場を後にした。

神奈子が本殿の奥、決して部外者では立ち入ることの許されない”裏”に足を踏み入れてすぐに、ケロケロとまるで場と状況にそぐわない明るい笑い声が突然聞こえてきた。そしてその声に視線をわずかばかり下に向けると、そこには自身の相方でありここに住むもう一柱の神、諏訪子の姿があつたので、すぐにしかめていた眉をどうにか緩めて平静を装う。

とはいえ諏訪子にそんな取り繕いなど意味を成さないのは、互いが互いに理解していたことでもあつた。

「いやー、ホントひどい顔してるねえ神奈子。まるで泣きそうになつてる所で更に蜂に刺されたのを、それでも無理っくり我慢してる意地っ張りな頑固親父、って感じだよ。それともやっぱり、娘が彼

氏を連れてきたのを見て洩ってるお父さん、の方が正解かな？」

諏訪子のその揶揄と言葉の裏に隠れている真意を理解しながら、神奈子は小さく鼻を鳴らしてわずかに目を細める。

「……ふん。これが洩らずにいられようか。大事な大事なうちの早苗を、名前も知らなければ一度も顔を見たこともないどこぞの某にくれてやらねばならないなんて……」

本来ならせめて相手の見極めくらいは自ら出向いてしてやりたかったのだが、今の状況ではそれもままならない。信仰の激減した今の状況では、わずかばかりの力の浪費すら許されないのだから。

妖怪からの信仰もある守矢神社は他の神ほど深刻ではないし、その上己の神域である神社にいる限りは最低でも一〇〇年単位での心配はまったくくないのだが……一寸先に何が起こるのかわからないのが、世の常である。そんな一時の感情のみで、守屋神社の柱たる神奈子が軽拳妄動に走る訳にはいかないのだ。

だが、それにしても……まさか今更になって、かつての政略結婚のようなことを強いねばなくなるとは、思ってもいないことだった。

そんな思いが、表情にもにじみ出てしまっていたのだろう。それを見て取った諏訪子はすぐにどこかからかうような口調で、

「気持ちわかるけど、当の早苗が弱音ひとつ言っていないんだ。それなのに、わたしたちがそれをひっくり返す訳にはいかないでしょ？」

「……なにより口惜しいのは、それだよ。もしも早苗が一言嫌だといってくれさえすれば……どんな手を使ってでも、絶対にそんなことはさせないっていうのに」

神奈子は言葉通り苦々しげに、まるで吐き捨てるようにそう言うため息を吐いた。

これにはさすがの諏訪子もそれまでの勢いを忘れてしまったかのように失ってしまい、小さく肩を落としながら眉尻を下げどこかさみしげに口を開いた。

「だから」、言わないんだよ。早苗は優しい子、だもん」

「……分かってる。分かってるよ。これからの幻想郷の……そしてなにより、守矢神社の未来と繁栄の為には致し方なし、だ」

そう言って去っていった神奈子の背中には、ただひたすらに神としての威厳と風格と……そしてわずかばかりの、家長としての懊惱煩悶が見受けられた。

「やれやれ、だねえ。何事も……世の中ままならない、ってことなのかな」

いつその事怒り狂ってくれでもすれば、もっと発散させてあげられたんだけどなあ……とそんなことを考えながら諏訪子は小さくため息を吐いた後、またすぐに頭も表情も切り替えて今度は早苗の元へと向かうべく、ピヨコンと跳ねるような軽快な足取りで境内の方へと向かって歩いていった。

（壊す壊す壊したイ破壊したイ握りつぶしてしまいたいそうだ壊すウ壊さなければそんなのダメダ知ったことかワタシハ壊したいんだ）

紅魔館の地下深くには、一人の少女が居る。永い永い時間……四九五年という永きにわたって、”自らの意思で”牢獄へと捕らえられたお姫様。

その名も、『悪魔の妹』フランドール・スカーレット。その名前からも分かる通り、彼女は紅魔館の主でもあるレミリア・スカーレットの、実の妹でもあった。

何故、当主の妹である彼女がこんな所に一人閉じこもり、苦しんでいるのか。そこには彼女自身の能力にこそ、原因があった。

フランの保持する能力は、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』である。

それ故にフランは今、その能力によってもたらされる恐ろしくも甘美な誘惑……目に映る何もかもを破壊し尽くしてしまいたいという衝動に、必死に抗っていたのだ。

何も無い地下深くで、間違っても壊してしまわないようにとただ一人になって、誰にも頼ることも出来ず他に動くものも存在しない静寂に沈みながら。

能力とは心の力であり、精神の方向性でもある。そして悪魔や妖怪という精神の生き物にとって、それは肉体と変わらぬ自身の一部なのだ。そしてそれを無理に抑えこむということは、即ちそれを増大させるということに他ならない。

例えば人間も、足があれば歩行する能力があるのだから歩くだろう。鳥は羽があり飛ぶ能力があるのだから飛ぶだろう。それは当たり前前にできることであり、できることなのだから意識せずともしていることなのだ。

だのに自身の機能であり能力を無理に抑えこむということは、よ

りそれを成したいという欲求を増大させる結果に終わってしまっていた。そして能力は、肉体とは違って時間によって衰えない。どころか膨れ上がった欲求は、よりその力を強大なものへと導いていく結果になりうるのだ。

もしも彼女がそれを何かに行使して押さえこまずにいたとしたら、今のように破壊衝動に襲われて地下にこもる必要などなかったであろうというその事実は……なんとも皮肉な話だった。

（壊す破壊すル握りつぶす粉々に塵芥に一片の原型も残さず二何もかもを跡形もなクダメヤメテ）

何度も何度も想像の中で、頭の中で、あれもこれもそれもどれも誰もを完膚なきまでにバラバラに壊して……、だけどいつもその想像が幻想になるギリギリのところ、どうにかその手を引っ込める。

本当は……。本当は、何も壊したくなんてなかった。ただただ愛する姉と家族と一緒に、穏やかに暮らすことができればそれでよかった。だけでもそれは、すぐに適わなくなってしまう……だから自分から地下に封印してくれと願い、壊したくない何もかもを遠ざけた。

なにより最愛の姉を、フランは壊したくはなかったから。

そんな無邪気で純粋な子供のような願いと、それら全てを無に帰してしまいたいという真逆の精神おもいを内に抱える歪な少女、フランドール・スカレット。

その在り方はあまりにも不自然で、悪魔としては気がふれていると言われてもおかしくはないものだったのかも知れない。悪魔であれば心のままに、思うままに……己の能力を、恐怖を振りまけばよ

かったのだから。それなのにそれを自ら抑えこむだなんて……他の悪魔からしてみれば、正気の沙汰ではないということなのだろう。

陰と陽。寒と暖。破壊と愛情。

そんな歪で危うい二面性を持っているからこそ、こんな力を持つてしまったのか。それともそんな力を持っていたからこそ、その心が不安定なものとなってしまったのか。それは本人にも彼女を愛する家族にも、誰にもわからないものだった。

ただ……以前にあった、異変の折。わずかとはいえその破壊の力を発散することができたフランは、以前よりはこの発作のような衝動にかられることは少なくなっていた。

そのため精神が落ち着いている時は、以前とは違い紅魔館の地上部へと行くこともできるようになっていたのだ。

けどそれでもまだ頻繁に、その衝動は彼女にその破壊の手を伸ばさせようと囁きかけて来てしまう。何故ならその衝動を全て消耗しきったわけでもなく、力を存分に発揮したわけでもなかったのだから。

はやく、はやくおさまって。そうしたらまたお姉さまといっしょに紅茶をのんで、たくさんたくさんお話するんだ。

そんなささやかな希望を一生懸命潰えてしまわないように心に灯して想いながら……自らの心に囚われたお姫様は、今日も孤独に戦い続けるのだ。

スカーレット家に仕える完璧で瀟洒な従者、十六夜咲夜はかつて一族としては数百年ぶりの新生児であり、スカーレット家のある分家筋の中では待望の第一子として生まれた。

しかし実際に生まれたその子供は、吸血鬼ではなく人間だった。稀に……本当に極稀にはあるが、完全に純粹ではない吸血鬼の一族からは、そのような子供が生まれることがある。それが隔世遺伝なのか、先祖帰りなのかは分からないが……、誇り高い吸血鬼の一族が、人間の子供を産んでしまった。当然吸血鬼の子供が生まれると思ひ込み、期待していた彼女の実の両親にとっては、それは許しがたい事実だったらしい。

そして彼女はその存在を抹消されるかのごとく捨てられて……それを知ったレミリアに、拾われたのだ。

そんな過去が、あったからだろう。

十六夜咲夜の夢は、とてもささやかなものだった。いつか……いつか自分を悪魔の従者だからって特別扱いも怖がりもせずに普通に接してくれる、平凡だけど優しい旦那様と己の主人のデザインしてくれたウエディングドレスを身に纏い結婚して、紅魔館の敷地内に離れを作らせてもらって二人でそこに住んで、仲睦まじく協力し合いながら子育てをして、もしも子供が女の子だったとしたらお嬢様とお揃いのドレスを着せてあげて……自分とは違う、実の両親が揃っている暖かな家庭を作っていく。

そんなとてもとてもささやかで、いつそ幼稚だとも言える小さな女の子のような、素朴な夢。

だけどそれは、潰えてしまった。これから咲夜は、紅魔館のため

に好きでもない人間の男と何としても契りを結び、そして子供を成さなければならぬ。

しかしだからと言って、それを恨む気持ちは咲夜には全くなかった。いや、恨むどころか……彼女はむしろ自ら進んで覚悟を決め、それを成そうとも思っていた。

それは咲夜が主人に忠誠を誓っているから、というのとは少し違う。

かつて己を救ってくれた……今は主人と仰いでいるレミリアを心から愛し、母と慕っているからこそその想い。そして人生の殆どを共に過ごしてきた、紅魔館に住む家族たちのために。単にそれが、自分の想い描く夢よりもより優先すべき事柄だったのだという、ただそれだけのことだったのだ。

だから咲夜は始め、正午前に博麗神社まで飛んでいき遠目にその八雲に呼ばれたであろう人間の男を見た時、正直なところ少し拍子抜けしていた。容姿も背格好も普通で、歳も恐らくそう離れても居ない、どこまでも平凡そうに見える、男の姿。

もちろん見た目だけで人を判断するつもりはなかったが、それにしてもそれなりの覚悟を……相手が子供であろうが壮年の男であろうが醜男であろうが恰幅が良かるうが、何も思わず接して見せようと固めていた覚悟が無駄だったような気がしてしまって、肩透かしを食らった気分になってしまっていたのだ。

「会食への招待？」

「はい。紅魔館のご当主様であり我が主、レミリア・スカーレットより貴方様のご招待をと仰せつかっております」

そして次に感じたのは、違和感だった。博霊神社に降り立って互いに自己紹介を済ませ、招待状を渡しながらも……咲夜は内心で、首を傾げていたのだ。

彼女の保持している能力は、『時間を操る程度の能力』。そして時間を操るということは空間をも操るということであり、時空間とは即ち次元……世界の持つ一つの属性だった。その能力が、目の前に立つその人間に何か違和感を覚えさせたのかも知れなかった。

「みること。念のために一応言っとくけど、お前はお留守番だからな？」

「えー!? どうしてでございますか!」

「いやいや、どうしてもこうしても……招待されてるのは俺一人だし、確認もなしに人数増やすわけには行かんだろ。それにまあ、早速家事やら何やらほっぼってどっちも何処かに出かけてくつてのは、居候としては少しどうかと思うしな」

「むー、それは確かにそうでございますが……。……っ、はっ!? もしや甲斐ぼっちゃま、そうやって何だかんだといってわたくしを遠ざけておいて、人知れず幻想郷一大ハーレム帝国を築くおつもりなのでは!? だめですわ! 正妻の座はわたくしのものなので、すから、妾を増やすにしてもまずはわたくしを通してからにして下さいまし!」

「なにアホなこと言ってんだ。色々ツツコミどころが多すぎるわ」「うみや!?!」

その後何やら見たこともないメイドと漫才のようなやり取りをしているのを眺めたり……道中で少し話しをしたりしながら感じたのは、小さな驚きだった。

なにせやけにあっさりと紅魔館に来ることを了承してくれて……しかも幻想郷に来たばかりの外来人であるはずなのに、なんだかやけに馴染んでいるようにも見えてしまい、本当に外来人なのだろう

かと疑ってしまっただったのである。

その上注意深く周囲を警戒していたので気づいたのだが……何故か彼と一緒にいると妖精が攻撃してこないばかりか、遠巻きにかまっただけでこちらを見ていたのだ。あのイタズラ好きで、ただ飛んでいるだけでも取り敢えず弾幕を飛ばしてきたり何だかんだとちよっかいを掛けてくる、妖精がである。

だから咲夜はもしかしたら自然に属する能力でも持っていたりするのだから、それとも単純に妖精に好かれる体質なのだろうか、そんな予想を内心でしてしまっていた。

「いやー、それにしても幻想郷ってのは、すごい所だなあ。妖怪どころか人間まで普通に生身で飛んでるし、それに景色は綺麗で自然が一杯。これでこんな状況じゃなかったら、いっそあっちこっち見て回って観光でもと洒落込みたかったんだけど」

「それでしたら、今の状況が落ち着けばそれまでできると思いますから……もしよろしければその時は、私が色々なところのご案内をいたしましょうか？」

「お、そりゃホントかい？ そいつはありがたいなあ。今はどうなるかわからないけど……もしも余裕ができてアンタの手が空いているようだったら、その時はまた頼むかな」

そして最後に思ったことは、その人間 門倉甲斐という男の雰囲気、どうにも霊夢とよく似た雰囲気を持っているような気がするということだった。

霊夢は人妖問わず、大抵の力ある存在に好かれやすい。それは彼女がこちらがどんな態度を取ろうとも、全く振る舞いを変えないことが原因だった。

霊夢は異変を起こした相手だろうとかつて対峙した相手だろうとどんな力の持ち主だろうと、変わらず平等に接してくる。というよ

りは、何があるかと自分を曲げないのだといったほうが正しいのかも知れない。

どれだけの殺気をぶつけようと、どれだけの嫌悪をぶつけようと、どれだけの力をぶつけようとも……まるでそんなことはどうでもいと言わんばかりに、己の思うがままに振る舞う。

それは霊夢と接する相手にとって、己が種族人格能力問わずどんな存在でも霊夢は気にしないのだから素のままに接していいのだという、不思議な安心感のようなものを与えていた。

そんな普通の人間にはありえない、どこか浮世離れた感覚と似たものを……咲夜はその時甲斐からも、感じていたのだ。

(これなら思ったよりも……悪いことには、ならないのかも知れない)

勿論だからと言ってほぼ初対面の相手に、それ以上咲夜が特になにか思う所があったわけではなかった。ただ現時点では色々想像してしまっていた最悪よりは、ずっとましな事にはなるのかも知れないという……そんな微かな期待を、咲夜は胸に抱いていたのだ。

(……後はお嬢様方がやりすぎてしまわないように、気をつけなければ……)

まあそれが一番の難題であることは、咲夜自身が最もよくわかっていたのだが。

基本的に紅魔館という所は、常識人が苦勞してしまうところなのである。だから美鈴もきつと今頃内心で、早く甲斐を見てみたいと思いつつもその後の気苦勞を想像してしまうとやっぱりあまり来てほしくもないという、複雑な思いを抱えながら戦々恐々と咲夜の到着を待っていることだろう。

そんな二人を箒にまたがって空を飛びつつ遠巻きに後をつけながら、霧雨魔理沙は内心でほくそ笑んでいた。

魔理沙は幻想郷の中でも、最も霊夢との付き合いが多い人間の一人である。そのため霊夢と甲斐がどこか似たような部分があることを、会話を盗み聞きしたりした上で比較的早い段階から察していた。そしてすぐに、始めに考えていた彼に嫌われるという策は無理であろうことを悟ったのだ。

だが、それと同時に、恐らくそんなものは必要ないであろうことにも魔理沙は気がついていていた。多分あの人間は、一言自分が嫌だといえど「わかった」と了承することだろう。

なら問題はむしろ周囲の反応……特に藍の方が問題になってくるはずだ。

そう思った魔理沙は、次にどうすれば藍を納得させられるかと考えて、今度は甲斐に借りを作ってしまえばいいと判断した。そうすれば甲斐が、「魔理沙には借りがあるからその頼みは断れない」と一言藍に言ってくれば、事足りるだろうと思ったのだ。

幻想郷が無くなってしまえば、困るのは魔理沙も同じ。だからあの人間ならば本当に最悪の状況になってしまっただけで後がなくなってしまうえば、なんとか無理づくり自分を納得させることも出来なくは無さそうだ。

しかし仮にそうだとしても、それは一度強制させられる今の状況を脱してから、自分の判断でそうすると決めたいとどうし

ても気に食わないのだ。

……真っ直ぐである。

そしてそのためには、今向かっている紅魔館という場所は格好の獵場だった。あのレミアが、咲夜が結婚させられそうになっているというのに大人しくしているはずは無いのである。

さすがに本気で殺したりするつもりはないだろうが……必ず何かしらの騒動は起きるはずだ。そしてそれを自分が上手く助ければ、予定通り甲斐に借りを作ることができるはずなのである。

「やっぱり日頃の行いがいい人間には、こうやってツキが回ってくるもんなんだな」

その後魔理沙は彼女の普段の素行を知っている人間がいれば何を言ってるんだとすぐにツッコミが飛んできそうなことを呟きながら、引き続き慎重に気配を消しつつ二人の後をつけていった。

甲斐に咲夜、その後ろに妖精たちと続いて、さらに魔理沙が遙か後方から着いてくる。その様を全て外から見ているものかもし居たとしたら……その目にはその光景が、きっとものすごくシユールなものに映っていたことだろう。

妖怪の山にある守矢神社に住む人間、東風谷早苗は真面目な性格をしていた。そしてそれだけではなく、自身の奉じる神のために外の世界を捨ててまで幻想郷へと移り住むような責任感の強さを持ち情にも厚い、優しい少女でもある。

更には『奇跡を起こす程度の能力』という人の望みを叶える力を持つことからも分かる通り、誰かの役に立つことに対して喜びを感じる性格でもあった。

だがその一方で、外のロボットアニメが好きだというまるで男の子のような子どもっぽい一面も持っていて……しかしやっぱりそういった部分を公務においては表に出さない、大人としての公私の使い分けまで出来る理性的な女性でもある。

人としての自分。神としての自分。現人神であり風祝としての自分と、少女としての己自身。そんな様々な面を持った己の全ての顔に線引きのしつかりと出来る、素晴らしい人格者。

それが守矢の風祝、東風谷早苗という少女なのである。

ただ……、彼女は根っこの部分が初めにも語った通り、責任感が強く真面目な性格をしている。そのために色々なことを考えすぎて、少々内に籠る気質も持ち合わせていた。

だから本音としては、やっぱりまだまだ結婚なんてしたくないし、しかもそれが一度も会ったこともない人間なんて尚更嫌だ。それに徐々にではあったが、やっと慣れ親しんできた人里の人たち……数少ない知り合いも含めてその全てがいなくなってしまうって、かなり堪えているというのもあった。

だけどやっぱり守矢神社は大切で、風祝としてはそれをしないわけには行かなくて、幻想郷の現状をどうにかしたいと思うのは自分

も同じだし、それに大事な家族である御二柱を困らせたくはないし、心配も掛けたくない。

他にも結婚自体に対してや、相手がどんな人間なのかまるでわからないことに対する不安、自分が上手く出来るのかという強い緊張や心配なども感じていた。

そんな彼女の持つ多面的な性格から来る様々な想いがグルグルと頭の中を駆け巡り、それは次第に渦を巻いてその流れの速さを高めていっていたのだ。

「あー、その、ね……早苗。そうだ、ほら。もしかしたら昨日呼ばれたっていう男はものすごい美男子で、性格もいい人間かも知れないし……。それに、なんだ。今の時代じゃあ男も女も二〇歳越えてもさっぱり結婚どころか出産なんか控えちゃったりしてるみたいだけど、昔じゃあそんなの考えられなくて一四、五で子どもを産むのなんてざらだったし、そんなに早苗も気にしなくてもいいんだよ？
だいたい本来人間なんて、体が出来上がったらすぐに子作りするのが当たり前で、私から言わせれば最近の外の人間のほうが異常なんだから」

そして外出をする準備をしながらも、すっかり思いつめた表情で黙りこんでしまっていた早苗の心情を察して必死に慰めようと早口に色々とまくし立てていた諏訪子はその時ふと、早苗の目に映る光がなんだかおかしいことに気がついて、思わず確認するようにその名を呼びながら顔を覗き込んだ。

「早苗……？」

「大丈夫ですよ、諏訪子様」

直後に早苗はニコリと屈託の無い明るい笑顔を浮かべて、パタパタとばたつかせていた手を止めて訝しげに首を傾げた諏訪子にその、なんだかやけに”グルグルとした瞳”を向け突然拳を握り締めると勢い良く何ごとかを語り始める。

「わたし、必ずやり遂げて見せますから！ 案ずるより生むが易しってよく言いますし、そんな人間チヨチヨイと誑かして、幻想郷に守矢大家族スペシャルを作り上げるんです！ 幻想郷では常識にとられてはいけないのだから、もうわたしの子供だけで人里を一杯にするくらいの気持ちで行ってきます！ 幻想郷全土守矢一家化計画発動ということですね！」

その時の早苗のセリフはもうなんとというか、色々と完全に吹っ切れてしまっていた。

「え、ちょ、早苗!？」

そしてそれをすぐ横で聞いていた諏訪子は愕然と顎が外れんばかりに口を開いて、目をいっばいに見開いてしまう。

「その内河童の皆さんにお願いして正月後に大家族特集とかのテレビ番組とかも流してもらったりしちゃって、ついでにわたしのことは肝っ玉お母さんとかそんな感じのキャッチフレーズを付けてもらうんです！ やっぱり年始と言えばあの番組が定番ですから、幻想郷にも必ず普及させて見せますよ！ ついでに初めてのお使いとかもこっちで流せたら、なお良しかもですね！」

「ちよつと待って早苗っ！ わたしには今早苗が何を言いたいのか、全然理解出来ないんだけど!？」

その諏訪子の全力のツツコミに、しかし早苗はまるで意味が分からないと言わんばかりに首を傾げてキョトンとした顔になる。

「? 何って、諏訪子様こそ何言ってるんですか。そんなのもちろん、わたしの今後の決意を語ってるんですよ? 来年の抱負はもう、お子さん百人できるかな? 東風谷早苗は最大で何人の子どもを同時に産めるのか!」で決まりですね!」

「それ抱負っていうの!? すでにもうなにか別のものになってない!? ってどうかそうじゃなくて、なんかもう色々とおかしいつてば! お願いだから早く正気に、いつもの優しい早苗に戻つてよ!」

「とんでもない。わたしは正気ですよ諏訪子様。なんだか今、とってもいい気分なんです。それはもう、お酒でもたくさん飲んで酔っ払っちゃった時みたいに。あ、そうだ。やっぱりご挨拶に伺うにあたって持っていくお近づきの印には、ミラクルフルーツがいいですよね?」

「ミラクルフルーツってどういうこと!? さ、早苗っ、もうどこから突っ込んでいいのかわけがわからないよ! あっ、待って今はまだ行かないでせめてもう少し落ち着いてから」

しかし諏訪子のその必死の説得にもまるで耳を傾けずに、早苗は「では行ってまいります!」と言って颯爽と飛び上がると、すぐに風を纏いながらものすごい勢いで飛び去って行ってしまった。しかも何故か窓から。

「ああ、早苗ー!」

それを見た諏訪子はすぐに慌てて早苗を止めるべくその小さな体をいっぴいに使って手を伸ばすが、今の彼女はその程度では全く止まらないのである。その姿はまるで興奮しきった闘牛のごとく、猪

突猛進という言葉がありありと体現してしまっていた。

東風谷早苗という少女は基本的には静かで大人しく優しい、どちらかと言えば淑やかな雰囲気を持った少女である。

しかし実は口ポツトアニメを見るのが趣味であることから分かる通り、元々はわりと単純で真っ直ぐな性格をしていた。それが今のような落ち着きを身につけたのは、偏にその真面目さから風祝としてあろうと努力してきた、その成果だったのだ。

だがそのせいで先にも語った通り少々複雑な精神構造を持つようになってしまった早苗は時折、今のようにその真面目さもあいまって悩みが爆発してメーカーを振り切ってしまう、普段の様子からはまるで考えられない言動を取ることが、稀によくあった。

……というか稀なのによくあるとはこれいかに。これでは複雑と言うよりは、複雑怪奇と表現したほうが正しかったかも知れない。

その後暫くの間早苗のその恐慌に呆然としてしまっていた諏訪子は、

「うええん、神奈子ー！ また早苗が錯乱して壊れちゃったよー！」

とその硬直が解けた瞬間半泣きになりながら、己の相方へと殆ど絶るようにして泣きついていったのであった。

山の川の近くに住む河童の少女、『超妖怪弾頭』河城にとりは今、

という聞き覚えのある声が扉の向こうから聞こえてきたせいで、思わず「ひゅいつ？」とどこか素っ頓狂な声を上げて動きを止めてしまっていた。ちなみに驚いた拍子に光学迷彩のスイッチも押してしまっていたらしく、その姿を隠す効果ももう消えている。

それから少しして、一向にこちらの反応がないことに疑問を感じたのだろう。やがてそのにとりの眼前に立ちはだかつていた扉はゆっくりとした動作で開いていき、そしてその先にはやはりというべきか……かつて会ったことのある見覚えのある少女の姿、『秘神流し雛』鍵山雛が現れたのだった。

「あら？ 貴女は確か……河童の河城にとりさん、だったかしら？」

そうして落ち着いた調子で声をかけられたにとりは、

「は……はいっ、そうであります！」

と直後に予想外に家の主が現れたことだけではなく、彼女生来の人見知りから来る動揺に舌を若干もつれさせながら、何故か上官と話す兵士のような口調で返事をしてしまう。

「あります？」

「あ、い、いや……なんでもないんだっ」

その妙に慌てた様子を見てとってちょこんと首を傾げた雛に、にとりは誤魔化すように小さく両手を振ってからコホンと一度咳払いをした。

「えっと……、それよりも厄神さん、あの時はスキマに落ちちゃったたのにもう帰ってきてたんだね。もしかしてあのスキマって、幻

想郷の何処かにつながってたのかい？」

「ああ、いいえ。違うわ。あのスキマは外の世界に繋がってたから」「えっ、外の世界！？ それでどうやってこんなに早く………というか、よく帰ってこれたね。今はあの妖怪の賢者も封印されちゃって、外と幻想郷を自由に行き来できる妖怪はいないはずなのに」

「妖怪の賢者が、封印………？」

訝しげな雛のそのつぶやきを耳にしたにとりはすぐに首を傾げると、

「あれ、知らなかったのかい？」

と聞き返す。

すると雛は「ええ」と頷きを返してから、どこか曖昧な表情を浮かべた。

「私が帰って来たのは本当に少し前のことだから………今の幻想郷がどういう状況なのかは、全然知らないのよ」

「ふうん、そうなんだ………」

そう言っただけで相槌を打ったにとりに雛は、「あ、そうだ」と小さく呟きを漏らしながら胸の前でそつと手を合わせて、

「いつまでも立ち話も何だから、一先ず中に入らない？ 大したものはないからあまりおもてなしはできないけど………お互いに聞いたこともありそうだし、厄のことも貴女くらいの妖怪ならすぐにはつかないはずだから、心配いらないわ。それに貴女もなにか、用事があったてここにきたんでしょ？」

「え？ そうだなあ。うーん………」

本人が家に帰って来ているのならにとりにはもう用事はないのだが、外の世界のことは……特に機械類には非常に興味がある。

それになんだか、雛の纏っている空気が以前の影のあったものよりも随分と柔らかくなって、話しやすくなっているような気がしたのだ。もしもそうではなければ人見知りのにとりが、いくら何度か顔を合わせたことがあったからといってこつも自然に話すのは無理だったろうから、多分気のせいではないだろう。

と言うかそれ以前に、昔の雛なら厄がつこつまいが誰かを家に招くだなんてありえなかったし、よほど外の世界で何か大きく意識を変えるようなことがあったのか、それとも幻想郷の今の予断を許さない状況を、多少なりとも察しているのか……。

（なんにせよ、これなら少しくらいはまあ、いいかな？ 今は特に急ぐようなこともなかったはずだし……）

そうしてにとりが「それじゃあ失礼して、ちょっとおじゃましようかな」と頷いてから視線で伺うと、雛は快く了承して小屋の中へとほぼ初めてのお客様を招き入れるのであった。

10話(後書き)

早苗さん、大暴走。

紅美鈴は咲夜の事をレミアアと同様、ほとんど生まれてすぐの頃から知っていた。そのため同じく家族のように思っているとはいえ、やはり主人であるレミアアやその妹様であるフラン、付き合いの長い友人であるパチュリーともまた違う……いわば本当の妹か何かのように思っていたのである。

だから、あの時。レミアアとパチュリーが暴走していたあの時は傍から見れば理性的に振舞っていたように見えただろうが……その実内心では、あの二人とそれほど大差ない程度には心乱れていたのだ。それがあも普通にしていられたのは別に美鈴が特別面の皮が厚いからとかそういうわけでもなく、単に先に二人が自分の分も取り乱していてくれたからという、ただそれだけのことだった。

そして美鈴は今その件の人間、門倉甲斐が咲夜と共に眼前へと降り立ってきて、そしてゆっくりと二人連れ立って歩いて来るのを目にしながらも、その時と同じくらい……どころか下手をすれば、それを上回るほどに内心で酷く動揺していた。

それは別に甲斐が想像を絶するほどの悪人顔だったからとか、その逆に他に類を見ないほどの善人だったからとか、そういう訳ではなく……

（何なんですかこの、完璧なまでの気の循環は！　こんなの仮にどれだけの武術の達人だって……気を扱うことが能力にまでなってる私にだって、簡単にはできませんよ！？）

気の循環というのは、武道における気の運用法ともまた少し違うものだ。

人間に限らず、生物というのは常に絶え間なく気を精製している。

それ故古い気は自然と体の外へと出ていき、大気へと混ざっていくのが普通だ。

しかし気を循環させるといふのは単純に体外へと気を垂れ流すのではなく、それを龍脈であったりマナであったり、そういった世界の気の流れへと還元させるといふ……どちらかと言えば仙人などの俗世を捨てた者のする、生きながらにして世界へと溶けこむための気の運用法である。

（だけど感じられる気自体は、確かに人間のもの。まさか、これほどまでに世界との親和性の高い”ただの人間”が居る筈が……！）

しかしいくら甲斐の気を探っても、感じられるのは”普通の人間”のそののみ。量も特別多いわけでもなく、どこるか平凡の域をでない量しか持つてはおらず瞑想をしているわけでもない。

つまりこの人間は本当にただの人間でありながら、何かしらの方法　呼吸法や瞑想など　を使わずにあくまでも自然体のままで、世界との気の循環をなしているということになる。

そんなバカな話が

「　ちよつと美鈴、どうしたの？　いきなり立ったまま黙りこんでじゃって。まさか居眠りしてるってわけでは……なさそうだけど」
「　門番さん？」

とその時その思考を遮るように二人から訝しげに声をかけられ、美鈴ははつと我に返ると門を閉じたままであったことに気がついて、「す、すみません」と謝りながらも慌てて門を開き体を横にずらす。それからすぐに美鈴は「どうぞ、お通りください」とどこかかしくまいった態度で頭を下げ、二人の不思議そうな視線が通りすぎていくまでそのまま沈黙を守っていた。

(どちらにせよ、あの気の穏やかさは……善人であるかはわからなくとも、少なくとも酷い悪人であったりはしなさそうです。あれなら一先ずは安心、ということにしておきましょう)

それ以上の見極めは、きっと中の二人がしてくれるだろう。あくまで自分は門番であり、今回のように正式な賓客には過度な干渉はできない。取り敢えず今はそれだけわかれば十分ということにして、納得するしか無いだろう。

それになんといつても、繰り返しになってしまいが自分は門番なのだ。故にすべきことは客人の見極めなどではなく

(あの遠巻きに様子を伺ってる黒白魔法使いと、この視線の主がもし入ろうと向かってきたら追い返すこと、でしようね。いつもとは違って今日ばかりは、本気でここを通すわけには行きませんから)

そうして美鈴はすぐに開いていた門を閉じると構えを取り、呼吸法などを併用しながら内に流れる気を高めると、まるで体が何倍にも見えてしまうようなプレッシャーを放ちながらもどっしりとそこに立ち塞がった。

紅魔館の中にあるとある図書館に住む魔女、パチュリー・ノーレッジ。彼女はその『動かない大図書館』という二つ名からも察することが出来る通り、知識という一分野に限定するのならば、幻想郷でもトップクラスに入るほどの少女である。

それがイコールで戦闘力になるというわけではないが、扱える術式の数で言えば他の追隨を許さないほどのものであり……仮にそれを”戦略的に”運用したとすれば、戦闘能力でも幻想郷最強の一角に加えたとしても過言ではないかもしれない程のものなのだ。

そしてそれを己自身もある程度自覚していたパチュリーはそれ故に今、驚愕していた。

（魔術が……効いていない？ それも発動はしてその上で、まるで吸収でもされているみたいに）

人間は普通、恐怖であったり怒りであったり……何かしらの感情が高まったときにこそ、その本質を覗くことができる。それがその人間の全てとは言えなくとも……やはりそれは嘘偽りのない、その人間の心の一部なのだ。

そしてそれを見るために咲夜に連れてこられた甲斐を心理的に追い詰めるべく、パチュリーはその時図書館の中から水晶を通して監視しながら精神干渉系の術式を発動させていたのだ。

その効果は相手の恐怖心を高めるだけという、それほど難しくもない簡単な呪詛のたぐいだっただが……しかし単純であるがゆえに障害もしにくく、そしてパチュリーが失敗するはずもない筈だった。

（彼の持っていた護符は、全てすり抜けていたはず。実際術後反応もなかったし……それすらも隠すような高度な防護術式を護符に込めるのは難しい。というよりも、そこまでするのならそのキャパシティを防御力に回すだろうから、意味はない）

そうして分析と試行を繰り返す内に次第に彼女の瞳には冷たい光が宿り始め、その意識も紅魔館に住むパチュリー・ノーレッジではなく、冷徹な魔女のものへとなっていく。

その他精神干渉術式、失敗。肉体干渉系の呪詛も発動はしても効果を発揮しない。他にも体力減少、不運、外傷、あらゆる呪いが効果を発揮せず。

精霊による直接攻撃、発動失敗。ただし足元を軽く隆起させてみたところ、それは問題なく発動して対象をよろめかせることに成功。その後前方の空間に風や温度変化などを発生させても間違いなく発動していることから、間接的なものは効果を発揮することを確認。

次に紅魔館内部の視覚効果を間接的に演出する術式の発動、成功。ただし対象は特に気にした様子はなく、元々の精神力も高い様子。また、対象の眼球等に干渉しようとすると、やはり発動はしても効果をうまく発揮はしてくれないようだ。

走査術式。身体能力のみを調べる簡易術式から、対象を廃人にして励起する魂までを捜査する高度なものまで全て失敗に終わる。が、やはり術式の発動自体はしている模様。

（直接的なあらゆる精神に属する事象の無効化？ でも限定的に……精霊魔術のみは、その発動を阻害させている。それに本人には何かしらの力を使った様子はないから……自然に属する何かの加護？ いえ……全属性をカバーするような広範囲な加護なんて、そうそう有り得ない。それこそ相当高位の……星霊か聖霊クラスの加護が必要になるはず。もしくは中位以上かつ、複数の存在の加護？）

「な、なにをしてるんですかパチユリー様！」

（他にあり得るとしたら、あの小鬼の霧化のような……干渉を受けても通用しなくなるような能力かしら。興味深いわね。もう少し実験を）

「パチユリー様！」

「……うるさいわね、小悪魔。邪魔よ。今は少し黙ってなさい」

その時のパチュリーの様子は、全くの無表情でありながらまるで耳元を飛んでいる子蠅を見ているかのような、本当に鬱陶しそうな目をしていた。場合によってはその声をかけてきた少女……小悪魔を、本当に潰してしまいかねないほどに。

『目は口ほどにものを言う』、という言葉がありありと現しているその視線に小悪魔は思わずうっつと怯んで本当に黙ってしまいそうになりながらも、しかしどうにか胸の内から少ない勇気をかき集め振り絞って、若干声を震わせながらも再び口を開いた。

「ダメです、黙りません！ どうしたんですか、いきなりそんな……少し怖がらせるだけのはずなのに、それどころかあの人を殺してしまいかねないような強い術まで使ってしまったって！ 今の幻想郷の状況であの人にそんなことをしてしまったら紅魔館自体が危ぶまれると言われていたのは、パチュリー様ご自身ではないですか！」

「あ………」

サーっと自身の血の気が引いていく音を、ようやく正気に戻ったパチュリーはその時聞いた気がした。

万が一。万が一にでも、あの人間を守っているものが、例えばかけた術が一定以上は無効化できないものであったとしたら。

いや……そうではなかったとしても、それが一定時間軽減するのみであるとか、効果の発動を遅延させるのみであったとしたら……、

(ヤバイ……！)

その瞬間、パチュリーはただでさえ白い顔をまるで死にかけの病人のように真っ青にさせながら、ブワツと全身から脂汗が吹き出したのを感じた。

そして自身が喘息を患つてることすら忘れて、直後にほとんど叫ぶようにして小悪魔に指示を出す。

「小悪魔！　ありつたけの解呪系術式の書かれている本をすぐに持ってきて！」

「え？　別にパチュリー様が術をかけるのをやめれば、それでも大丈夫なんじゃないんですか？」

「いえ、もしかしたら後になってから効果を発揮するだけかも知れないし、それに――」

パチュリーは一度そう言つて言葉を止めると、その訝しげな視線にひくりと頬を引き攣らせながら、

「私でも中々解呪できないような、一度発動したら死ぬまで継続的にかかる禁術までさつき使っちゃったのよ……」

「ただの人間になんてものかけてるんですか!？」

小悪魔の顔が、パチュリーに負けず劣らず青ざめていく。

「い、今はそんな事はいいから、とにかく早く！」

「わ、わかりましたよー！」

絶対これが終わつたら、久しぶりの休暇をとってやるんだ。そんなことを思いながらも、小悪魔はパタパタと足と羽をばたつかせて図書館中あちこちに鎮座している大きな本棚の間を飛び回るのであった。

12話

「パっ、パチユリー様!？」

咲夜はその時、驚いていた。

どうにも初めから、一向に予定していた術に甲斐がかららないことから無言で案内を続けながらも内心で首をかしげていると、突然まるでお化け屋敷の仕掛けのような術ばかりが飛んできて……そしてコレは何かあったのだろうかと、一旦甲斐に断って確認してようか悩み始めた矢先に、今度は特に探らずとも肌でその危険度が感じられるような、トンデモないものが飛んできたのだ。

それはかかってしまったとしたら、自分ですらただでは済まないであろうレベルの術だった。どころかおそらくは、主であるレミリアでさえ抵抗するのにはそれなりに苦勞するレベルのものだったのだから、その時の咲夜の驚きも察することができるだろう。

「か、門倉様！」

「ん？ どうかしたかい、咲夜さん。なんだかやけに慌ててるみたいだけど……何かあったか？」

「えっ……あ、あれ？ あ、あの……だいじょうぶ、なんですか？」
「？ 大丈夫って、何が？」

しかし慌てて振り返った甲斐から返って来たのはそんな呑気なもので、

(もしかしたら八雲が護符以外にも何か渡していたのかも知れない)

などとそんなことを考えながらも、咲夜は客人の前であることから忘れてほっと素のままの反応で胸を撫で下ろしていた。

そしてその後すぐに、

「あの、申し訳ありませんが、ここで少々お待ちいただけますか。急いで確認しなければならぬことができましたのでっ」

というと突然飛び上がり、甲斐に背を向け体を加速させる。

実はこの時咲夜は口調こそ落ち着いていたが、内心ではかなり焦っていたのだ。

「えっ？ あ、ちょっとま」

それは甲斐の返答も待たず、その上能力すらも使わずに文字通り飛んでいってしまったことから、十分に窺い知れることだろう。

そして甲斐はその姿がドンドンと遠ざかってしまい見えなくなつてから、制止の声と共に持ち上げていた手を所存投げに下ろすと、

「いきなりどうしたんだらうなあ、咲夜さん……」

と首をかしげながらその場に立ち尽くすしかなかった。

その時フランドールは、ルンルン気分で階段を登っていた。

そこが階段ではなかったとしたら、もしかしたらスキップぐらいはしていたかも知れない。実際彼女の背中に生えている、木の枝に

宝石がぶら下がっているような特殊な形状の羽根もその気持ちを表すようにパタパタとせわしなく動いていた。

その理由はと言うと当然、ようやく久しぶりにあの地下室から出てこられたからである。

少し前までずっと心の底から沸き上がって来ていた破壊衝動もやっと収まって、当分は落ち着いてくれるだろう。少なくとも数日の間くらいは、地上部にもいられるはず。

だから、

(咲夜はきつとまた何処かでお掃除してるんだろうな。美鈴は、お昼寝中かな？ パチユリーはいつも通りご本を読んでいるんだろうな。……お姉さまは、何をしてるかな)

などとフランは、自身の家族が今は何をしているか色々想像をふくらませながらも、軽快な足取りで階段を登り切りようやく廊下へと出てきたところだった。

しかし、その直後。

(あれ？ あれ、誰だろ、う。お客様、か、な)

偶然、それまで案内してくれていた咲夜が急に飛び出して行ってしまい、何処か困ったように所存投げに佇んでいた人間 甲斐を
目にしたその瞬間、

「あ、」

フランの心の中の全てが、

「あは、ハハっ」

”破壊衝動” 一色のみ、染め上げられ塗りつぶされた。

「あハ、キャハハハはははははははははははハハハははははは、ああああああウウああああアアああああ！！！！」

門倉甲斐の保持する能力は、『全てを許容する程度の能力』。
その能力は、幻想や現実、そしてその狭間すらも許容する、絶対的な許容と受容の力。

それは抑圧され、常にその身の内でフラン本人に否定されながらも膨張し爆発する機会を伺っていたその力、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』とそれに伴う彼女の破壊衝動をも許容し受容してしまう。

そのためフランはこの時、未だかつて無いほどの強烈な発作的破壊衝動に突然襲われて、まるで抵抗する間もなく一瞬の内に破壊以外には何も考えられなくなってしまい、直後に自身の破壊の手を可能なかぎり全てに伸ばしてそれを握りつぶしたのだ。

「っ！！！！！！！！」

次の瞬間その周囲には轟音が轟き鳴り響き、その地にあったあらゆる全てが破壊せしめられて……そしてそこにはたった一つのモノ以外には、なにもかもが残ってはいなかった。

それはあらゆる偶然によって、引き起こされたことだった。

美鈴は甲斐の護符を抜くために張られた結界によって中の様子が

伺えず、

咲夜はパチュリーの暴走に慌てて能力を使うのも忘れ図書館へと向かっており、

パチュリーも同じく慌ててしまつて監視の目を止めており、
レミリアの待っていた部屋はその場所からはまだ遠く、

そして、フランが久しぶりに地上部に出てきて初めて会つたのが、
甲斐であつた。

それら全ては偶然によつて複雑に絡み合い、やがて運命と呼ばれる一本の紐へと至つたのだ。

甲斐はその時、自身の内側……心の中に手を伸ばされたのを、意識ではない何処かで確かに感じていた。

肉体とは魂の器であり、そして魂とは心の器である。そして心とは、その存在の核である。

それをもしも潰されてしまつたら、無機物だろうが有機物だろうが精神の生き物だろうが関係なく、ありとあらゆるモノ全てが砕け散つてしまつたらう。

それはすなわち死であり終わりであり、生物非生物関わりなくいづれ訪れる終焉の形の一つなのだ。

普通であれば、そんなものに抵抗する術はない。もしもそれが在るとすればただ一つ、それをされないようにするという逃げの一手のみ。その手に捕まってしまったら、それは既に等しくあらゆるモノに終わりが訪れてしまったということなのだ。

だが

門倉甲斐は、世界すべてを受け入れている。そのために必要なのは、決して変わらない不変の”己”であり心。何もかもを受け入れるには、何もかもを受け入れてもなお変わらない心を持っていなければならなかった。

それはたとえどこまでも純粹で強大な破壊の意思だろうが何だろうが関係なく受け入れて、しかしそれでも不変でいなければならぬのだ。

それが何であろうとも。それが心であり精神に属する何かであるのなら、甲斐は変わってしまうわけには行かなかった。

それをしてしまうということはつまり己が『門倉甲斐』ではなくなるということであり、今まで培ってきた自分のすべてを否定してしまうということ他ならないのだ。

だから

甲斐はいつものように、無意識の内にその自身の器の縁へと手をかけて、その中身……心へと伸ばしてきたその手を受け入れて受け流し、世界へと循環させたのだ。

「ぐ……！」

しかしそれは、甲斐のみに適用されるもの。周りにあるものは当然破壊され、そしてその中心にいた甲斐へと破片が降り注ぐ。それらひとつひとつの破片は大きさが小さな石くらいになっており、大したものではなかったのが不幸中の幸いではあったが……だからと言つて、無傷とはいられなかった。

だが甲斐は、それが一旦収まって視界が晴れた後も、その場から離れようとはしなかった。そこには状況が理解できなくて驚きに固まっていたこともあったし、連続して同じことが起きていたことから足元が崩れてしまつて不確かだったという理由もあったが、それだけではなく。

いくらそれがどれだけの暴虐の具現だからといって……。いや、だからこそ

(“泣いてる” 子どもを前にして、それに背を向けて逃げるわけにやいかんだろ)

甲斐の目にはフランのその時の狂声が、歪にゆがんだ表情が、何よりもそのこちらを見つめている瞳が、その裏では泣いているようにしか見えなくて……。そしてそれが甲斐のその足をその場へと引き止め、縛り付けていた。

状況がまるで見えなくて、全てがいきなりで、周囲の何もかもが碎け散り、天井が破壊され青空が見えていて、どれだけの狂気をぶつけられたとしても……。甲斐にはその場から逃げだすことだけは、どうしても出来なかったのだ。

「うああああアアアああああああああああああああああああ！！！！」

しかしフランは、たとえ通じなくともそれを止めることができない。

一度加速のついてしまったその衝動は、最早ブレーキの壊れた車のようなものだった。

幾度も幾度も押さえ込められ、せき止められ、常に発動するその時を待っていたその衝動は、眼前にある全てを決壊したダムから溢れる水のごとく、破壊という名の流れへと巻き込み押し流していく。

「っ！！」

そしてフランは声にならない”悲鳴”を喉がはちきれんばかりに叫び続けながら、心の暴虐に背をむりやりに押さえつけられて、幾度も幾度もそれを行使し続けた。

何度繰り返したとしてもそれを受け止めてくれる、門倉甲斐という名の世界に対して。

「いっっ！！」

だが何事にも、必ず終わりは訪れる。どんなモノにも、無限というのはいえないのだ。無限とはすなわち数えられないということであり、そして数えられないということはゼロですら無い、始まりの存在しないモノだということなのだから。

故にその衝動にだって、終わりはあったのだ。それは今まで抑えこんできてしまったからこそ膨れ上がったものであり、そうでないのならフランの心が破壊に染まることはないのだから。

そしてとうとう、この時ついに、フランの破壊の意思は消耗し、
磨耗しきった。

それはこれまでとは違い、もはやフランの心の一部として……そこだけが突出して大きくなり衝動という形になることは、再びそれを無理に抑えこんだりしない限りは無いだろう。

だが彼女の心は今、ブレーキが壊れていた。だからその加速のままに伸ばせなくなってしまった手の代わりに、フランは足を踏み込み正面にいる唯一破壊することの出来なかったモノ、甲斐へと向かって飛び込んでいく。

「いやだよお！ もうやめてええエエ！！」

既に正気に戻った心を抱えて、それでも止まらない体を泣きながら止めようとしながら。

力は使いきり、そのせいで体力もほとんど残っていないとも……それでも吸血鬼という存在はその優れた身体能力のみで容易に人をひき潰し破壊し尽くしうる。

だからフランの脳裏にはその時、目の前に居る人間が自身の体によってもたらされる衝撃によってぐちゃぐちゃになってしまう未来しか、想像できなかった。

が、その先にいたのはただの人間ではなく、『門倉甲斐』なのだ。

「あ……！！」

故に彼はその飛び込んできた幼く小さな体を大地にではなく空へと循環させて、そしてその身体をそのまま危なげ無く受け止めた。

直後にフランは完全に心身ともに消耗しきり、ほとんど気絶するようになり落ちてしまう。

「ふう……。なんだかわけが分からなかったが、取り敢えず終わった……。のかな？」

その後甲斐は小さく吐息を漏らしながらフランの顔をそっと覗き込んで、その瞼が閉じられ小さく寝息が漏れているのを確認してから内心でほっと胸を撫で下ろした。

が、それはそれとして、

「あー、それにしても……。どうしたもんかなあ、これ」

先にも述べた通り、正直なところ甲斐は全く今の状況が理解できていなかった。

甲斐からしてみれば、いきなり説明もなしに案内役がいなくなってしまうって困っていた所に、突然廊下の角から現れた女の子に襲われた、というところなのだ。

そのため今自分の腕の中で疲れて眠ってしまったこの少女が誰なのかもわからなければ、いつ咲夜が戻ってきてくれるのかも分からない。その上なんだかよく分からない内に周りがほとんど更地になってしまっていて、自分が何かしたわけではないとはいえ、このままほっとくわけにも行かないだろう。

だがどうにもこの館の中はやたら広い割には人影の一つも見当たらず、誰かを呼びたくてもどうにもならないし……

「参ったなあ……」

結局甲斐は何一つわけがわからないまま、取り敢えずフランが落

ちてしまわないように抱き直しつつ困ったようにため息を漏らして、
ようやく事態が収まったというのに途方に暮れることしかできな
かったのである。

12話（後書き）

次回更新もいつもよりは少し間があくと思いますが、お付き合いいただけると幸い。

13話

時は少々さかのぼり、咲夜が甲斐の案内をしてパチュリーが暴走する前。

紅魔館最奥部の当主の部屋で、レミリアはずっと一人でそわそわしていた。その理由は言うまでもなく咲夜からの件の人間の到着の報を待っているからであり、そして同時にその人間に関して色々想像をふくらませてしまっていたからである。

見た目は？ 性格は？ 身長は？ 年齢は？ 咲夜を任せられるだけの気概はあるのか？ 今の自分の状況に対してどう思っているのか？

(…………、本当なら…………)

例えどんな理由や動機があつたとしても、相手がどんな人柄だつたとしても、気持ちのない結婚など咲夜にして欲しくはない。しかし……感情が落ち着いてしまえば、どうしても自分の中にこれまで培ってきたスカーレット家当主としての思考が顔を出してしまう。そして自分の中にあるその面は、しきりに相手が何者であろうとも紅魔館が取るべき道はそれしかないのだと訴えかけていた。

元々……貴族としての対面を大事にしていたのは家を守るためであり、それはひいては家族を守るためのものだったのに。

だというのに自分は今、家を守るために家族の一人を犠牲にしようとしているのだ。

酷い、ジレンマだった。

理性では、そうするべきなのだとわかっていた。だけどやはり、赤子の頃から娘として接し育ててきた咲夜にそんなことを強いるの

は、嫌だった。だけどそのどちらをも理解してくれているからこそ、咲夜が自ら進んでそれをなそうとしているのも分かってしまった……その心遣いは無碍にするのは、果たして母親として正しいのかと、そついう思いも浮かんできてしまう。

(だけど……)

もしもその呼ばれた人間が、どうしようもない外道だったとしたら。

感情のままに動いてしまうであろう自分を止めることが出来る自信は、なかった。

だが、自分がそれをしてしまえば、それはイコールで紅魔館全員の意志であるということになってしまう。集団とは、そついうものだ。トップの決定は、すなわちそこに所属する全ての者の意志であると取られてしまう。

そして仮にそつなつたとしても、きつとみんなは文句ひとつ言わず最後まで着いて来てくれるのだろう。それもそれこそ、最期までだからこそ……それがどうしようもなく理解できてしまうからこそ、レミリアは感情のままに動くわけには行かなかった。

感情と理性。レミリアという名の吸血鬼としての自分と、スカーレット家当主としての自分。

そのどちらを優先すべきかなどと、とうに分かっていることなのに……それでもどうしても、心が納得してはくれなかった。

「はあ……」

思わず、深い深いため息が漏れでてしまう。

どちらにせよ、せめて一度は件の男をこの目にしなければ納得す

ることなどできないが、仮にそれをしたとして本当に自分は納得できるのか。今のこの、胸の内で渦巻く感情に折り合いをつけることができるのか。

できないではないではなく、やらなければならないのだ。そんなことは頭ではとつくにわかっていたとしても、どうしてもできると言い切れることは出来なかった。

(こんな姿、咲夜やフランには絶対に見せられないわね……)

とうの昔に何度も暴走してしまつて醜態を晒しているのは理解していたが、これはそれとはまた違うものだ。こういつた種類の……悩みや苦悩を抱えている自分を見せる。それは紅魔館の主としてあるまじき行為であり、なにより自身の吸血鬼としての矜持が許さないのだから。

そんなことを、悶々と考えていた時だった。

「……………っ!？」

突然の、轟音。

それはどうあつても……精神に依存する生き物である以上どうしても恐怖を抱かざるをえない、破壊と言う一つの属性にのみ特化した心の力。

「フラン!?! どうして……………!」

フランがこの力を地上で使つたことなど、今まで一度もなかったことだ。以前の異変の時さえ、その戦いの場はフランの部屋のあの地下であった。

たしかにそろそろ地上に出てくる頃合いだろうと思ひ、咲夜の事

をどう説明しようかと頭を悩ませてはいたが……

(いえ、今はそんなことより急いであの子を止めないと……!)

このままでは、下手をすれば紅魔館全体が更地になりかねない。そしてそうなってしまうえば、後で最も苦しむのはフラン自信なのだ。故に姉として、唯一無二の家族としてほうっておくわけには行かなかった。

「場所は……」

意識を集中させて、気配を探る。すると直後に繰り返し先ほどと同じかそれ以上の轟音が響いてきたので、大体の場所を割り出してレミリアは部屋から飛び出した。

(地下の入口近くの廊下。ここからだ、少し遠いわね)

自身の出しうる最高の飛行速度を以って、フランの元へと文字通り飛んでいく。その間にもレミリアは、一体何があったのかと思考を巡らせていた。

(フランが能力を……それもこんなたてつづけに使うなんて、明らかにおかしい)

仮にこれが地下から聞こえてくる音だったとしたら、まだ納得はできる。しかし今フランが居るのは間違いなく屋敷の地上部で、それもこの様子だと完全に我を忘れてしまっているのだろう。

つまりフランは気持ちが悪く落ちてきて地下から出てきたというのに、その直後に何故か暴走してしまったということになる。

(まさか、例の人間に何かされたんじゃないか……)

フランが能力を使うことで喜ぶ者は、フラン自身を含めて紅魔館には存在しない。だからついそんなことを勘ぐってしまったが……

(いや。それはない、か)

その考えは、すぐに捨てた。

フランの力は、幻想郷の中でも上位に入るレミリアさえ凌駕しているのだ。そのフランの精神に干渉するだなんて、絶対にできないとは言わずとも、パチュリーでさえ容易にはかなわない。それこそやろうと思っただけなら、それ専用の術式を開発して、その上でフランが無抵抗の状態で術をかけるとか……そんなレベルのものなのだ。そんなことを、ただの人間にできようはずもない。

(なににせよ、急がないと……!)

万が一にでも、咲夜や美鈴がフランに殺されてしまったら……誰にとっても、悲劇となる。そんな恐ろしい危惧を抱きながらも、レミリアは更に速度を上げて目的地へと向かっていった。

そしてとうとう、そこにたどり着いた時に……レミリアが目にしたものは、狂笑を上げながら能力を暴走させるフランと、その中心にいながらその全てを受け止めている、見たこともない人間の姿。

(あ……)

それは……その光景は、己自身がいつかたどり着いてみせようと思っていた、理想だった。

今でもまるで、昨日のことのように思い出せる。フランが初めてその能力を、暴走させてしまった時のことを。

バラバラに弾け飛び、あつという間に碎けてしまった両親。まるで廢墟のようになってしまった、かつて住んでいた屋敷の姿。血みどろになりながらも、悔しそうに佇む美鈴の姿。そして同じくボロボロになってしまった自分の腕の中で、泣きじゃくりながら自分を殺してくれと縋るフランの、その全てを鮮明に覚えている。

あの時レミリアは、決意したのだ。いつかフランを、その苦しみから開放してやろうと。今はまだ力及ばず、それは叶わなくとも……どれだけの時間がかかろうとも必ずフランの全てを、姉として受け止めてやるのだと。

その思いが。今この時に、バラバラに碎け散ってしまったような気がした。

いや、それどころか

(今の私には、近づくことすら……！)

あまりにも荒々しい、この撒き散らされる破壊の嵐は……きつとあの時の両親のように、あつという間にこの身を碎き滅ぼさだろう。故にレミリアは、恐怖ではなくランドールのために……これ以上足を前に進めるわけには、いかなかった。

本来なら、悪魔や妖怪にとって肉体的損傷はそれ程重要なことではない。それが仮に、四肢が失われたのだとしてもだ。幻想に生きる精神の生き物を殺すのは、”認識”であり精神なのだから。

しかしフランの能力は、ただの破壊ではない。
相手の最も壊れやすい”目”が見えて、それを手に取り壊す。そ

れがフランの自身が能力を使うときの感覚を表した言葉であるが…
…それはそんな生易しいものではなかった。

幻想郷に存在するものは、生物非生物関係なく幻の存在であると位置づけられる。そのためそこに存在する何モノかの核は皆、精神に依存してしまうのだ。そしてフランのあの能力は、その精神を生み出す心を破壊するものだった。

故にあの能力に対抗するためには、ただ一つ。揺るがぬ心を持つ他にない。例えば生きながらにして全てが”完結”してしまっている、霊夢のように。

そしてまだ自分は、その領域に立ててはいなかった。

そこまで思い至った所で、ブツリと生々しい音がする。その音は、レミリアがあまりにも強く拳を握りしめたために爪が肌へと喰い込み裂いてしまった、その音だった。

そんな傷ばかり、あつという間に治ってしまうのに。

未だ泣きじゃくるフランを抱きしめてあげることすらも、自分にはできないのか。

「いやだよお！ もうやめてええエエ！！」

(ああ、フラン……。泣かないで、フラン……)

悔しくて、腑甲斐なくて……。今すぐにも、自分の心臓を抉り出してしまいたくなった。

そして、全てが終わった後。

暫くの間レミリアは、まるですべての感情が抜け落ちてしまったような、自分の顔を同じ作りの仮面を被ってしまったかのような…
…完全な無表情になってしまっていた。

あらゆる感情が、突き抜けてしまって。もう自分がどんな表情を

しているのかも、自覚できなくて。まるで精巧に作られた人形のよ
うな無機物じみた顔のまま二人を無言で見つめながら、その場に
ただただ佇んでいた。

「ん？」

フランの暴走が収まってから、数分ほど経った後のこと。甲斐は
不意に後ろから聞こえてきた軽い足音に気がつき振り向いた。する
とそこにいたのは、今自分の腕の中で安らかに眠っている少女とよ
く似た顔立ちの女の子で、ようやくこの家に住む誰かが来てくれ
たのかとホッと息をつく。

その、直後。

「お前は……」

「え？」

甲斐の正面で立ち止まった少女　レミアは、始めビククリす
るほどの無表情で、顔を俯けながらポツリと何事かを呟いて、

「……いえ。その子は私の妹だから……私が引きとるわ。家人が迷
惑をかけたようで、申し訳なかったわね」

と言葉少なげに、やけに感情の起伏のない平坦な口調で語り腕を前
に差し出してきた。

「ああ、そうなのか。いや、よかったよ。案内してくれてたメイドさんもいなくなっちゃって、どうしたもんかと困ってたんだ」

「……そう」

なんだかやけに重苦しい雰囲気纏っているレミリアに若干首をかしげながらも、甲斐はフランを任せるべく腰を落とした。

たとえ子どもの体格であろうとも、寝ている誰かを起こさないようつれていくのは存外に体力を使うものだ。だから一瞬自分で連れていこうかと提案するべきか迷ったが、背中に羽もあることだしきつとこの二人も人間ではないのだろう。

なので安心してその身体を離すべく腕を伸ばそうとしたのだが……

「あれ？」

それと同時に自身の服が引っ張られ、フランが一向に離れないので疑問に思って視線を落とす。するとそこには、まるで絶対に離れないとでも言わんばかりにがっちり胸のあたりを掴むフランの手が。

「あー、どうしようか。まさか無理に引き剥がすわけにも行かないし……」

甲斐は借り物の服に思いっきりシワが付いちまうな、などと考えながらもどうしたものかとレミリアに視線を向けるが、それに返って来たものは質問の答えではなく、まるで独白のようなレミリアのつぶやきだった。

「私が……」

「え？」

「私が、その子の姉なのに。お姉ちゃんは、私なのに……」

そしてポツリポツリと、まるで雨が降ってきたかのように……フランの能力によってむき出しになってしまった地面に小さな雫が落ちて、染みを作っていく。

「何も、なんにもできないの……？ 眠っているフランを、ベッドに連れていってあげることすら……、できないの……？」

次の瞬間、それまでの無表情が嘘のように……クシャリとレミアアが表情を歪ませた。それはまるで、どうにか蓋をしていた感情が堰を切って溢れてしまったかのように……その様子からは深い深い、悲哀を感じさせられた。

「どうして……」

そうしてレミアアは、面喰らって目を丸くしている甲斐にズイッと泣き顔のまま詰め寄ると、

「どうしてお前には、フランの能力が効かなかった……！？ 一体何の能力を持ってるんだ、答える！」

と叫ぶ。

その姿はまるで、懇願しているようにも、激昂しているようにも、嘆いているようにも見える……なんとも形容しがたい、複雑なものだった。

ただど一つだけ、甲斐にも分かったことがあった。それはこの眼の前の少女が、何かに深く悲しんで、苦悩しているのだということ。

「俺は……」

どうすれば、いいのだろう。きっとこの少女は、本当はその答えなど求めていないのだろう。

「フラン……、ごめんなさい……」

それはすぐに直前の勢いを失ってしまい、甲斐の腕の中で眠る少女をハラハラと泣き続けながら見つめていることから、見て取れた。

「……」

だからかけるべき言葉が、見つからなかった。だってこの少女は自分には、何も求めていないのだから。

(どうして……)

誰かが泣いている姿というのは、こつこつ胸を締めつけるのだろうか。女でも、男でも。老人でも、子どもでも。老若男女関係なく、誰かが悲しむ姿を見ていたくはなかった。

叶うことならば、本当は世界にいる誰にだって、泣いて欲しくない。だって甲斐は世界すべてを、愛しているのだから。

だけどそのために、できることは何もなかった。少女の世界は少女のもので、それは教えてもらわなければ知りうることはできないことだから。

何を求めているのか。何を悔やんでいるのか。何を悲しんでいるのか。

何もかもがわからなくて……だから甲斐は、嗚咽を漏らすことを我慢しながらも静かに泣き続けているレミリアの側で、ただただ落ち着くまでその小さな背中をさすってやることしか、出来なかった。

「へへっ」

クイツと楽しげに口角を吊り上げ帽子のツバを爪弾くと、空いた右手で自身の相棒であり最高の切り札、ミニ八卦炉を懐から取り出す。

「弾幕は」

そして宣言されるのは、もはや『普通の魔法使い』霧雨魔理沙にとつての代名詞とも言つべきスペルカード。

「パワーだぜ！」

その威力は最大出力で放てば山一つを焼き払えとも謳われる、幻想郷全体でも指折りの高火力砲。その名も、

恋符

「マスタースパーク！！」

直後に撃ち出されたのは、まるで彗星の如く燦然と輝く巨大なレールガン。それは直線上にあった虹色にきらめく光弾全てを飲み込んで、一直線にその先に居る人物　紅魔館の門番、美鈴の元へと向かって行く。

いつもならば、これで終わり。スペルカードルールに則って魔理沙は勝者となり、無事紅魔館の中へと入ることができるだろう。

この時魔理沙は、異変解決人の一人として数々の人妖を倒してきたその自信を以って、美鈴がこれで撃墜されるであろう未来を脳裏に思い描いていた。

そしてこのまま何もしなければ実際にその未来は現実のものとなり、紅魔館の門扉は開かれ魔理沙にその敷居をまたぐことを許してしまうことになる。

元々、美鈴は弾幕ごっこがあまり得意ではなかった。

彼女の能力は『気を使う程度の能力』であり、また彼女自身あらゆる武術を習得しているため、近接格闘能力は高い。が、弾幕ごっこはその名の通り妖力や魔力などを弾丸へと変換させ、それを撃ちあう決闘法であるために、その能力を完全に活かすことは難しいのだ。

しかし

「ふうふう……」

しつこいようだが紅美鈴は、門番なのである。そして門番とは門を守る者であり、ひいては招くべくを招き、招かざる者を遮る守り人だ。故に……相手が自分よりも強いから、自分が得意ではない方法で戦うからと言って、その門扉を開いていい理由などにはならないのである。

「ハッ！」

だから美鈴は鋭い呼気とともに体の内に巡る気を操り、そしてそれを以って自身の眼前へと迫ってきていた熱線を”曲げ”、その空いた軌道に自身の体をねじ込み避けた。

「うえっ、マジかよ!？」

それを見た魔理沙は己の切り札の一つをあっさり避けられたことに驚きを禁じえず、思わず悲鳴じみた叫びを上げてしまう。

だが、弾幕ごっこにおいて一つ所に留まるということは、それ即ち敗北を意味する。その硬直は美鈴にとっては絶好の好機であり、魔理沙にとっては敗因となりうる致命すれの隙だった。

そしてそれほどの大きな隙をあ的美鈴が見逃すはずもなく、すぐに己の妖力を形とした七色の光弾を再び撃ち出す、が

「つとと、危ない危ないっ」

そこは魔理沙もさるもので、咄嗟に慣れた手つきで危なげなくホウキを操ると、するりするりとまるで隙間を縫うかのごとく器用に飛行し避けていく。そうして回避行動を続けながらも、魔理沙は先程美鈴がどのような手段で己のスペルカードを退けたのかの、考察を続けていた。

(さっきのは……)

受け止められたわけでも潰されたわけでもなく、逸らされた。

(どっやって?)

美鈴とは何だかんだでそれなりの付き合いがあったが……いくらこれまでの記憶を探っても、そこに該当するものはなかった。ということは、実は美鈴には魔理沙の知らない別の能力があるか

(　　)　ワタシの知らない応用法がある、ってところかな。でも、魔力や霊力を使った術ならともかく、”気”だけでそんなことができ

るのか……?)

しかしいつまでもそんなことを考えているような悠長な時間は、存在しなかった。

魔理沙が分析に思考を割いていることに、美鈴も気づいていたのだろう。すぐにまるでそれを遮るかのように、今度は美鈴がスペルカードを宣言してきたのだ。

幻符

「華想夢葛！」

そしてその宣言の後に雨あられと飛んでくるのは、魔理沙の視界いっぱい壁と見紛うほど満たされた青一色の光弾の山。

「うお、いきなりそれかよっ!？」

その光弾の軌道はほぼランダムで、しかも量もかなりのものだった。いくら魔理沙が弾幕ごっこの腕前では幻想郷中でも並ぶものほとんどいない玄人でも、他に思考を割きながら避けられるほどにそれは甘い弾幕ではない。

「うつひゃあ、こいつはルナティックだぜ！」

しかしそれでも、魔理沙は楽しいな雰囲気は崩さなかった。それは別に、いい加減な態度だというわけではなく。あくまでも真剣に、しかし己は曲げずにいどむということ。何事も、真剣にやるからこそ楽しいのだ。そしてそれこそが霧雨魔理沙という少女の生き方であり、在り方だった。

その姿はまるで先ほど彼女が放った光線のように、夜空に光る彗

星の如く真つ直ぐに輝いていて……だから彼女はどこまでも勝手気ままに生きながら、自然と誰かを惹きつけてしまつのかも知れなかった。

スペル、ブレイク

「やっぱりあれくらいじゃあ、魔理沙さんは倒せませんか」

「へへ、当然だぜ。霧雨魔法店のエースを舐めてもらっちゃ困るな」
「いや、魔法店のエースって……あのお店は魔理沙さん一人で作ってるんじゃない？」

「だからエースなんだぜ。エースってのは、そこで一番のヤツのことを言うんだからな」

「相変わらず無茶苦茶言ってますね……」

軽口を叩き合い、お互いに空中で真正面に対峙しながらも……二人はまるで鏡合わせのように、内心ではいかにして目の前の相手を倒すかと戦術を練っていた。

（さっきのあれ……まだ原理は分からないが、それら軌道はそれほど大きくなかった。ということは多分、あれ以上にパワーを上げれば押しきれはるはずだぜ。つまりいつも通りに）

（魔理沙さん相手に、全てを防ぎきるのは難しい。最終的には持久戦に持ち込むとしても、今はまだその時ではないですね。むしろ今は）

その瞬間……二人の視線が交差し、火花が散る。更にはその空間 紅魔館門前上空の空気が張り詰め、周囲の温度が上がってしまったかのような錯覚すら感じさせられた。

（攻め、あるのみ！）

そして魔理沙と美鈴が同時に力を高めあい、それを放とうとしたその、刹那。

紅魔館の屋敷、その一角からまるで腹の底まで……否、魂の底まで響いてくるような轟音が轟き、しかもあつという間にその壁も天井も吹き飛んだ。

「えっ!?!」

「うお、なんだなんだっ? なんだかやけに派手だなあ」

直後に二人はほとんど同時に動きを止め、その場所へと視線を向け目を見開いた。

「おいおい、今のつてまさか」

「はい。あれは恐らく、妹様の……」

そして美鈴はその魔理沙の確認をするような問いかけに、重苦しい雰囲気で頷く。

「むう、ありやまずいな。あんなもんにもしいつが巻き込まれてたら、多分一溜まりもないぜ。いくら性格が霊夢に似てるからって別に能力まで同じってわけじゃないだろうし……外の人間にゃ荷が重そうだ」

何があったのかは分からないが、一緒に入っていた甲斐が巻き込まれる可能性はゼロではない。そしてもしもそうなってしまったら、自分の計画が全ておじゃんになってしまおうし……それどころではなく、下手をすれば本当に幻想郷が無くなってしまいかねない。流石の魔理沙とて、それは困るのだ。

そんなことを考えた後、魔理沙は眉をしかめながら視線を美鈴に

戻すと、

「おい、美鈴！　ここは一旦休戦にしようぜ！　お前だってフランの暴走は止めたいだろっ？」

「そう、ですね。招かれざる客を私の一存で入れてしまうのは業腹ですが……今はそんなことを行っっていられる余裕はなさそうです」

その時美鈴の脳裏に浮かんでいたのは、レミアアと同じ。かつてフランが初めて能力を暴走させた、その時のことだった。

あんな事を二度も繰り返させるわけには、行かないのだ。

そして二人は示し合わせたように視線を交わすと無言で頷き合い、美鈴が自分よりも速いであろう魔理沙のホウキにすぐに掴まると、

「大丈夫です魔理沙さん、行ってください！」

「オツケー、シツカリ掴まっとけよ！　飛ばすぜ、美鈴！」

幻想郷の中でも人間最速と言われているその飛行速度で、目的の場所へと向かって弾丸のごとく飛翔した直後に、

「魔理沙さん！」

「ちっ、なんだなんだあいきなり！？」

進行方向に、二人のものとはまた違う弾幕が飛んできて、魔理沙は慌てて舌打ちを漏らしながらも急制動をかける。

そしてその弾幕の軌道を辿り、視線を上げた魔理沙の目に飛び込んできたのは

「山の天狗か！？　どうしてこんな所にこんないっぱい居やがるんだよ！？」

漆黒の羽をその背に携えた、日本妖怪の中でも最も知名度の高い妖怪のうちの一つ。鴉天狗の、その大群だった。

先ほどの弾幕は、あの天狗たちが放ったものなのだろう。そしてその目標は、どちらかと言うと魔理沙ではなく美鈴を狙ったものだった。

ということはあるのは魔理沙ではなく、

「山の妖怪が、紅魔館に何のようですか！ 今は緊急事態なのです、邪魔立てするなら例え天狗とて容赦はしませんよ！」

そこまで思い至った所で、美鈴が常の穏やかさからは想像もつかないような殺気だった様子で言い放つ。しかしそれに返って来たのは、動揺の欠片もない傲岸不遜な声だった。

「我ら誇り高き天を翔ける狼なり」

「故に地に這いつくばりし現状許しがたき」

「これは警告だ」

「我々はこれより、幻想郷唯一の人間の男を拐い山の復権を狙う」

「博麗を離れた今こそが好機」

「そちらこそもしも邪魔立てするのなら」

『容赦はしない』

バラバラとアチラコチラから声の飛んでくるその様は、いつそ異様な光景だった。余程畑仕事に駆り出されたことが腹に据えかねていたように見える。天魔がこんなことを許すとは思えないから、おそらくは一部の血気盛んな天狗達の暴走なのだろう。皆が一様に浮かべているその表情は、無表情であるからこそその裏に隠れている憤怒が逆に浮き彫りとなっていた。

が、今更その程度のことでは怯む魔理沙と美鈴ではないのだ。

「はっ。いきなり人様に不意打ちかましといてくれて、なーにが誇り高い妖怪だつてんだ。ちゃんちゃら笑わせてくれるぜ」

「全くですね。ほら、こちらは時間がないのです。御託はいいですから、かかってくるのならさっさとかかって来なさい。それとも真正面からの戦いは怖くてできないんですか？ それはそれは素晴らしく誇り高い妖怪様なんですねえ」

美鈴も余程腹に据えかねているのだろう。普段の彼女ならば絶対に言わないであろう痛烈な皮肉を天狗に返しながら、言葉通りすぐに戦闘態勢に入る。

まさに、一触即発。

いつ対峙するどちらもが爆発し、戦いが始まってしまってもおかしくない緊迫感の漂うこの空間の中で……直後にまるで、それをあつという間に全て吹き飛ばしてしまいそうな、神風が吹いた。

「どうもどうも、皆さんごきげんよう！ 清く正しい射命丸でございます！」

次の瞬間天狗と魔理沙たちを遮るかのようにその中間に現れたのは、幻想郷最速と名高い山の鴉天狗、射命丸文だった。

「貴様、何をしにここへ来た」

「まさか我らの邪魔をしようというのではなかるうな」

文がとびつきりの変わりものであることは、山の誰もが知っていること。それ故天狗たちはまさか協力しにきたとは思えずに、本来は仲間であるはずの彼女に威圧感を叩きつけまるで仇の如く睨みつ

ける。

「ふふふっ」

しかし文が漏らしたのは、不敵な笑み。文はまるでこの状況を心底楽しんでいるかのように唇に弧を描かせながら、持っていた葉団扇で口元を隠し朗々と言葉を紡ぐ。

「やあやあ血気盛んな天狗諸君。あなた方には天魔王様から、このわたしがわざわざその伝言をお伝えしに参りましたよ」

「……なに？」

「いいだろう。言ってみろ、射命丸」

相変わらずの傲慢な物言いも意に介さず、文はひらりと優雅に一礼すると、

「ではでは、お耳汚しを失礼して」

と前置きした後、その不敵な笑みをそのままに口を開いた。

「此度の独断専行は褒められたものではないが、お前たちの気持ちもわからなくもない。だからある条件をクリアしさえすれば今回のことには目を瞑ろう。以上が天魔王様より言いつけられた、伝言の内容です」

「条件だと？」

「それはなんなのだ」

文の言葉を聞いた天狗たちが、すぐにその内容を聞き返す。

その疑問を受けた文は下げていた頭をすっと上げると、口元に浮かべていた笑みを隠すのをやめ、

「ふふ。それはですねえ、」

天を翔けた。

その瞬間、現れたのは風神の化身。それは滅多に見せることのない、彼女の全力の姿。その最速にして神速の神風は誰一人捉えること叶わず、まるで暴風にさらされた木の葉のごとく数人の天狗たちを吹き飛ばした。

「このわたしを、倒すことですよ」

一拍置いて、文が自分たちの背後に周り空中に制止してからようやく事態を理解した天狗たちは、とうとうその憤怒を露わにして、犬歯をむき出しにして叫んだ。

「貴様一人で、我ら全員を相手にするといつのか!」

「笑止!」

「いいえ、わたし一人ではありません」

文がそう呟いた瞬間、それまで様子を伺っていた魔理沙と美鈴の背後から、

「もー、文さんってば早すぎるんすよ。せめて私も連れてってくれればいいのに、さっさと一人で先に行っちゃうんだから……」

ブツブツと愚痴を漏らしながら、哨戒天狗の犬走椀が現れた。

「一人が二人になった所で同じ事!」

「往くぞ!」

更に魔理沙と美鈴も、天狗側の人数が多いことからこのままここをすり抜けるのは難しいと判断し、

「おっしや、美鈴っ。ワタシたちも文たちに加勢するぜ！」

「はい、分かりました！」

と叫びあうと眼前で繰り広げられる、弾幕の雨の中へと飛び込んでいった。

そしてここに前回の異変以来では最大級の、大混戦の火蓋が切って落とされたのだ。

14話（後書き）

安西先生、感想が欲しいです……

という冗談はさておくとしても……やはり感想というものは作者の糧となるもの。自身の力量不足が原因である以上いた仕方のないことなのですが、どうしてももっと増えないかなーと思ってしまふのはやめられなかつたりしてしまいますな。

とまあ、そんな愚痴は置いておくとして。今回は紅魔館の外で起こっていた騒動の一幕でございます。

ちなみに、きつと予想がついているかたもいらつしやるでしょうが、美鈴が前に感じていた視線というのは椀のものだったりします。前回サボったことを天魔に咎められて、今回のことを罰として与えられた文に無理やり付き合わされたというのが裏話。

多分この辺は本編では語ることがないと思うので、あとがきに載せようかと思ったのですが……やっぱりこういうのは明かさないほうがいいのでしょうか？ 難しいところですね。

射命丸文。その名前は天狗社会の中においては、天魔や大天狗に次いで知名度のある名前だった。

何故、ただの一天狗であるはずの文がそうも有名なのか。そこには彼女にまつわる多くの流言飛語。その力が実は幻想郷においてもトップクラスに位置するもので、大天狗を凌ぐほどであるという噂や、以前天魔直々に大天狗昇進の話があったというのに「わたしは自分の翼で飛び回っている方が性に合ってますから」と言っただけなく断ったという眉唾ものの逸話などが飛び交っていることもあったが……何より最もその名を知らしめることになった原因は、やはり彼女に与えられた役職の、その特異性にこそあった。

特殊遊撃警備隊長、射命丸文。

それが天狗の山における、彼女に与えられた役職の名だ。

この部隊、特殊遊撃警備隊における職務自体は、他の哨戒天狗たちとそれほど大きく変わりはない。普段の指揮系統の独立性や時に天魔から直接指示が下されること、有事の際の権限の大きさなどある程度優遇されている面はあったが、しかしそれだけでは今のようにな彼女が有名になることはなかっただろう。

だから問題はそこではなく、この部隊の最大の特異点……それは部隊の人員が、射命丸文ただ一人しかいないことにこそあった。

そしてそれが意味することは一つ。

要するに文はたった一人で哨戒天狗の部隊一つに匹敵すると、そう天魔に認められたということなのだ。

それもこの部隊は、実質分隊ではなく小隊権限を持っている。つ

まり数人ではなく数十人単位での戦力を、文は一人で発揮することができるということになってしまう。

天狗は元々、総じて力の強い種族だ。文献に残されている逸話は数知れず、大天狗にいたっては神として祀られることすらある。

その天狗の、数十人分の戦力。言葉にしてしまえば簡単だが

（そんな馬鹿な話が、あつてたまるか。それでは大天狗様どころか……下手をすれば天魔様とすら肩を並べかねんではないか）

どうせ天魔様にどうにかして取り行つて、今の立場をもらつてい気になってるに違いない。今日こそ文字通り、その天狗になつてしまつている鼻を明かしてやろうぞ。

妖怪の山の小天狗、巻谷朱裏まきせしゆりは険しい表情を浮かべ弾幕を放ちながらも、その実内心ではそんなことを考えながらほくそ笑んでいたのだ。

そしてその次に視線を巡らせ朱裏が自身の視界の内に捉えたのは、文の隣で剣と盾を抜き放ち弾幕を出している白狼天狗の少女、犬走椛。

彼女も実は文に負けず劣らず、天狗たちの間では有名だった。なぜかという単純に、椛の場合は男たちからの人気があることが理由である。

三年連続嫁にしたい天狗第一位。天狗新聞ほぼ全紙協賛、今最も人気のある天狗コンテスト第一位など、他にも（勝手に）送られた賞は数知れず。椛は言うなれば、天狗社会におけるアイドル。いやさ、妖怪の山全体で見ても最も人気のある少女なのである。

ちなみに前述のコンテストの際、唯一文の発行する文々。新聞だけは『犬走椛氏トップ独走の裏に隠れる黒い影！不正投票の謎に迫る！』などという記事を出して散々に叩かれていたが、それは余

談であるう。

兎にも角にもそんなこんなで、朱裏も勿論椀のことは目をつけていたので……せつかくだからこの機会に文の有事権限によってこの戦いを強要されているであろう椀を懐柔し、あわよくばそのまま口説き落としてやるうなどという下衆なことを考えていたのだ。

そして朱裏は椀に安全に話しかけるべく自身の愛用の羽団扇を振りかぶり、椀の持っていた剣を狙って打ち合い鏢迫り合いに持ち込むと、そのまま囁くように声をかけた。

「犬走」

「……私みたいな一介の哨戒天狗の名を覚えていただけで光栄ですね、小天狗様」

その浮かない顔を見て、ますますこの戦いに参加していることが本意ではないのであろうことに確信を深めこれはいけると心中で拳を握りながらも、余裕の笑みを浮かべて朱裏は更に言葉を重ねる。

「ふ、そんなことはどうでもいい。それよりも……どうだ、犬走。いや、椀。お前もこちら側にこんか？ どうせ今とて射命丸めに無理やり指揮下に入れられたのだろう？ ならばいつまでも地に這う芋虫のごとく働くことを強いられるそちらに義理立てする理由もないはずだ」

「それで天魔様に逆らって、あの人間を拐った後はどうするおつもりなんですか。今の情勢でそんなことをしてしまったら、下手をすれば天狗全体が幻想郷内で孤立しかねないんですよ？ ただでさえ今は苦しい時期なのに、これ以上山の立場を悪くしてどうするんです」

「ふん。そんなもの、例の人間さえ手中に収めればどうとでもなるう。バカとハサミは使いようとも言っことだし、そ奴も我ら天狗の

誇りを取り戻すその手伝いができて、本望であろうよ」

その嘲るような笑みと言葉を聞いた瞬間、椀は頭の中でブチッと何かがちぎれるような音が聞こえた気がした。

「黙れ」

「……なに？」

そして思わず、猛る激情のままに言葉が口を衝いてしまう。

「その汚い口を閉じろと言ったのだ、この外道が！ 貴様らの所行のどこに、天狗の誇りがあるというのだ！ 与えられた義務も果たさずありもしない権利を主張し、あまつさえあくまでも自己中心的なその考え……まるで子ども駄々も同然！ 貴様らのような、無為に吠えるだけで成すべきこともしない者共をなんと呼ぶか、教えてやろうっ」

その怒声と共に気合一閃、朱裏の団扇を切り払うと……椀は剣先を真っ直ぐ眼前に突きつけてそれを言い放った。

「人それを 負け犬と言うのだ！」

直後に背後から、ぱちぱちと何処か無責任な声と賞賛の拍手が飛んでくる。

「ひゅー、言うわね椀。いいぞー、もっと言ってやれー」

それを聞いた椀は反射的にズルツと肩をこけさせながら、呆れ顔で続けてツツコミを入れるべくそちらに振り返って、

「いやいや、文さんもたいして人のことはいえないっすからね！？ 今回のこれだって、元々は文さんの昨日のサボりの罰だったことを忘れないで下さいよ！」

「まあまあ、仮にアレがなくなっても人数が増えるくらいでどうせこちらの皆さんの制圧に駆り出されるのは変わりなかったんだろっし、いいじゃない。一緒一緒」

「文さんだけね！ 私は割と関係ないんですけど！」

「まあそう言わずに、今度また特製饅頭作ってあげるから、それで勘弁してよ椀」

「う、うー！ そんなのじゃ釣られないっすからね！ 犬じゃないんだから、食べ物で餌付けできると思わないでください！ 大好き！」

その言葉と同時にブンブンと思いつきり左右に揺れている椀の尻尾を見て、少し離れて別の天狗と弾幕を撃ちあっていた魔理沙は思わず攻撃を止めヒラヒラと手を振りながら、

「いや、釣られとる釣られとる」

と突っ込んでしまう。

「ちよ、魔理沙さん！ そんなこといいから前見てください、前！」

しかし当然そんなことをされてしまったのは背中合わせに死角を潰しながら戦っていた美鈴としてはたまったものではなかったので、若干慌てた声で注意を飛ばす。それを耳にした魔理沙はすぐに「へいへい、分かってるぜ」と口調だけはやる気なげに飄々と返事をしながらも楽しそうに口角を持ち上げて、再び前方に魔力で形成したレーザーとミサイルを撃ち出し何人かの天狗を落とした。

「き、貴様ら、バカにするのもいい加減に」

その全員の余りにも緊張感のない様子と、先ほどの椀のセリフに激昂し今度は当てるつもりで団扇を振りかぶった朱裏はしかし、

奇跡

「ミラクルフルーツ！」

「な、何！？ ぐああっ！」

次の瞬間側面から飛んできた、放射状に膨れる幾つもの弾幕の群れにあっさりと撃墜され、地面へと落ちていく。

「うわあ。さっきのセリフもそうでしたけど……悲鳴まで三流悪役みたいな人でしたねえ、今の天狗さん」

そうしてそんな辛辣な言葉を口にしながらも弾幕と共に現れたのは守矢の風祝ことはっちゃんけ現人神、東風谷早苗だった。

「ぶつ。まあそう言っただけでやるなよ早苗。あれはあれで一生懸命生きてるんだからさ、多分。ああいう絶滅危惧種は保護してやらんとダメなんだぜ？」

「そうですかね？ マンガやアニメだと良いスパイスになりますけど、現実には居ると割とイラつくと思いませんか、ああいうタイプの方って」

口調だけは丁寧だが毒舌満開な早苗の言い様に、魔理沙は「ああ、なるほど」と呟きを漏らすと合点が行ったように頷いて、

「さっきのスペルカードといいその言動といい、今日の早苗ははっ

ちゃけモードなのか。久しぶり……でもないか？」

最後に曖昧に首を傾げた魔理沙を見て、早苗も同じく首を傾げて頭の上に疑問符を浮かべる。

「？ 何の話ですか？」

「いや、気にするな。どうせ後になっただらさんざつぱら悶えることになるんだろうから、今は気兼ねなく存分にはっちゃけてくれ。その方が面白いしな、こつちとしては」

「はあ。よくわかりませんが、まあいいです。そんなことよりも……天狗の皆さん、話は全て聞かせてもらいましたよ！ 今や滅びの危機に瀕し、幻想郷に住む全ての人妖が手に手を取って協力しあわなければいけないこの窮地に、その最後の希望である方を自分たちだけで独占しようだなんて……ハッキリ言っただけです！ そのような悪行、神も許しませんし私も許しませんよ！ この風と奇跡の美少女巫女、東風谷早苗が蛇に代わってお仕置きです！」

常のお淑やかさからは考えられない頭の悪いセリフを言っただけと指を突きつけてきた早苗を見て、天狗たちはいろんな意味でピシりと固まり動きを止めた。

「どつちも許さないのかよ。てかズルイって……ワタシが言うのも何だけど、神職としてお仕置きする理由はそれでいいのか？ そこはもっとなんかあるだろ、正義とか信仰とか神の教えとか」

「まったくです。……それにしても話は全て聞かせてもらったってもしかして出てくるタイミング見計らったりしてたんすかね？」

「ありそう……というか、確実にそうだろうな。なんというか相変わらず、普段とのギャップが激しいやつだぜ」

「なんだか語尾に『キリッ』って付きそうな勢いでノッてますねえ。あれが外の世界で言うところの決め台詞ってやつですか。今度わた

しも真似してみようかな？」

「それやったら絶対他人のふりしますからね、文さん」

完全に緊張感を失い口々にそんなことを口走る三人を尻目に、美鈴は一人さつと注意深く周囲を見渡し自身に誰の目も向いていないことを確認していた。

（今なら抜け出せそうですね）

美鈴にとって今の最優先事項は天狗に勝つことでも全滅させることでもなく、一刻も早く紅魔館へと戻り皆の無事を確認することなのである。

故にこの好機、見逃す理由はないのだ。

そして美鈴が紅魔館へと向かうべく気配を消そうとしたその時……何かを感じたのか、不意にこちらを向いた魔理沙と偶然、目があってしまう。

（あ……）

しかしそれに返って来たのは小さな頷きで、美鈴はその心遣いに感謝しつつも滑らかな身のこなしで死角へと移動しつつ飛び去って行った。

ちなみにその時動いた空気の揺らぎで文もそれに気づいていたが、彼女も同じく知らないふりをしてむしろ死角を増やすようにさり気なく動いていた。文としては元々二人で全員の相手をするつもりだったのだから、ここで離れられようとも感謝はすれども恨む筋合いはないのだ。

それに先ほどの早苗の不意打ちのスペルカードでかなりの数を撃墜していたし、頭の小天狗も落ちた。正直なところもう、戦力過多

もいいところなのだ。今更一人減った所で、大した問題はない。

後はゆっくりと被弾しないように気をつけて、残存戦力を一人ひとり確実に潰していくだけ。

（さあ、さつさと全員倒しちゃって、今度こそあの人間に突撃インタビューと行きましようか。今回はこちらから接触する理由もあることですしね）

それから暫くして、既にその数を大きく減らしていた天狗たちは、完全に不意を突かれたこともあって幻想郷でも指折りの実力者たちの弾幕にさらされ、瞬く間に全滅してしまうのだった。

15話（後書き）

朱裏さんに合掌。皆さんはっちやけている上に色々ツッコミどころは満載でしたが、取り敢えず外での騒動はこれにて決着でございます。

……それにしても、まだ二日目のお昼ごろなんですよね、これ。現代人り編も合わせれば文字数も二十万字超えを達成して晴れて文庫本二冊分くらいになったというのに、進みが遅い事この上ないでござる。

一人戦場を離れ、紅魔館の中へと足を踏み入れた美鈴が最初にしたことは、気を探ること。紅魔館内部に存在する人物の位置関係と皆の状態を把握することだった。

外からでは未だ張られているパチュリーの結界があつたためにそれは叶わなかったが、内側に入ってしまったえばもはや気を扱うことに長けている美鈴にとって、慣れ親しんだ者たちの気配を探ることなど朝飯前。それに何十年、何百年と過ごした紅魔館はその壁から調度品に至るまで美鈴の気と馴染んでおり通りがいいので、先ほど魔理沙のマスタースパークを逸した擬似レンズ構築などよりも余程簡単なことだった。

そうして瞬く間に屋敷全体の索敵を終えた美鈴は、それで得た情報を頭の中で一つ一つ整理していく。

（パチュリーさんと小悪魔さん、それに咲夜さんは図書館ですか。ということはおもしかしたら、お三方はまだ妹様の暴走に気づいていないのかも知れませんね）

紅魔館内部に存在する大図書館は、騒がしさを嫌うパチュリーの意向で防音効果のある結界が常に張られている。きつとあれほどの轟音だったのだからかなりの振動も伴っていただろうが、図書館とはかなり距離も離れていることだし、その可能性のほうが高いだろう。

一つ気になるのは、客人の案内役をしていたはずの咲夜がなぜ図書館に居るのかということだったが……今重要なのは”どうして”ではないので、その疑問は一先ず頭の隅に置いておくことにしよう。

次に

(地下入口の近くには、気配が三つ。これはお嬢様と妹様。それに……)

あの一度感じてしまえばしばらくは忘れられそうもないくらいにひどく特徴的な気の流れをしていた、客人の気配。

一体これがどういう状況なのかは今一理解出来なかったが、それよりも。それらを認識した美鈴がその時胸に抱いたのは、深い安堵だった。

(寝ているのか気絶しているのかはわかりませんが、どうやら妹様の暴走はもう収まっているようですね。お嬢様も弱っている様子はありませんし、大事なはず。……良かった)

だが、しかし。

まるでその安心によって齎された安堵の気持ちに水を刺すかのように、屋敷内部にそれとは別の不快な気配が幾つか存在することにも、美鈴は気がついていった。

それらは全て記憶の中にない気配だったので個人の特定をすることは出来なかったが、状況を考えるにその名も知らぬ妖怪の正体は恐らく、

(……天狗。外のあれは陽動…… 囿だったということですか)

同時にギチツと、歯噛みの音がその場に鳴り響いた。

それと気付いた時には全てが終わってしまっている賢者の如き賢しさではなく、また真正面からぶつかってくる戦士の如く心地よいぶつかり合いでもなく……ただこちらの神経を逆撫でするだけの、中途半端な小賢しさ。

無遠慮に他人の家へと土足で入り込み、好き勝手に振る舞うその傍若無人な無神経さ。……既に大きくささくれだっていた美鈴の心

は事ここに至ってついに、

(堪忍袋の緒が、ブチ切れました)

さすがに殺すつもりはない。が、半殺しくらいは覚悟してもらおう。悪魔の館と恐れられている紅魔館に、奴らは宣戦布告したのだ。相手にその覚悟があるうがなかるうが、知ったことではなかった。悪魔とは、勝手気ままに相手の心を蝕み抉る、篡奪者なのだ。

それに手を出すことがどういう意味を持つのか、この侵入者たちには身を持って思い知らせてやらねばならないだろう。

紅美鈴は基本的には、穏やかで礼儀正しい妖怪である。礼儀には礼儀を以て、家族には愛情を以って、花や木々には慈愛を以って接する高潔の士。その上かつての人里では多数の武術家達からの尊敬の念を集め、度々来るその挑戦者たちにも正々堂々と妖怪としてではなく、同じく一人の武術家として戦うという、まったくもって妖怪らしくない妖怪なのであった。

だがいくらはしくはないといっても、それでもやはり美鈴は妖怪であり、精神の側に属する幻想の存在だ。そして精神に属する生き物はそれ故に、己の信念や信条といった心の中に抱く柱を重視する。その、美鈴の根幹に位置する柱をこの天狗たちは恐れ知らずにも、侵そうとしているのだ。

故に美鈴はもはや一片の情すらその瞳に宿さず内に巡る気によって身体を強化すると、努めて力と成した技術を以って疾駆し、獲物を貪るべく地を駆けた。

妖怪としての身体能力。更には気と中国武術における震脚と呼ばれる技術を応用した加速法に、縮地と呼ばれる歩法を合わせた体捌きによる高速移動術。

それはもはやしなやかな肢体持つ肉食獣の全力疾走すら歯牙にも

かけぬ、幻想郷地上最速の称号を与えられたとしても遜色無いほどのもの。

獣を超え、妖かしという粹すら噛み砕かんと地を揺るがし牙を剥くその姿

正に、紅き龍が如く

不埒者には鉄槌と絶望を。懺悔の時すら与えずに、一方的に蹂躪する。神への祈りを嘲笑い悪意を司る魔の何たるかを、魂の奥底まで刻み込んでやるう。

そうしてこの時紅魔館内部へと潜入していた天狗の大多数は以降、何であろうと紅いナニカを見ただけで、訳もわからず震え上がるようになったという。

(美鈴？)

その時ふと、レミリアは自身の最も付き合いの長い部下であり気の置けない友人でもある門番の気配を一瞬だけ、微かに感じた。その感覚がレミリアにもたらしたものは、僅かばかりの自らの”我”。そしてその取り戻した自分が、今の己の姿を俯瞰する。

守るべき存在である筈の妹を見つめながら弱々しくも涙を流し俯く自分と、更には初めて会ったはずなのに不思議と居心地の良い雰囲気を持った人間の、背中を撫でる手を何故か享受する自分。

(っ！)

直後にパシリと、レミリアはその手を払い除け溢れる涙をぐいと手の甲で拭った。

そして次の瞬間レミリアの胸中に沸き上がってきたものはどこまでも腑甲斐ない己への、強い怒りの感情。

自分は　レミリア・スカーレットと言う名の吸血鬼は、こんなにもか弱かったか？　己がこれまで築いてきた数百年というその歴史は、そんなにも薄っぺらなものだったのか？

(否)

悪魔の館を統べる己は、それほどまでに取るに足らない存在だったのか？

(否)

咲夜の母親であり、美鈴の主であり、パチュリーの親友でありそしてフランドールの姉である己が、これほどまでに頼りない者であっていいのか？

(否！)

ギチギチと、心が軋む音がする。

少しずつ、少しずつただの一人の姉としてではなく、レミリア・スカーレットという総和としての己が戻ってくる。

だが、しかし。

それでもやはり、レミリア・スカーレットにとってフランドール・スカーレットの悲劇はある意味、その始まりの一つとも言えるものでもあったのだ。

スカーレット家当主としての己が歩み始めたのは、あの日からだった。だから真の意味で吸血鬼としての誇りを重んじるようになったのも、あの日が始まり。美鈴との関係がただの縦の繋がりではなくなったのも、パチュリーと友人関係となれたのも、咲夜を引き取ることができたのもその過去があったからこそだった。

あの昔日の面影は、現在に至るあらゆる根幹に根ざしその枝を伸ばす、レミリアにとってはある意味での原点であり支柱の一つ。

故に、後ひとつ。

レミリアの中に流れる虚ろな虚無感と無力感をねじ伏せるための、後押しが必要だった。

そんなレミリアの、激しくも切ない己の内なる敵との葛藤の姿を目の当たりにした甲斐がしたことは、

「み〜こと。今、いいか？」

この場には居ないはずの、己のメイドであり妹分を呼ぶことだった。

博麗神社と紅魔館の間には、仮に飛行して移動したとしてもそれなりの距離がある。そのためもしその甲斐の声のみ〜ことの耳に届いていたとしても、ここまでたどり着くにはかなりの時間がかかるはず。

だというのにその静かな呼び声にみ〜ことは、

「はいはい、ただいま！ いつでもどこでも貴方の側に、『呼ばれて飛び出る永遠のメイド』み〜ことでございます！」

美しい赤みがかった金糸を揺らめかせ、虚空から唐突に現れながらもいつもの調子で確かに答えた。

み〜ことはもはやその内に秘める心の力によって、時間や空間の縛りなく何処にしようとも常に彼の者と共に在る。故に心を込めてその名を呼べば、彼女がその呼びかけに応えないはずがないのである。

そんなみ〜ことの、いつも通り過ぎる様子に甲斐はつつい、

「そりゃいったい何のキャッチフレーズだ……」

と苦笑を浮かべてしまうが、しかしすぐにその笑みを口元から消すと表情を引き締めた。

その真剣な様子の甲斐を見て、み〜ことは敏感に場の空気を察し佇まいを整えると、

「それで、甲斐ぼっちゃま。今回はどのようなご用件でわたくしをお呼びになられたのでございますか？」

常にはない恭しい態度であくまで従者としての対応を取る。

み〜ことのその問いに、甲斐は小さく頷きを返すと視線で己の腕の中で眠る少女を示し、

「ああ。悪いが少し、この子を頼む」

「承知いたしました。それでは失礼致します」

するとみ〜ことは小さく会釈をして甲斐に歩み寄り、するすると器用がちりちりと甲斐の服を掴んでいたフランの指を解きその小さ

な体を代わりに預かった。

(……)

そんな二人のやりとりを両の目で確りと見つめながらもレミリアはその時、大きな衝撃を受けていた。

それは別にいきなり現れたメイドに対するものではなく、それよりも。

甲斐があまりにもあつさりとフランの手を引き離し、その身を他人に預けてしまったから。

(そんなにも簡単に、お前は)

その手を、離すというのか。

五〇〇年近くもの永い永い刻をかけて、ようやくフランが見つかることができたその手を……。そして同じだけの時間、自分がどこまでも求めてやまなかつたその救いの手をお前は……

そんなにも簡単に、引き離してしまうというのか。

その瞬間レミリアの心という名の炉の中に燃え上がったのは、激しい憤怒と、

そしておそらくは、嫉妬と呼ばれる感情の炎だった。

分かっている。それが理不尽でお門違いな感情であることは、分かっている。むしろ迷惑をかけた側なのはこちらであって、この人間には何も非がないことは、分かっている。

だけど最早その感情の炎が燃え上がることを止めるのは、レミリアにはできそうもなかった。

仮に、仮にこれが己の認めた相手でもある霊夢や魔理沙であったのなら。あるいは紅魔館の住人のうちの誰かであったのなら、この気持ちももつと違ったものになっていたかも知れない。しかし実際にはそれどころか……人柄も知らず、能力も知らず、名前も知らず、何もかもを知らない赤の他人が、なんの予兆も前触れもなく唐突に、己の役目と任じてきたそれをあっさり搔つ攫ってしまってしまったというその事実が、レミリアにはどうしようもなく許し難く、納得が行かなかったのだ。

勿論たとえ自分が認めようが認めなかるうが、この人間がフランを救ったという事実は事実であって変わりはない。

そんなことはとうに頭では理解していたが、だけどせめて

「人間」

「ん？」

「わたしの名は、レミリア・スカーレット。紅魔館の主にして、吸血鬼……誇り高き夜の王の一族、スカーレット家の当主だ。……お前の名は、なんという？」

「ああ……なるほど。アンタがここの。俺は、俺の名前は」

お前が本当に、それを成せるだけの能力/心があるのだということとを、

「門倉甲斐。今回幻想郷に偶然呼ばれてきた、ただの普通の人間だ」
「ならば、門倉甲斐。お前にはここでわたしから正式に、決闘を申し込む。お前が本当に我が妹、フランドールの全力を受けきり救ってみせたというのならその力……このわたしに、見せてみる」

わたしに、認めさせて欲しい

16話（後書き）

中二病、全開。気付いた時には美鈴が美龍さんに。

それにしても今回は何回も書き直しを繰り返し、非常に難産でありました。特にレミリアの心理描写は苦戦した。人とは違う精神構造を持つ妖怪や悪魔の心中……難しいです。変になっていなければいいのだけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0826x/>

東方界境輪舞

2011年11月21日11時37分発行